

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第30集

あさ ひ  
**朝 日 遺 跡 I**

1991

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

## 序

古代史に興味がある人で、朝日遺跡を知らない人はまずいないのではないでしょか。そう言えるほど朝日遺跡が著名となった今、その資料は速やかに公表されなければならないと考え、そのために平成2年度から4年間で本書を含めた全5巻の報告書を作成・刊行できるよう計画し、現在努力しておるところであります。そして、その最初としてここに本書を刊行いたしました。

名古屋環状2号（一般国道302号）線建設に伴う事前調査としての朝日遺跡の発掘調査は、昭和47年以来愛知県教育委員会によって実施され、その成果もすでに昭和57年3月に報告書として刊行されております。したがいまして、本書は昭和56年以来調査を引き継いだ（財）愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部、その後身である当センターの実施した部分に関する報告であり、内容は新しいものとなっております。

長期にわたって継続調査を実施した朝日遺跡の成果はまことに膨大であり、前回と同様、その成果を一望の元に理解することは至難であります。また、速やかな公表を優先したために不十分な面も多々あるとは存じます。こうした反省は今後の整理・研究に生かしていくことを期し、まず本書が朝日遺跡の理解と埋蔵文化財研究の一助となることを願う次第であります。

最後に、調査を遂行するにあたりご理解いただいた建設省中部地方建設局愛知国道工事事務所・道路公団名古屋建設局の方々、愛知県教育委員会、地元教育委員会および住民の方々、そのほかご協力を賜った皆様方に対し心より謝意を申し上げます。

平成3年3月

（財）愛知県埋蔵文化財センター

理事長 松川誠次

# 総目次

## 朝日遺跡 I (本書)

序説 1

序説 2

第 I 部 調査の概要

第 II 部 遺構

## 朝日遺跡 II

第 III 部 自然科学的研究

## 朝日遺跡 III

第 IV 部 木製品

第 V 部 骨角製品

第 VI 部 金属製品

## 朝日遺跡 IV

第 VII 部 石製品

## 朝日遺跡 V

第 VIII 部 土器(土製品)

第 IX 部 総論(研究総括)

# 序　　説　　1

## 18年の調査史を背負う

朝日遺跡の発掘調査には、本県の調査研究及び調査技術の水準の問題、行政体における調査体制と組織整備のプロセスとが凝縮している。湧水を食い止めることができず、遺構の精査が十分でなかつた初期の段階から、水抜排水設備による遺構検出方法の時代へ、あるいは愛知県教育委員会文化財課内の時限的調査組織から(財)愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部、(財)愛知県埋蔵文化財センター設立へと変化していった姿は、まさしく愛知県の調査水準そのものである。1972年に始まり、1989年に事実上終了した18年間にも及ぶ本遺跡の発掘調査の歴史は余りにも長いものであったと総括できるが、この調査史は同時にまた、かかる〈凝縮体〉を相対化し、融解し、さらには模索の中から発展の姿を見い出してきた過程を表してもいたわけである。

朝日遺跡の調査研究史については、すでに1982年愛知県教育委員会刊「朝日遺跡」にて詳述したので、ここで改めてふれることはない。今回の報告書は、その後(財)愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部と本センターとが進めてきた1981年度以降の調査結果を中心にまとめたものであり、その意味では18年間に及んだ調査史のうちの後半9年間の成果を公表するものである。

そこでまず、この「遺構編」の叙述を進めていくに当たって、1980年度までに明らかにされた遺構総体について概括整理をしておこう。

弥生前期に貝殻山貝塚地点付近に限定されていた朝日遺跡の居住域は、中・後期になると次第にその規模を拡大し、旧河道とみられる埋積浅谷を挟んだ地点に南北二つの環濠をめぐらした集落を発達させてていき、それぞれに対応する方形周溝墓群を築いていくようになる。二つの環濠集落はどちらも概ね橢円形を呈するとみられ、その規模は、未調査部分の多い北集落では不明確であるものの、南集落では長径220m、短径170mと推定されるまでに至った。方形周溝墓はⅠ期に出現し、Ⅶ期まで築造され続けたが、総計で198基検出された全体の分布状況は東西南北の四群に区分され、このうち密集度の高い「東Ⅰ群」と「西Ⅰ群」とがそれぞれ南北集落に対応する墓域ではないかと推定されている。個々の方形周溝墓の規模は、一辺8~10m前後のものが多いが、一辺28m×23mを測る大形の周溝墓も築造されている。また、その形態については、周溝の四隅が切れて陸橋となっているタイプと隅の一ヵ所ないし二ヵ所が切れているタイプとが主流を占め、時期が下がるにつれて前者から後者へ、さらには溝が四周を巡るタイプへと移っていく様相も明らかとなった。この推移の中に東日本的な特色がよく表れている。黒色を呈した均質な土層から成る本遺跡の遺物包含層の中から住居跡を検出していくことは技術的に困難を極めたが、それでも1980年度調査までに竪穴住居跡141棟、掘立柱建物9棟が発見されている。竪穴住居跡の平面形は、Ⅱ期からⅢ期にかけては円形を主流とし、Ⅳ期以降は方形プランが中心となっていく傾向を示している。またその分布状況も、Ⅱ期からⅢ期までは広く拡散した形態をとるのに対し、Ⅳ期には範囲を縮小化し、やがてⅤ期に至ると環濠内部へと集中していくという動態をみせる。

このように、1980年度までに検出された本遺跡の遺構のみから見ても、本遺跡が東海地方で最大規模を誇る弥生時代集落であることが窺われ、東海地方における弥生文化成立の問題のみならず、集落の立地、濠をめぐらす居住域と墓域との関係、方形周溝墓にみられる東日本的性格と社会構成の在り方などの諸問題は、弥生社会全般を通じたムラの生態を理解するのに好個の資料となっている。今回報告する調査内容は、以上の成果に対してさらに詳細な肉付けをするものであり、かつ、その後発見された銅鐸埋納遺構、ヤナ遺構、玉作遺構、大形方形周溝墓群などの特異な遺構は、本遺跡のもつ価値と位置をいっそう深化させるものといえよう。

18年間の調査により膨大な出土資料と記録図面類とを残したこれらの遺構群の大半は、こんにち、道路敷となって消滅あるいは埋もれている。このことに対して、われわれは幾分かの疲労を覚えるだけだ。

## 序　　説　　2

### 報告書を作成するにあたって

#### A

朝日遺跡の発掘調査はこれまで各団体によって幾度も行われてきた。そのうち、愛知県教育委員会と(財)愛知県埋蔵文化財センター（昭和56年度は(財)愛知県教育サービスセンター）による調査が大規模かつ継続的なものであった。

愛知県教育委員会担当分についてはすでに報告書が刊行されている。1975年刊行の中間報告書では、調査地区が全体に東に片寄っているために方形周溝墓群の調査報告が主となっており、記載上の制約もそれほど表面化していない。しかし、1982年刊行の報告書では、中間報告分を含み、かつ居住域をも調査範囲としているために内容はより複雑となり、記載上の条件はかなり難しくなっている。そこでは朝日遺跡を全体として把握することに主眼が置かれ（中間報告書では「朝日遺跡群」と呼称されていたのがそこでは「朝日遺跡」と改称されていることに示されている）ており、それにしたがい遺構に関しては中間報告分を含めて新たに通番を与えることによって再整理されている。そして、それらの資料は愛知県清洲貝殻山貝塚資料館で保管されている。

さて、今回の報告は基本的には過去の報告総てを包括するものでなければならない。少なくとも、現在の朝日遺跡像を規定した愛知県教育委員会資料は含めなければならない。とはいっても、保管され検討に耐える遺物は容易に含めることはできるが、遺構に関しては報告書の記載（あるいは遡って一次的調査資料）に頼らざるを得ないのであり、その意味で全体像としての再構成には慎重にならざるを得ない。また、1982年報告では通番による整理が行われている以上、ここでもそれを踏襲することがある意味で必要とも言える。

だが、われわれは〈朝日遺跡〉という固有の実在全体に関わる問題と、発掘調査において諸種の条件によって機械的に分割された〈単位〉の報告とは問題が異なるとあえてここで強調しておきたい。

したがって、朝日遺跡の整理・報告については、上述したような立場から、今後に予定されている

整理の継続重視を第一義としてすでに報告された部分との関連を一応は脇へ置くことにする。膨大な範囲にわたる調査資料（遺物だけでもコンテナバット1万8000箱に近い量がある）の整理を混乱なく進めるためには、遺構・遺物の収納において完結する調査段階の地区区分を整理単位とすることが最も現実的な対処であると考えるからである。この点で朝日遺跡に関する情報は、調査上の単位に分割されたモザイク的な情報と朝日遺跡全体としての統合された情報という二つの水準に分かれることになる。そして、おそらくそのために後者の把握はきわめて難しいものとなるだろう。その結果生じる繁雑さはわれわれ報告者の責任であり、またそれは整理の過程において報告書を刊行しようとする計画そのものに含まれる不安定さでもある。

## B

今後の整理計画を規定する報告書の刊行予定は次のとおりである。

- 1992年3月 『朝日遺跡II』（自然科学編）・『朝日遺跡III』（木器・骨角器・金属器編）
- 1993年3月 『朝日遺跡IV』（石器編）
- 1994年3月 『朝日遺跡V』（土器編・総括編）

『朝日遺跡II』は、自然科学的分析を中心として構成される。事実報告というよりは研究報告としての性格を強く示すものであり、当センター外部の研究者による報告が多数予定されている。

『朝日遺跡III』は木器・骨角器・金属器についての整理および研究報告である。それぞれの整理は来年（平成3年）度実施して報告となる。

『朝日遺跡IV』は石器についての整理および研究報告である。コンテナバットにして千箱単位の量が出土しており、来年（平成3年）度から整理を実施する予定である。

『朝日遺跡V』は土器についての整理および研究報告、そしてそれまでの調査研究の総括をいちおうの区切りとして行う。総括の主となるものは朝日遺跡の全体である『朝日遺跡I』「第1部 遺構」では整理の過程にあることもあって十分な検討ができていないので、当然遺構の全体的な検討についての比重も高いものとなろう。そこでは、朝日遺跡全体としての問題を改めて措定し、その一定の解決を目指すことになる。当然、遺構番号などに関して改訂することも有り得るものと考えている。

朝日遺跡の整理・研究報告は以上のような内容で進めるつもりであるが、もちろん研究は報告書の完結をもって終了するものではない。報告できなかった資料、あるいは新たな問題と解決など絶えざる整理・研究はわれわれに与えられた責務である。そうした研究はわれれにとどまらず、関心のある人々全てによって行われるのが本来的な姿であろう。そのためにも、資料は担当者・機関をはじめとする一部に個的に独占されなければならない。拙速となる可能性は高いが、資料は正しい手続きで、速やかに公表されて初めて事実となる。單なる伝聞の類では資料ではあっても事実ではない。事実は共有されねばならない。われわれには、そのための基礎資料の整備が求められているのである。そして、その伝達はあらゆる機会を捉えてあらゆる手段で継続的に行われる必要があると考えている。遅延より拙速をあえて選択するものである。

## 例 言

1. 朝日遺跡は、愛知県西春日井郡清洲町・春日町・新川町、名古屋市西区の1市3町にまたがって、東西約1.4km、南北約0.8kmの範囲を有する大遺跡である。
2. 本書は、昭和56年、昭和60年～平成1年にわたって実施された名古屋環状2号線建設に伴う事前調査（調査面積49624m<sup>2</sup>）にかかる発掘調査報告書5分冊のうちの第1巻『朝日遺跡I』（「第一部 調査の概要」・「第二部 遺構」を収載）である。
3. 調査経過、調査担当者および組織は別に記載したとおりである。
4. 調査にあたっては、本センター各専門委員、愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センターの指導を得たほか、清洲町教育委員会、建設省愛知国道工事事務所、日本道路公団名古屋建設局ほか関係諸機関のご協力を得た。
5. 本書の様式

### ■本文

○「第一部 調査の概要」では、発掘調査事業の概要を提示している。「第二部 遺構」では「第一章」で全体的な層序の概説、「第二章」以下で時代別の遺構概要の提示を調査年度順・調査区単位アルファベット順で行い、最後に若干のまとめを行い今後の指針としている。遺構概要を調査年度・調査区アルファベット順で行っているのは、これまで散発的に発表されてきた事實を調査経過に合わせてたどるためである。

なお、調査区名は、「第一部」と「第二部」で異なる場合があるが、これは、調査計画時の調査区割が実際の調査において変更のあったことを示している。「第二部」本文では、必要があれば旧調査区名を表記するが、基本的に新調査区名で記載している。

○遺構番号と帰属時期はあくまで現状における認識である。帰属時期は将来土器編年の細分による変更の余地を残るものである。なお、本書で使用する時期区分は次のようにする。

I期：遠賀川系土器期、II期：朝日期、III期：貝田町期 aを前半期、bを後半期とする、IV期：凹線紋系土器期（従来の外土居期・高蔵期・獅子懸期・下長山期）、V期：山中期（見晴台期を含む）、VI期：欠山期、VII期：元屋敷期、そして古墳時代と記載する場合はVII期以降についてである。

○遺構の分類呼称と記号は次のようである。

S B…竪穴住居、S A…掘立柱建物、S H…小穴例（柵・垣）、S K…土坑、S D…溝、S E…井戸状遺構、S Z…方形（円形）周溝墓、S X…そのほかで特に注意を必要とするもの

○本文および図版中の表記について

各調査区で完結するあるいは他の調査区との連続が不確定である遺構は、各調査区ごとでアラビア数字で通番をふり、半角文字で表示している。

各調査区を横断する遺構は、溝と杭群についてはローマ数字で、方形周溝墓はアラビア数字で通番をふり、それぞれゴチック表示している。とくに、方形周溝墓は県教育委員会資料を含めている。

○プラン・土層セクション（図版も同様）などに使用されているスクリーントーン表示は、全体

を統一していないので、個別の記載および凡例への注意が必要である。

○挿図に使用されている遺物実測図は、あくまで例示にすぎず正式の報告ではないので、特に説明を加えることはしていない。

#### ■図版

○遺構プランは縮尺 1 : 200 を基本としている。

○遺構プランは、今後刊行する続巻の記載上の便宜を考慮して、大きく東西南北の各地区に区分してあり、本文記載の順番とは一致していない。また、以前の調査区も含めて図化してあるので調査区位置図および県教育委員会『報告書』との対応が必要である。

○遺構プランは、本センター調査区にはケバ表示がしてある。ケバ表示の無い遺構は以前の調査区である。しかし、調査の都合上重複した地区についてはケバ表示したものもある。

○土層セクションの位置はアルファベット表示しており、基本的には各図版で完結させている。ただし、調査区壁面の場合には他の図版に続く場合があり注意が必要である。その場合は当該調査区図版では重複しないアルファベットを使用している。土層セクションの観察方向は、アルファベットの向きと観察方向が一致している場合があるがそうでない場合もあるので、注記を確認する必要がある。

6. 執筆分担は下記のとおりである。ただし、石黒の原稿は宮腰健司・加藤調査課長が校閲した。

加藤安信 序説 1

森勇一 第 I 部第 2 章 1、第 II 部第 1 章 1

石黒立人 序説 2、第 I 部第 1 章・第 2 章 2、第 II 部第 1 章 1 を除くすべて

7. 本書の編集は石黒が行った。

8. 本書に関する図面・写真資料は本センターで保管している。

9. 本書を作成するにあたり、次の方々の御協力があった。(順不同)

赤羽一郎、梅本博志、伊藤稔、中川真文、柴垣勇夫、高橋信明、野口哲也、  
都出比呂志、原口正三、伊藤久嗣、新田洋、鈴木敏則、車崎正彦、松本完、  
福島正実、笹沢浩、青木一男、岩崎直也、佐原眞、田中琢



## 目 次

# 第Ⅰ部 調査の概要

## 第1章 調査の経緯と経過

1. 経緯

2. 経過

A 調査の方法と工程

B 調査体制

## 第2章 遺跡の概観

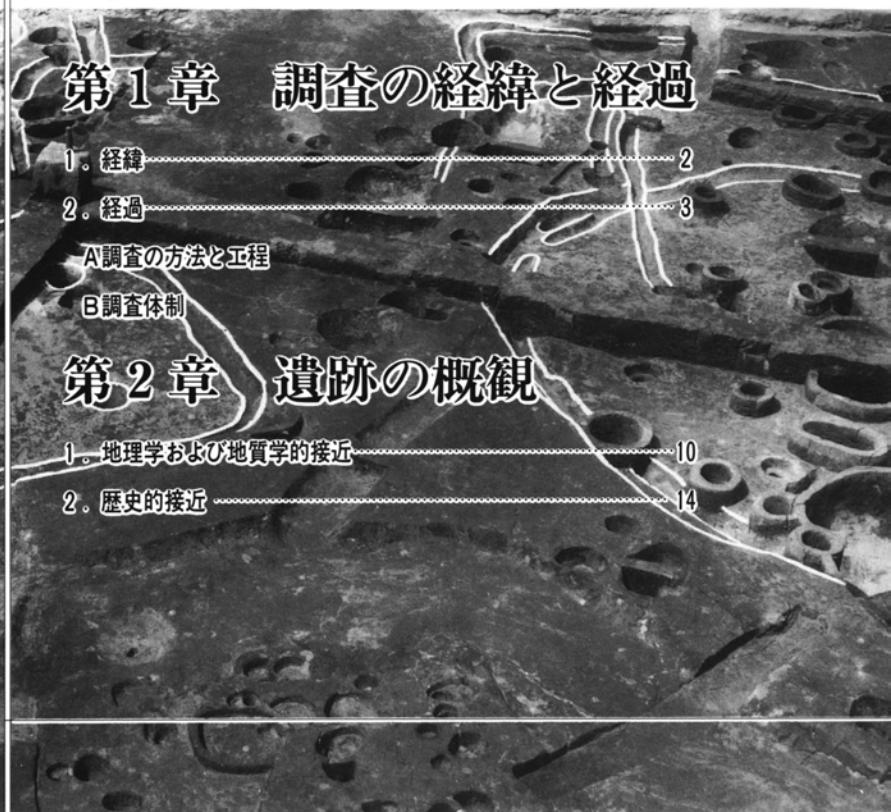
1. 地理学および地質学的接近

2

3

10

14



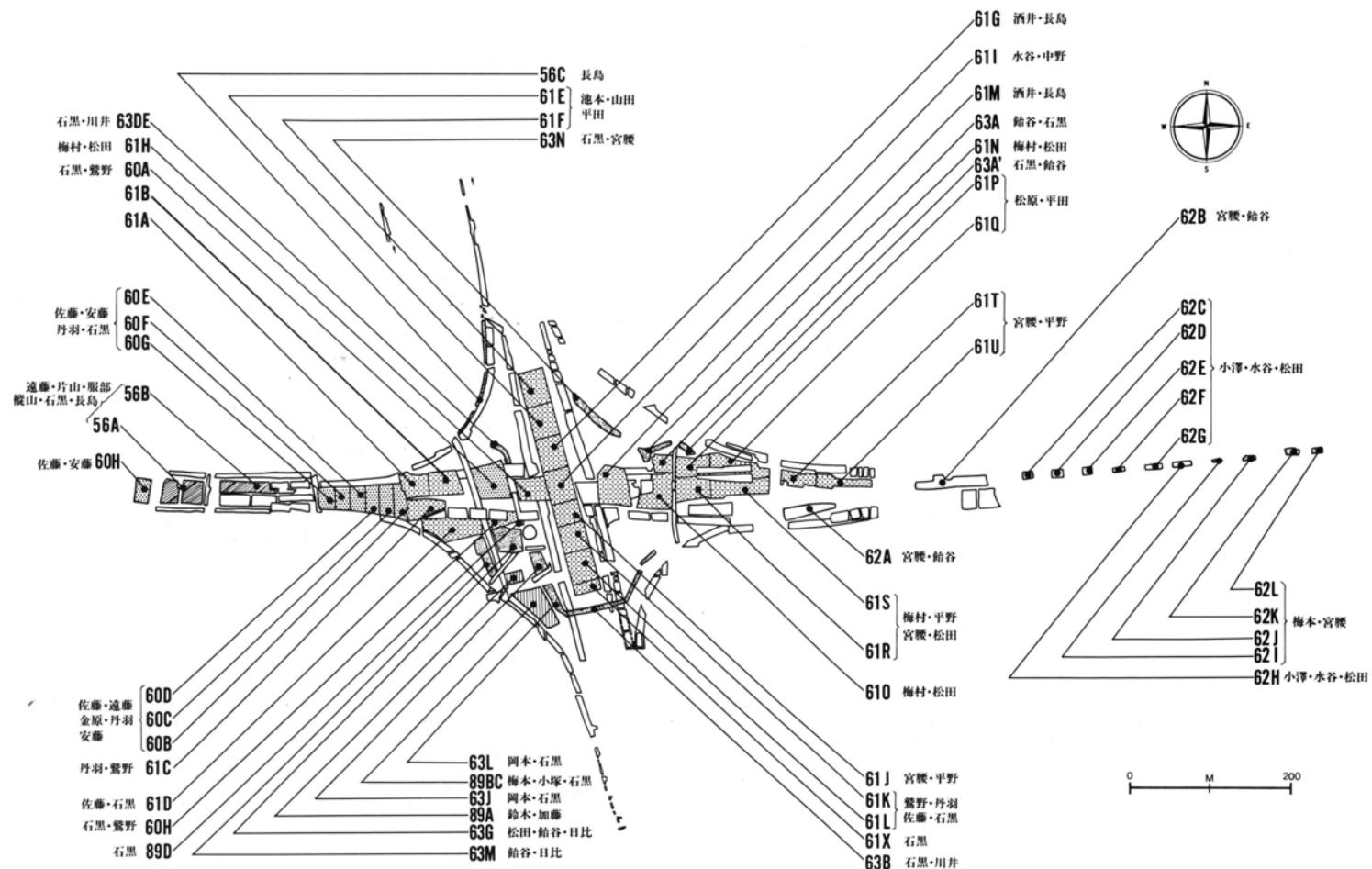
# 第1章 調査の経緯と経過

## 1. 経緯

名古屋環状2号線建設の事前調査として開始された朝日遺跡の発掘調査は、第1期として昭和47年から昭和54年にかけて愛知県教育委員会、第2期として昭和56年が(財)愛知県教育サービスセンター(埋蔵文化財調査部が担当)、昭和60年から平成1年にかけて(財)愛知県教育サービスセンターの業務を引き継ぎ発足した(財)愛知県埋蔵文化財センターがそれぞれ実施した。

第1期は昭和55年に現地調査が終了した後2年間の整理期間をもって昭和57年には報告書が刊行されている。記録類・出土遺物などは愛知県清洲貝殻山貝塚資料館で保管され、一般に公開されている。

第2期は、昭和56年の成果は業務を引き継いだ(財)愛知県埋蔵文化財センターが記録類・出土遺物などを保管している。昭和60年からは第1期とは異なって広範囲に面的調査となり、後述のように第1期には調査できなかった谷部分も調査するに至った。



第1図 調査区全体図(及び担当者)

## 2. 経過

### A. 調査の方法と工程

朝日遺跡は沖積地に位置し、地下水位も高い。そのため第1期の調査では湧水に悩まされ、谷の調査も自力ではほとんど不可能であった。第2期ではそうした経験を生かし、地下水の強制排水（ウェル・ポイント）による工法を採用し、その結果縄文時代の堆積層を確認するという成果も得ることができた。

調査区は第1図のように多くの地区に分かれる。したがって同じ遺跡ではあっても条件は異なる場合がある。特に谷の場合は、砂層の厚く堆積する河道部分があり、その掘削が問題となる。

掘削は包含層直上までバックホーなどの機械力によって行いそれ以下を人力で行うことを基本とした。しかし、河道については、61A区のように堆積層の状態を注意深く観察しながら機械力を使用した場合や、その反対に60E区のように勾玉などの装飾品が出土したために移植ゴテで掘り下げを行ったというように、適宜方法を変えた。

包含層の掘削はベルトコンベヤーを使用して人力で行った。包含層中の遺構検出は極めて困難であり、そのため遺物集中地点の確認を中心に行った。実際の遺構検出は、ベース面において行うのが通例であった。

遺構の詳細に関わるプラン・セクション、遺物の出土状態図などは調査に並行して作成したが、土層観察に土色帳は使用していない。遺構平面図の作成は写真測量によって行った。

各調査区の工程は第1表に示したとおりである。

第1表 調査工程表(アルファベットは調査区名を示す)

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
56 '81	AB					C						
60 '85				AH		EFG	I			BCD		
61 '86	C	D			AB	EF	G	H	J	KL		
62 '87	N	M	O		RS					PO		
63 '88	T		U									
1 '89	X											
	C~L	A~B			AA							
	B	J								GH	DE	
	L		M									
	A	BC		D								

## B. 調査体制

### 調査体制 昭和56年度

調査主体 財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部

調査期間	昭和56年4月～昭和57年3月		
調査指導委員	井関 弘太郎	名古屋大学教授	地理学
	伊藤 秋男	南山大学教授	考古学
	大参 義一	信州大学教授	考古学
	澄田 正一	愛知学院大学教授	考古学
特別調査指導委員	立松 彰	東海市平洲記念館学芸員	考古学
組織			
調査担当	発掘調査所長	高澤 茂樹	
	主事	石黒 立人	
	主事	樅山 昌宏	
	主事	片山 正巳	
	主事	榎原 芳久	
	主事	服部 良夫	
事務局	調査部長	丹羽 功	
	庶務補佐	水谷 良夫	
	主査	松原 広治	
	主事	松田 定次	
	主事	菅沼 真四郎	

### 調査体制 昭和60年～平成元年度

調査主体 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

調査期間	昭和60年7月～昭和61年3月		
理事長	奥田 信之	県教育長	
常務理事	中林 茂	(兼 事務局長)	
理事	井関 弘太郎	名古屋大学教授	
	伊藤 秋男	南山大学教授	
	大参 義一	信州大学教授	
	坪井 清足	奈良国立文化財研究所長	
	樅崎 彰一	名古屋大学教授	
	三浦 小春	光陵女子短期大学教授	
	花木 蔦雄	都市教育長会会長・一宮教育長	
	伊藤 芳	町村教育長会会長・蟹江町教育長	
	大橋 雄大	県土木部長	
	小島 俊夫	県教育委員会社会教育部長	
	林 正治	清洲貝殻山貝塚資料館長 清洲町長	

	鈴木 瞳美	県陶磁資料館副館長
監事	本田 辰郎	県出納事務局次長
	田中 隆三	県教育委員会総務課長
専門委員	榎崎 彰一	名古屋大学教授 考古学
	早川 庄八	名古屋大学教授 文献史学
	井関 弘太郎	名古屋大学教授 地理学
	浅野 清	愛知工業大学教授 建築史学
	渡辺 誠	名古屋大学助教授 動・植物学
	池田 次郎	京都大学教授 形質人類学
	江本 義理	東京国立文化財研究所保存科学部長 保存科学
調査担当	調査課長	橋本 雅司
	課長補佐兼主査	清水 雷太郎
	課長補佐兼主査	遠藤 才文
	主査	金原 宏
	主事	石黒 立人
	主事	佐藤 公保
	主事	鷲野 勉
	嘱託	安藤 義弘
	嘱託	丹羽 博
事務局	管理課長	斎藤 樹三
	主査	稻垣 隆一
	主事	伊藤 義幸
	主事	森 信孔
	主事	小倉 晴美

調査期間	昭和61年4月～昭和62年3月
理事長	小金 潔 県教育長
常務理事	中林 茂 (兼 事務局長)
理事	井関 弘太郎 名古屋大学教授
	伊藤 秋男 南山大学教授 考古学
	大參 義一 信州大学教授 考古学
	坪井 清足 (助)大阪文化財センター理事長
	榎崎 彰一 名古屋大学教授
	三浦 小春 中日新聞嘱託
	花木 蔦雄 都市教育長協議会会长・一宮教育長
	伊藤 芳 町村教育長協議会会长・蟹江町教育長 (6月30日就任)
	栗木 茂一 町村教育長協議会会长・小坂井町教育長 (7月1日就任、11月30日辞任)
	大溪 紀雄 町村教育長協議会会长・吉良町教育長 (12月1日就任)
	大橋 雄六 県土木部長
	中神 秀雄 県教育委員会社会教育部長
	林 正治 清洲貝殻山貝塚資料館長・清洲町長
	日下 英之 県陶磁資料館長
監事	石原 坂男 県出納事務局次長

	田中 隆三	県教育委員会総務課長
専門委員	橋崎 彰一	名古屋大学教授 考古学
	早川 庄八	名古屋大学教授 文献史学
	井関 弘太郎	名古屋大学教授 地理学
	浅野 清	愛知工業大学教授 建築史学
	渡辺 誠	名古屋大学助教授 動・植物学
	池田 次郎	岡山理科大学教授 形質人類学
	江本 義理	東京国立文化財研究所保存科学部長 保存科学
	諫訪 兼位	名古屋大学教授 岩石学（7月1日就任）
	木方 洋二	名古屋大学教授 木材組織学（7月1日就任）
調査担当	調査課長	橋本 雅司
	課長補佐兼主査	清水 雷太郎
	課長補佐兼主査	竹内 尚武
	主査	梅村 清春
	主査	山田 耕治
	主査	鷺野 勉
	主事	池本 正明
	主事	石黒 立人
	主事	酒井 俊彦
	主事	佐藤 公保
	主事	土屋 利男
	主事	平田 瞳美
	主事	平野 清
	主事	水谷 朋和
	主事	宮腰 健司
	嘱託	中野 良法
	嘱託	長島 広
	嘱託	丹羽 博
	嘱託	松田 訓
	嘱託	松原 隆治
事務局	管理課長	齊藤 樹三
	主査	青山 光一
	主事	森 信孔
	主事	田上 堅三
	主事	小倉 晴美

一調査期間	昭和62年4月～9月	
理事長	中根 昭二	
常務理事	中林 茂	
理事	小金 潔	県教育長
	井関 弘太郎	名古屋大学教授
	伊藤 秋男	南山大学教授
	大參 義一	信州大学教授

	坪井 清足	(財)大阪文化財センター理事長
	榎崎 彰一	名古屋大学教授
	花木 蔦雄	都市教育長協議会会長・一宮市教育長
	大渕 紀雄	町村教育長協議会会長・吉良町教育長
	下田 修司	県土木部長
	中神 秀雄	県教育委員会社会教育部長
	林 正治	清洲貝殻山貝塚資料館長・清洲町長
	日下 英之	県陶磁資料館長
監事	石原 坂男	県出納事務局次長
	龍野 等	県教育委員会総務課長
専門委員	榎崎 彰一	名古屋大学教授 考古学
	早川 庄八	名古屋大学教授 文献史学
	井関 弘太郎	名古屋大学教授 地理学
	浅野 清	愛知工業大学教授 建築史学
	渡辺 誠	名古屋大学助教授 動・植物学
	池田 次郎	岡山理科大学教授 形質人類学
	江本 義理	前東京国立文化財研究所保存科学部長 保存科学
	諏訪 兼位	名古屋大学教授 岩石学
	木方 洋二	名古屋大学教授 木材組織学
調査担当	調査課長	明壁 正毅
	調査補佐兼主査	鷺野 勉
	調査補佐兼主査	山田 耕治
	主査	梅本 博志
	主事	小澤 一弘
	主事	佐藤 公保
	主事	平田 瞳美
	主事	水谷 明和
	主事	宮腰 健司
	嘱託	鈴谷 一
	嘱託	松田 訓
事務局	事務局長兼管理課長	太田 正男
	主査	青山 光一
	主事	鈴木 孝治
	主事	田上 堅三
	主事	大野 智靖
	主事	小倉 晴美

調査期間	昭和63年4月～平成元年3月
理事長	中根昭二
常務理事	鈴木 正明
監事	福地 甲子八
理事	小金 潔 県教育長 井関 弘太郎 名古屋大学名誉教授

	伊藤 秋男	南山大学教授
	大参 義一	信州大学教授
	坪井 清足	(財)大阪文化財センター理事長
	榎崎 彰一	名古屋大学教授
	花木 蔦雄	都市教育長協議会会長・一宮市教育長
	金島 覚	町村教育長協議会会長・西枇杷島町教育長
	下田 修司	県土木部長
	白井 正巳	県教育委員会社会教育部長
	林 正治	清洲貝殻山貝塚資料館長・清洲町長
	山田 五夫	県陶磁資料館長
<b>監事</b>	小倉 政則	県出納事務局次長
	鈴木 穀	県教育委員会総務課長
<b>専門委員会</b>	榎崎 彰一	名古屋大学教授 考古学
	早川 庄八	名古屋大学教授 文献史学
	井関 弘太郎	名古屋大学名誉教授 地理学
	浅野 清	愛知工業大学教授 建築史学
	渡辺 誠	名古屋大学助教授 動・植物学
	池田 次郎	岡山理科大学教授 形質人類学
	江本 義理	前東京国立文化財研究所保存科学部長 保存科学
	諏訪 兼位	名古屋大学教授 岩石学
	木方 洋二	名古屋大学教授 木材組織学
<b>調査担当</b>	調査課長	明壁 正毅
	課長補佐兼主査	森 勇一
	課長補佐兼主査	土屋 利男
	主事	石黒 立人
	主事	川井 啓介
	主事	日比 宰
	主事	宮腰 健司
	嘱託	飴谷 一
	嘱託	岡本 直久
	嘱託	松田 訓
<b>事務局</b>	事務局長兼管理課長	太田 正男
	主査	古田 伴弘
	主事	鈴木 孝治
	主事	田上 堅三
	主事	大野 智靖
	主事	小倉 晴美

一調査期間 平成元年4月～8月

<b>理事長</b>	松川 誠次
<b>常務理事</b>	鈴木 正明
<b>理事</b>	小金 潔 県教育長
	井関 弘太郎 中部大学教授

	伊藤 秋男	南山大学教授
	大参 義一	信州大学教授
	坪井 清足	(財)大阪文化財センター理事長
	榎崎 彰一	名古屋学院大学教授
	花木 蔦雄	都市教育長協議会会长・一宮市教育長(6月30日辞任)
	稻石 新	都市教育長協議会会长・蒲郡市教育長(7月1日就任)
	金島 覚	町村教育長協議会会长・西枇杷島町教育長
	下田 修司	県土木部長
	白井 正巳	県教育委員会社会教育部長
	武田 晋	清洲貝殻山貝塚資料館長・清洲町長
	山田 五夫	県陶磁資料館長
監事	福地 甲子八	
	小倉 政則	県出納事務局次長
専門委員	榎崎 彰一	名古屋学院大学教授 考古学
	早川 庄八	名古屋大学教授 文献史学
	井関 弘太郎	中部大学教授 地理学
	浅野 清	愛知工業大学教授 建築史学
	渡辺 誠	名古屋大学教授 考古学 動・植物学
	池田 次郎	岡山理科大学教授 形質人類学
	江本 義理	前東京国立文化財研究所保存科学部長 保存科学
	諏訪 兼位	名古屋大学教授 岩石学
	木方 洋二	名古屋大学教授 木材組織学
調査担当	調査課長	明壁 正毅
	課長補佐兼主査	森 勇一
	課長補佐兼主査	山仲 廣司
	主査	梅本 博志
	主事	石黒 立人
	主事	小塚 俊夫
	主事	鈴木 正貴
	嘱託	加藤 とよ江
事務局	事務局長兼管理課長	渡辺 守夫
	主査	古田 伴弘
	主事	鈴木 孝治
	主事	大野 智靖
	主事	村上 寿章
	主事	小倉 晴美

## 第2章 遺跡の概観

### 1. 地理学および地質学的接近

朝日遺跡をとりまく地理的環境や濃尾平野における朝日遺跡の占める位置および遺跡基盤層の成立過程などについて、現状における問題点をふまえて略記する。

**位置と地形** 朝日遺跡は半径約12kmの犬山扇状地扇端部より南方へほほ7km、木曽川水系五条川の氾濫平野内に位置している。古くより朝日貝塚あるいは清洲貝殻山貝塚の名で知られ、東海地方屈指の弥生時代の集落遺跡として著名である。

朝日遺跡の東方約4kmには、庄内川をはさんで西志賀遺跡（名古屋市北区）、遺跡の南西部一帯2km以内には阿弥陀寺遺跡（海部郡甚目寺町）、廻間遺跡（西春日井郡清洲町）、土田遺跡（清洲町・稻沢市）、大渕遺跡（甚目寺町）などが展開し、この付近一帯は弥生時代の一大遺跡群を構成している。

**黒色土** 朝日遺跡の調査現場における第一印象「何と黒い土なのだろう」という強烈な想いは、その後4年間愛知県内外の多くの遺跡の土の色を観察したのちでも、変わることはなかった。それでは朝日遺跡の土の色はどうしてあんなに黒いのだろうか。このことについて、常識的な解答のいくつかは用意することはできる。しかし、上下を淡灰褐色～緑灰色の砂層やシルト層ではさまれた朝日遺跡の遺物包含層の、異常なほどの黒さの真の原因については、依然謎のままになっている。このことは朝日遺跡の特質を語るうえにおいて、いずれ明らかにしていかなければならない課題の一つのように思われる。

**貝層と弥生時代の海岸線** 朝日遺跡ではもう一つ、全国の弥生遺跡としてはむしろ稀ともいえる貝層の多さについてふれておかなければならない。ハマグリ・マガキを中心とした内湾砂泥底に生息する貝類が多く、そのことから弥生時代の頃、朝日遺跡付近に海が存在していたのではないかという推定がなされていた。そして、いくつかの報告書には、実際に弥生時代の頃の海岸線の位置が朝日遺跡のすぐ近くにひかれたものも見受けられた。こうした弥生時代における朝日遺跡をめぐる海岸線の位置については、一体どこまでが正しく、どこまでが正しくないのか、朝日遺跡との関わりを持ちはじめて以来、ずっと頭を悩ませてきた最も重要で、かつ根源的な課題ともいべきものである。

**埋積浅谷** 1988年度に入って、朝日遺跡では約5600m<sup>2</sup>の発掘調査が行われた。この調査によって朝日遺跡の基盤層の成立や地形発達を考えるうえで重要な発見があいついだ。その一つは、朝日遺跡の北集落と南集落の間を貫流する河道（埋積浅谷）の生成時期が明らかになったことであろう。河道の一部をその底部付近まで完掘することができたことによって、谷地形の規模が幅25～30m、深さ約4.3mにも達する巨大なものであり、その河道の周辺には厚さ1.5mにおよぶ未分解の泥炭層（確認できる最

下層の標高は-0.1m)が堆積していることが判明した。この泥炭層中の放射性炭素年代を測定した結果、 $4670 \pm 90$ y.B.P. (GaK-13397) をはじめ計7点の4000年代を示す年代値が得られたことから、この浅谷の形成時期はこれまで言われてきたような「弥生の小海退」に対応したものとは別の、少なくとも縄文時代中期にまで遡る河道であることが次第にはっきりしてきたのである。

そして、1988年9月には浅谷底のはるか上位にあたる小河川の底部に堆積した黒灰色シルト層上面より縄文時代後期の土器片と、この地層を掘りこんで構築されたドングリピット2基が発見されるに及んで、朝日遺跡における浅谷の形成は縄文時代後期より遡るものであるということがいよいよ確実なものになった。

**砂堆地形** 一方、朝日遺跡付近では、以前より北西-南東方向に連続する基盤砂層の高まり(微高地)の存在が指摘されており(井関、1979・井関、1982)、これらはこの地域を流下する木曽川水系五条川の自然堤防の延長方向とは明らかに直交ないし斜交していることが知られていた。そして、この微高地の存在を考慮に入れるならば、朝日遺跡の立地がたんに五条川の自然堤防帶に依拠しているというだけでは説明しきれない側面をもっていることが認識されるようになってきた。

1988年末、朝日遺跡の2調査区において深度30mに達する3ヶ所のボーリング調査を実施した。その詳細な分析結果は1991年度に発刊が予定されている「朝日遺跡・自然科学編」にゆずることとして、ここではボーリング柱状図の最上部を占める沖積上部砂層のみについて述べる。本層は、その厚さが7~8mに達し、朝日遺跡付近における分布深度は+1.2m~-7.3mであることが判明した。その結果、木曽川水系によってもたらされた砂質堆積物は、三角州前置層としてこの地域の平野の前進・拡大に多大な貢献をしたことが容易に推定される。しかし、沖積上部砂層の最上部にみられる起伏、すなわち北西-南東方向に軸線を有する微高地と、それを迂回するように北東から南西方向に流下する旧河道の存在こそが、朝日遺跡における弥生集落の立地に最も寄与したことがより一層鮮明になってきたということができる。

**縄文時代後期の海進** そして、もう一つの沖積上部砂層上面に記録された朝日遺跡63B区における海生珪藻の多産層準( $3790 \pm 90$ y.B.P.)と、土田遺跡89C区における海の証拠( $2530 \pm 190$ y.B.P.)の発見は、縄文時代後・晚期の頃の海進によって、朝日遺跡付近が海の影響の強い環境下に置かれたことを示している。この海進の規模については、両者の標高がいずれも0m付近かそれよりいくぶん高いところに位置していることから、濃尾平野におけるその後の沈下量を考慮に入れれば、無視できないほどのものであったことは想像に難くない。

#### 文献

- 原 賢仁(1978) 濃尾平野における後期完新世の地形発達と先史遺跡の立地。名古屋大学大学院文学研究科修士論文  
井関弘太郎(1979) 朝日遺跡群の立地微地形。朝日遺跡群範囲確認緊急調査報告、愛知県教育委員会、15-19。  
井関弘太郎(1982) 朝日遺跡における旧自然環境の復元と考察。『朝日遺跡』、愛知県教育委員会、217-227。  
井関弘太郎(1982) 沖積平野。東京大学出版会、142P。  
森 勇一・伊藤隆彦(1989a) 古生物学的にみた朝日遺跡の古環境の変遷。愛知県埋蔵文化財センター年報(昭和63年度)、76-91。  
森 勇一・伊藤隆彦(1989b) 昆虫および珪藻遺骸から得られた縄文時代中期~晚期の古環境。日本第四紀学会講演要旨集、19、68-69。  
森 勇一・伊藤隆彦・永草康次・橋 真美子(1990) 濃尾平野周辺地域における遺跡基盤の粒度および鉱物組成。愛





知県埋蔵文化財センター年報（平成元年度）、65－84。  
海津正倫（1988）濃尾平野における縄文海進以降の海水準変動と地形変化。名古屋大学文学部研究論集、285－303。

## 2. 歴史的接近

朝日遺跡には、縄文時代に始まり江戸時代まで間欠的に続く人間活動の痕跡が記されている。

縄文時代は、集落という性格はきわめて希薄であるが、ドングリ・ピットなどの遺構が検出されており、近接するであろう集落の活動領域に含まれていたことがわかる。

弥生時代は朝日遺跡のほとんど全体に関わる時代であり、朝日遺跡の変遷が逆に弥生時代を区分する可能性もある。

朝日遺跡の周辺では、貝殻山貝塚の南西約1kmほどのところに遺跡が存在する可能性はあるものの実態はほとんどわかっていない。ある程度わかっている遺跡のうち最も近接するのが西約2kmにある清洲町松の木遺跡であり、II期からIII期にかけての遺跡と考えられている。その南南西1.5kmにはII期からV期の遺跡である甚目寺町阿弥陀寺遺跡、南西2kmにはIII期からV期の森南遺跡があり、この付近は比較的遺跡の集中する地区といえる。

朝日遺跡を中心に半径5kmの円を描いた範囲には上述のような遺跡群が含まれているけれども、その範囲外縁の様相は北と南で大きく異なる。

南東には朝日遺跡同様I期に始まり貝塚を形成する西志賀遺跡、南西にはII期からIII期の遺跡である寺野遺跡があり、これらは低湿地帯に分布する遺跡として系譜的な関係も含めて相互に緊密な関係があったと考えられるが、北に目を転じるとそこは条痕紋系土器分布圏であり曾野遺跡や大地遺跡など系譜を異にする遺跡が営まれている。この南北の関係は、起源問題としては大きく〈縄文〉対〈弥生〉という図式で説明できるものであり、それに関してはすでに別に著しておいた。

しかしIV期を境にしてこの枠組みも変換し、時代の変化を予感させるものとなる。

弥生時代末～古墳時代にかけて遺跡の立地が移動することは、濃尾平野全体にわたってみられる現象といえ、弥生時代中期から後期にかけて続いてきた阿弥陀寺遺跡や森南遺跡のような集落の多くがVI期遺構に衰退し、かわりにV期からVII期にかけて新たに出現したり集落規模が拡大する廻間遺跡や埋田遺跡のような遺跡が顕著となる。また墳墓では、廻間遺跡においてVI期にあたる前方後方型の低墳丘墓があり、その他低地部の古墳として、二ツ寺古墳・土田遺跡があげられる。古墳時代後期～古代にかけての周辺の様相ははっきりしないが、稲沢市内に尾張国衛・国分寺・同尼寺が建立されるほか、竪穴住居を中心の清洲城下町遺跡、掘立柱建物のみの大瀬遺跡がある。鎌倉～室町時代には、土田遺跡等でみられる溝で区画された居住域と方形土塙で構成される墓域という形態の集落が多くみられる。その後近世には、遺跡西方に織田の居城である清洲城を中心とした城下町が広がっていく。

## 第1章 層序

- 1. 遺跡基盤層の地形学的検討…16 2. 谷地形…22
- 3. 微高地…23 4. 竪穴住居…26 5. 土坑…26
- 6. 溝…27 7. 方形周溝墓…27

## 第2章 繩文時代

- 1. 谷地形…28 2. 貯蔵穴…30

## 第3章 弥生時代

- 1. 56A区…31 2. 56B区…34 3. 56C区…37 4. 60A区…38
- 5. 60B区…42 6. 60E区…49 7. 60H区…57 8. 60I区…58
- 9. 61A区…59 10. 61C区…74 11. 61D区…77 12. 61E区…82
- 13. 61H区…99 14. 61M区…103 15. 61P区…110 16. 61N区…114
- 17. 61T区…117 18. 62A区…120 19. 62B区…121 20. 62C～62L区…122
- 21. 63A区…124 22. 63B区…124 23. 63D区…127 24. 63G区…130
- 25. 63J区…132 26. 63L区…132 27. 63M区…134 28. 63N区…135
- 29. 89A区…137 30. 89B区…137 31. 89D区…142

## 第4章 古墳時代

- 1. 谷A内の遺構…143 2. 西部地区…144 3. 北部地区…144
- 4. 南部地区…144 5. 東部地区…148

## 第5章 中世

- 1. 土坑…151 2. 谷…151

## 第6章 その他

## 第7章 若干の分析と展開、そして課題

- 1. 遺跡の地表面…155 2. 住居…156 3. 集落の形式…158
- 4. 墓制について…163

# 第1章 層序

## 1. 遺跡基盤層の地形学的検討

1985～1989年度に行われた発掘調査、およびそれに先立つ1981～1982年度の県教育委員会の発掘調査等の成果より、朝日遺跡の基盤層を構成する砂層および青灰色シルト層についての東西・南北両断面図を作成した。ただし、各地点における柱状図はいずれも各調査区担当者によって作成された土層セクション図にもとづいており、砂層と青灰色シルト層についての共通した認定基準が確立されていないこともある、厳密な地層対比にはいさか問題が残る資料も含まれている。

### 東西断面（A B断面） 第4図参照

やや低いところに位置する西墓域と、南方に屈曲する谷A（本書における呼称で、かつては「旧河道C」と呼ばれた）に沿った部分、および東墓域についての約1.7kmの断面図である。柱状図数は計37本である。

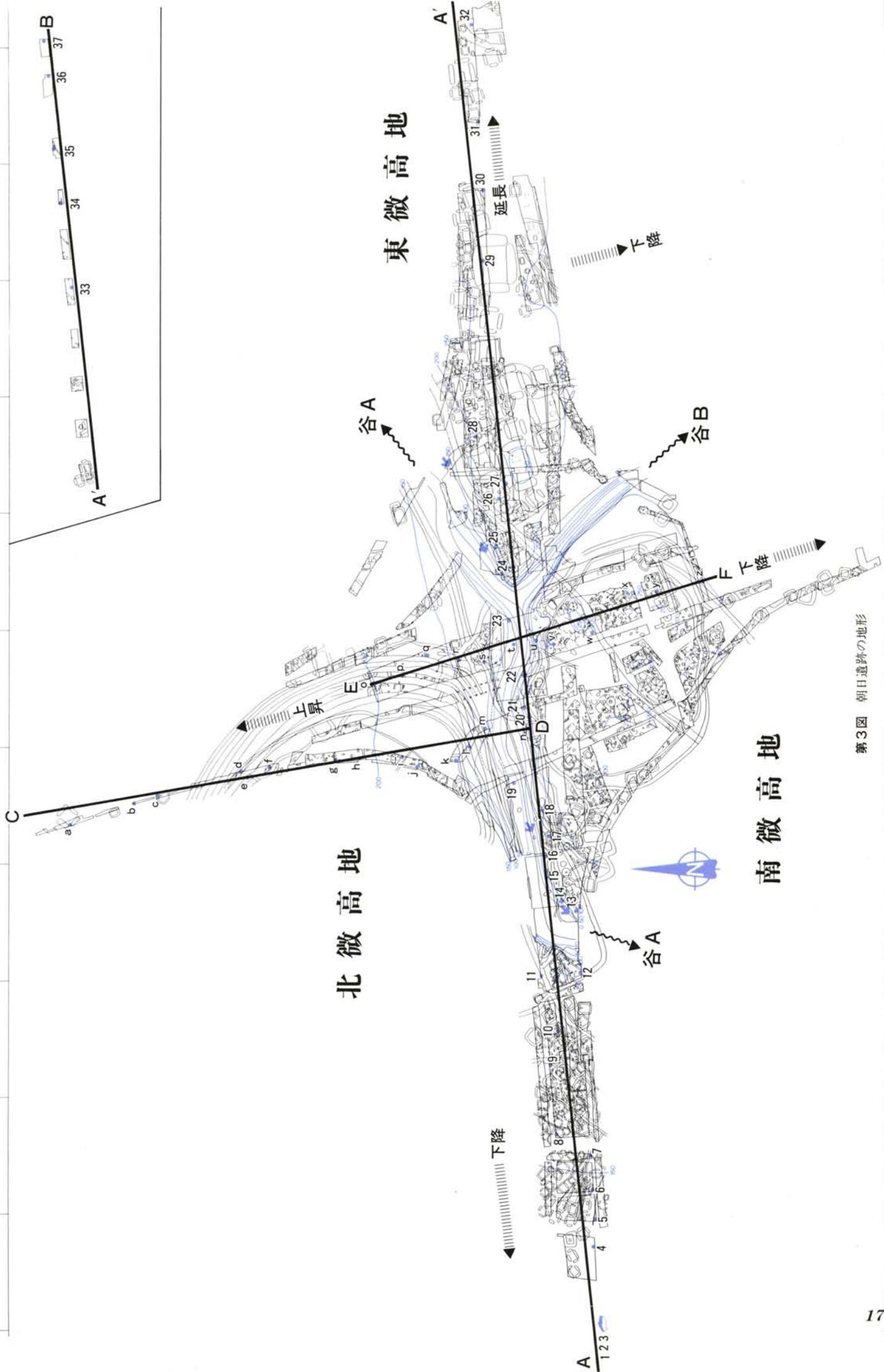
西部から詳しくみると、1～3は標高+0.2～0.6m付近に青灰色シルト層が存在するのみで砂層はみられない。基盤層の標高は谷の部分を除けばもっとも低い。4～9の部分では、標高+1.2～1.8m、1～3同様砂層の存在は確認されていないが、遺跡基盤層を構成する青灰色シルト層は下位付近では細～中粒砂層に移化している可能性高い。10、11の基盤層がやや低いのは人為的な溝が掘られている影響であろう。なお、10地点は土層セクションから砂層が確認された最西端の地点である。その最上面の標高は+1.3mである。12～13にかけて基盤砂層が低くなるのは、南流する谷Aを横切ることによる。13地点の砂層上面の標高は-0.5mである。14～25はいずれも東西に流れる谷Aの谷壁および河床付近の柱状図である。基盤層の標高は地点14でもっとも低く、-0.4mであった。ここでは砂層は確認されておらず、青灰色シルト層のみである。

26～37の柱状図は東墓域にあたる部分である。この地域の基盤砂層上面の標高は+0.5m内外で、その上部に平均1.5mに達する青灰色シルト層の堆積がみられる。全体として標高+2.0mかそれよりやや上回る位置に弥生時代中・後期の方形周溝墓が造られている。32の砂層上面の高度が+2.0mと他にくらべて著しく高いのは、おそらく基盤砂層と遺物包含層の砂層とが区別されていないことによるものと思われる。

### 南北断面（C DおよびE F断面） 第5図参照

#### C D断面

第3図 朝日遺跡の地形



北集落北方の環濠集落の外側（3地点）より集落東半部を経て、谷Aを横断し南集落に至る計13本の柱状図を連ねた約400mの断面図である。環濠外側のa～c地点では、標高+1.6～1.8mに上面高度をもつ青灰色シルト層がみられるものの、砂層の存在は確認されていない。d～fは北集落の環濠付近の柱状図である。上面の高度は+1.8m内外である。f地点で標高が極端に低くなるのは人為的掘削（溝）の結果と考えられる。g～kの5本はいずれも北集落内の柱状図である。標高+1.5～2.2m付近の高所に青灰色シルト層ないし砂層が分布しており、北集落が高燥な微高地上に立地していることが、断面図からも読みとることができる。l～mは北集落南端から谷Aを横断し、南集落北端に達する柱状図である。砂層の上面高度はk～lにかけて急激に低くなり、m地点ではついに標高0mに達する。

#### E F断面 第5図参照

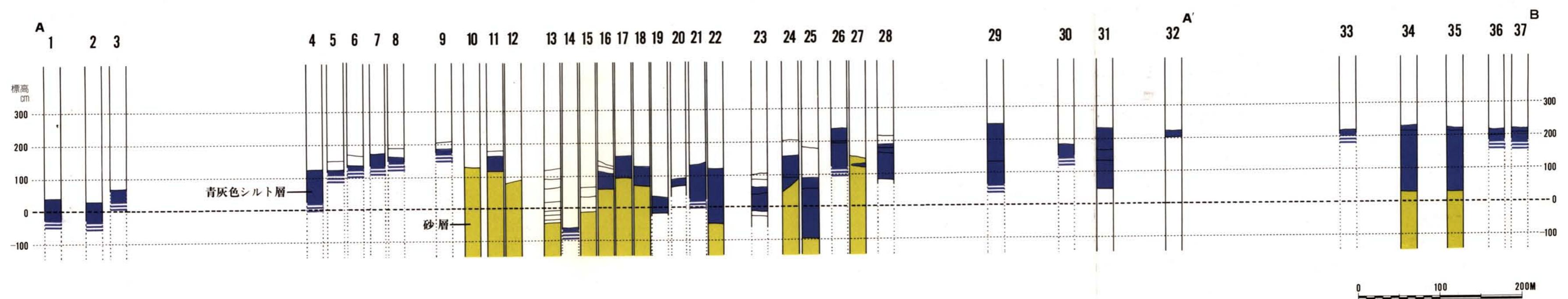
北集落東端から谷Aを横切って南集落東半部を縦断する12本約300mの断面図である。o～qの3本は北集落内に位置している。ここではC D断面同様+1.6～2.0m前後に青灰色シルト層が分布している。r～uは谷Aを横断する断面であり、+0.2～0.7mに上面高度を持つ砂層を被覆して1m未満の青灰色シルト層の堆積がみられる。v～zの5本は北集落内の柱状図である。ここでは+1.8～2.0m付近に青灰色シルト層よりなる基盤層が分布している。

#### 砂層について

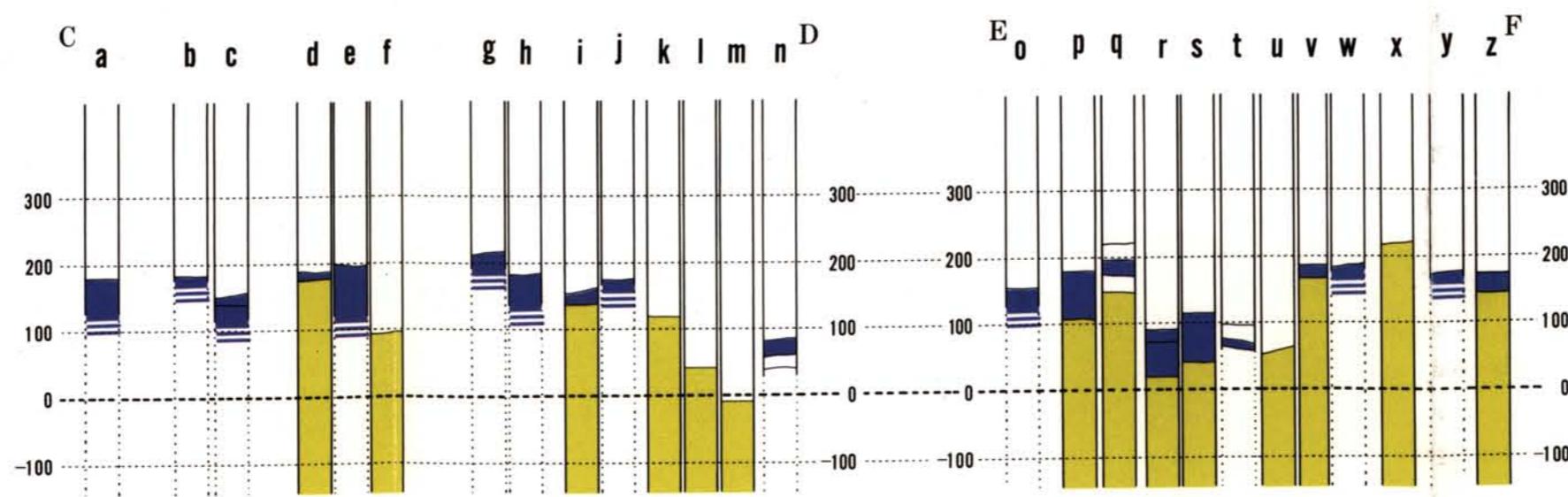
中～粗粒砂を中心に一部細粒砂をまじえる比較的淘汰の良い砂層であり、いわゆる沖積上部砂層の上部相にあたる。谷Aの断面観では著しいラミナの発達する部分がみられ、この砂層が河川によって運ばれたものであることを示している。しかし、粒度分析結果では標高+1.0mおよび0m付近に分布する砂層は河川性堆積物の特徴を有するものの、標高-1.0mと-0.5mに位置する砂層では海浜砂の粒度組成を示した。また、A B断面の31地点（62 I 区）の標高0mの砂層中には海～汽水生の珪藻が多量に含有され、少なくとも本層の一部は海浜環境に堆積したものであることが明らかになってきた。砂層の上面は主に谷Aの下刻に伴う比高2m（本来はもっと大きいものと思われる）に及ぶ著しい起伏が生じている。

#### 青灰色シルト層

青灰色シルト層は、通常は淡緑灰色～黄灰色を呈し、薄いところでも20～30cm、厚いところでは層厚2mに達する。下位の砂層の凹みを埋めるように堆積しており、その上面の高度はどの地域においてもおおむね+2m付近に存在する。本層の堆積環境を示す直接的な証拠は得られていないが、シルト層中には炭質物や植物遺体などの生物起源の包有物、あるいはシルトの粒径以外の碎屑物をあまり含んでいないことより、本層は比較的短期間に堆積したものであり、しかも強い水流の直接の影響下で堆積したものでないことは明らかである。また、現在までのところ、この層が海水の影響の及ぶところで堆積したという証拠は確認されていない。さらに考古遺物や放射性炭素年代など、青灰色シルト層の明確な堆積時期を考えるうえでの情報も得られていない。



第4図 朝日遺跡東西方向基盤層柱状図



第5図 朝日遺跡南北方向基盤層柱状図

## 砂堆と谷地形

朝日遺跡における弥生集落の立地が本来、北東－南西方向に延びる旧五条川の自然堤防上の微高地に立地したのか、あるいはそれと直交する北西－南東方向に軸線を有する砂堆（正しくは浜堤）の上に立地したのか議論が分かれるところである。しかし、北および南の集落がC D、E F断面に示されたようにやや北西－南東方向に並んだ微高地上に位置していることは、朝日遺跡の立地がここに流れている河道両側の微高地（自然堤防）に依拠したものでなく、何らかの原因でここに生じた砂堆状の地形に立地したものであることを示唆している。

そして、この砂堆が4000年（y.B.P.）代（放射性炭素年代による）の生成年代を示す谷Aによって激しく侵食されているという事実から、砂堆の生成時期は少なくとも縄文時代中期にまで遡る可能性を考えられる。その後、谷Aの埋積が進行するとともに、この地域は早くも縄文時代後期の人々の活動の舞台となった。これまでに谷Aに沿った東墓域および南集落の縁辺部より縄文時代後期の土器片が4ヶ所にわたって出土し、同時期のドングリピットが埋積が進んだ河道内より発見されている。

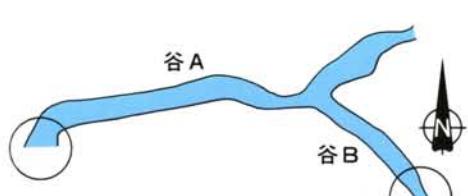
やがて、北集落と南集落に挟まれた谷Aの部分が埋積されるに従って谷Aが南流するようになり、谷Bを生じさせたという可能性も想定される。そして、そのことがこの地域一帯の標高2mに達する高所に、膨大な量の青灰色シルト層を堆積させることにつながったものと考えることもできる。

谷Bの出現によって、北と南の集落の間の谷の部分の水流が弱められ、弥生時代中期の頃には地下水位の低下とあいまって河川水はほぼ完全に枯渇し、ここに幾重にも及ぶ環濠や柵・杭群などの防御施設が構築されることになったのである。そして、この谷に再び水流が復活したのは、弥生時代中～後期にかけての頃であるという調査成果が発掘によって得られている。

## 2. 谷地形

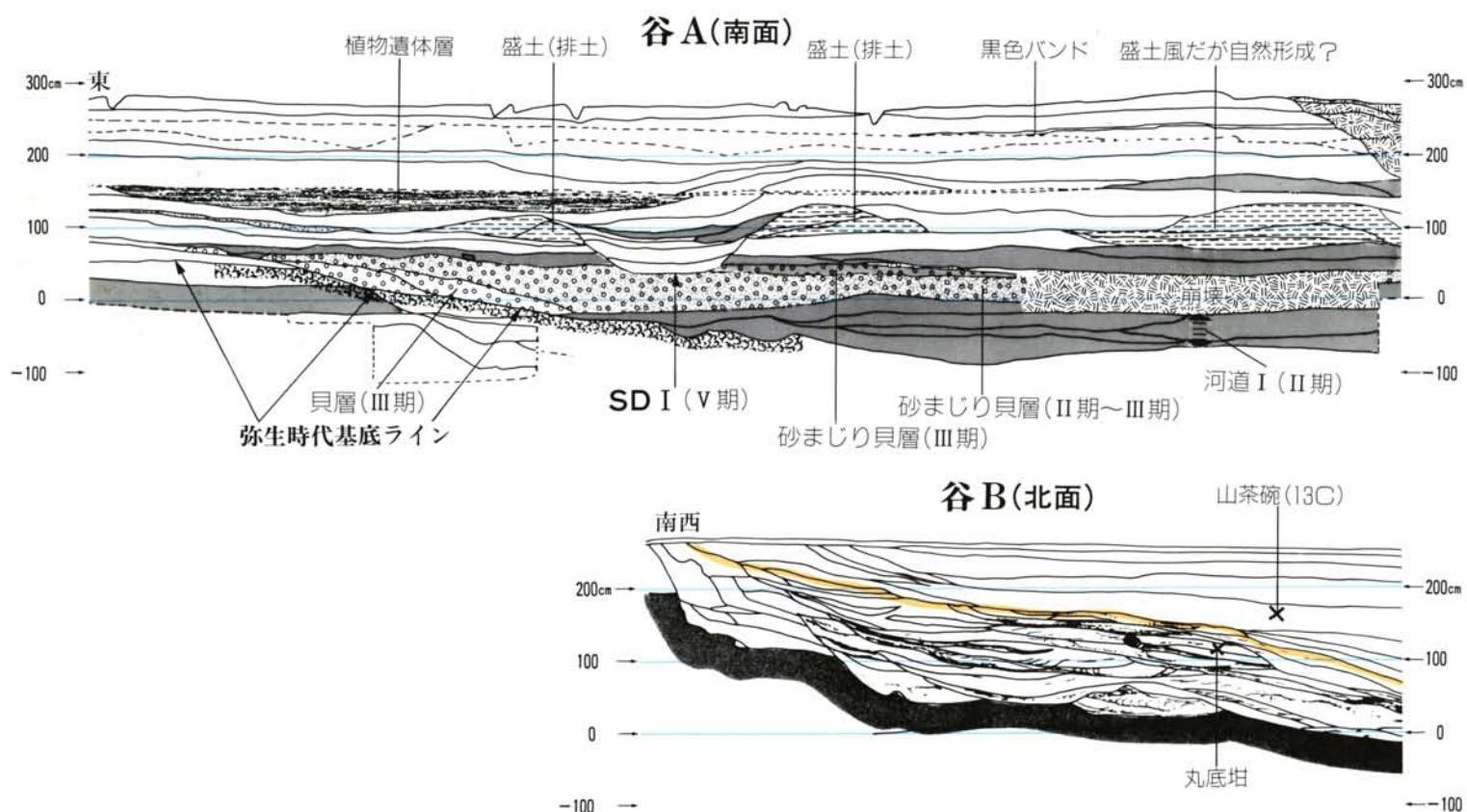
朝日遺跡の立地する微高地は、谷地形によっておおきく3地区に区分されている。ところで、1982年刊行の報告書（以下『報告書』と呼称する）では、谷に関する遺構として「旧河道」が提示され、「旧河道A」・「旧河道B」・「旧河道C」・「旧河道D」が認定されている。しかしその遺構としての意味は、井関弘太郎氏も『報告書』で指摘されているように「埋積浅谷」、つまり〈浅い谷〉なのである。それが「旧河道」であるのは、〈谷〉の埋没あるいは下刻過程における一時的な状態であるにすぎないのである。V期以降は河道の継続性が認められるものの、それ以前は間欠的な河道形成にとどまるようである。

これら「旧河道」はその後の調査によってかつての「旧河道A」と「旧河道D」が大規模な溝であることが確認されており、「埋積浅谷」としても認定の変更を必要としている。



そこで本書では、第6図のように「旧河道B」とその延長方向にある「旧河道C」を谷Aと呼び、それに直交する「旧河道C」の一部を谷Bと呼称する。

谷Aは、朝日遺跡の地理的環境を大きく規定するもので、幅約30mを測り、底の標高は約マイナス2mまで確認している。そして、マイナス0.6m以下では縄文時代後期の泥炭層の



第6図 谷A・谷B

存在が、さらにその下部の砂層から検出された炭化物については<sup>14</sup>C年代測定によって縄文時代中期相当の年代が与えられている。

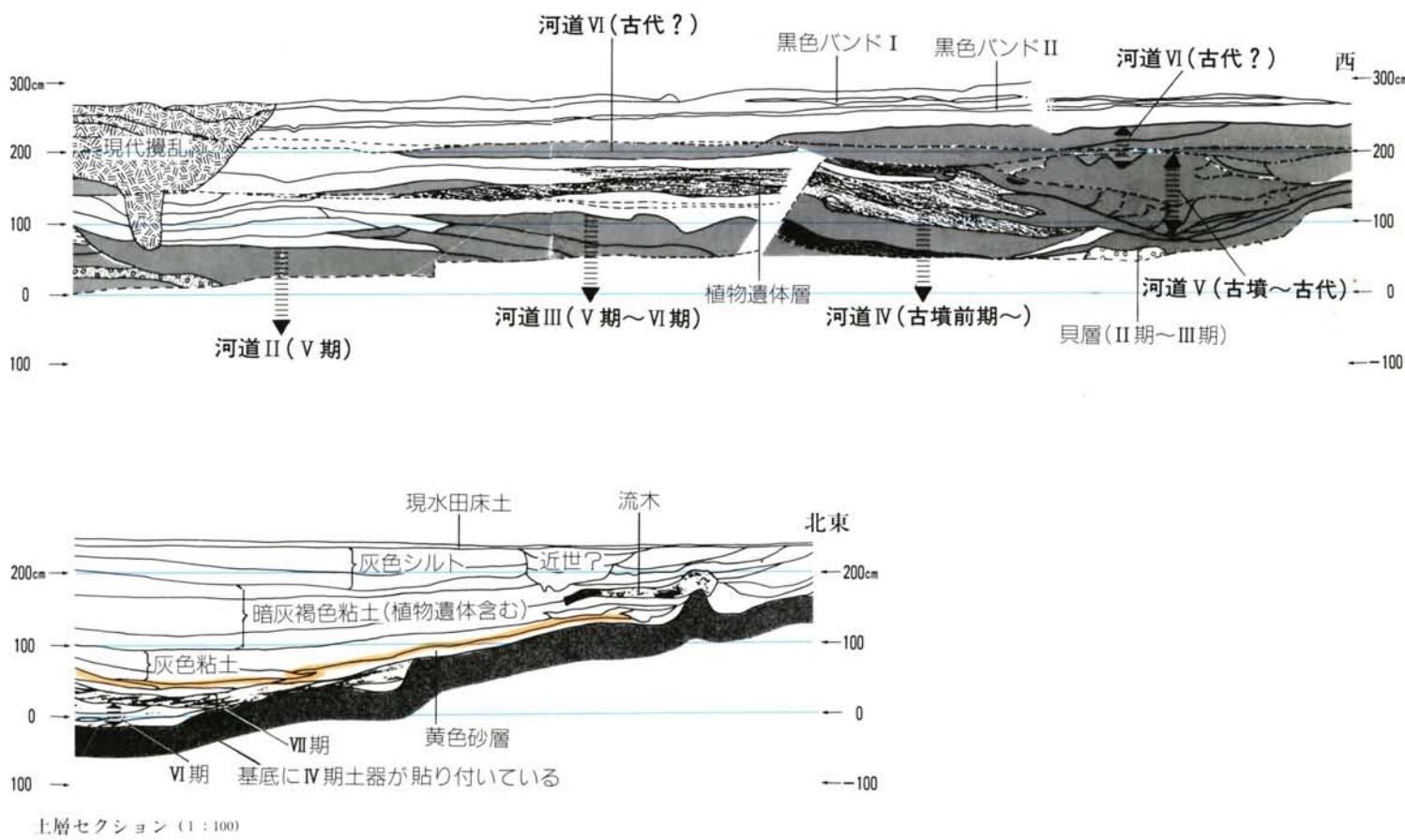
弥生時代の堆積層は縄文時代後期堆積層の上に堆積している。流水・止水による堆積環境の変化と人為的堆積層が複雑な関係を織りなしている。特に谷Aでは、弥生時代で少なくとも3回、それ以後3回の河道の形成が確認でき、河道化の時期を挟んでの季節的な変化なども含めて複雑な堆積状況を示している。完全に埋没するのはおそらく中世以降である。

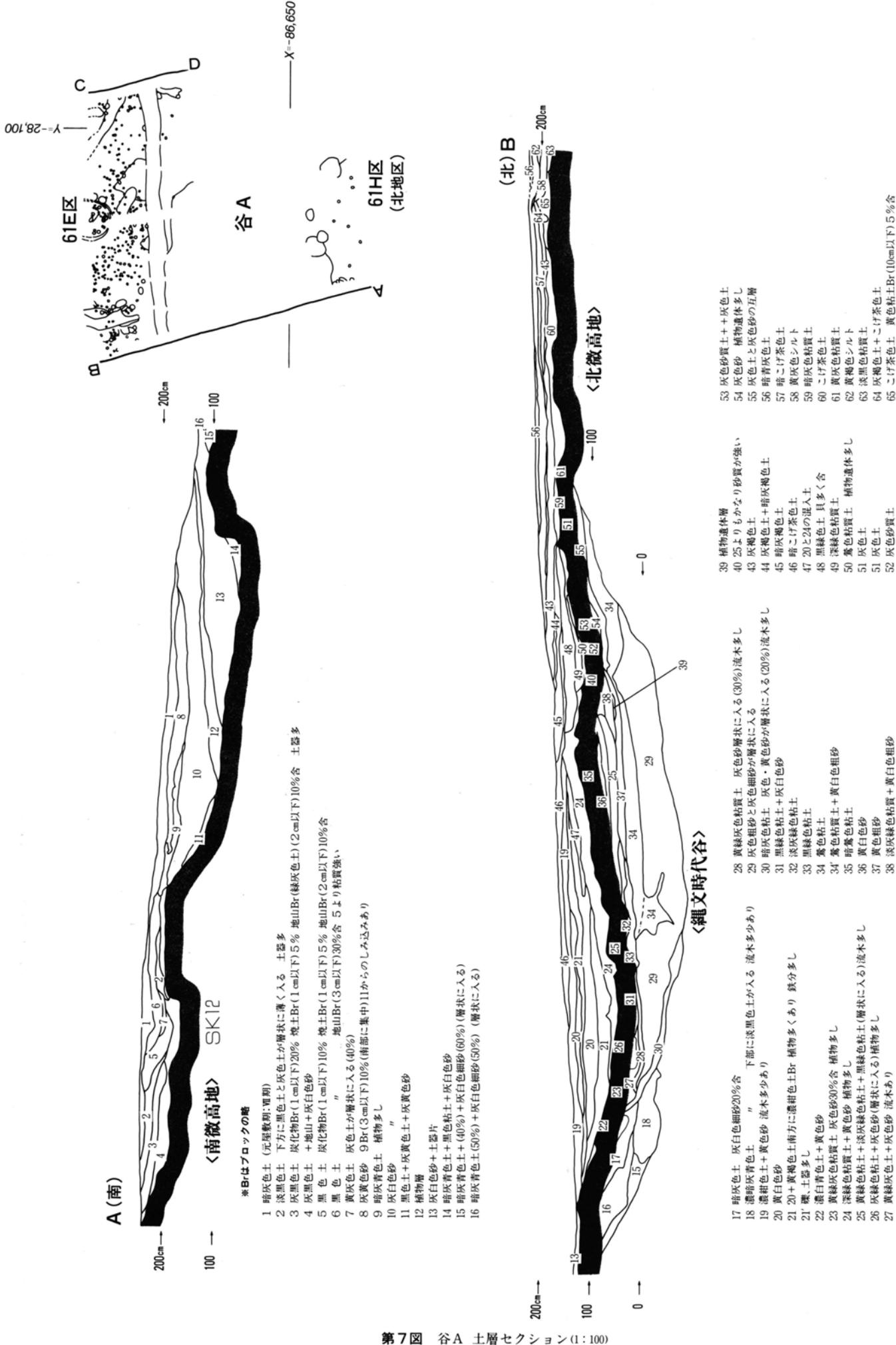
朝日遺跡を特徴づける貝層は、谷Aの南北両斜面で検出されているけれども、堆積層としては南微高地北斜面の方が厚く広範囲にわたっており、北微高地南斜面では散在し層自体も薄い。

谷Bは、幅約20mで、底はマイナス0.2mを測る。谷Aとは異なり下部に縄文時代堆積層は存在せず、また谷の東西斜面には谷底へ向けて下降する堆積層の形成はなく、谷Aより新しいものであることが看取される。もともと浅い谷状地形であったものを人工的に掘削して水路とした可能性がある。Ⅳ期以前の堆積層は見られず、また古墳時代後半期以降の堆積も止水的である。中世にもまだ窪地状をなし、諸点で谷Aとは大きく異なる。

### 3. 微高地

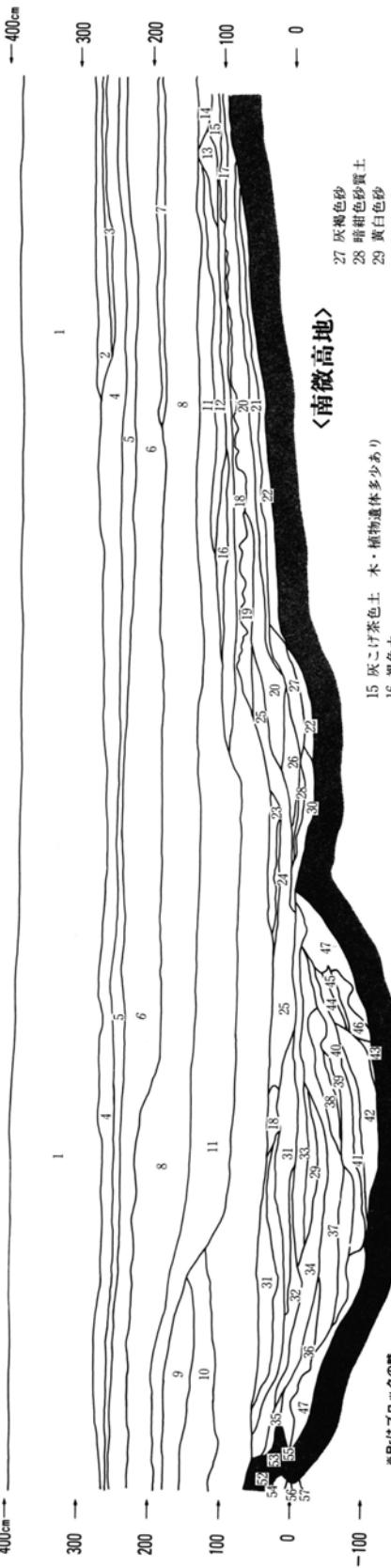
朝日遺跡は縄文時代に形成された微高地（浜堤）上に位置している。その起伏に関しては、人工的



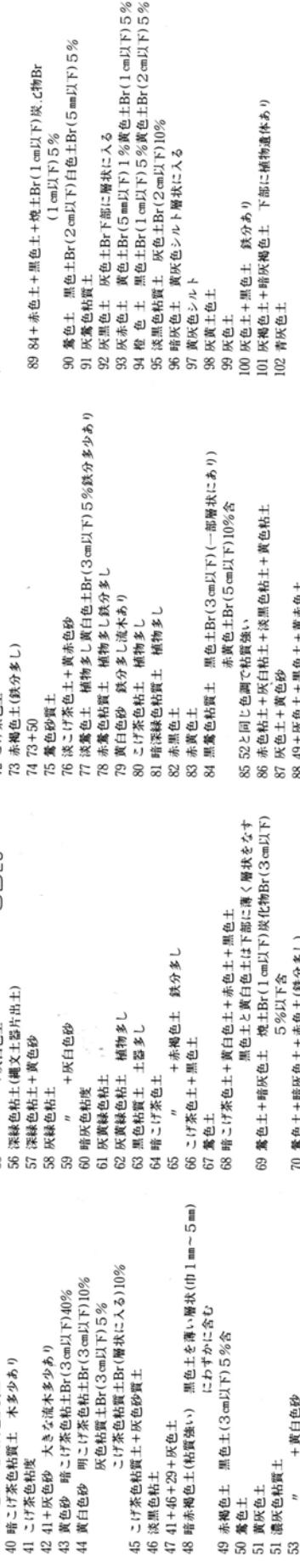
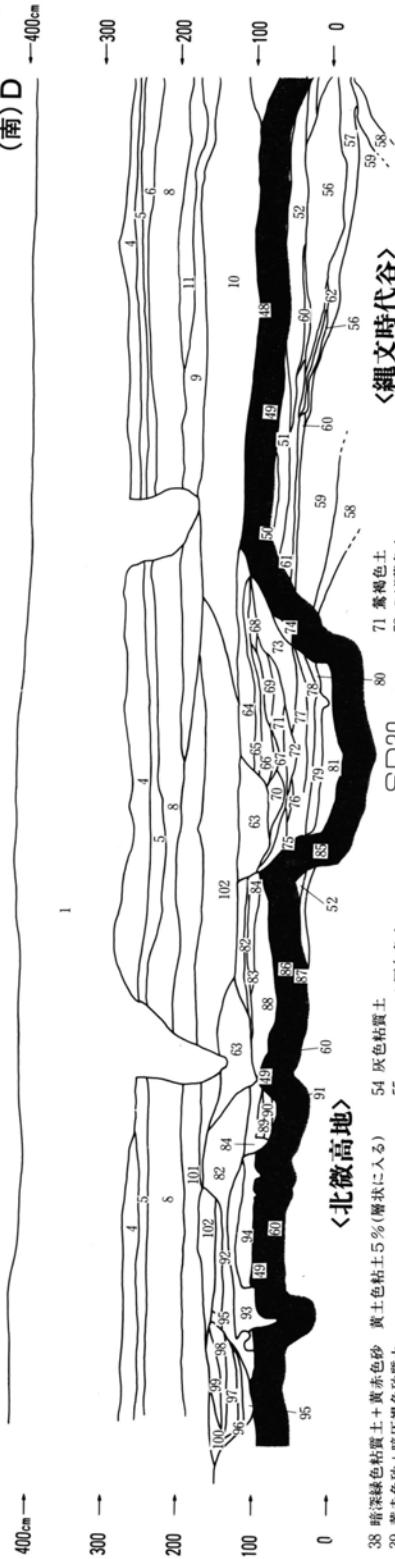


第7図 谷A 土層セクション(1:100)

C(北)



第8図 谷A 土層セクション(1:100)



な改変を受けていないと思われる包含層下部の標高をもとに等高線を描くと、第一図のようになる。標高2.6mが現状で確認できる最高所であり、そこでは灰色砂層の上に黄灰色シルトがのり、その上部には褐色粘土（または黒褐色シルト）が堆積している。黄灰色シルトと褐色粘土（または黒褐色シルト）両者の境界は漸移的で、不整合面の形成は見られない。

褐色粘土（または黒褐色シルト）上部には黒褐色砂質シルト（ところによっては含まれる砂が多くなる）の遺物包含層が堆積する。

上記以外の地点では人工的な改変によって包含層下部の標高は一定せず、浅ければシルト層、深ければ砂層が露出するのが一般的である。もちろん、「上部砂層」の高い所では遺構深度が浅くても砂層は露出する。

これまでのところ居住域内部の遺構外平坦面において洪水等に関わる滯水を示す層位は確認していない。あくまで流水による下刻が認められるのみである。

## 4. 竪穴住居

竪穴住居はいずれも「跡」であり、崩壊しているのが通例である。その竪穴には埋められたものと自然埋没の両者があり、朝日遺跡の継続期間中では人間集団の活動により前者が主となる。

埋められた竪穴のうちⅢ期までの例では、ほとんど上部が以後の遺構によって削平され、床面付近しか残存していない。そのため、多くの竪穴断面ではベースの黄（青）灰色シルトと包含層他が攪乱されて斑状をなす貼床が特徴的に観察されることになる。残存状態が良好な例では、上部に黒褐色砂質シルトが堆積している。

Ⅱ期の竪穴では、そのいくつかに継続的な廃棄が観察されている。ベース土・灰・炭化物・貝等が厚さ2、3cmの薄い層をなして堆積している。63N区ではそれが最終的に埋まりきらないで窪地状をなすⅡ期としては珍しい例（63N区SB01）を検出している。

Ⅳ期以降はベース土は余り含まず黒褐色砂質シルト（包含層）が主となる。土器廃棄を伴う例では、貝層・炭化物層・灰層・ベース土などが2、3cmの薄い層として累重する例がある。Ⅳ期以降は床面の貼床も以前程の厚みがなく、床面だけを取り上げるなら継続期間は短くなる印象を受ける。

自然埋没はほとんどⅦ期以降に限定される。つまり、地表面での人間活動の停止によって形成されるからである。下部は弥生時代包含層の再堆積で黒褐色砂質シルトからなり、上部は黄灰色粘土の堆積となる。

竪穴の掘形深度の最大例はこれまでのところⅡ期で約90cmの深さを有する例を確認した。多くはそれより浅く50cm以下となるが、おそらく竪穴掘削時の排土で形成される周堤を含めて浅くとも1m程度はあったものと推定する。

床面掘形に掘削時の工具痕が確認される例は少ない。

## 5. 土 坑

その性格上、埋められたものがほとんどであり、遺構の大多数を占める。

貝や土器などを伴う例、炭化物・焼土・灰のどれかが組み合って検出される例、竪穴住居のような攪乱された埋土や薄い層の累重する例、黒褐色砂質シルト（包含層）のみの例などがある。

そのなかで、埋没状態に何らかの意味が伴うと考えられた例は、いずれも井戸として認定した。

## 6 . 溝

溝は、居住域外部ではほとんど自然埋没である。それに対し居住域内部や外縁部では、居住域の拡張や人間集団の諸活動に伴って人為的に埋められる例が多い。両者とも堆積状況は別にして、概してベースの黄（青）色シルトと黒褐色砂質シルト（包含層）を含む。

このベース土の流入は、特に大量である場合には溝掘削に際して排出された土がまとまって流入した可能性が高く、その移動距離が近接しているなら「土壘」との関係で問題となる。いずれにしても大きな人為的作用が推定される。反面、少ない場合は特に冬期の壁面崩落など、自然条件によるものと考えられる。

前者の多くには貝・炭化物（焼土）・人工遺物が伴い、土坑と同様の生活廃棄物の処理場と化している。現代の先進国的な衛生観念では、ゴミ溜的な好ましくないものであったろう。

自然埋没では、砂層の堆積や植物遺体（流木）の流入があり、水流のあったことを示している。いずれにしても、自然と人為の両者によって埋没する。

## 7 . 方形周溝墓

墳丘は、周溝の掘削とともに順に排出される黒褐色砂質シルト（包含層）とベースの黄（青）灰色シルトが、方台部の周囲から中央に向かって流し込むように盛り上げられているので、プランでは周囲の黒褐色砂質シルトから内側の黄（青）灰色シルト攪乱土への漸移的な移行が同心円的に観察される。その結果方形周溝墓築造以前の古い時期の遺物が墳丘上部にくることになる。だから、墳丘中の遺物によって時期決定することはできないのである。

III期までは盛土中におけるベース土の割合は少なく、ほとんど黒褐色砂質シルトに限られるが、IV期以降は高さを確保するためかベース土が目だつようになる。

主体部はこの盛土中に構築される。旧地表面から掘り込まれる例はほとんど見られない。だいたいがベース土ブロック中に構築されるようで、検出は極めて困難である。

周溝は、多くが自然埋没である。しかし、IV期を中心に特定の時期には再掘削が行われる。完全に再掘削されプランまで変更されることはないようである。

周溝再掘削に併せて墳丘の改変が行われているかどうかについては、墳丘に設けられた土器棺上部が遺存していないことに示されているように、上部の削平のために確認できない。

## 第2章 縄文時代

### 1. 谷地形

縄文時代の谷の存在がほぼ確定したのは昭和61年度の調査である。

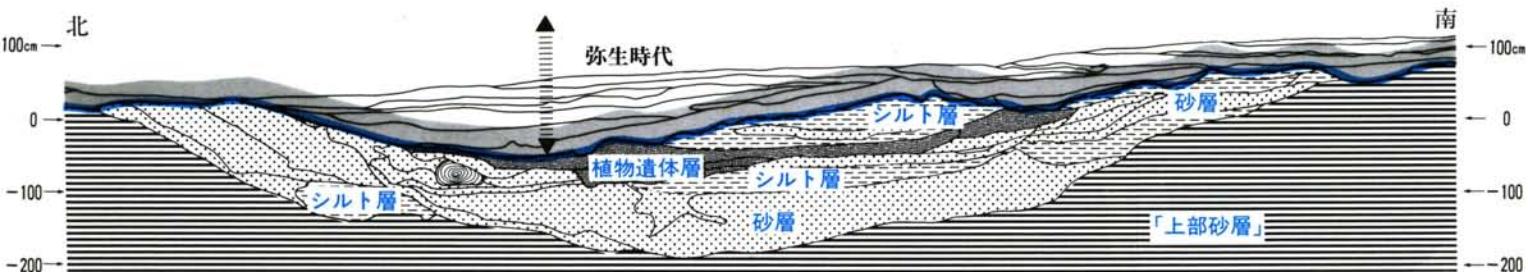
それ以前、昭和60年度の調査で60E区谷A部分で下部から流木層とともに縄文土器を検出しその存在が注目されたけれども、調査工程上の都合もあって面的に確認されるまでには至らなかった。それより遡れば、第1期の発掘調査において縄文土器の出土はあったが、一次的に包含される層の検出にまで至ることはなかった。

昭和61年度の調査では、ちょうど61A区が谷A部分に位置することがわかっていたので、調査にあたって縄文時代堆積層を確認することを課題に含めた。そこで、弥生時代遺構・包含層の調査に統いて谷Aにトレンチをいくつか設けた結果、上部の植物遺体層から少量ではあるが縄文土器の出土を確認し、しかも木製杓が出土するに及んで単に遺物の散布にとどまらず、人間の活動が想定されるに至った。後述の貯蔵穴はこうした経過の延長にある。

縄文時代の谷は、61A区でマイナス1.8mまで掘り下げて基底である「上部砂層」を確認している。その後、63A区では谷Aが複数の不整合面をもって堆積していることを確認した。

縄文時代の谷A上部に堆積している止水環境を示す植物遺体層以前の堆積層の時期に関しては、61A区においてマイナス1.8cmで採取した木乃について $4200 \pm 190$ yBPという<sup>14</sup>C年代測定値が与えられている\*。いずれにしても地形学的な分析の詳細は『朝日遺跡II』(自然科学編)において報告されることになろう。

\* 海津正倫「濃尾平野における縄文海進以降の海水準変動と地形変化」『名古屋学文学部研究編集CI・史学34』



第9図 谷A 縄文時代堆積層セクション：61E区・61H区間(1:100)



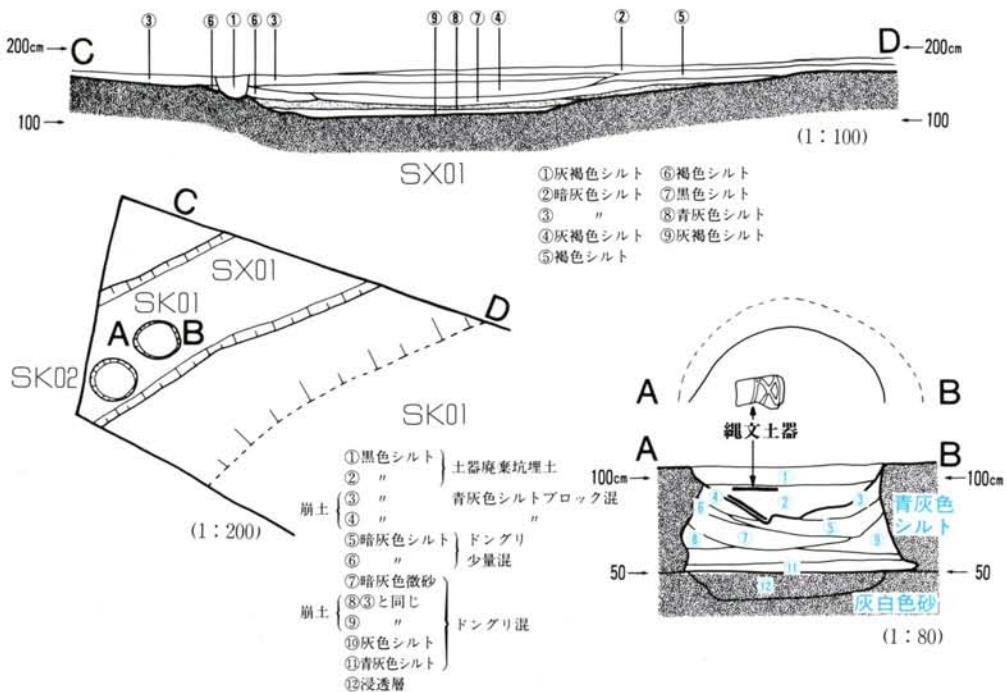
第10図 縄文時代の谷A  
土器と流木の出土状態

## 2. 貯蔵穴

63A<sub>2</sub>区で谷Aに並行すると考えられる溝状の落込みであるSX01下部において検出したが、調査当初それが縄文時代に属するものであるとは認識しておらず、そのためSK02はドングリを採取しないまま掘り下げてしまった。SK01は埋土の半分が観察用に残してあったので、すべてサンプルとして取り上げ、含まれている自然遺物の分析を名古屋大学教授渡辺誠氏に依頼した。

SX01は暗色系のシルト層が堆積し、⑧青灰色シルト層（ベースの再堆積である）を挟んで上下に大きく区分できる。時期は、①が弥生時代中期に属し、②以下はそれ以前である。⑦はSK01埋土上部の①・②と類似しているので、縄文時代後期に属す可能性がある。

SK01は、径1～1.2mのほぼ円形プランで、深さ0.5mを測り、断面は下部の膨らむ袋状をなしている。埋土は、大きくA. 縄文土器を含む①・②、B. ベースの青灰色シルトブロックを含む崩土③・④・⑧・⑨、C. ドングリを含む⑤～⑪となる。Cは⑤・⑥・⑦と⑧・⑨の堆積状況が異なっていること、ドングリ単純層が存在しないことなどから複数回の使用が考えられる。Aは、縄文時代後期土器（堀之内II式の深鉢：底部を欠くのみではほぼ完全に復元できる）を含む土坑状部分の埋土で直接ドングリ貯蔵穴とは関係しないが、貯蔵穴の下限を決定するものとして重要である。



第11図 63A<sub>2</sub>区貯蔵穴

# 第3章 弥生時代

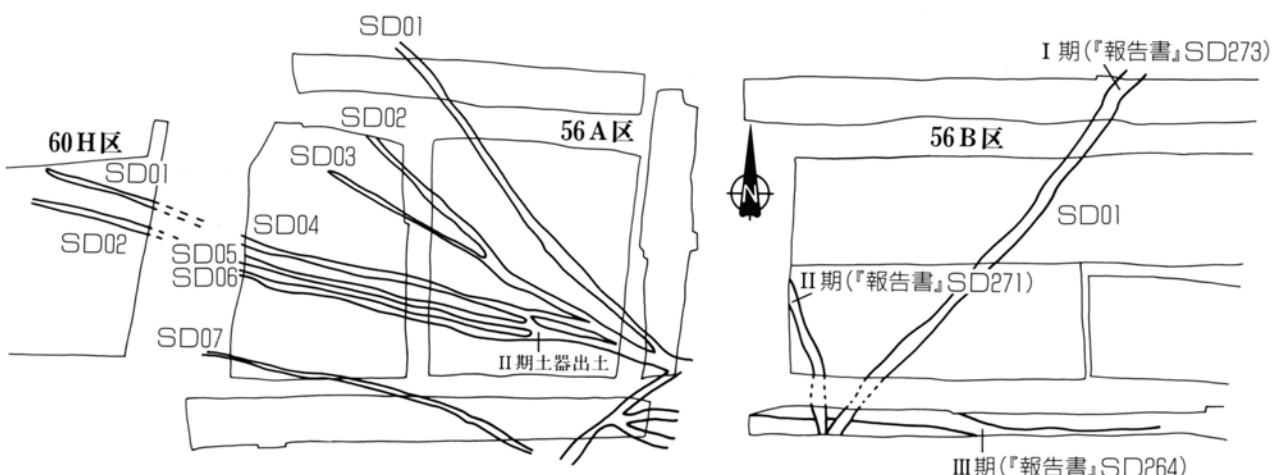
## 1. 56A区 図版4・5

### A. 溝

**方形周溝墓築造以前** 56A区では調査区南東部を要として集束する複数の溝が検出されている。同様の溝は56B区・60H区でも検出されており、ほか関連する溝は『報告書』で報告されている。

56A区SD01～SD07は、07を除いて一点に集束するようである。ほぼ平行して掘削されている04・05・06を境界として以北では集束し以南で並行するという相違は、『報告書』「SD264」がIII期と報告されているけれども、この溝を含めた東西ラインを基準軸とする何等かの土地区画に関係するものであることが窺われる。それは、重複する方形周溝墓群のなかに溝の走向に一致した方位を採用している例があることからも、溝の持続性を含めて十分考慮する必要があることを示している。

溝の掘削時期は、調査では05・06の集束部分でII期の土器が出土し、これと切り合っているS Z 19がII期であること、II期のS Z 17 東周溝がSD02・03の集束部分と切り合っていることから、方形周溝墓に先行することは確実で、II期以前ということになる。溝相互の関係は同時であるか否かは確認されていないけれども、近接した時期において誤りないと考える。また、方形周溝墓の方位が溝の走向に規定されている側面のあることは、その時期まで溝が埋没しきらないで確認できたことを示していると考える。



第12図 方形周溝墓群以前の溝(1:100)

では、その性格はいったい何であるのか。

西にきわめて緩やかに下降するベース面に溝の走向が一致していること、56A区ではⅠ期・Ⅱ期の遺構・遺物がほとんど出土していないことを考えると、居住域に関係するものとは考えられない。一番考え易いのは水田との関わりである。つまり、並行する04・05・06は幹線水路、他は枝水路ということになる。

**方形周溝墓築造以後** 方形周溝墓を破壊して走るSD08が検出されている。古墳時代以降である。

## B. 方形周溝墓

方形周溝墓は18基検出された。包含層上面における起伏の存在によって、墳丘の残存が予想された。結果、墳丘の確認された例は13基であった。一部には墳丘構築方法に関わる特徴である、墳丘中央部へのベース土の積み上げが観察された。56A区ではS Z 1 8が最大例であり $10.6 \times 6.3m$ を測る。タテ・ヨコ2辺の長短差が著しい。

方形周溝墓の分布は、SD04・05・06という平行する溝群以北において上述した溝と相関する線的な放射状配列を見せる主要な第1グループ、そのなかにあって方向を違えるS Z 1 9を第2グループ、SD07以南にある軸線も異なる無関係な第3グループの3つに区分される。第1グループには一边5m以下の小規模方形周溝墓があり、S Z 1 6はラインに沿うものの、他は充填的に分布する。

方形周溝墓の基本的な配列に関しては、2~3基で一単位を形成することを暗示する空間の存在が無視できない。しかし、同時に全体として線的な配列も認められるのであり、築造経過の問題も含めて検討が必要である。

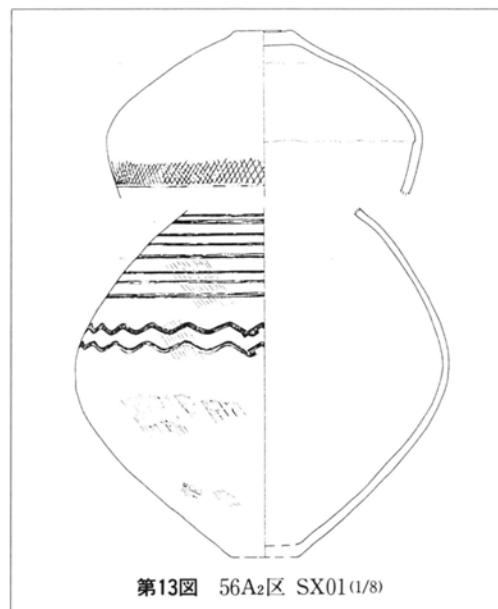
主体部に関してはほとんどの例で不明確であったが、S Z 8については棺材は遺存していなかったものの、小口板が底板を挟むタイプであると推定するに足る木棺痕跡が検出されている。

これら方形周溝墓の時期は、すべてから時期決定資料が出土したわけではないが、Ⅱ期の土器が出土したS Z 1 9・2 7を含めた全体の規則的な配列、下限がⅡ期と考えられる上述した溝との規則的な重複によって、これらがⅡ期に属すことがわかる。当地区においては、Ⅲ期の土器は出土していないこと、配列の完結性からみてⅢ期まで下がる可能性は少ないと考える。

## C. 土器棺 SX01

S Z 1 9墳丘を切り込んでベースに達する深さで検出された。時期はⅣ期に属しS Z 1 9よりは明らかに新しい。Ⅳ期に散見される方形周溝墓墳丘再利用の一例かもしれない。

棺構成は、知多・三河系壺を蓋に、四線紋系壺を身として、正立て埋置されたものである。





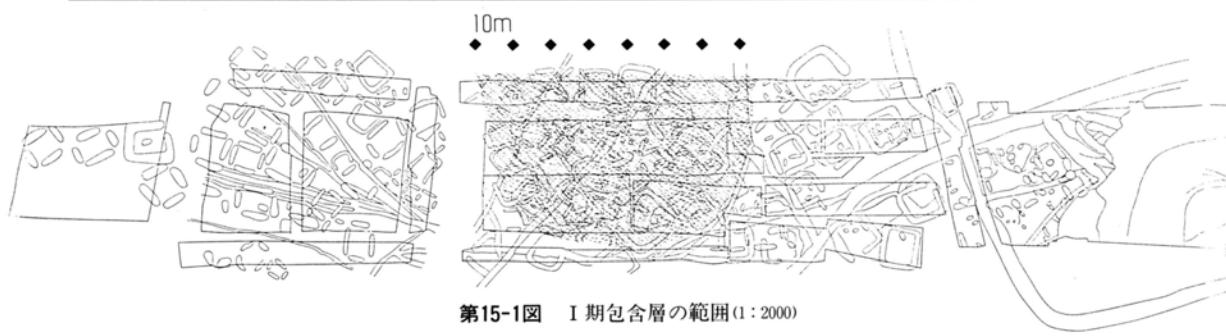
第14図 56A<sub>2</sub>区方形周溝墓

## 2. 56B区 図版6~8

### A. I期の遺構と包含層

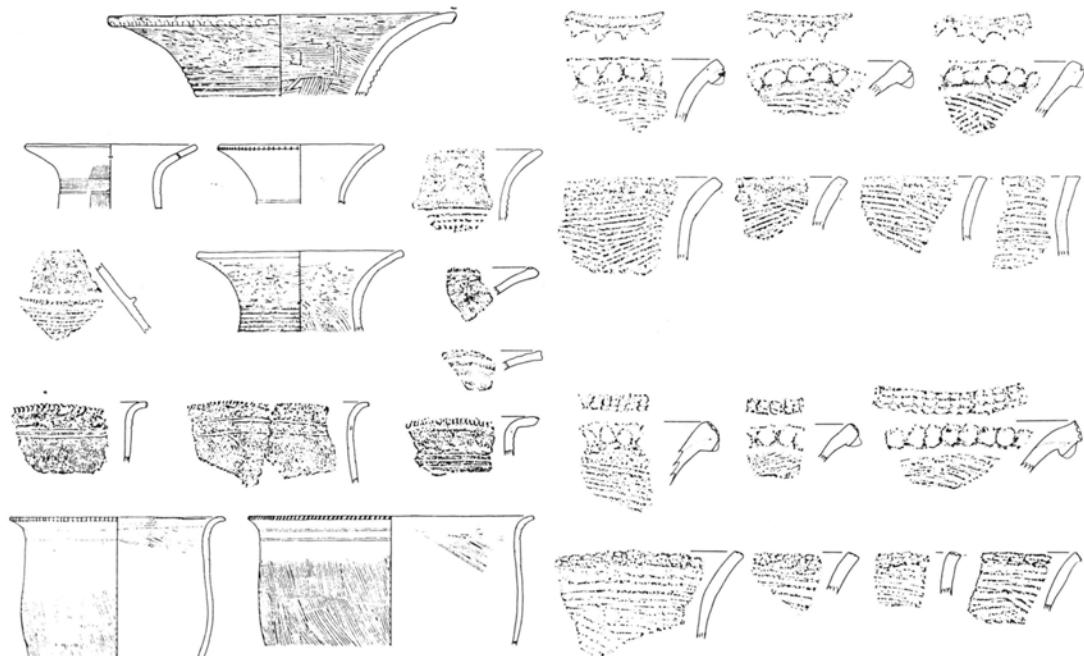
56B区では東西70mの範囲でI期の遺物がまとまって出土している。とくに方形周溝墓墳丘中からの出土が顕著である。これは、墳丘がI期包含層を積み上げていること、墳丘調査が他の部分の調査に比べてより精密であったためで、おそらくI期の遺物は一定範囲に拡散して分布していたのである。

ここで遺物については詳しく触れないが概略示せば、土器には第15-2図に示したようく遠賀川系土器とく条痕紋系土器があり、石器には石鏃・磨製石斧のほかに円礫を打ち欠いて製作した粗製剥片石器（横刃形石器）などがある。しかし、出土土器はすべてがI期というわけではなく若干II期の土器も出土している。方形周溝墓に伴うものが混入したのかもしれない。



第15-1図 I期包含層の範囲(1:2000)

#### I期の土器(%)



第15-2図 56B区 I期の包含層と遺物

遺構は、SD01が『報告書』SD273と同じであり、「西志賀期」(ここでいうⅠ期)として報告されている。ほかに56B区では方形周溝墓とは関係しない小穴や土坑がいくつか検出されている。時期のわかる例はないが、なかにはⅠ期に属するものもあるかもしれない。また、遺物の詳細な分布状況などは不明でありそうした遺構との関係は明かでないが、内容を見れば居住域が存在したと考える方が現状に即していると考えている。

## B. 方形周溝墓

方形周溝墓は、Ⅱ期～Ⅴ期に属する例が検出されている。このうち墳丘の残存したものは4基であり、墳丘に関してはⅣ期・Ⅴ期の例が相対的に高い傾向がある。

人骨の遺存した例としてSZ58がある。主体部の構造は明らかにならなかったが、1号・2号の2体が検出されている。遺存状態が良好であった1号人骨は頭を南東に向け、四肢を強く曲げた仰臥屈葬状態を呈している。レベルは、頭部下で標高185cm、足の方に向かって低くなり足下で170cmを測る。2号人骨は遺存状態が悪く、わずかに頭蓋骨の一部であることが確認できたにすぎない。おそらく構造は木棺であろう。2号人骨に近接してⅠ期土器(壺)が出土しているが、人骨に比べて検出レベルは200cmと高い。これは墳丘構築に際して混入したもので、人骨とは無関係であろう。

方形周溝墓の時期的な配置では、Ⅱ期が56B区の東部と西部、Ⅲ期が中央部、それらに重複してⅣ期・Ⅴ期が散在している。

Ⅱ期方形周溝墓は、西の一群が56A区東部を含めて非A4形の集中する傾向を見せ、しかも県教育委員会調査区で検出された例に見るように一部に「連結形」も含んでいる。これは、朝日遺跡全体の墓域形成からいっても特異な地区を形成しているといえる。

空白地(Ⅲ期の方形周溝墓の集中する地区)を挟んで東にある一群も西と同様非A4形を含むだけでなく、長軸と短軸の差が大きいSZ62のような拡張例が存在する。SZ41も拡張ではないが長短比が大きい。また、SZ74に隣接する2基の方形周溝墓は方形周溝墓間の狭い空間を連結形で分割している。「連結形」は空間に余裕が無い場合の構成方法であろうか。

Ⅲ期方形周溝墓はⅡ期には空白であった中央部に凝集して分布する。SZ56は墳丘が完全に重複するが軸線がややずれている。拡張例とはいえないかもしれない。このようなⅢ期方形周溝墓の凝集は、他に空間がなかったことを示すのであろうか。

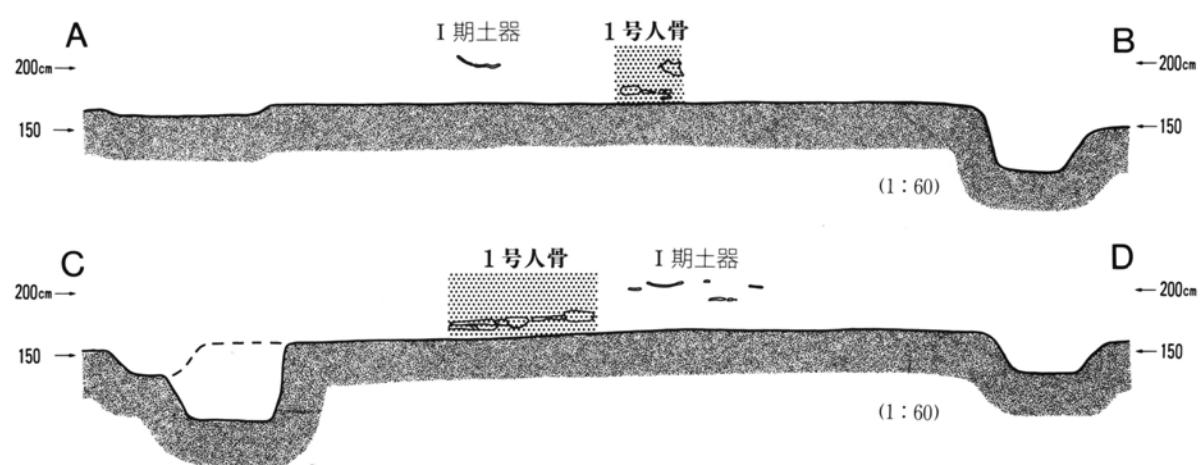
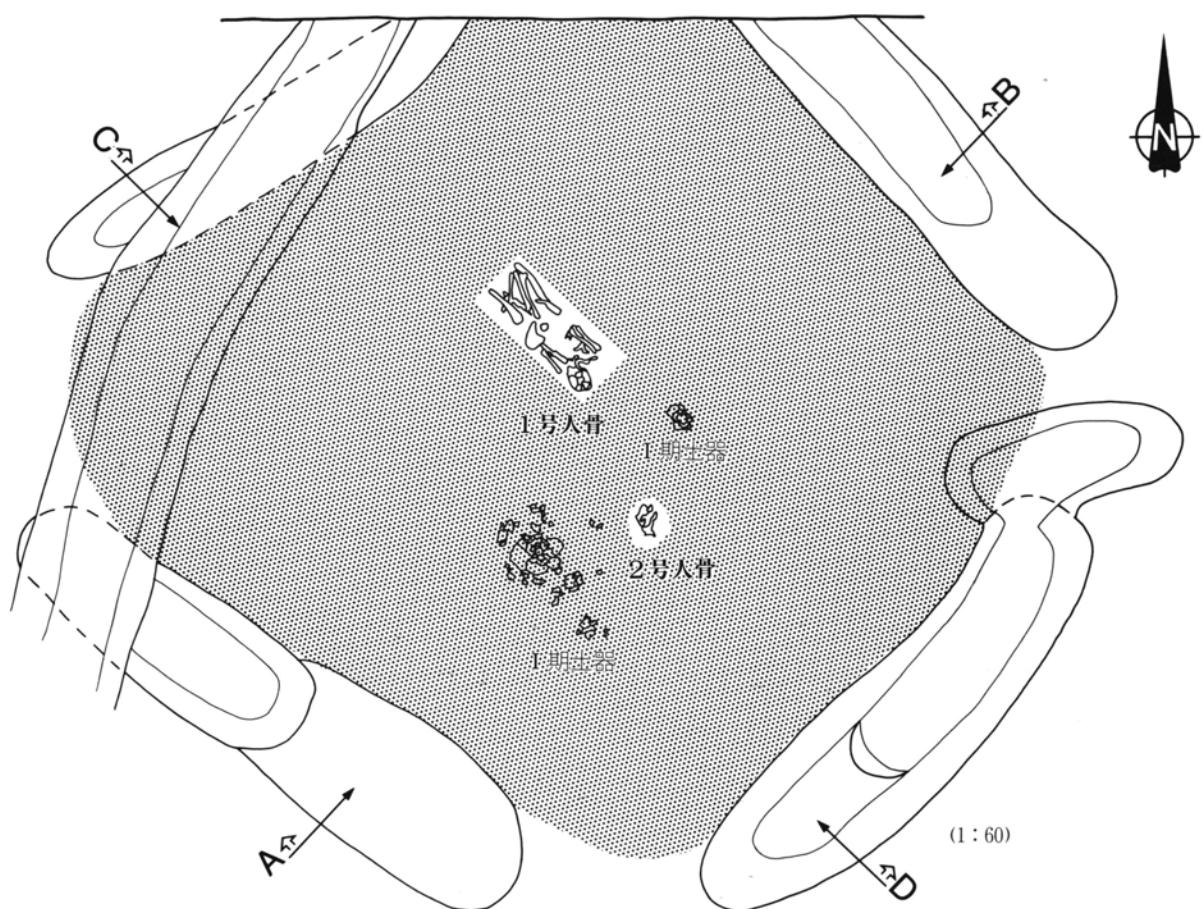
Ⅳ期は、県教育委員会調査区から続くSZ76がある。西に陸橋部を有するA1形である。同じく県教育委員会調査区からの続きで、Ⅲ期とされたSZ59もⅣ期であるかもしれない。50×30cmの針葉樹と思われる大形の板材が周溝から出土している。何かを置くための台であろうか。

Ⅴ期はSZ76に隣接して1基検出されている。

## C. 方形周溝墓以後

Ⅴ期以降の溝が2条ある。性格は不明である。

56A区とは異なり包含層上部からⅥ期以降の新しい時期の遺物が多く出土している。破片での出土であっても完全に復元できるものも含まれている。周溝の埋没がある程度進行してからの堆積であり、



第16図 56B区 SZ47と人骨



第17図 56B区 方形周溝墓(東から)

方形周溝墓の築造時期よりは新しいので直接関係するとはいえない。墳丘上からの転落では説明できない時期差がある。

これらの現象に関しては、方形周溝墓の再利用、儀礼の継続、あるいは墓域であることが忘れ去られて別の性格の区域になったか?などいくつかの解釈が可能である。

### 3. 56C区

幅3mの狭長な調査区である。県教育委員会調査区に西接している。県教育委員会と同じく北居住域の密集した遺構群を検出した。遺物はII期からVII期まであり、継続した居住域であったことが窺える。



第18図 56C区(北から)

## 4. 60 A区 図34~37・49

南微高地の北端から谷Aにかけての地区で、北微高地も一部検出している。調査時にはウェルポイントの設計が不適切であったために地下水位を十分に下げることができず、谷A内の調査は基底を確認しないままに終了した。また60 A区は河道がかかっているという予想で機械力による大幅な掘り下げを計画したけれども、調査区の半分以上を占める谷部分の掘り下げに際しては最初かなり上方に掘削面を設定したため再度の掘削を必要とするに至った。そしてかえってそのために、SD Iは溝下部を残して削ってしまうという事態を招いた。谷Aの埋没過程に対する認識が不十分であった。谷Aで検出した河道からはあたかも河原の砂利のごとく摩滅した土器破片が多量に出土し注目された。また、河道以南の谷Aには暗褐色砂質シルトが堆積し、腐食した貝とともにほぼIV期に限定できるクガなどの木製品が多量に出土した。その上部には明灰色細砂と暗褐色砂質シルトが交互に堆積、谷A内が徐々に埋没していった状況が窺える。

### A. 竪穴住居

SB01は南西壁のみ検出した。SD IIIを埋めているベース土を床面としているが、住居構築のために特に埋め立てたものではないだろう。周壁溝・炉・主柱穴は不明確。隅円長方形プランを呈すると考える。遺物はほとんど出土していない。II期からIIIa期のSD IIIより新しくIIIa期のSX01に切られるので、IIIa期と推測する。

SB02は一部を検出したのみで不明。

平面的には検出できなかったが、多数の柱穴の存在や土層セクションから他にも竪穴住居が存在することを確認している。

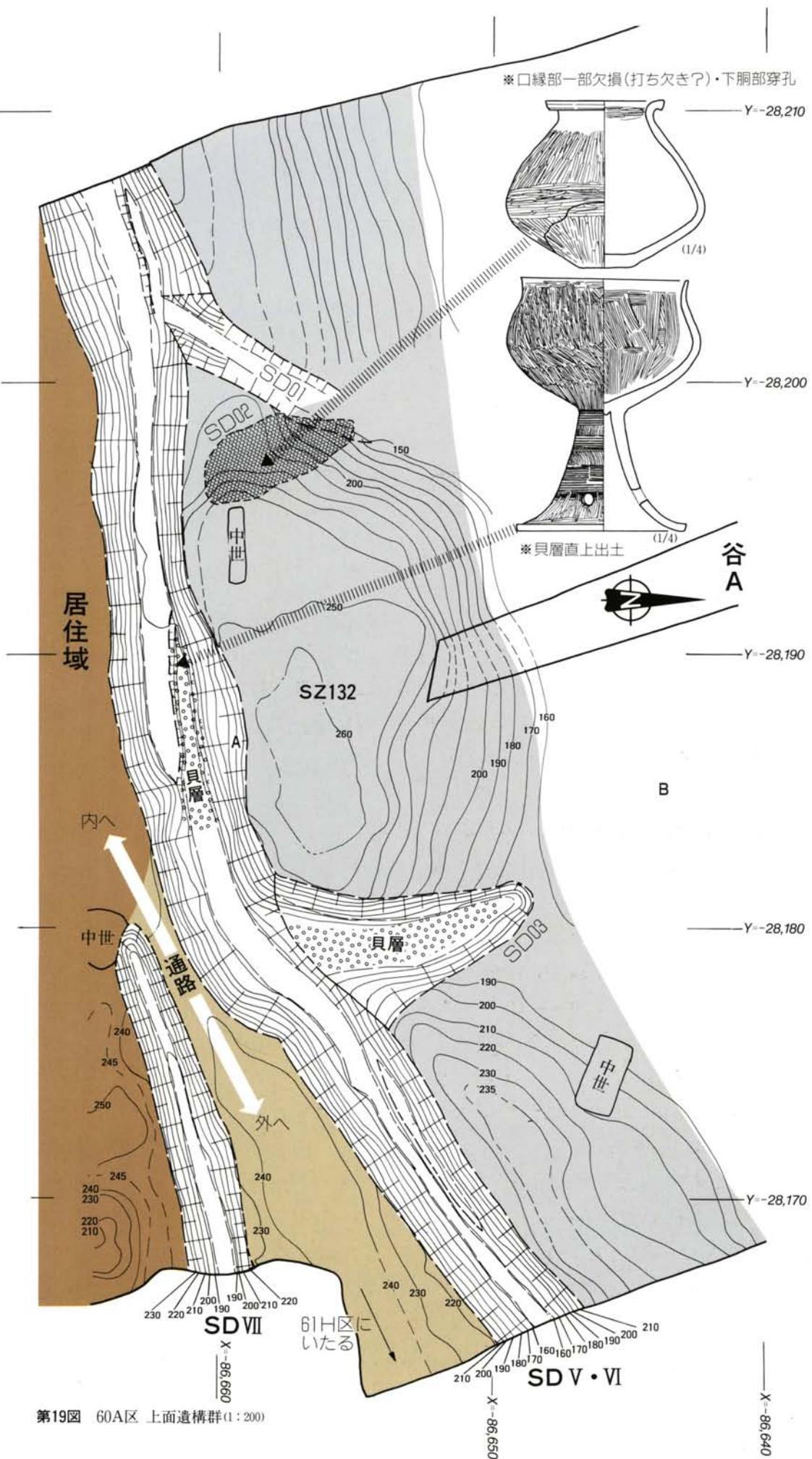
### B. 溝

SD Iはすでに述べたように検出は不十分であった。断面観察によれば、幅4.5m、深さ1.3mを測る。

SD IIIはSD Vと重複したII期に掘削された溝であり、IIIa期には埋没する。SD Vと分かれて北に折れる部分では上部に貝層が形成されていた。この貝層はSD IV b上部にも続いており、埋土も下部とは明確に異なるものであったので、IIIa期にSD IIIからSD IV上部にわたって浅い溝が掘削されたかもしれない。下部はベース土の再堆積が顕著で、渦巻くような模様が観察できる。一部に貝殻が含まれる。幅4m以上、深さ1.6m以上。

SD IVは、杭が2本遺存した掘り残し部分で西のaと東のbに分かれる。幅2.2m、深さが南肩で0.7mを測る。埋土上部にはカキを中心とする貝や土器が多く堆積している。そして上部はIIIa期の砂混じり破碎貝層が覆っている。多条沈線紋壺が出土しているのでSD IIIよりは古いと考える。SD IIIとSD IV bの交差部分が掘り残されて幅0.2~0.4mの陸橋部になっているのは、両者が時期的に隔絶するものではないことを示しているのであろう。

SD V・VIは、V期に掘削されたVと再掘削のVIという関係である。Vは幅5m以上、深さ2m前



第19図 60A区 上面遺構群(1:200)

後、VIは幅4.5m以上、深さ1.7m以上と推測する。SD VIにはSD01が接続している。同じVI期だが、SD VIの堆積がある程度進行してから掘削されているようである。

SD VIIはVI期に掘削されている。60A区では規模が小さく、幅2.5m、深さ1.3mを測る。SD VIとは1.8mの間をおいて切れる。この部分が通路であろう。なお、土壙は検出していないが、SD V・VI南肩は北肩よりもやや高くなっている。なお南肩には手焙り形土器が置かれたように遺存していた。

### C. 杭 群

SX Iは20本の杭(割材)がやや締まった砂層に打ち込まれている。上部は河床によって削られ、地中部分の長さ15cmほどしか遺存していなかった。

### D. 方形周溝墓 SZ 131

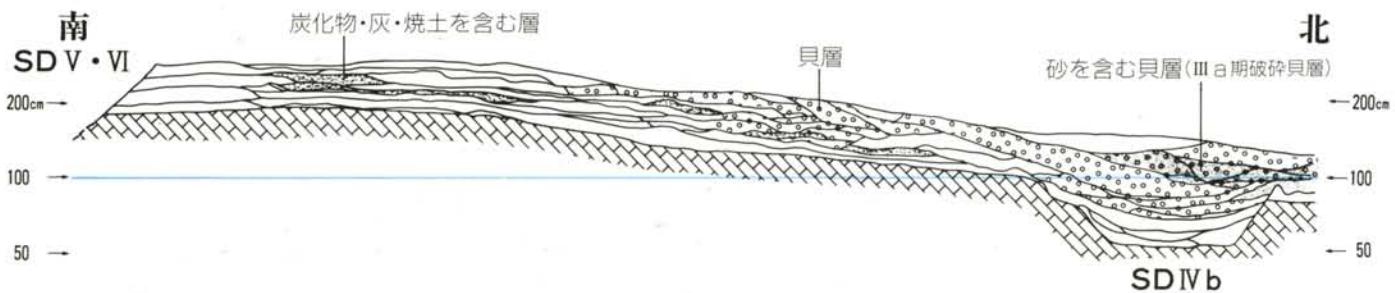
SD02・03とSD Vに削られた部分から構成されるが、調査当初は方形周溝墓の可能性すら思い付かなかった。SD02ではIV期の土器が多量に出土し、下胴部穿孔壺があったものの土器廃棄遺構と考えていた。SD03も他につながらない孤立した溝として、性格を決めかねていた。しかし再度検討してみると、墳丘相当部にはベース土が堆積し、SD03にはIV期の腐食貝層があり、SD V下部にもほんの一部ではあったが何故かIV期の貝層がある。そして、SD02には下胴部穿孔壺がある。これらを総合すると、古地の自由度が高いIV期であれば方形周溝墓の可能性が高いのではないかと考えるに至った。



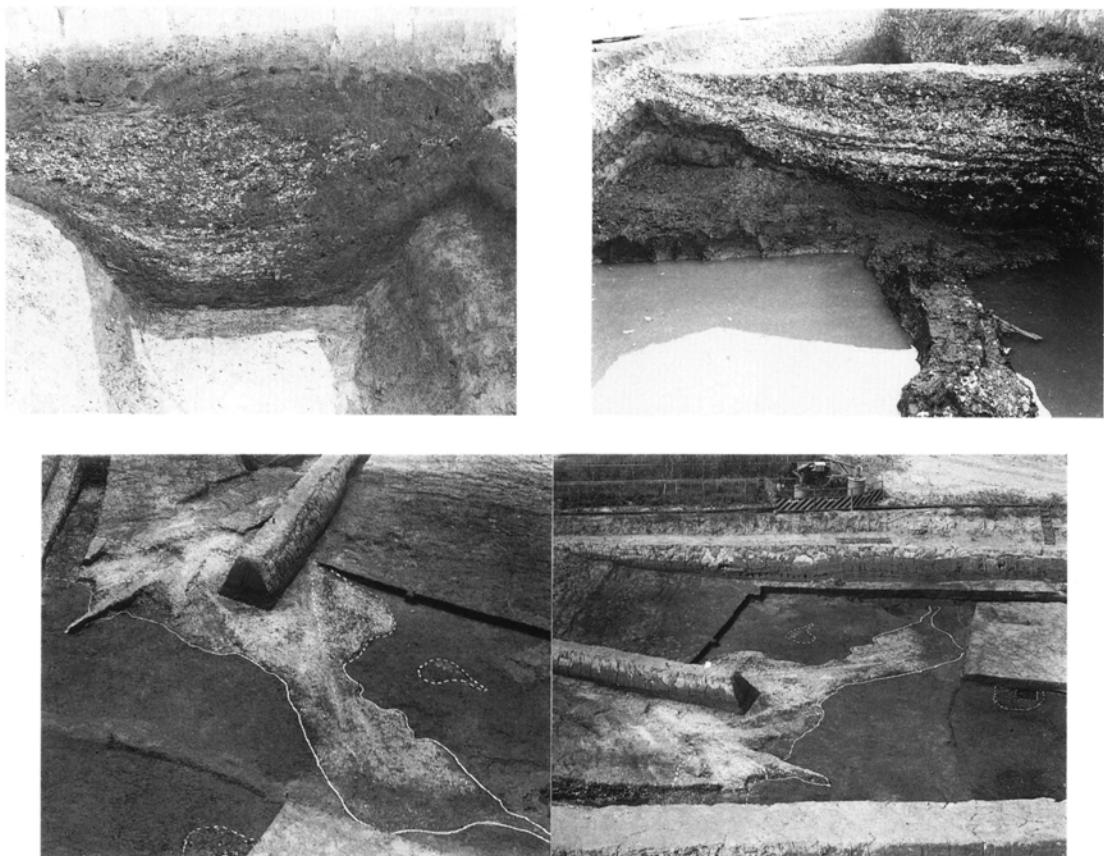
第20図 SX I (東から)

### E. 貝 層

時期ごとの広がりに偏りはあるものの、谷A斜面での堆積が顕著である。II期貝層はカキを中心としてSZ 131以東に分布するがSD IV上部でまとまっているほかは薄い。III期も同じくカキを中心としほぼ全体に分布し、とくにSZ 131周辺で多い。IV期貝層はハマグリを中心としてSZ 131以北に集中しており、厚いところでは1m近くある。これら貝層の始まる微高地北端から谷A斜面には、炭化物・灰・焼土が薄く交互に堆積した部分があり、また貝層中にも同様の層が挟まれていたり貝層自身に炭化物・灰が含まれる場合がある。付近で集中的な煮沸処理が行われたと考える。



第21図 60A区 谷A南斜面土層セクション(1:100)



第22図 60A区の貝層  
SDIV · SZ132北斜面  
・谷A内(北から)・谷A内(東から)



第23図 60A区 貝層の散布状態(北から)

## 5. 60B区 図版26~28・31

調査区の半分ほどが谷Aである。谷Aでは貝層の出土はあったものの60A区ほどの量はない。貝層最下部は一次堆積層であるが、上部は砂混じりのIIIa期破碎貝層である。その上部は暗褐色砂質シルトと明灰色細砂の周期的な交互堆積で覆われており、おそらくIV期になって徐々に埋没が進行したものであろう。V期には河道が形成され砂層の堆積も顕著となり、河道II・III・IVと形成される。河道I・Vは本調査区では確認していない。

谷A以南の微高地部分はII期からIII期にかけて居住域となり、IV期には方形周溝墓が築かれる。

### A. 竪穴住居

**II期** SB03は、中央に灰の詰まった深さ5cmの浅い土坑(SK19)がある。床は一部に貼床が認められる。掘形には竪穴構築時の掘削具の痕跡が認められた。SD II b・III掘削排土によって埋没している。SB04は北東側で周壁溝が少なくとも4条存在する。中央には、ベース土ブロックが充満した中に灰・炭化物の薄い層をともなう土坑(SK16)があり、内部からは獸骨が出土した。貼床は少なくとも4面確認した。そのため対応する柱穴は多数となり、特定できていない。SK15・17に切られる。SB07は周壁溝をもたない。中央にあるSK10は炉穴の可能性がある。SB08はSB04と同じく周溝が4条めぐり、拡張が同調していることは注目される。中央のSK13は本住居に伴うもので、焼土が面をなして存在し、また内部にも焼土が多量に含まれていた。炉穴とは状況が異なる。SB10・SK12に切られる。

SB05・11は時期は特定できないが、軸線からみてII期の可能性がある。05では床面掘形に竪穴構築時の道具痕が規則的に遺存していた。

**III期** 直接的に時期のわかる住居は少ない。切り合いと軸線で推定する。SB01はSD IIIを埋めて床面としている。軸線の一致するものにはSB09・10・12がある。SB10はSB08を埋めて床面を形成している。SB06は円形プランではないが隅円方形プランといえるほど定形的でもない。

### B. 掘立柱建物

時期の確定できる例は無いが、IIIb期以降には下がらない。軸線ではSA03・04がII期であるかもしれない。SA02はSD II a・b間の陸橋部であるSX03に近接しており、通路としてのSX03に関係するかもしれない。西北端柱穴が未検出であるのはベース面が傾斜面をなしているからである。

### C. 小穴列(垣)

SH01は、SD IIIに沿って1.4m内外の間隔で並ぶ10個の小穴である。ベース面でSD III北肩に接しているので、30cm強ある包含層上面まで溝斜面を延長すると斜面中に並ぶことになる。これらを垣とした場合、居住域内の区画として溝と併用される例は確認していないので、溝掘削以前(II期)か、溝が廃棄されて埋没がある程度進行したIIIa期であろう。

## D. 土坑

土坑には、a : 暗褐色砂質シルトなどの包含層からなるもの、b : 土器などの遺物や貝などが廃棄されているもの、c : 遺物はあまり含まれないで炭化物や焼土が含まれているものがある。cの中には炭化物・焼土・灰それぞれが薄い層をなしてバームクーヘンのような累積的・規則的な堆積を示すものが観察される。その場合にはベース土(青灰色や黄灰色を呈するシルト)がケーキの生地のように間に挟まれることもある。長楕円形プランの場合には軸線が窺える。II期: SK22、III期: SK06・12はベース面の等高線方向に長軸がある。

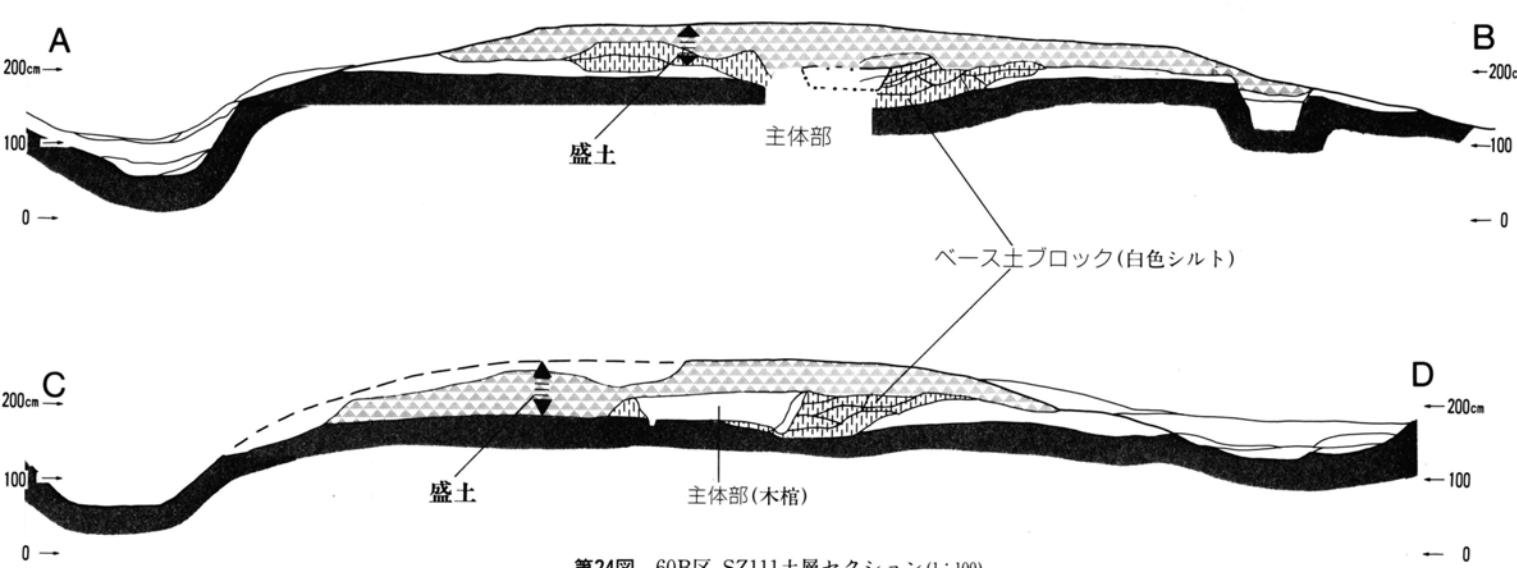
## E. 方形周溝墓

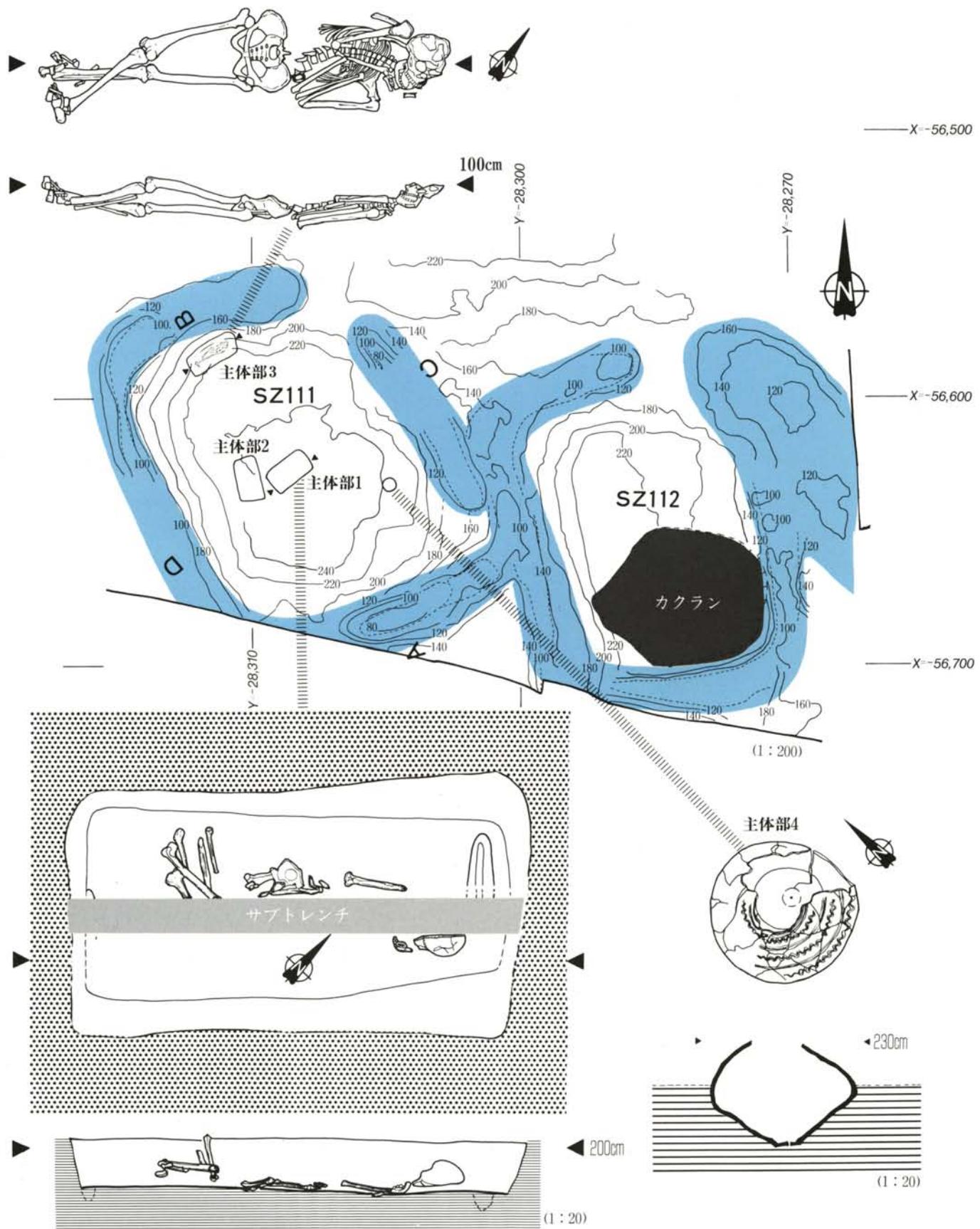
主体部を検出した確実なものSZ111と調査時には性格不明の高まりとしたSZ112がある。

SZ111はA3形と推測される。供獻土器には貝田町式系壺が出土している。主体部は木棺の可能性のある1~3と壺棺の4がある。主体部1ではサブトレレンチによって仰臥屈葬の人骨が破損した。木棺構造は小口板が底板を挟む形式である。主体部2からは屈葬状態の人骨が2体分並んで検出された。両者の性別は不明である。主体部3は身長169cmという背の高い男性の人骨である。主体部4は正立の壺棺であるが蓋は伴っていなかった。

墳丘はIII期包含層にベース土と暗灰色砂質シルトを盛り上げたものである。ベース土は墳丘中央部に多く、主体部1はベース土に包まれていた。主体部4は墳丘裾近くに設けられており、ベース土は周囲に見られなかっただけでなく、恐らく墳丘上から切り込んで墓塚が設けられたと推測する。主体部4の埋土は、最上部の暗灰色砂質シルトの下には水平に堆積する暗灰褐色砂質シルトがあるが、これは蓋の痕跡であろう。供獻土器はIV期で、在来系と外来系がある。

SZ112は、ベース土を多く含んだ盛土からなるが、主体部らしきものは検出されていない。盛土は南の溝を埋めており、拡張されたか、異なる性格のものに造り替えられているかもしれない。





第25図 60B区 方形周溝墓

## F. 溝

II期・III期の溝は、住居群に近接するSD02~05と、居住域を分断するSD II・III・IVがある。前者は相互に軸線が関係しており何等かの小区画を形成するものと考えられ、後者は集落全体に関わるものである。

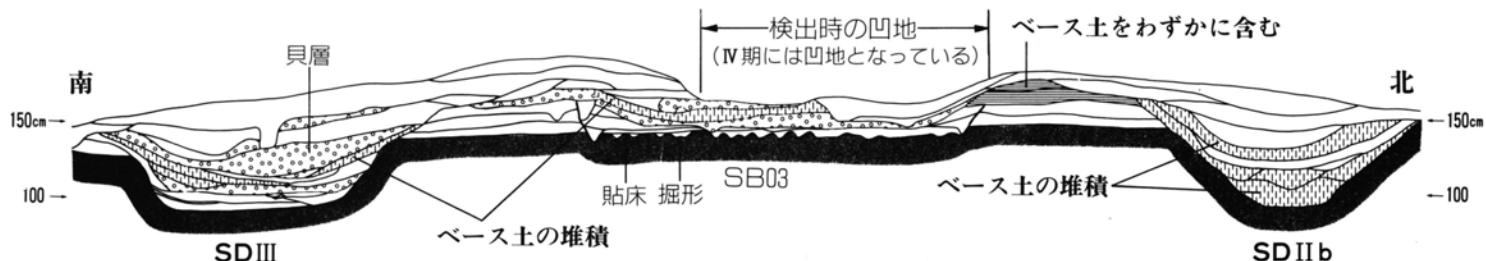
SD IIはSX03によってa・b二つの部分に区分される。規模は、SD II aが幅2m~1.5m、深さ1m以下、SD II bは幅3.5m~4m、深さ1m~1.2m以上あり、前者の方が劣る。SX03は溝内に設けられた陸橋部で、平坦部の長さ1.2m、幅0.8mを測る。中央がやや低く南北が高い。南端中央には杭がある。溝底との比高は35cmほどである。SD II aには逆茂木があり、一部は60E区でも検出している。原位置にある逆茂木は少ないが、SX03北西隅のものはその位置とともに根元が斜面に埋没して斜め方向に枝を張っていることが注目される。SD II bに逆茂木は遺存せず、本来在存したかどうかも不明である。

SD II bの埋土は、60B区西半部では大きく3層に分かれ、上層：III a期包含層で炭化物・焼土を含む暗灰色砂質シルト、中層：II期とIIIa期にまたがりベース土がやや多くなる、下層：II期でほとんどベース土のみとなる。東半部ではII期貝層が中層や上層に多く含まれるようになり、II期でかなり埋没が進行しているためにIII期の層がほとんど見られないという相違が生じている。また、上部でベース土の再堆積が顕著となる。こうしたベース土の再堆積は、通常の埋没では生じない層位であり、それが一旦盛り上げられた部分の崩壊または整地によるものである可能性が考えられる。第26図のようにSD II b南肩からは一部がSB03を覆うベース土をわずかに含む層が検出されている。これなどは掘削に際して最初に排出される土層である。本来溝の両肩には少なくとも再堆積した量のベース土が積み上げられていたと考える方が、SD II b内に堆積したベース土の由来としては理解し易いだろう。

SD IIIからは東端を除きほぼ全面にわたって貝層が検出されている。しかも下部にはベース土の堆積層が部分的にしか見られない点でSD IIとは大きく異なる。そして上層までII期の堆積層によって埋められている。貝層は大きく上中下の3層に分かれ、下層がベース土を含むのに対し、中・上層はほとんど貝殻廃棄となっている。

SD IV aでは出土している土器がII期でもやや古相を呈し、SD II・SD IIIに先行する溝である。貝層とベース土の堆積があり、ベース土は南北から流入している。

SD01からは時期を決定するような土器の出土は無かったが、層位的にはIIIa期堆積層を切り込んでおり、それ以後と考えられる。V期の早い時期でSD Iと併行する可能性もある。

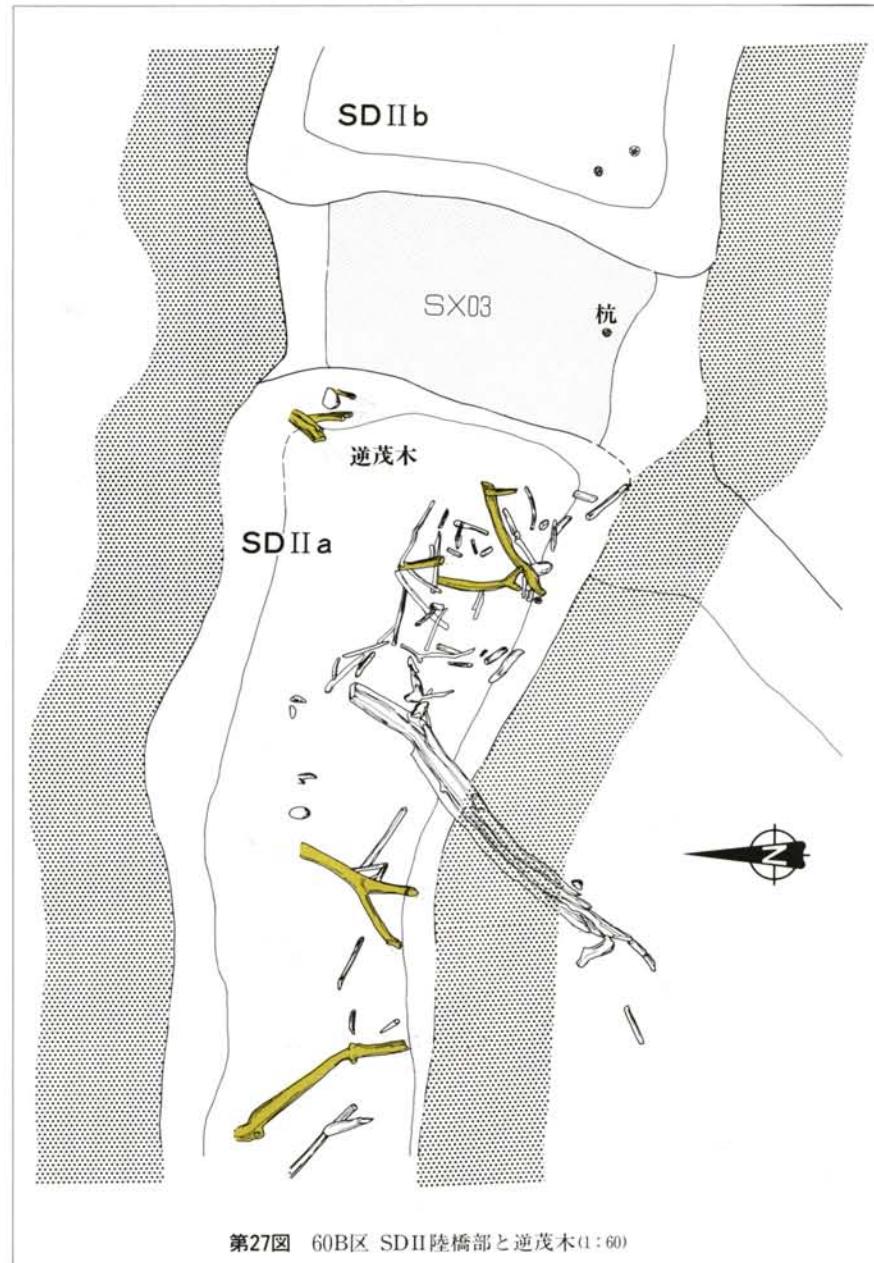


第26図 60B区 SDII・III間土層セクション(1:80)

SD Iは、谷A南寄りを河道に沿って走る溝で、上層からⅧ期中葉の土器などが出土している。

埋土は、中層に砂層があり、下層と上層に植物遺体を含むシルトが堆積している。

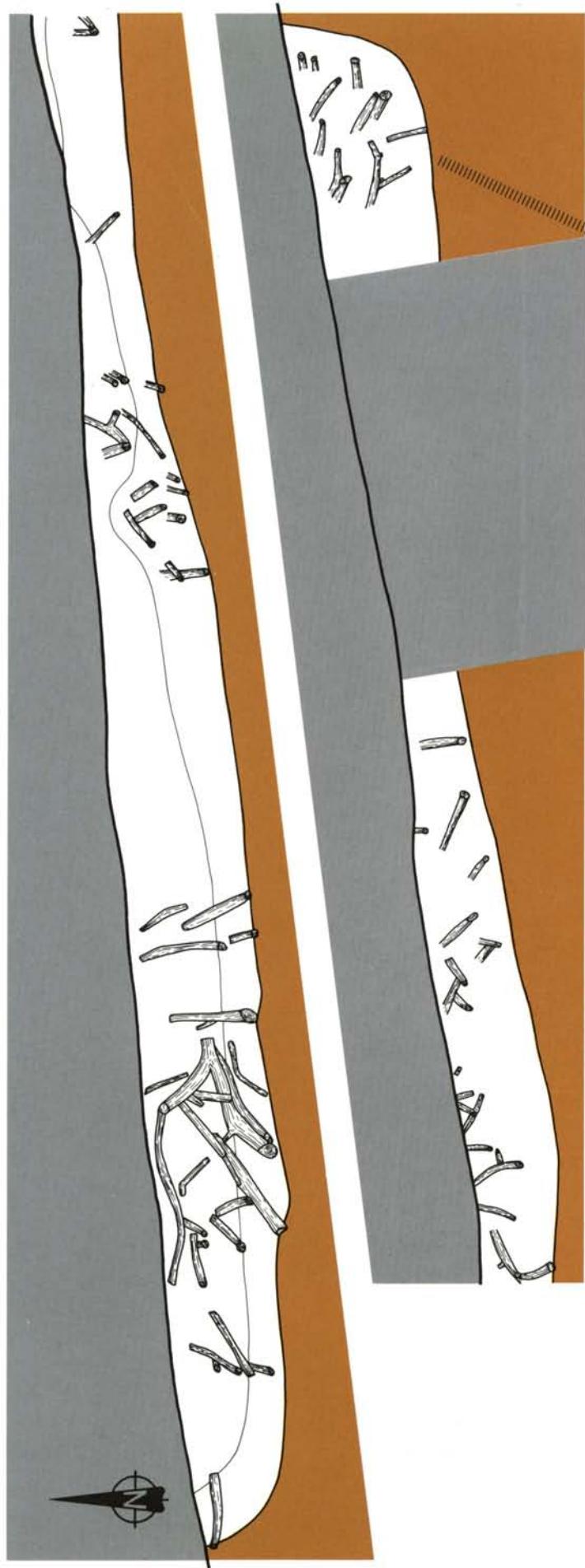
SD II b・III・IVなど溝内への貝殻廃棄は、特に顕著なのがSD IIIの西部SB08付近である。第28図のようにカキを中心とする貝とともにII期の完全な壺も出土している。しかし、SB08はSD IIIと重複しているのでそれ以外の住居での生活に関係するか、あるいは調査区外となる以南地区との関係であるかもしれない。そして、それが60A区のような集中的な煮沸処理をも意味するかどうかは不明である。



第27図 60B区 SD II 陸橋部と逆茂木(1:60)



第28図 60B区 SD IIIの貝層と土器(東から)



第29図 60B区 SX01(1:40)



第30図 SX01東端(西から)

### G. 杭と溝

SX01は調査区北壁際で検出したために全体を検出することはできなかった。幅は不明だが長さ18mを測る深さ約1mの溝状の遺構で、内部に枝持ちの木が南に傾けて多数立てられていた。その東端の溝状部分の終息するところでは、枝を持つ木は終息部分の輪郭に合わせて南から東に向けて扇状に傾けて立てられていた。いずれも立っており、斜めにねかせた木が存在したかどうかは調査上の



第31図 SX I (東から)

制約もありはっきりしなかった。

埋土はIII b期以前の土器を含む黒褐色砂質シルトであり、とくに攪乱状をなした部分の確認はできなかった。上部では一部に砂層の流入が認められているので、溝状部分は完全に埋められることなく浅い窪地状をなしていたことが窺える。

SX01で検出された杭の上部は、すでに河床によって削られていたために不明である。唯一溝の方向に倒れ込んで削平を免れて残っていた木は長さ約2mを測り注目された。

S X I は杭群（乱杭）である。上部は河道IIに削られており、砂層中には僅か5cmほどが露出していただけない。地下の残存部長は約40cmを測る。60A区・60E区とは異なり、本調査区における杭群は密度が高いものであった。この段階ではこれが上述の遺構と関連があるとは考えていないかった\*。

## F. 土堤状遺構

SX02はS D I の排土を谷A側に盛り上げて土堤状としたもので、調査区東半部での連續は確認したが、以西は明確にしえなかった。堤防的な性格は無く、溝掘削に際しての排土処理の一貫であろう。

盛られた時期はすなわちS D I の掘削時期であり、谷Aにおいて河道によって形成されたと推定される堆積層（自然堤防状の河道に平行して帯状をなす隆起部分）の末端に一部かかっていることから、谷Aで河道が活発な活動を開始するV期前半に位置づけられる。

## G. 貝 層

居住域内部での溝や住居跡への貝殻廃棄とは別に、谷A内部でも貝層が検出された。そのうち、調査区西部では砂層と互層をなす砂を含む破碎貝層の分布が顕著であり、しかもそれらは非常に薄い層の累重であって、規則的な強弱のある水流によって形成された二次堆積であることが窺われた。それらは、S D II a構築に前後しているので、II期からIII a期にかけて形成されたことがわかる。こうした堆積状態は下流部にあたる60E区でも確認されているが、上流部（61A区）では層自体もそれほど厚くなく、谷A内部での水流の状態が一定でないことが窺える。

上述のような二次堆積ではない一次堆積の貝層は、ベース面上に厚さ約20cmほど堆積していたに過ぎず、60A区に比べて薄いものであった。貝層下部はコンクリートのように固着して硬い面を形成し、掘り下げるのにつるはしを用いなければならないくらいであった。

\*この段階でこれらが「逆茂木」とすると推定し、県資料も含めて朝日遺跡における特異な結界施設の存在を『昭和60年度 年報』で報告したが、しかしその全体像の復元は位置的・時期的につながる61A区SX02の検出を待たなければならず、結果的には時期尚早であったという反省が残った。

## 6. 60E区

図版10~12・26

調査区の東半分は谷Aである。河道はI~VIまである。このうち、河道IV・Vに相当すると考えられる部分からは他では見られないような大きな流木が多量に出土した。

西の微高地部分ではII期までの居住域とIII期の方形周溝墓などを検出した。居住域は一部に包含層上面で高まりを検出したので方形周溝墓を想定した部分もあったが、掘り下げた結果、図版11に表示したような旧表土残存部の高まりを確認するに至った。この高まり上部には、灰とともにしまりのないボロボロ崩れる土層が堆積していた。これは被熱の結果と考えられるもので、そうした土をこの部分に集中的に廃棄したのであろう。同様の層は60A区でも認められている。

貝層はSK36に認められた他はSD02に若干遺存していたぐらいで、決して多いものではない。

微高地東端の谷Aに接するあたりは、S Z 1 0 8 南周溝が削られていることに示されるように、河道の侵食によって一部遺構が削られている。したがって、それ以前の遺構の一部が欠如していることは念頭におかなければならない。

### A. 玉作工房

SB03は10m×9.5mの円形豎穴で、時期はII期~III期初頭と推測する。周壁溝が部分的に2条めぐる。床面には多数の土坑や小穴があり、また方形プランを示す周溝もあるので、以前には別の建物が建っていたようである。それも玉作工房であったかどうかはわからない。

玉作工房は調査当初それであるとはわからなかった。未完成が数点出土した段階では確定せず、玉作工房と確信した段階ではかなり掘り進んでいた。その時点では、すでに床面覆土のほとんどを掘り下げていたが、残っている部分の土を取り上げた。そのほか床面にある土坑や柱穴の土もすべて取り上げ水洗選別を実施した。その結果、緑色凝灰岩を素材とする管玉の製作工程が復元できる資料とともに、ヒスイ・メノウの残片も出土し、勾玉などが製作されていた可能性も考えられるに至った。

### B. 豊穴住居

SD02以北では玉作工房を含む円形プラン3棟、不明確だが隅円方形プランも存在するようである。以南では周壁溝が錯綜して豎穴住居を特定するのは困難だが、円形プランは存在しないようである。SD02を境にして構成に差がある。

SB02はSB01より新しく、新たに建てられたものである。SB01はSB03と同規模の円形豎穴住居であり、並存の不可能な両者を時期差と考えれば、SB02は玉作工房と並存した可能性が高い。中央の小穴は炉穴であろう。

### C. 溝

SD01は県教育委員会が調査した溝である。最初の掘削はII期と推定され、玉作工房と同時か先行してあったものがその後埋め立てられ、III期に再度掘削されたようである。しかし、SD03の掘削にともない

最終的に埋没したと考えられる。

SD02はII期の溝で、幅約2.5m、深さ約0.3mと浅い。埋土にはベース土を主として炭化物などを挟んだ薄い層が累重しており、埋没過程は決して単純ではない。周辺での遺構掘削にともなう排土がそのつど流入しているようである。しかし、それでも整地されず短期に埋没していないのは、区画としての性格が存続したからであろう。単純な埋没ではない。

SD04は時期を直接決定できる資料に欠けるが、包含層上部から切り込んでおり、しかもSD06より明らかに新しい。問題は方形周溝墓S Z 1 0 8との関係であるが、残念ながら明確でない。時間的に近接するなら先行する可能性はある。

SD05はSD02に位置的にも時期的にも並行する。

SD06は谷A近くでa・b・cの3条に分かれる。bの最下部はII期であるので、それに切られるaはII期と考えてよいが、cは近接する溝中では最も新しく、時期的には大きく離れる可能性がある。埋土の最上部では古墳時代前期末の土器が出土している。V期以降である可能性もある。

SD07はSD06bに並行する位置にある。時期的にも並行するであろう。

S D Iは面的に完掘できなかったが、調査区南壁セクションでは両側に排土を盛り上げた高まりを確認した。

S D II aでは立った状態の逆茂木を検出した。先端部は欠損しているため不明である。

## D. 土 坑

溝状に細長いものや長楕円形プランを呈する例が多く、軸線に一定の指向性が窺える。ほとんどIIIa期に属し、SK26では細頸壺、SK27では浅鉢の完形品が出土し、SK35では本来土器棺として組み合っていたと思われるII期の壺と小形鉢の破片が坑底より浮いて出土した。後に述べるように、土器棺や方形周溝墓の存在から考えてIII期以降は墓域であった可能性が極めて高いのであり、これら土塙も人骨の出土した例はないけれども墓塙であった可能性がある。しかし、木棺の痕跡を示す例はなく、墓坑であったとしてもいずれも土塙墓である。かつて西に接する県教育委員会調査区では包含層中から人骨が出土しており、墓域であることはまちがいない。

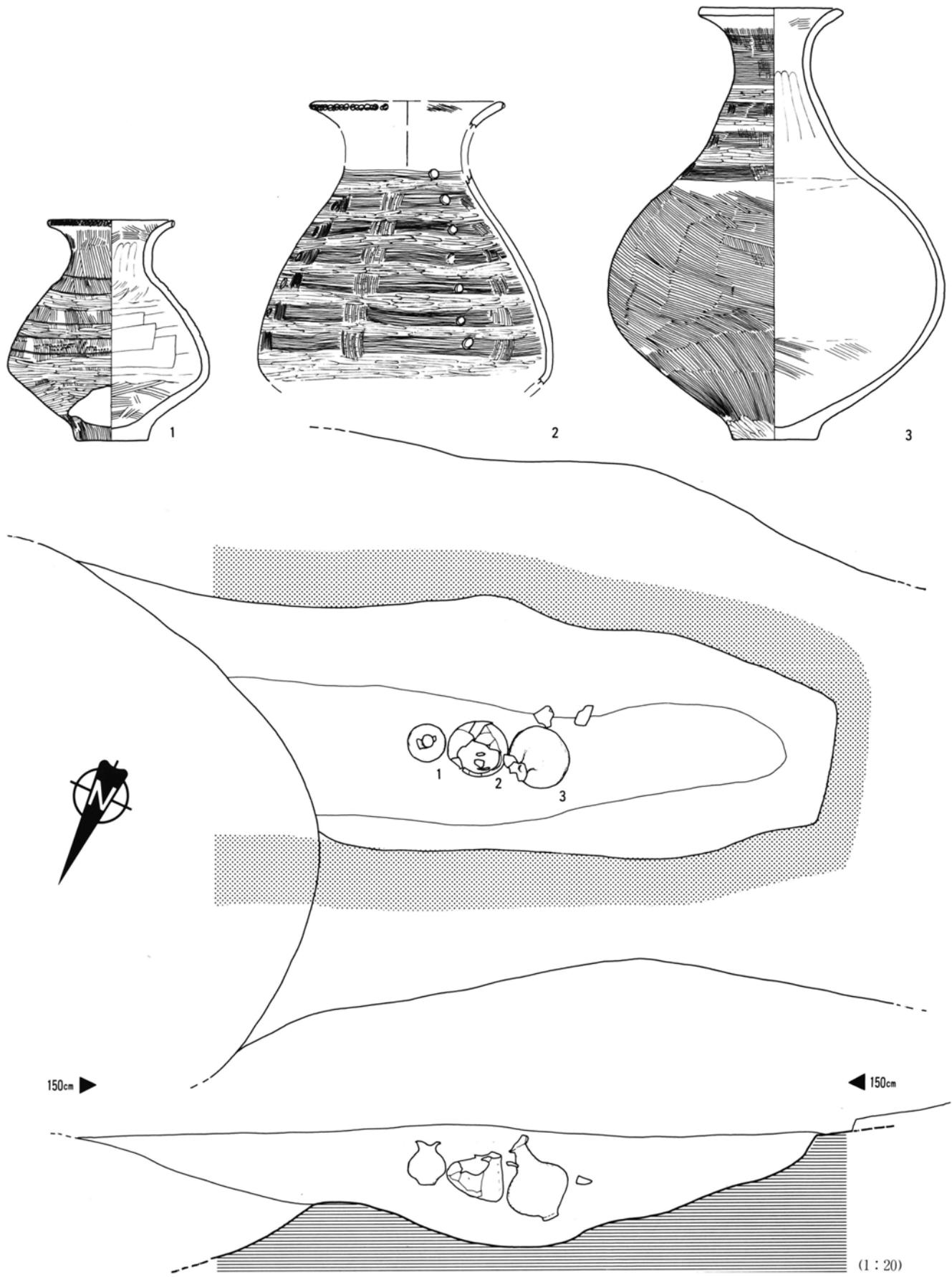
ただ、全体に墓塙が展開する可能性が高い中で、SK36(III期)上部にある土塙には貝殻が廃棄されており、その性格が問題である。

## E. 方形周溝墓

S Z 1 0 7は周溝が土坑の連結したような状況で、他に例の無いものである。おそらく、最初A 4形であったのをその後拡張する段階で長軸方向に土坑を二つ加えたのである。主体部ははっきりしないが、墳丘の盛土中から壺が1点出土しており、壺棺をもつ可能性がある。

S Z 1 0 8はA 4形で、東周溝から下胴部に穿孔の施されたIIIb期細頸壺が出土している。供献土器であろう。

ところで、S Z 1 0 7・S Z 1 0 8間の重複している可能性のある周溝からはIIIb(前半)期の壺が3点出土している。溝底からは浮いているけれども、並んで出土しているので置かれたものと推測する。



第32図 60E区 SZ107・108間 供獻土器とその出土状態



▲SZ108と供献工器(北から)

▼土器棺SX01(東から)



◀供献土器  
(西から)

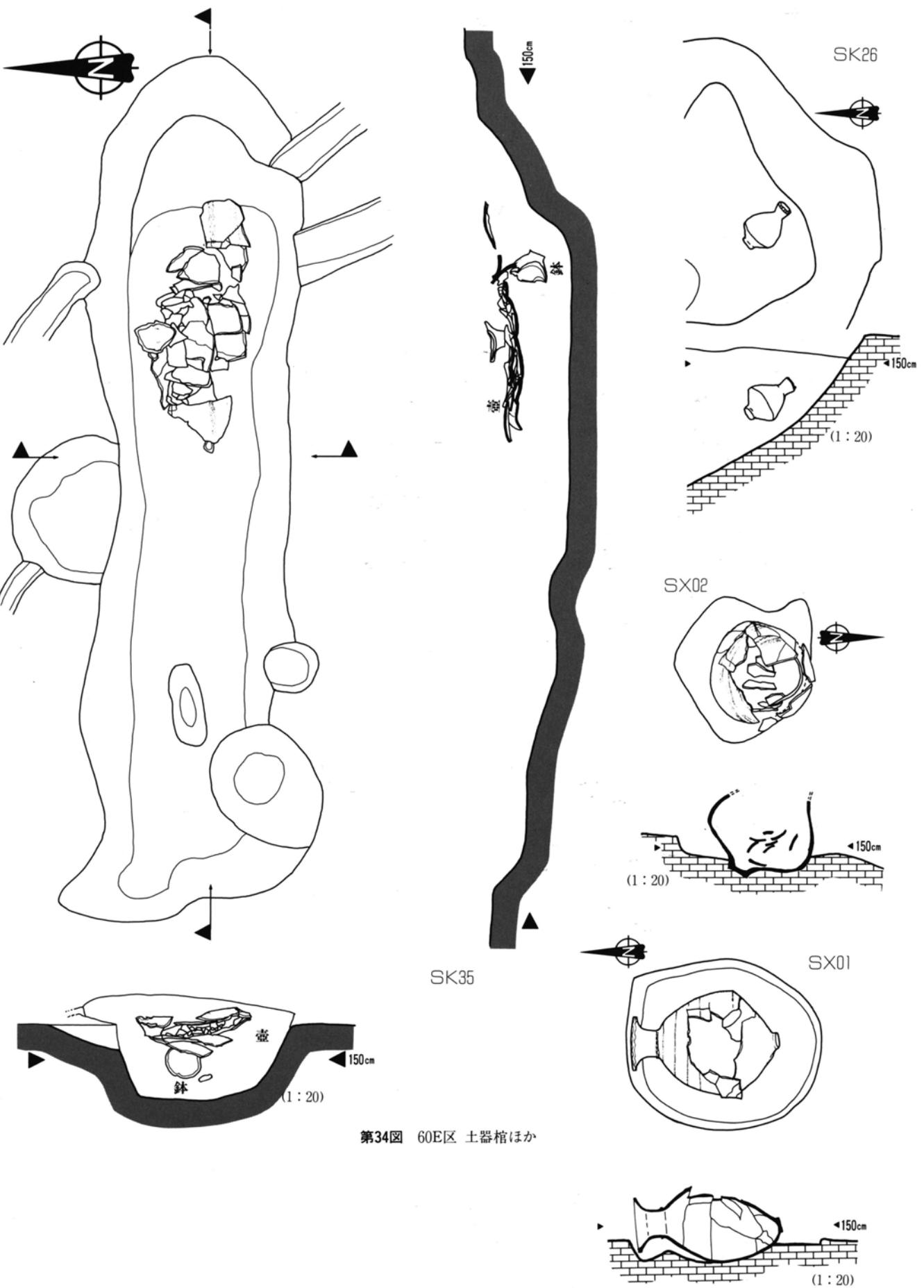


第33図 60E区 方形周溝墓ほか

1は下胴部穿孔で2は底部を欠くが、3には加工は認められない。3は、形態的には長頸で中央に微妙な隆起もあり、〈続条痕紋系〉細頸壺の基本形態を忠実に継承している。しかし、調整・紋様は貝田町式系であり、折衷型である。

#### F. 土器棺

SX01はIIIa期壺を横位にしたもの、SX02はII期壺を正立に据えたものである。後者の存在は、II期にはこの区域が墓域となっていたことを示すのであろう。



第34図 60E区 土器館ほか

## G. 杭 群

S X I は調査区北東部で砂層下から検出した。打ち込まれている杭は、カシの割材で、径 5 cm 前後、残存部分の長さは約 40cm である。横に組み合うような材や編物は伴ってはいない。

SX01はSD06bの谷Aへの流入部にある杭群であるが、ほとんど痕跡的に検出されたにすぎない。



▲SX I (西から)



▲SX I (南西から)



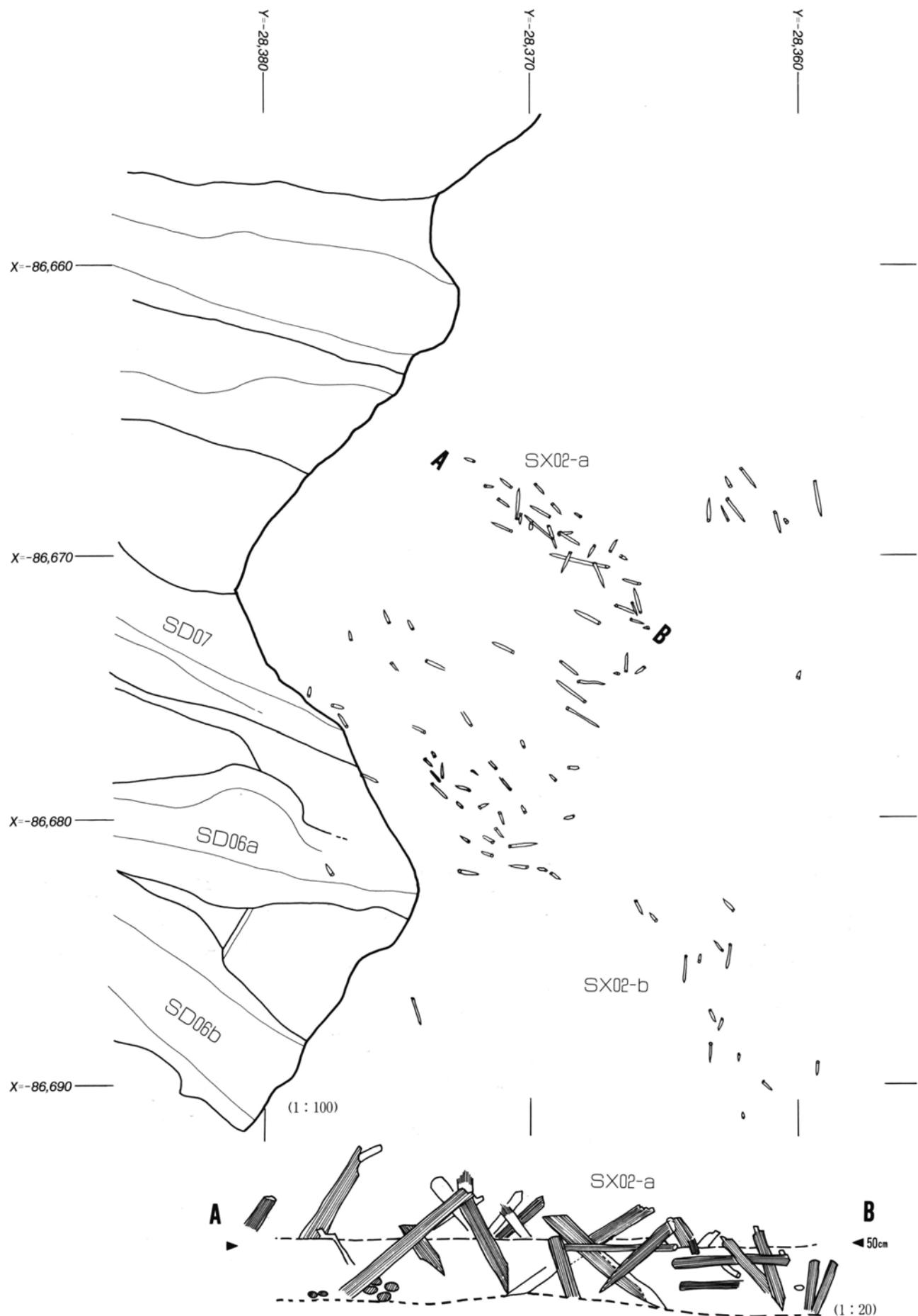
第35図 60E区  
谷A内で検出  
した杭群ほか



SX02は、大きな流木を含む河道IV・Vの推定流路部分では粗であるのに対し、そうした流れがそれほど顕著に観察されなかった河道II・IIIの部分では密である。このことは、前者の水流によって一部が流されてしまったことを示しているのであろう。SX02はa：矢板からなるグループとb：丸木杭からなるグループがある。両者それが打ち込まれている傾きや全体の並びとともに河道と直交しているので、河道を横断するものであったことがわかる。しかし、これらが堰であるにしては横木が組み合っていないし、矢板・杭の密度も低い。時期は古墳時代まで下がるかもしれない。



第36図 谷A内河道と杭群



第37図 60E区 谷A杭群

## 7. 60H区 図版2・3

### A. 方形周溝墓以前

おそらく56A区から続く幅0.5m、深さ0.1mの平行する細い溝が検出された。そして、出土遺物はほとんど無いが、ベース（黄灰色シルト）面直上には黒褐色砂質シルトが堆積している。ベース面の標高は56A<sub>1</sub>区で150cmであったのが、ここでは125cmと低下している。溝の走向は傾斜に対応している。

### B. 方形周溝墓

S Z 1 はこれまで確認された西の限界に位置する。A 4 形である。周溝埋土には墳丘側からの流入が観察される。

S Z 2 は清須城の外堀掘削のために西半分が不明である。

S Z 3 はA 2 形あるいはA 1 形と推測される。時期はIII期と考える。主体部は木棺である。

S Z 4 は東半分が調査区外にあるため不明である。

なお、調査区の東壁土層セクションではS Z 3 の北に盛土のある部分が観察されたが、これは規模的にみて方形周溝墓とは考えられない。



第38図 60H区 方形周溝墓（西から）

## 8. 60 I 区 図版41・42

### A. 積穴住居

SB01はIV期。掘形深さ25cm残存。おそらく小判形プランであろう。SB02に切られる。県教育委員会調査区との対応はない。貼床はベース土で形成される薄い層の累重。覆土にもベース土(明灰色シルト)ブロックが多量に含まれているが、これは整地土である。

SB02は一部のみ検出で時期は不明。隅円方形プラン。貼床はベース土で形成される薄い層の累重。IV期以降。

SB03は周溝のみ確認。軸線はSB02に一致している。SB04は周溝の検出にとどまる。隅円方形プラン。IIIb期か。SB05は掘形深さ約15cm残存。隅円方形プラン。SB06に切られる。SB06では貼床は未検出である。掘形深さ約15cm残存。SB07は円形プランであろう。II期またはIII期。SB08は隅円方形プラン。IV期。SB09・SB17を切る。覆土からはIIIb期の土器破片が多く出土した。整地に伴うものであろう。SB09は隅円方形プラン。IV期。一部の検出にとどまる。

SB10はIV期。小判形プランであろう。調査区南壁際で炭化物・焼土を検出した。焼失家屋の可能性がある。

SB11は隅円方形プランであろう。III期。

SB12はV期前半。かなり角張った隅円方形プランである。貼床があり、床面は少なくとも2面ある。SK03は上面にともなう土坑で、貼床と同じベース土で形成された半円帶状のわずかな高まり——硬化面となっている——が囲む。入口施設の一部である可能性がある。

SB13は円形プランで、周溝は2条まで確認した。IIIa期。中央にある土坑SK33は本住居跡に伴う。上面に炭化物・焼土が見られ、埋土は炭化物と黒色砂質シルトの互層である。炉はこの部分と北に分布する焼土面の2ヵ所が考えられる。SB14以後は周溝の検出にとどまるが、時期はIII期のうちに収まる。

### B. 柱 根

P1は残りが悪く、形状ははっきりしない。SB10より新しい。P2は径50cmの柱である。63G区で検出した柱根や礎板の存在は、この区域に大形の掘立柱建物が存在したことを強く示唆する。あるいは木柱群であろうか。

### C. 井 戸?

SK31はIV期で、ロート状の断面を呈し、また埋土がベース土のブロックを多く含む。

### D. 溝

SD01は土坑の連結したような形状を呈する。多条沈線紋を有するII期前半の壺が出土している。居住域内部の区画溝であろう。

## 9. 61A区 図版27・29・30・32・33・34

### 上面遺構群

#### A. 溝

S D I はⅤ期前半に掘削された、平均幅約4m、深さ約1.5mの溝である。調査区西半部ではS Z 1 1 4 墳丘を避けてその際に掘削されているので南側肩がやや高くなり、溝底との比高1.75mを測る。そのため北側の盛土頂部とは25cmほどの差を生じている。盛土は平坦部に75cmほどの厚さで築かれている。そしてその北側は河道が侵食する状況になっている。調査区東半部ではやや低い平坦部に溝が掘削されていることもある、排土は両側に盛られている。調査区東壁土層セクションでは、北側盛土のさらに北に溝状の落ちを確認したが面的に検出するには至らなかった。南には微高地との間に「落ち込み」が形成され、滯水環境を形成したようだ。これは水田跡の可能性がある。

埋土は、中層として標高80～100cmあたりに植物遺体を含む砂層があり、流水のあったことが知れる。その下層はややシルト質とはなるが植物遺体を含み多少の流水が窺われる。上層は砂質シルトからシルトの堆積となり、標高150cmあたりでは植物遺体を含むシルト層が堆積する。中層の水流は溝が閉じていないことを示すが、その時期は河道に接続しており、後述のS DⅧに塞がれたりして止水状態となっていたのであろう。

出土遺物としては、上層から一本スキの未成品、下層からクワが出土している。

S DⅧ (Ⅶ期) はS D I と斜めに交差する溝で、下層は褐色砂質シルトの堆積だが、上層には河道からの分流と考えられる明灰色粗砂の堆積が見られる。上層の砂層はⅦ期後葉ごろに相当するもので、河道Ⅵに關係すると考えられる。この砂層は61C区を通り、県教育委員会調査区で検出された方形周溝墓の周溝上部をたどって調査区外へ抜ける。

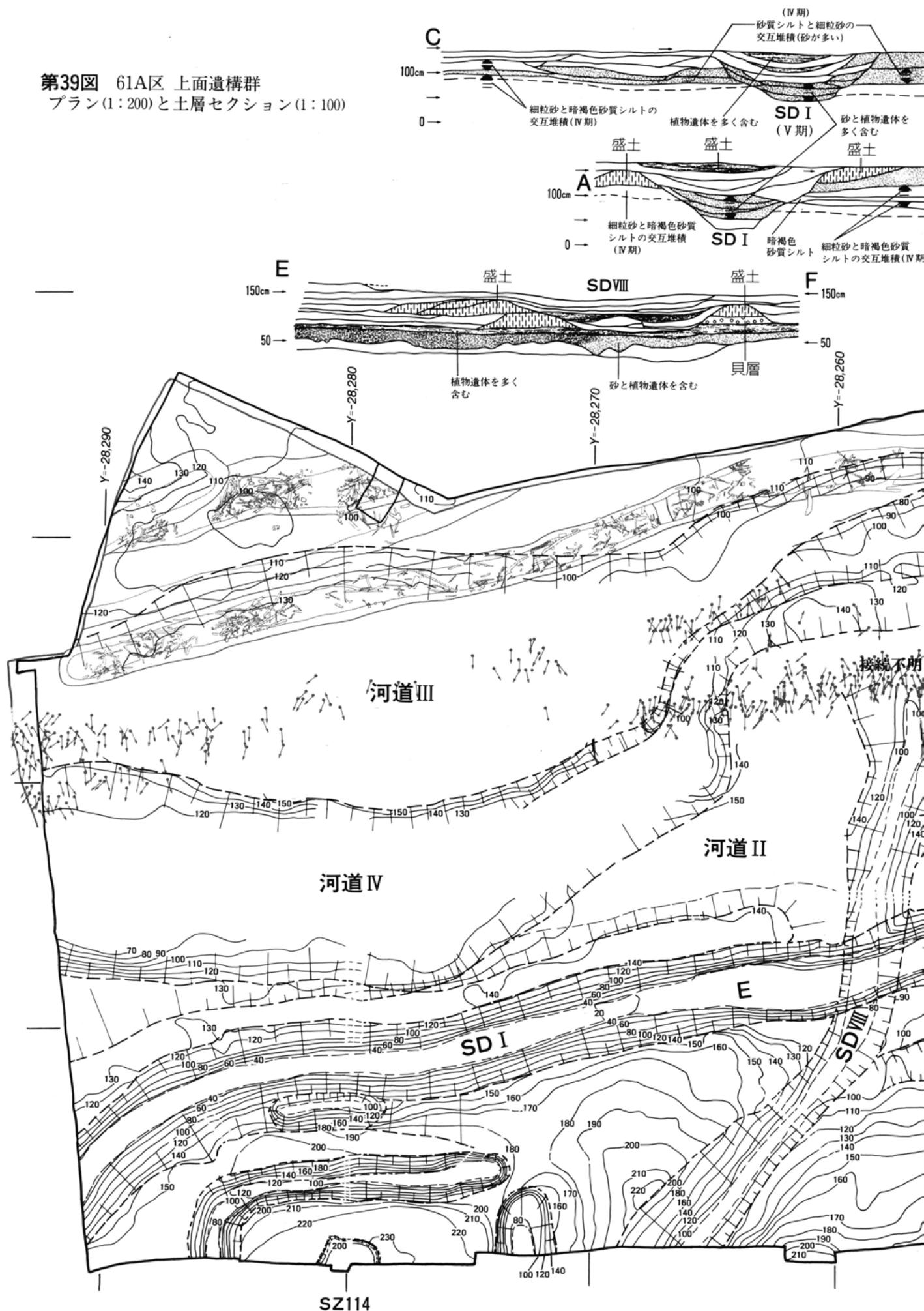
#### B. 方形周溝墓

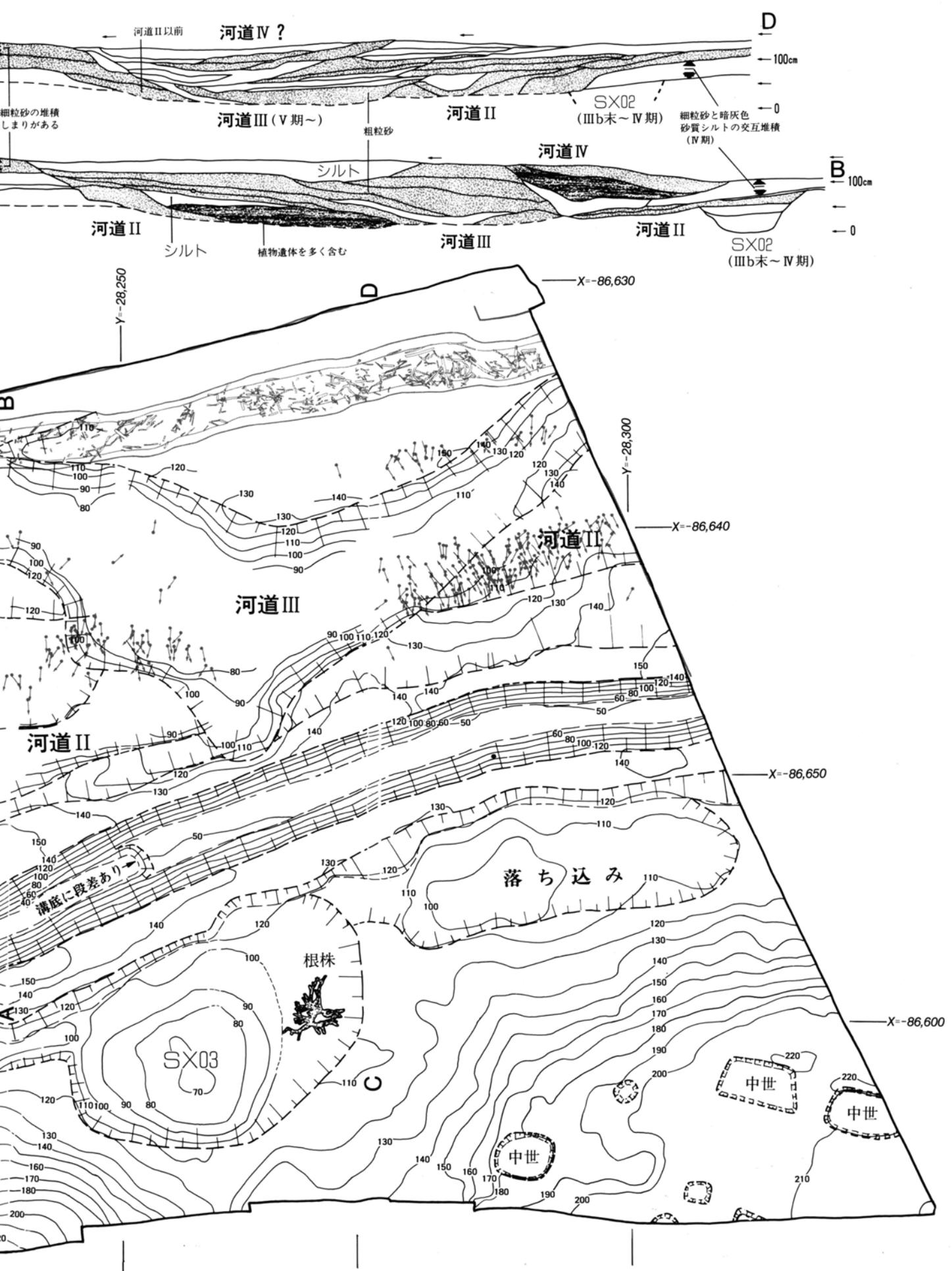
S Z 1 1 4 は半分弱の検出で、S Z 1 1 7 は東周溝を調査区南壁土層セクションで確認した。ほんの一部を下面で検出したにとどまっている。S Z 1 1 4 のプランは、おそらくA 1 形だろう。供獻土器は出土しなかったので時期は確実ではないが、隣接の方形周溝墓群との関係からみてⅣ期と考えてほぼまちがいない。主体部は検出できなかった。

#### C. 河道

河道はⅡ・Ⅲ・Ⅳを面的に検出することを心がけてある程度検出できたが、やや土層セクションとのずれを生じている。河道Ⅰは土層セクションで存在をチェックできるのみで、面的には谷Aのほぼ中央部を流れていたものと推測する。

河道Ⅱは、Ⅳ期に堆積したa：暗褐色あるいは暗灰色砂質シルトと細粒砂との交互堆積層およびそ





れに連続して堆積している b : しまりのある細粒砂層、と不整合面を形成している。a の成因については、①谷 A 全体で同様に堆積していたのではなくたとえ規模は小さくても中心的な流路が谷 A 内の最も低い部分にあり、その周辺的な堆積として交互堆積を形成した、②中心的な流路は當時存在したのではなく季節的変化で規則的な堆積層を形成した、という二つの見方ができる。第39図土層セクション C - D には交互堆積層を切り込むが河道 II よりは古い砂層が確認されている。これは交互堆積に連続する層であるから、最終的には不整合面を形成しているが、交互堆積層の形成に関わるものであったかもしれない。b は、その上面高度が SD I 北側盛土基底より 30cm ほど高く、調査時には盛土の可能性はないものかと考えたが、盛るならばどこからか運ばねばならないこと、実際土層セクションをよく観察すると薄い縞状模様が観察でき通常見られる盛土のごとく攪乱されたような部分が認められなかつたことから、自然堆積ではないかと考えた（第6図土層セクションへの注記では「盛土風だが自然形成？」とした層位に相当する）。層位の連続で考えた場合、直下は厚い砂層と薄い砂質シルト層との交互堆積、その下はその逆の交互堆積であり、上層になるにしたがって順次砂の量が増加して砂層自体にラミナが生じるようになる。このことは、a の段階では決して活発ではなかった河道の活発化、つまり砂の運搬量の増加と継続的なオーバーフローによってこうした高まりが形成されたこと（自然堤防の縮小版）を示しているのではないだろうか。

## 下面遺構群

### A. 竪穴住居

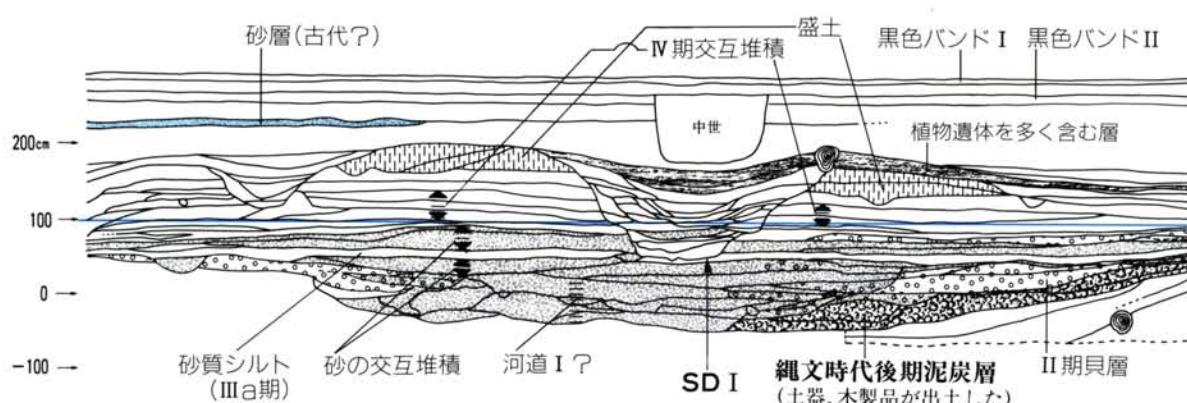
SB02はII期で、隅円方形プランを呈する。他はII期またはIIIa期に属す。

### B. 掘立柱建物

SA01はII期またはIIIa期である。

### C. 土 坑

谷 A のやや北よりに SK01 がある。土器はほとんど出土していないが層位的にみて II 期であろう。谷 A には流水の痕跡が認められるけれども、おそらく河道 I の活動停止による一時渴水時に掘削されたと考える。土坑の基底はマイナス 180cm にまで達しており、当時の地下水位がかなり低かったことが窺



第40図 61A区 東壁土層セクション(1:100)

える。埋土は壁の崩落を示すのか、弥生時代基底層である縄文時代層のブロックが多量にあって、それに粗砂がかむ状況で、一部人為的に埋められているのかもしれない。恐らく、SK01は本来袋状土坑で上部がせりだしていたのであろう。内部からは、樹皮のついた丸木と禾本科？植物の茎を大雑把に綴じた編物様のものが中位で面的に出土した。敷いてあったというよりは、覆ってあったのが落ちたのかもしれない。

#### D. 大形土坑

SX03はⅣ期である。粘土層によって覆われている上部は長径約12m、短径約8.5m、流木・木製品を含む。また砂の流入の顕著に見られる下部は長径約8m、短径約5mを測る。

下部は深さ約0.5mを測り、Ⅳ期土器の他に木製品や流木の多量出土をみた。流木には摩滅したものもあり、河道からの流入が推測される。したがって、Ⅳ期にも谷Aには活発な水流の形成された時期(突発的なものかもしれない)のあることに注意する必要がある。

#### E. 杭と溝

調査区北半部では、河道の砂層下から杭群SX1を検出した。杭は数百本が帶状に分布する。検出した段階では杭の頭部は砂層中に5~10cmほど出ているに過ぎず、地中部分も10~30cmとばらつきがある。したがって割材か丸木か特定するのは難しいけれども、すくなくとも両者の存在は確認している。築堤に見られるような横木や編物の類は遺存していなかった。これらの状況は60B・60E区と同様である。第42図の→は杭の延びている方向(打ち込まれている方向の逆)を示したものである。平面的には東西の偏差を含んでいるが基本的に南向きの傾斜を有している。打ち込み角度は、垂直に対して15度内外で垂直なものはない。杭の打ち込まれた時期は、直接決定する資料に欠ける。

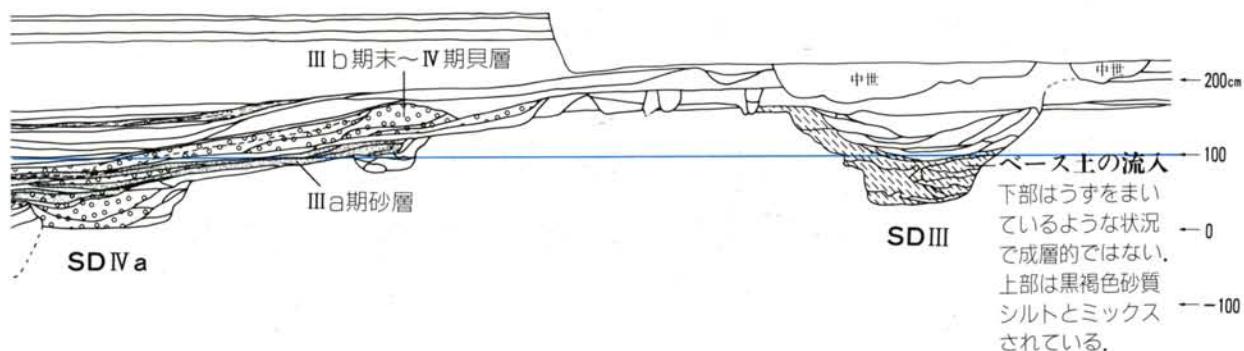


▲ 北から



▲ 拡大

第41図 61A区 SK01出土編物



杭はII期貝層上から打ち込まれ、その上部をV期以降の河道堆積の砂層が被覆していたので、すくなくともその期間内の構築物である。そして本来の状況として、①杭が乱立していた、②護岸あるいは築堤の基礎として横木や編物とともに盛土に封じ込まれていたのが河道の侵食によって杭だけが遺存した、という二つの可能性が考えられる。

②に関しては河道の活発化するV期以降ならば可能性があるものの、河道との関係は検出状況では窺えず、もし河道の制御のためであったなら無力であったことになる。後述する61H区では河道北岸の護岸と考えられる杭と横板を組み合わせた構造物(SX03)が貧弱であるにも関わらず遺存しており、しかもその付近に杭の密集する部分は検出されていないのとは対照的である。

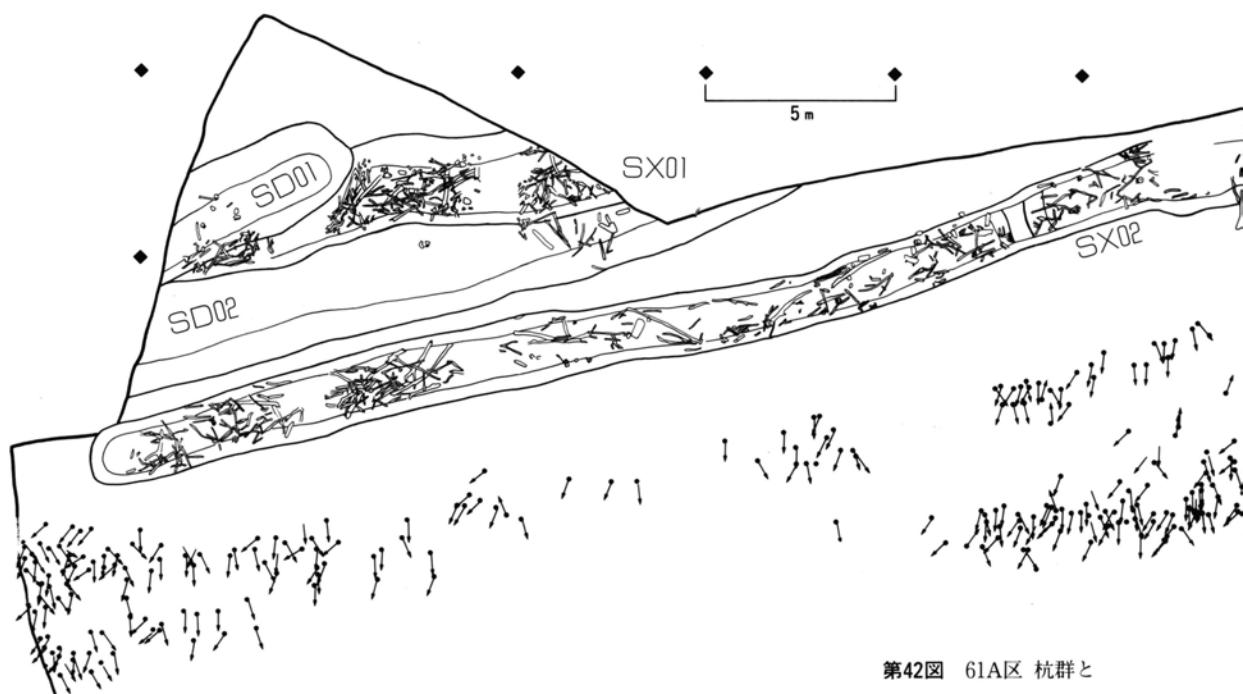
谷底部と微高地上面との比高は2.5m以上あり、谷Aからあふれたような状況はIIIa期に可能性があるのみである。V期に限って築堤されたとしても、SDIのような溝の掘削が行われていることは、果してそうした築堤をするだけの必要がどこにあったのか考えさせる。

以上のことから、SX1とした杭群については河道化以前に打ち込まれた、つまり遅くともIV期には存在した——より限定するなら後述するSX01・02のような構築物と共に機能した——防御施設の一部であるという可能性を想定する。

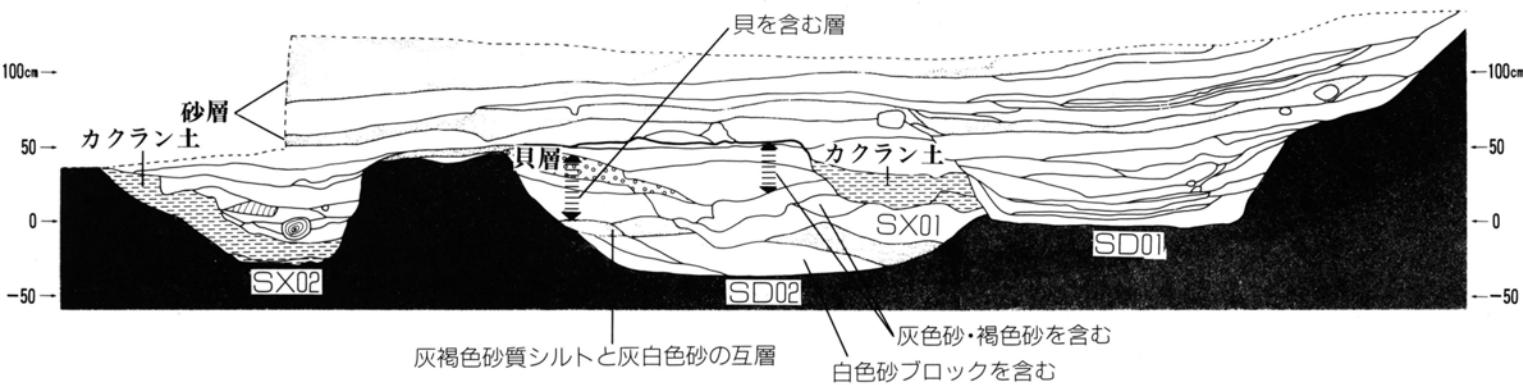
SX01・02は内部から枝持の木、打ち込まれた杭、抜かれた?杭、木製品、牙製品などが出土した、掘形が溝状を呈する遺構である。枝持の木・打ち込まれた杭は構築物の存在を強く示唆する。

溝状部分の埋土は、上部は自然堆積であり分層もできるが、下部は第43図に擾乱土として示したようにブロック状の土で充填されている。

枝持の木は、溝の延長方向に倒れている径5~10cm、長さ2.5m以上のそれほど枝が張らず屈曲もなく延びるもの—a、径はaより細く多くは断片化して検出されたが、遺存状態のよいものでは長さ約3mを測る—b、溝の延長方向には一致せず南向きにあって大きく枝を張り、よじれているよう



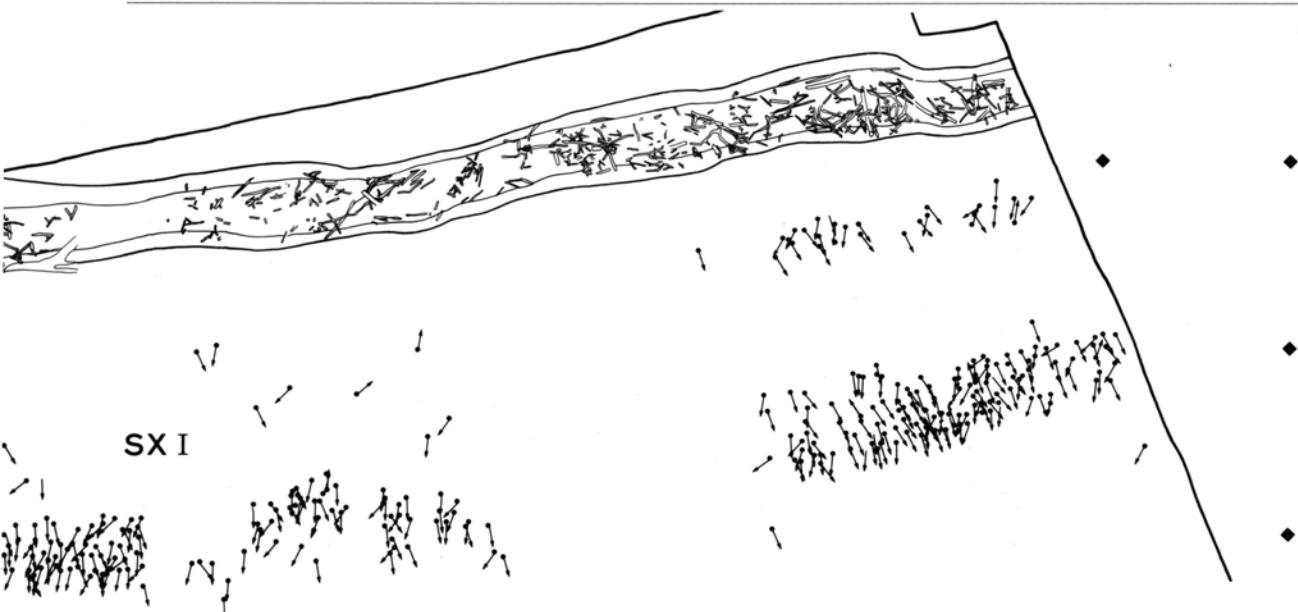
第42図 61A区 杭群と



第43図 61A区 西壁土層セクション(1:50)

ものまである径の一定しないもの—c、の3種に区分できる。特にcは原位置にあるものが多く、地中に埋められている下端部は鈍い角度で一方向から断ち落としてあっていわゆる杭先とは異なる。つまり、大きく枝を張っている材が使われていることとも絡んで当初から打ち込むことは考えられていないのであり、それが地中に固定する方法という点でこの溝状をなす掘形および上述の埋土の特徴とも関わってくることになる。全ての樹種同定は実施していないが、同様の材が出土した県教育委員会調査区例では主要なものはカシであり、外観の一一致しているこれらも多くのカシであろう。これらの材は、a・bが幹または幹に近い枝、cが枝分かれする先端に近い部分であろうと推測する。おそらく、切り出してきた材をそれぞれの太さ、形状に合わせて使い分けているのであろう。

**その他** SD II b (II期) は SD IV a と重複して途切れる。その重複部分すぐ西の SD IV a 溝底からは穿孔のあるイノシシ下顎骨が出土した。SD IV a (II期) は幅2~2.5m、深さ0.5mと小規模で、全体に貝層をともない、櫛、ガラス質石英安山岩の剥片群、動物遺体などが出土している。SD IIIはかす



特殊遺構(1:200)

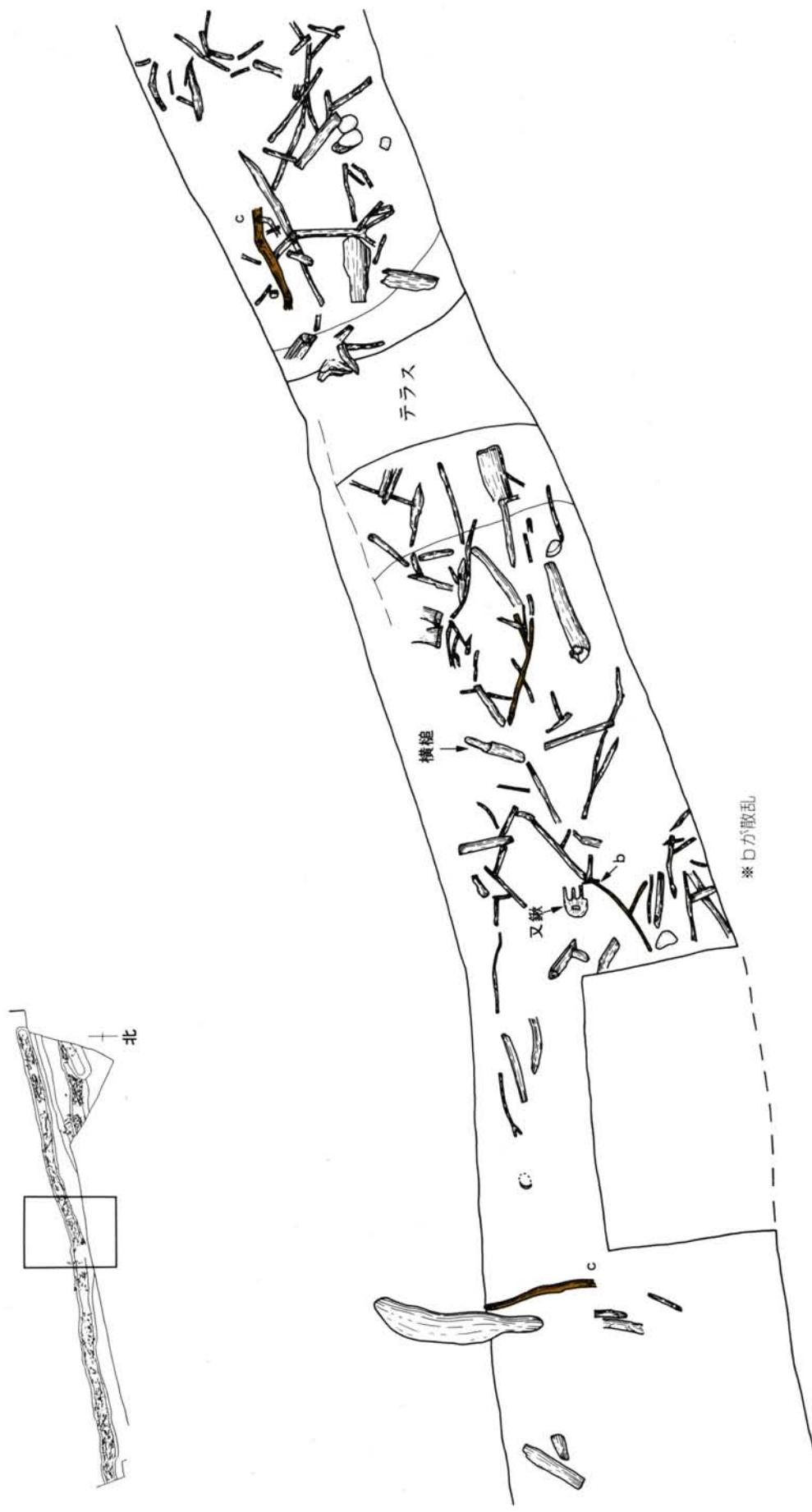
第44図 61A区 SX02-(1)



第45図 61A区 SX02-(2)



(1 : 40)



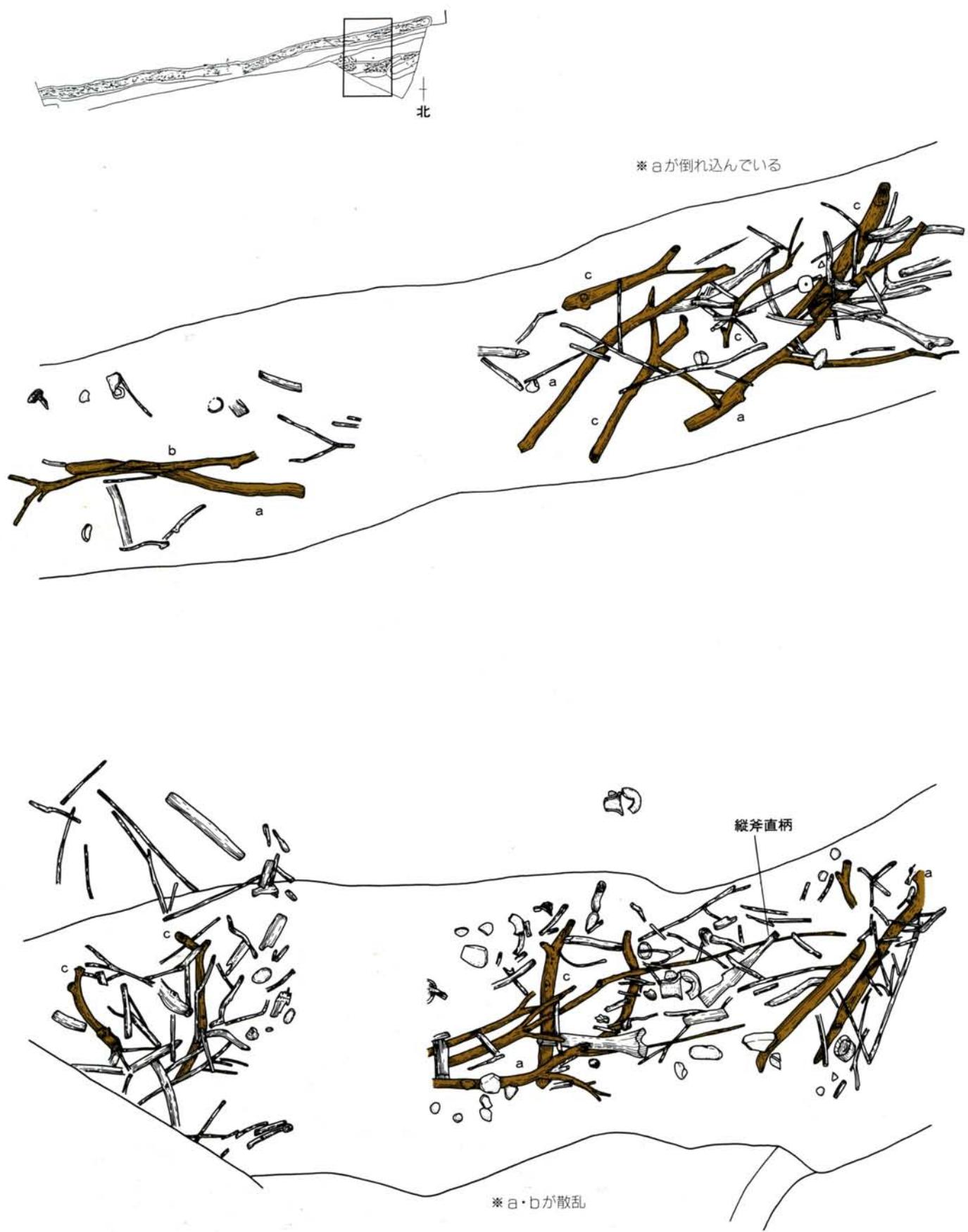
(1 : 40)

第47図 61A区 SX02-(4)



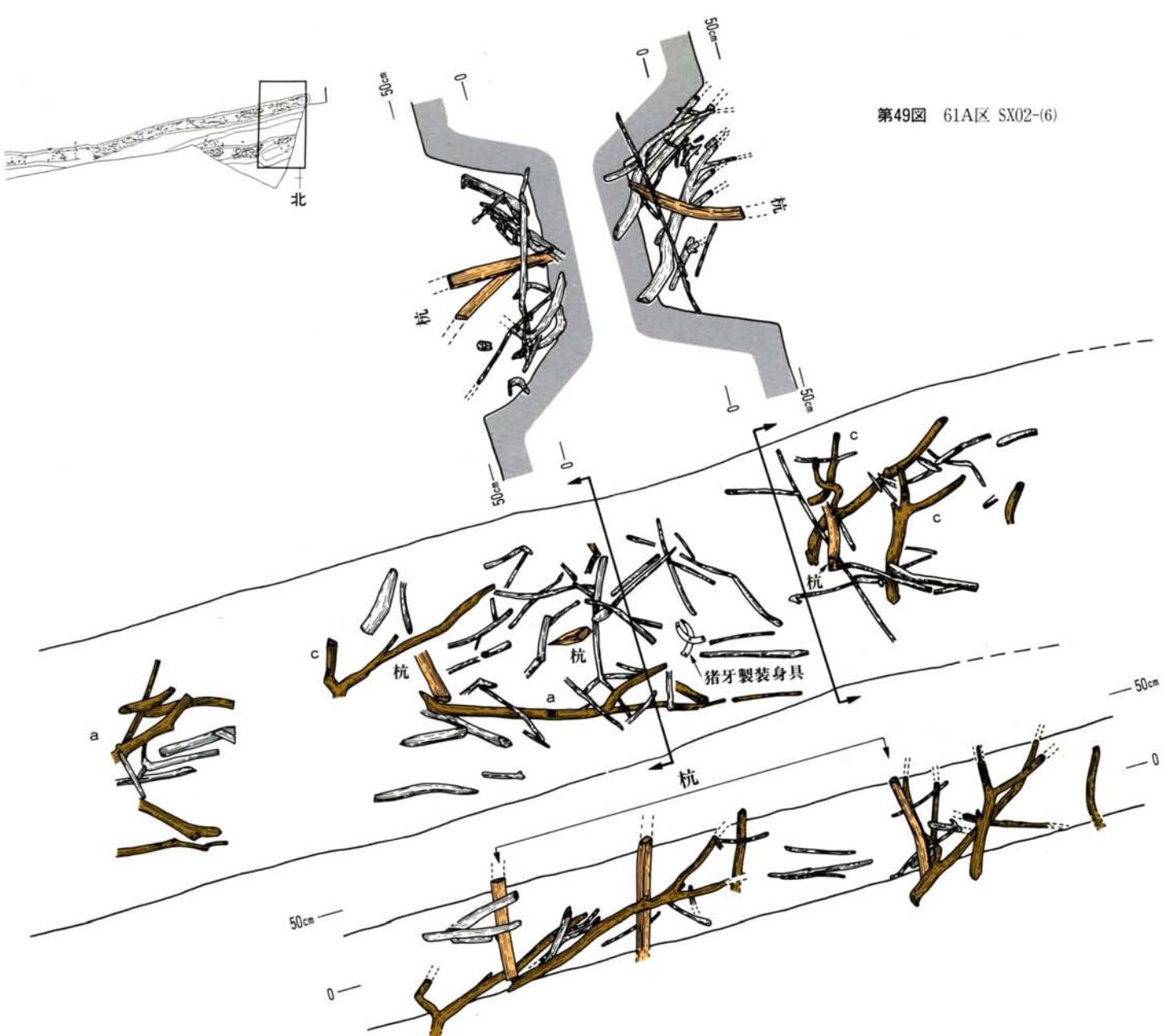
(1 : 40)

第48図 61A区 SX02-(5)



(1 : 40)

第49図 61A区 SX02-(6)



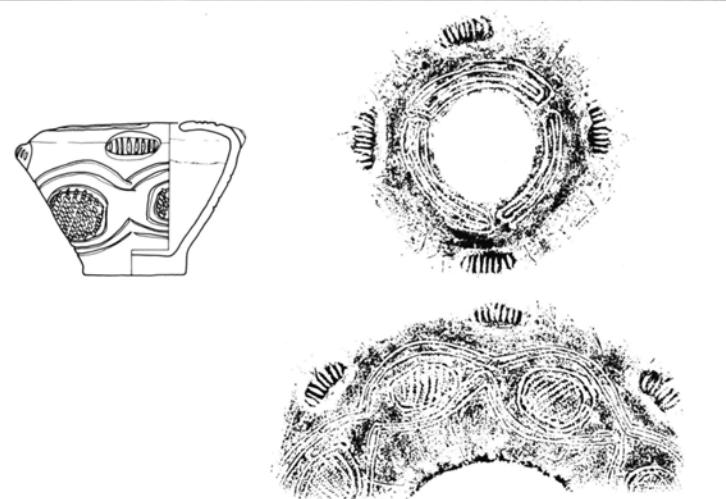
(1 : 40)

めている程度である。

SX01に切られているSD02は、埋土に稿状をなす砂の堆積があり水流のあったことが窺える。可能性としては谷A北縁を東に延びて63D区のSD05と連続するものと考えるが、確証はない。

## F. 貝層

貝層は河道によって削られ



第50図 61A区 SD IVa出土土器(1/3)

た部分をのぞいた谷A内に広く分布する。II期貝層はSD IVa内の他、調査区西部で検出した集石の周辺で約20平方メートル、調査区東部SD IVaの北で河道を挟んで分布し本来さらに広がっていたことが推定される。厚さは最大40cm程度はあったであろう。IIIa期貝層は砂混じりの破碎貝層が河道両端にそって分布する。一次堆積層は不明である。IIIb期貝層(一部IV期を含む)は調査区南東コーナーの微高地斜面上で最大層厚40cmで45平方メートルの範囲に分布する。

IIIb期貝層の下部にある弥生時代基底面やSX03周辺の標高120cm等高線からSD IIIの間では、南北方向に走る細長い溝を含んだアバタ状部分の集中がみられた。IIIa期砂層の分布ともほぼ一致することか

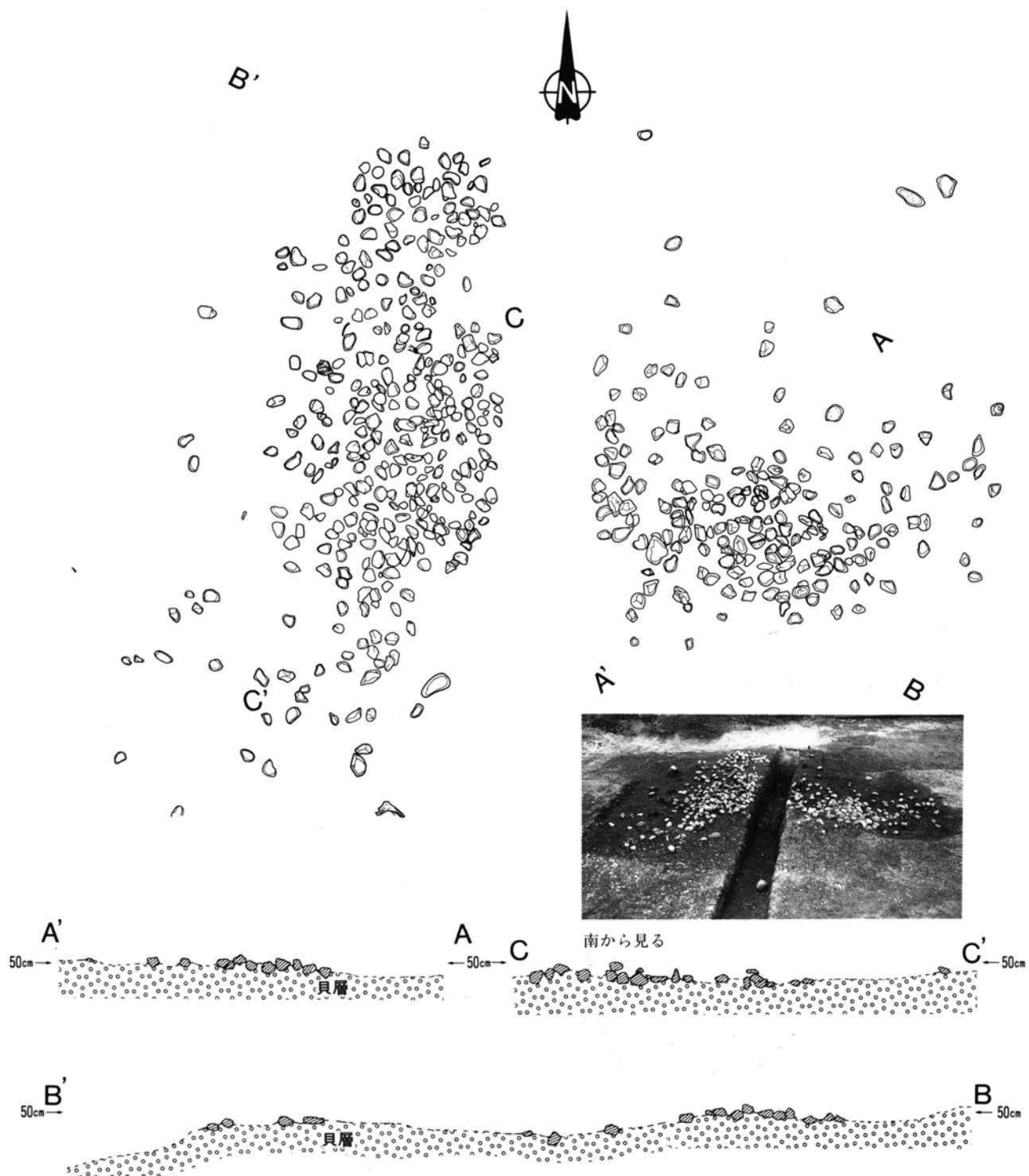


第51図 61A区 貝層セクションとベース面

らおそらく流水によるものであり、谷A内の水位上昇による侵食によって形成されたものと考えられる。

### G. 集 石

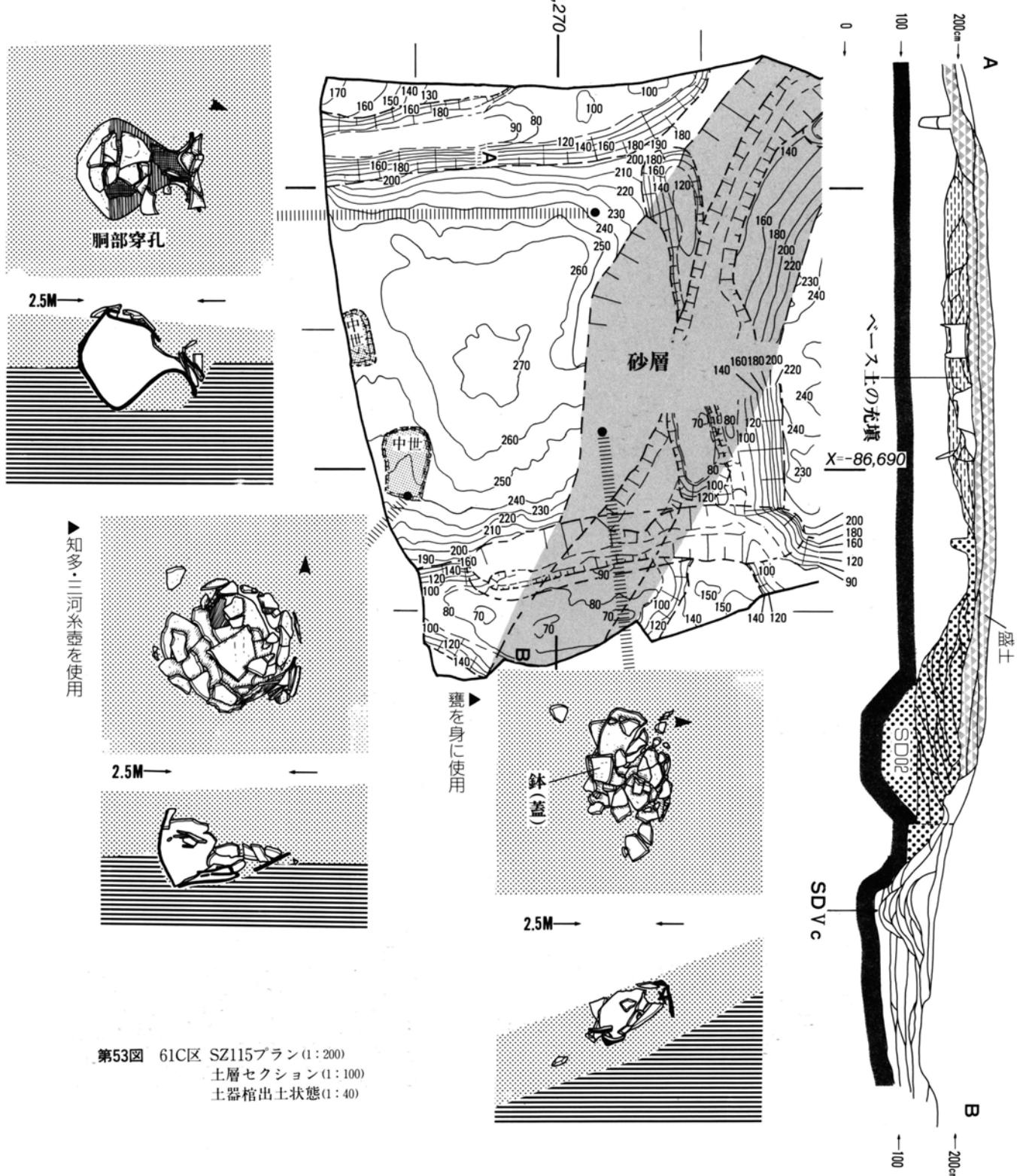
II期貝層の上部で径5～10cmの河原石の集石があった。



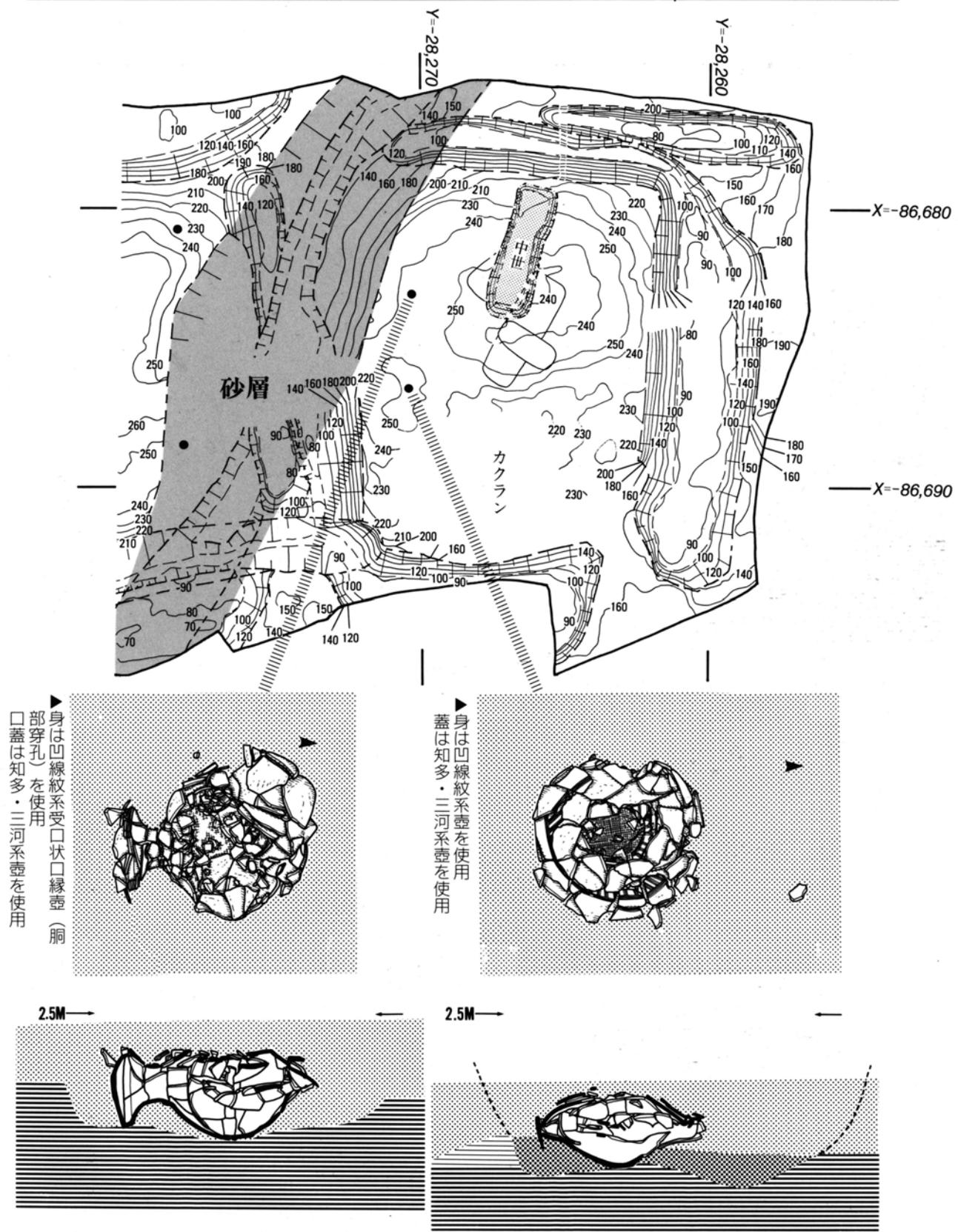
第52図 61A区 SX04(1:40)

上面遺構群

A. 方形周溝墓



SZ115は西周溝が60B区にかかりはっきりしないけれども、少なくとも2ヵ所の陸橋部を有する。墳丘下で検出したSD02はIV期で、時期・位置・土層セクション（ベース土の流入がある）から判断して、



第54図 61C区 SZ118プラン(1:200)・土層セクション(1:100)  
土器出土状態(1:40)

S Z 1 1 5 構築以前の方形周溝墓の存在を示唆する。つまり拡張（改修）を示すものと考えられる。S Z 1 1 5 東周溝では下部から貝田町式系の供献壺を検出しており、60B区方形周溝墓と近接した時期であることが窺える。墳丘は S D VIII 上部の砂層で大きく削られている。土器棺 3 基を検出、壺棺 2 基（身を横位にして胴部穿孔、口・胴部とも蓋をしたもの 1、知多・三河系壺を正立にしたもの 1）、甕棺 1 基（凹線紋系甕でおそらく鉢を蓋としている）である。土器棺以外の主体部は墳丘内に認められるベース土の集中する部分に存在すると推測され、プランおよび土層セクションでも複数存在することが窺われた。検出時で溝底と墳丘頂部との比高約 2.1m を測るが、土器棺の出土状態からみて本来はそれ以上あったものと推測する。

S Z 1 1 8 西周溝と S Z 1 1 5 東周溝は切り合い関係にあり、S Z 1 1 8 が新しい。南東・北西 2 カ所に陸橋部を有する A 2 a 形である。南西陸橋部付近はすでに調査され、『報告書』には南周溝東端から出土した供献土器が掲載されている。それに対し東周溝では上部から多量の土器と炭化物が出土し、通常の生活廃棄と考えられる。供献土器はすべて凹線紋系である。墳丘は上部がやや削られているものの、溝底との比高約 1.8m を測る。土器棺は 2 基検出され、2 基とも壺（身は凹線紋系壺、蓋は知多・三河系壺片を使用しているもの 1）である。土器棺以外の主体部としては、ベース土の集中する墳丘中央の辺りで検出された切り合う複数の土坑があり、一部は人骨片？を伴っていた。

S Z 1 1 7 は南周溝を検出した。口縁部に打ち欠きのある凹線紋系細頸壺が出土した。

## 下面遺構群

---

方形周溝墓下には居住域に関わる遺構群が展開する。包含層は下部では黒色を呈し、かなり有機分が多い。そして注意されたのは 60A 区・60E 区で検出されたボロボロと粒状になってしまいのない茶褐色の層位である。これには炭化物・灰が含まれ被熱が窺われた。

### A. 積穴住居

SB01 は円形プランで周溝は 2 条ある。II 期。他はいずれも部分的で不明確である。

### B. 掘立柱建物

SA01 はおそらく II 期。

### C. 小穴列（垣）

SH01 は、切り合ったり接近する 2 つの小穴が単独の小穴をまじえて線状に並んでいる。埋土はベース土ブロックである。切り合ったり接近することは造り替えを示すのであろう。S D IV a と平行するが同時存在かどうかは不明である。II 期。

### D. 溝

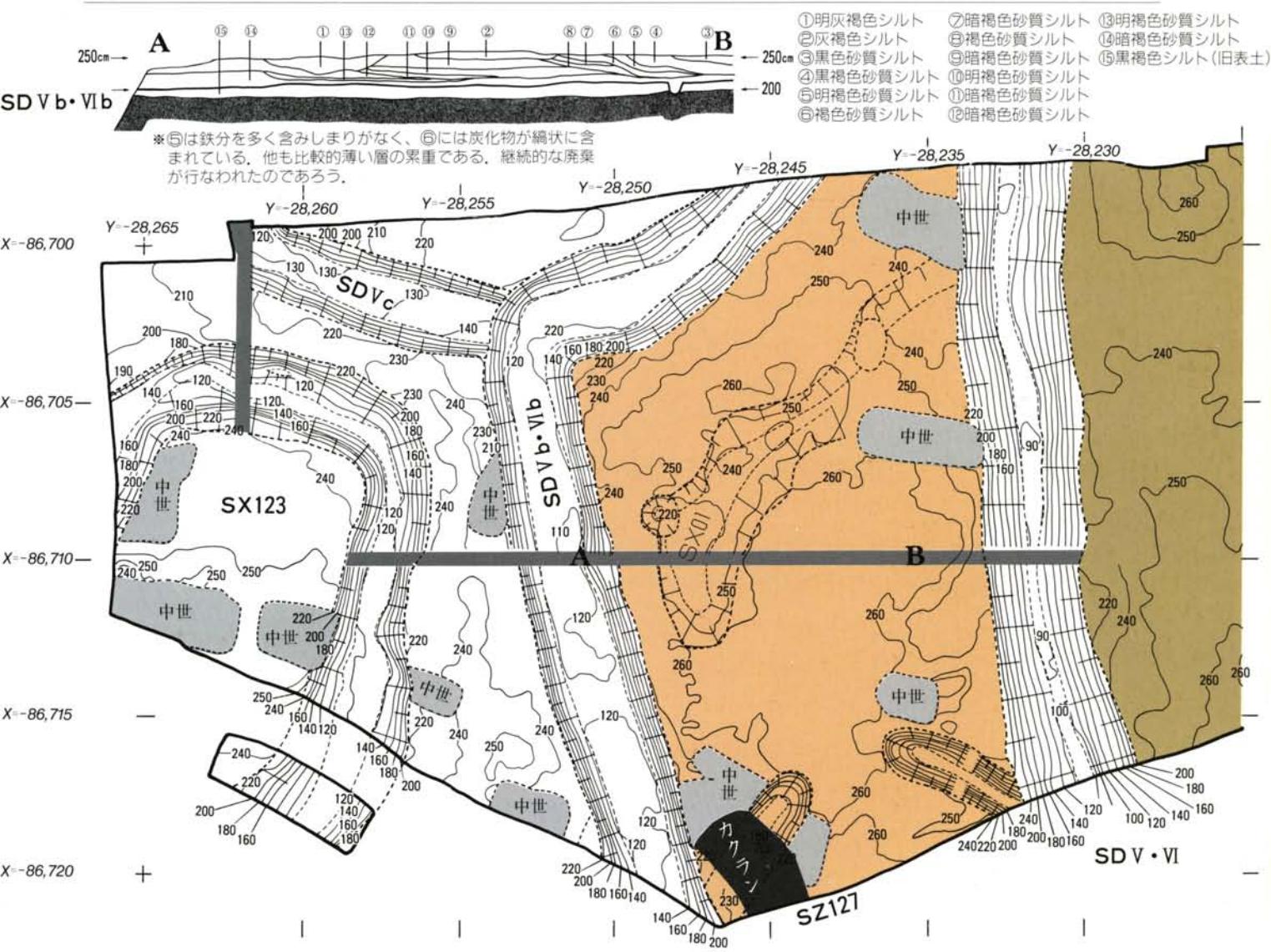
SD01 は II 期に属す。

## 11. 61D区 図版31・38・39・40

## A. 溝と区画

61D区ではV期に掘削された溝S DV・V b・V c、それを改修したS DVII・VI b、やや時期的に下がって新たに掘削されたIXを検出した。S D IXからはVI期の土器群が埋土中位からまとまって出土したので、VI期に埋没を始めていることは明かである。そしてS D IXがV期のS Z 1 2 6の墳丘を避けている事実、その下層で検出したSB12もV期であることから判断すると、時期的に下がるものであることはまちがいない。いちおうS D IX最下層からはV期でも最も新しい段階の高杯が出土している。つまり、その掘削時期はV期からVI期へ移行する時期に限定できよう。おそらく、他のS DVII・VI bも同様の時期を想定できるだろう。

S D V c は最初 S D V と接続していたが、V 期末の改修に際し接続部に排土が盛られて分離される。



第55図 61D区 溝と区画(1:200)・土層セクション(1:100)

61C区でS Z 1 1 5南の墳丘裾を一部削って終息するが、S D VIIIとの交差部分は明確ではない。S Z 1 1 5南の墳丘裾再掘削部分自体も確実にS D V cからの延長とは言えず独立した溝である可能性もある一方、時期的にS D V cとS D VIIIが近いこともあって接続していた可能性も否定できない。

これらの溝は断面形が逆台形、U字形、V字形など地点で異なり一定ではない。調査区中央東西ラインでの計測によれば、S D V bは逆台形で、幅約3.7m、深さ約1.4m、S D Vは断面U字形、幅約3m、深さ約1.3mと規模はそれほどでもない。S D IXも同様の規模である。しかし、この点は遺構面の削平という問題もあり、本来の規模よりは幾分低い数値であることに注意しなければならない。

S D V・VI、S D V b・VI bで囲まれた部分は調査区内において区画を形成するが、これが閉じるかあるいは帶状に延びて行くかどうかはなお確定する資料に欠ける。この区画は、内部から明確な遺構は検出されなかった。SX01は溝と言うよりは不定形な落込みであり、この部分のみ灰色粘土が堆積していた。この区画は頂部で標高260cmを測るけれども、層位は弥生時代中期包含層で、弥生時代後期包含層や溝掘削に際しての盛土は確認されなかった。ベース土を含む盛土が確認されたのはS Z 1 2 7の墳丘に関係する部分に限定されていた。おそらく本来はかなり高度を有する区画ではなかったかと推測する。

## B. 方形周溝墓

調査区西辺で検出した方形周溝墓は2基が重複していた。S Z 1 2 2は一辺7mでわずかにゆがんだ方形を呈し、少なくとも2ヶ所の陸橋部を有している。南周溝上部にはベース土が流入しており、S Z 1 2 3築造時に埋め立てられたものと推測する。供献土器の出土はない。

S Z 1 2 3は南北約15mで、S Z 1 2 2を南北に2倍した規模となっている。南東に陸橋部を有する。供献土器はV期でも初期の特徴を有する。したがって、S Z 1 2 2はIV期末からV期初頭ということになる。

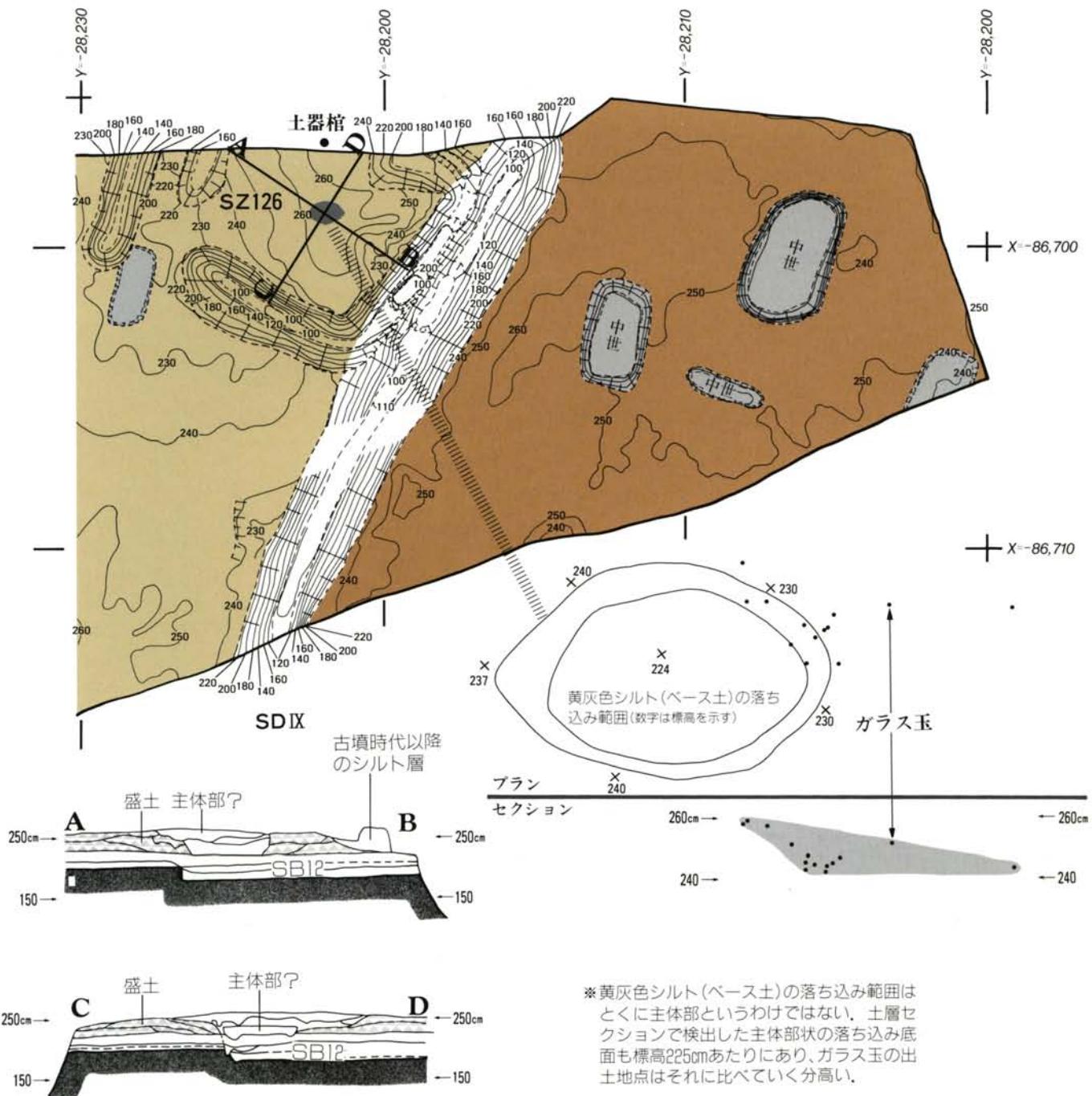
S Z 1 2 6は県教育委員会調査区とまたがっており、当初から存在はわかっていた。ただ、包含層上面の精査段階ではS D V寄りにも包含層の高まりが一ヶ所あり、方形周溝墓が2基並んでいるのではないかと推測した。それで試掘溝を調査区北壁沿いに設定したけれども、西側の高まりには囲む溝が検出されず、方形周溝墓とは認定しなかった。

S Z 1 2 6は西に陸橋部を有するA 1形である。主体部はベース土中に落込みが検出されたものの構造ははっきりしない。しかし、この落ち込みより東では、ガラス玉が東西2.2m、南北45cm、高低差17cmの範囲（主体部？）で13点出土し、水洗選別で検出したものを含めて総数80点を数えた。また東周溝最下部からは、1.7m×0.7m、深さ約30cmを測るベース土の詰まった土坑SK59が検出された。埋葬施設であるかどうかは不明である。

S Z 1 2 7は当初土壘状部分の基底ではないかと考えていた。しかし、周溝および供献土器を検出したので方形周溝墓と認定した。

## C. 積穴住居と包含層

IV期以前の包含層 II期包含層は以後の遺構が存在する部分を除きほぼ全体で検出された。特にS D



第56図 61D区 SZ126プラン(1:200)・土層セクション(1:100)・  
ガラス玉出土分布(1:20)

\*黄灰色シルト(ベース土)の落ち込み範囲は  
とくに主体部というわけではない。土層セクションで検出した主体部状の落ち込み底面も標高225cmあたりにあり、ガラス玉の出土地点はそれに比べていく分高い。

V・VI、SDVb・VIbで囲まれた区画では、弥生時代包含層の確認面からII期の土器が多量に出土した。それらについては溝との関係で盛土かとも考えたが、当然存在すべきベース土ブロックからなる層位が認められること、炭化物が帶状をなして多量に含まれている褐色砂質シルトや鉄分を多量に含む粘着質の褐色シルトがブロック状をなさないで成層的に堆積していること、下部はこれも粘着質で有機分の多い暗褐色シルト(遺跡形成前の表土)、そして漸移層、通常のベースである黄灰色シルトへと層位変化していることからみて、遺構構築にともなう攪乱をそれほど受けていない安定した包含層が形成されていることが窺われた。

自然状態での弥生時代ベース面(旧表土)である暗褐色シルト層は、61D区において上面標高220cmを測るが、散在する遺構や上部に堆積している炭化物や遺物を含む暗褐色砂質シルトの存在からすでに

幾分か削られていることが推測できる。

いずれにしても、この区画内での遺構形成頻度が低いことは遺構の配置でも明かであり、上部の堆積層は付近の竪穴住居構築に際しての排土や廃棄物の累積した結果であるとしてもIIIa期を下るものではない。そして、注目しておきたいのは、ここで検出されたような粘着質の層位が貝層を伴うII期の居住域では普通といってよい頻度で観察されることである。県教育委員会の調査でもそうであったし、すでに述べた60B区、60E区、61C区、後述する61P区・63N区でもそうである。なにか、III期以降とは異なる共通した活動が行われているのではなかろうか。その結果としての堆積層の形成と考える。

III期包含層やIV期包含層は遺構埋土としての検出にとどまる。SB04周辺では黒色砂質シルトとともに土器が多量に出土した。部分的に限定された包含層である。

**II期竪穴住居** SB06はやや台形気味の隅円方形プランを呈し、拡張の形跡がある。対面するSB08との直接的な前後関係は確認できていないが、規模から切り合い関係を復元するとSB06の方が新しい可能性がある。

SB05は不整円形プラン、SB08は円形プランで拡張が行われている。

SB22は2.7m×2.2mという小規模な竪穴で床面から炉は検出されていない。

**IIIa期竪穴住居** SB03は周溝がやや錯綜する觀がある。溝を挟んで対面する住居は、南半部東西は弧状をなして円形プランを窺わしめる周溝を含むものの、北半部はすべて隅円方形プランをなしているので、明確には確認できなかったが、円形プランと隅円方形プランの住居が重複しているのであろう。

SB07はSB03に切られており、IIIa期でも古い。

SB15はSB14を切る。隅円方形プランである。

**IV期** SB11は床面直上に土器が遺存していた。

SB04周辺は周溝の錯綜が激しいので、プランの特定は難しい。少なくとも2棟は存在する。

**V期以降の包含層** SDV・VI以東にはほぼ限定される。SDV・VIのすぐ東側では包含層中からV期の土器がまとまって出土した。特に遺構があるわけでもなく、SDVI掘削に際して埋没土とともにあった土器群が盛り上げられたものと考える。VI期以降の土器は溝内で検出されたものがほとんどであり、包含層上面にはS字状口縁甕やVII期の土器が散見される程度で、全体にVI期以降の包含層が希薄であるとの印象は免れない。遺構の密度に大きく関わるのであろう。



第57図 SK17(西から)

**V期** SB19は拡張があり、a・b・c 3条の周溝がめぐる。

SB12はS Z 1 2 6墳丘下で検出した。長軸約8m、短軸6mを測る。床面直上には土器が遺存していた。

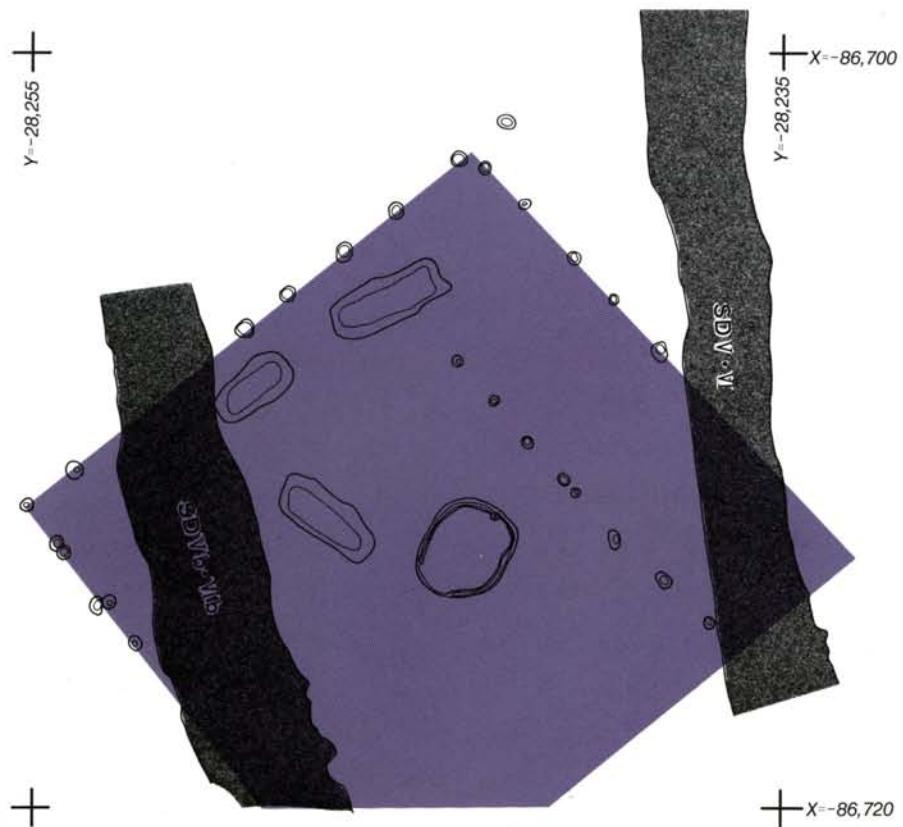
#### D. 掘立柱建物

SA01は1×2間としたが、周辺の柱穴群の存在からみてもう少し大きな建物である可能性がある。あるいは周辺に複数棟存在するかも知れない。SA02についても同様である。II期かIII期。

## E. 小穴列（垣）

SH01はベース土ブロックを埋土とする小穴が直線的に並び、時期もII期に限定できる。それに対し、SH02以下はこれら小穴が方形区画をなすという想定の元に直交する小穴列を抽出したのである。SH01はすでに『昭和61年度 年報』でも報告したように「垣」である可能性が高い。

この小穴列の軸線を念頭において土坑の軸線との関係を検討すると、SK16・17が同様の軸線を有していることに気が付く。そして、同時期で重複しない住居はSB22のみである。先の土坑はII期でも前半期の特徴を示す土器（多条沈線紋）が出土しており、この区域の遺構群のうち重複しないものに相互関係を認めるならば、この区域の特殊性が浮かび上がってくる\*。



第58図 61D区 垣プラン(1:200)

\* 小穴列が区画を形成するかどうかは、そもそも柱穴の時期決定が困難な状況では「言及すること自体問題外」とも言えるためにむつかしい。しかし、幸い61D区では当該区域においてIII期以降の遺構分布が希薄であり、包含層の堆積状況等からみて少なくともSH01・SH02という直交する小穴列の存在は確実である。そして、L字形を構成するのであれば、それが方形の区画を形成する可能性も一段と高いものになるとを考えたのだが、厳密にはあと一歩及ばないと言わざるを得ない。

## 12. 61 E 区 図版17~22

旧調査区では61E区～61G区・61I区北半部に相当する。地形的には北微高地(居住域縁辺：標高250cm)から谷A北斜面(河道：底面標高マイナス60cm)にまたがる。この地区で注目されるのは谷Aに面して標高100cm付近でIIIb期の住居床面が検出されたことである。掘形を想定しても堆積状況から地表面標高がそれほど高いとは思えないが、IIIb期には十分居住可能であったのであろう。

### A. 溝

**III b 期以前** SD01はII期掘削で、幅約6m、深さ1.5mを測る。埋土は大別して、貝を含む上層と含まない下層(灰褐色砂質シルト)とに分かれ。貝層は、下部はII期からIIIa期初頭、上部はIIIb期からIV期までの幅がある。

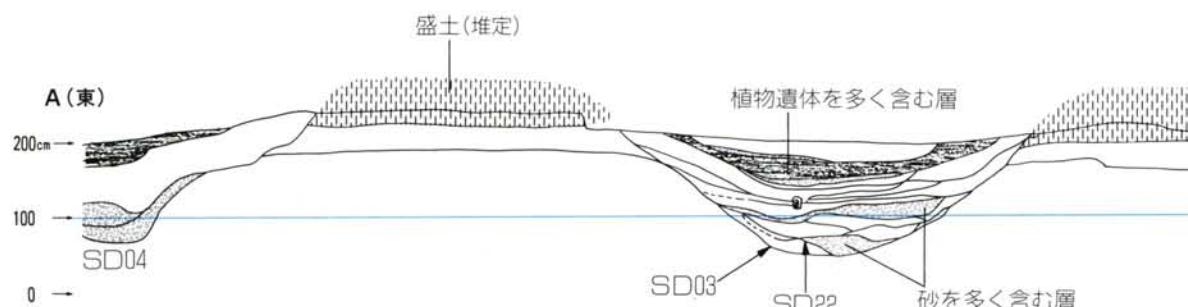
SD02～04はIIIb期。調査区北半部では平行し、それぞれV期以降のSD21～23と重複する。幅約5m、深さ約1.5mを計測するが、溝間の盛土を考慮するなら、実際は深さ2m以上あるものと推測する。埋土は最下部にベース土を主とした薄い層(砂質シルト層との交互堆積をなす場合が多いが所によっては細粒砂が15cmほど堆積する)があり、中位は植物遺体を含む黒褐色砂質シルト、上位は色調の明度を増しながら黄灰色砂質シルトが堆積する。

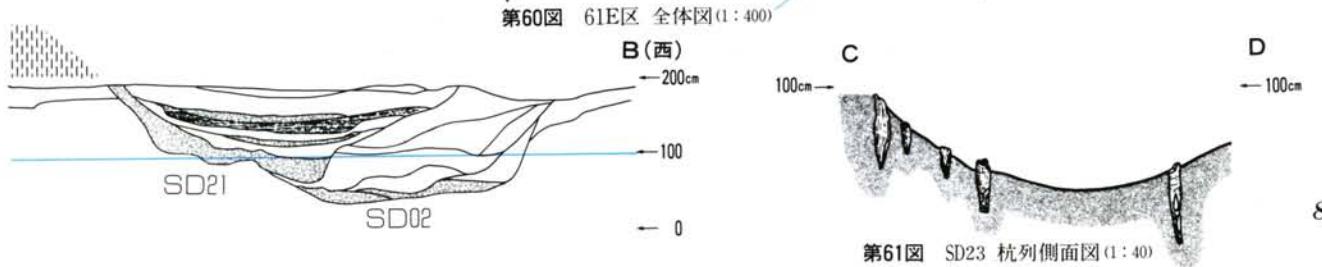
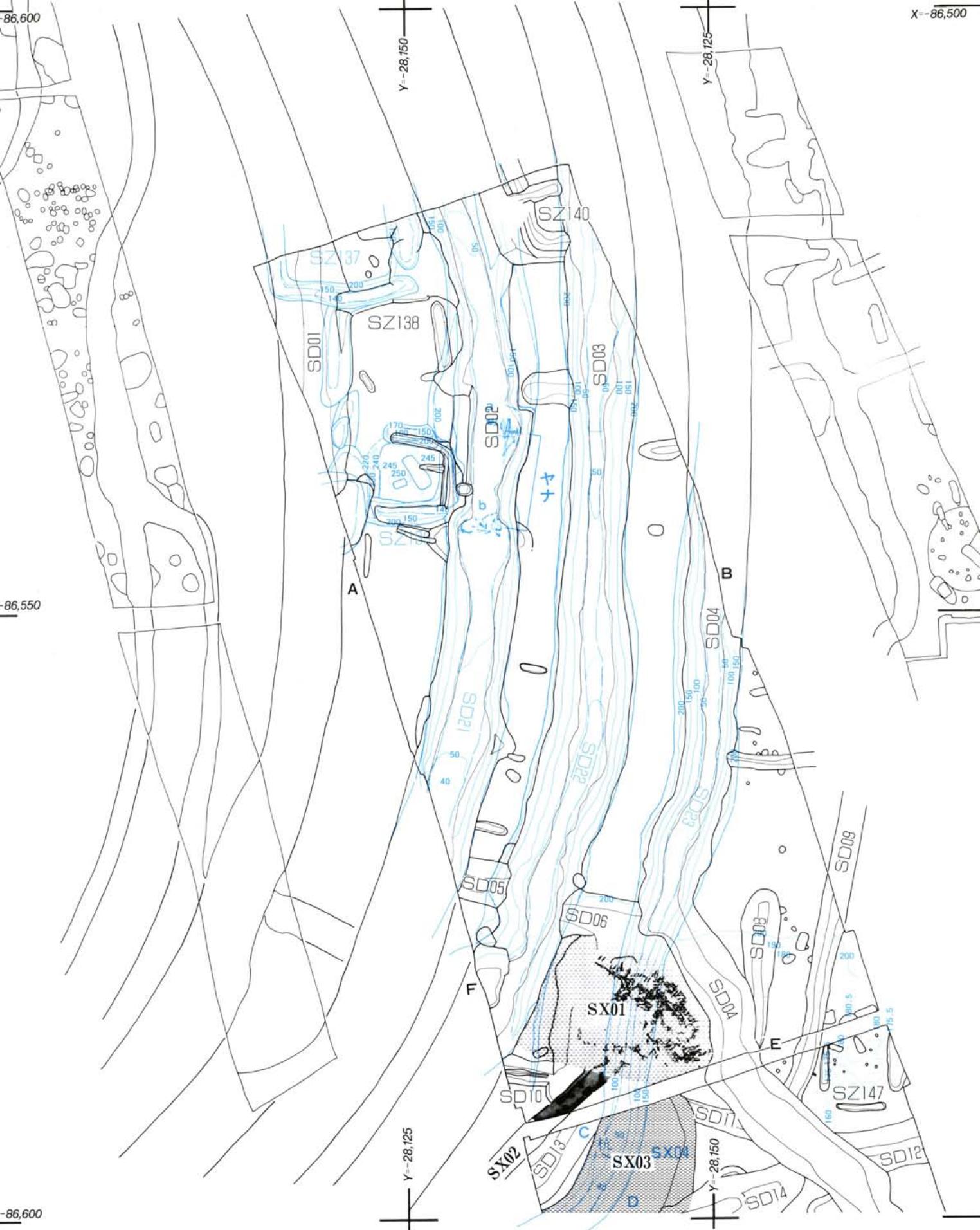
SD04は、a：SD06接続部以北、b：SD08接続部以南、c：その間、の3ヶ所で様相が異なる。

aはSD23が重複し埋土は完全に残ってはいなかった。SD06との接続部は溝底が立ち上がり終息するような状況を示し、SD06底面とは段差を形成している。cはSX01の裾に沿うように走る。SX01盛土部分の裾ははっきりしないが、基礎の杭群・横木の並びと平行しているので特に変形しているとも言えない。cはSD08付近で折れて南北方向の溝となる。cの北半部と南半部は異なる性格か、あるいは掘削時期の異なる部分が合成しているように見える。bはcとの境がちょうどSD08との接続部でaの南端と同様に不自然である。bは新旧2条が重複している可能性がある。SD04-2はIV期で、植物遺体を含む黒褐色砂質シルトが下部に、上部には灰黄色細粒砂が厚く(70cm)堆積していた。SD04-1は埋土がベース土ブロックからなる。

SD05・06はSD03に分割された同一の溝である可能性が高い。SD07・08・09は出土土器の時期がII期からIIIa期と古いが、SD09埋土上部にはSD04と同じ灰黄色細粒砂が堆積し、それほど両者に時期差があるとは思えない。SD10・11も時期を確定できないとはいって、全体の配置からいって全く異なる時期の遺構とは考えられない。多少の時期的な変化を含みながらも、一連の遺構群と考えられる\*。

SD12はII期。SD13はII期の土器が出土しているけれども風化しており、位置的にも他との接続がなく浮いてしまう。SX02との関係で言えば、61A区におけるSX02と下層にある溝との関係に近い。





SD14はII期～IIIa期（最古）。SD05の東西には深い土坑状の落ち込みがある。底面レベルは調査区西壁際でほぼ標高0m、東はマイナス50cmまで達する。

SD16はIIIb期。三叉状に分かれている。南西に延びる部分は地表の傾斜方向に一致しており、底面標高では北西から南西という傾斜になる。SD15への接続があるのかもしれない。

SD17はIIIb期には埋没しており、II期まで遡る可能性もある。SD15付近で底面標高93cm、南端で60cmを測り、比高約30cm。おそらくSD20-1につながるのであろう。

SD18はIIIb期の住居床面が上に形成されており、それ以前には埋没している。II期まで遡る可能性あり。北西端で標高約100cm、南端で標高38cmを測り、比高約40cm。末端は不明だがSD20-1につながるのであろう。

SD20は上層（SD20-2）と下層（SD20-1）に分かれ、1はII期で幅約3.5m、深さ約1.3m、2は幅約4m、深さ約0.7mを測り、IIIa期～IV期の土器が出土している。西端は河道で切られて不明である。終息する可能性が高い。

**IV期以降** SD19はSD20-2と位置的にも時期的にも併行している。

SD21はV期掘削で下部には流木を含む砂層が堆積し、上層は、植物遺体を多く含むシルト層（VI期以降）が堆積している。ヤナは下部の砂層が示す水流の存在した時期に対応すると考える。

SD22はV期掘削で、下部に砂層が堆積し、上部は植物遺体を含むシルトの堆積である。

SD23は他とは異なり一部の区域でV期以降再度の掘削が行われている。SD23-2はSD23-1が完全に埋没しない段階で中央の窪地部分を幅1.5m、深さ数10cmの断面逆台形に掘り下げている。埋土は暗褐色砂質シルトで砂層は含まない。南部の調査区西壁付近では直交して杭列（SX04）が検出された。北約1mにも杭が2本60cmの間隔で溝方向に打ち込まれていた。性格は不明である。

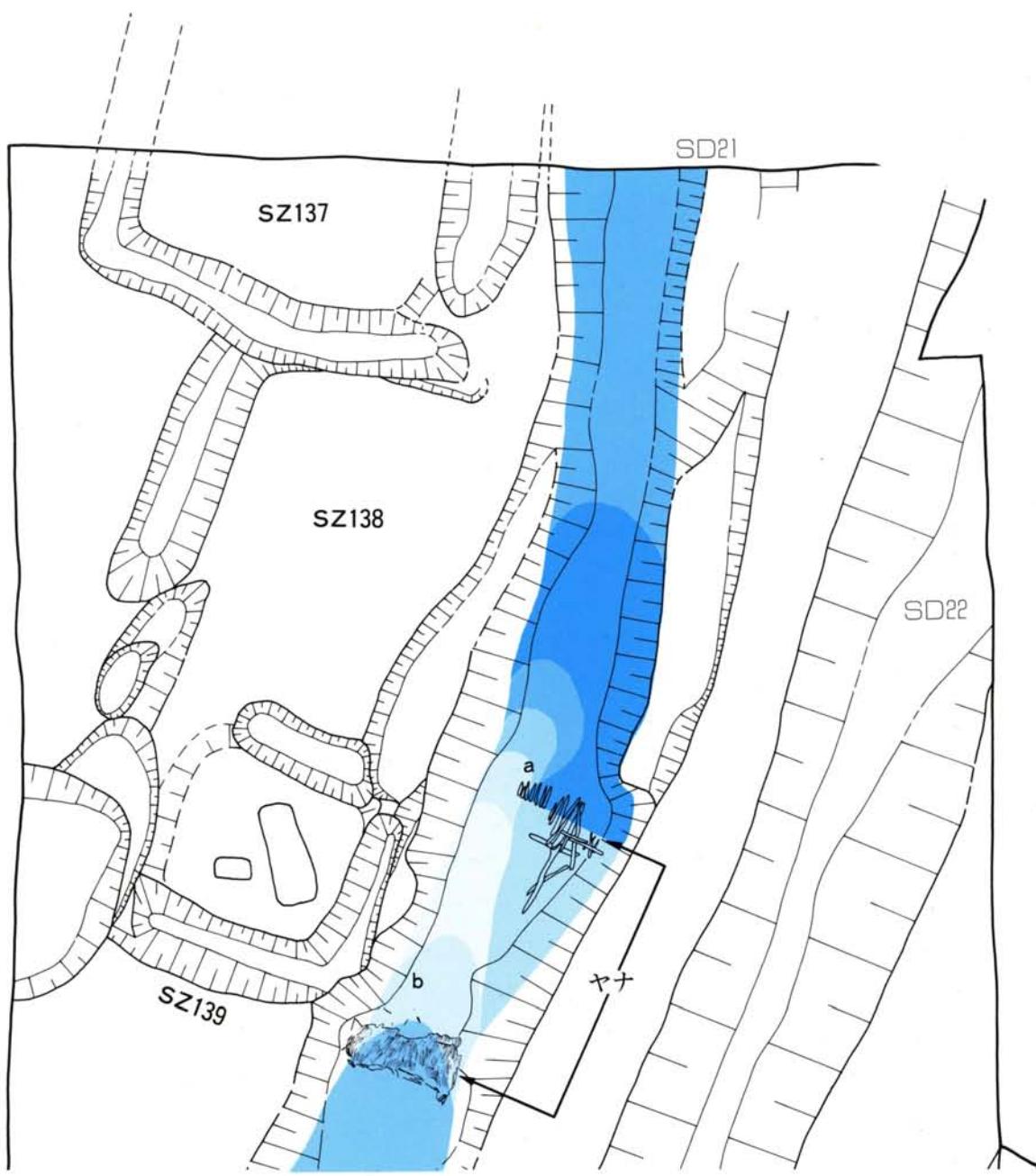
SD21・22下部に水流が認められることは両溝とも末端が開放していることを示している。つまり、谷Aの河道に接続していると考えられるわけであり、その点はSD23-1も同様である。しかし、それがSD23-2になって水流が観察されなくなるということは、再掘削された溝の末端が閉じられた可能性がある。

## B. ヤナ

SD21で検出した。北にある簾：aと南の簾：bからなり、この間の溝西斜面には標高110～120cm程度の高さにテラスがある。本来杭列の倒壊を防ぐ役割をもつ横木を支える又木もすでに根元が浮いており本来の状態になく、杭列も南に傾いていた。

aは杭列・横木・又木・網代からなる。杭列は溝に直交して打ち込まれた杭16本からなり、西は岸まで達せず1mほど開いているのに対し、東は溝壁がL字に折れて広がる部分にまで達している。全体に東へ寄っている感じである。それを下流側から横木と又木が支えている。杭は直径8cmのものが多く、それぞれ10～15cmの間隔で打ち込まれている。16本ある杭は西側部分が短くなってしまっており横木もその部分にはない。

網代は杭列の北側で杭に貼りついて検出された。幅5mmほどの薄く割いた材を6条一単位として、2本超え、2本潜り、1本送りで編んでいる。南からも出土したが破損して流れたものであろう。これら網代はいくつかの断片に分かれていたが、本来は杭列の北側全体に貼りつけられていたのであろ



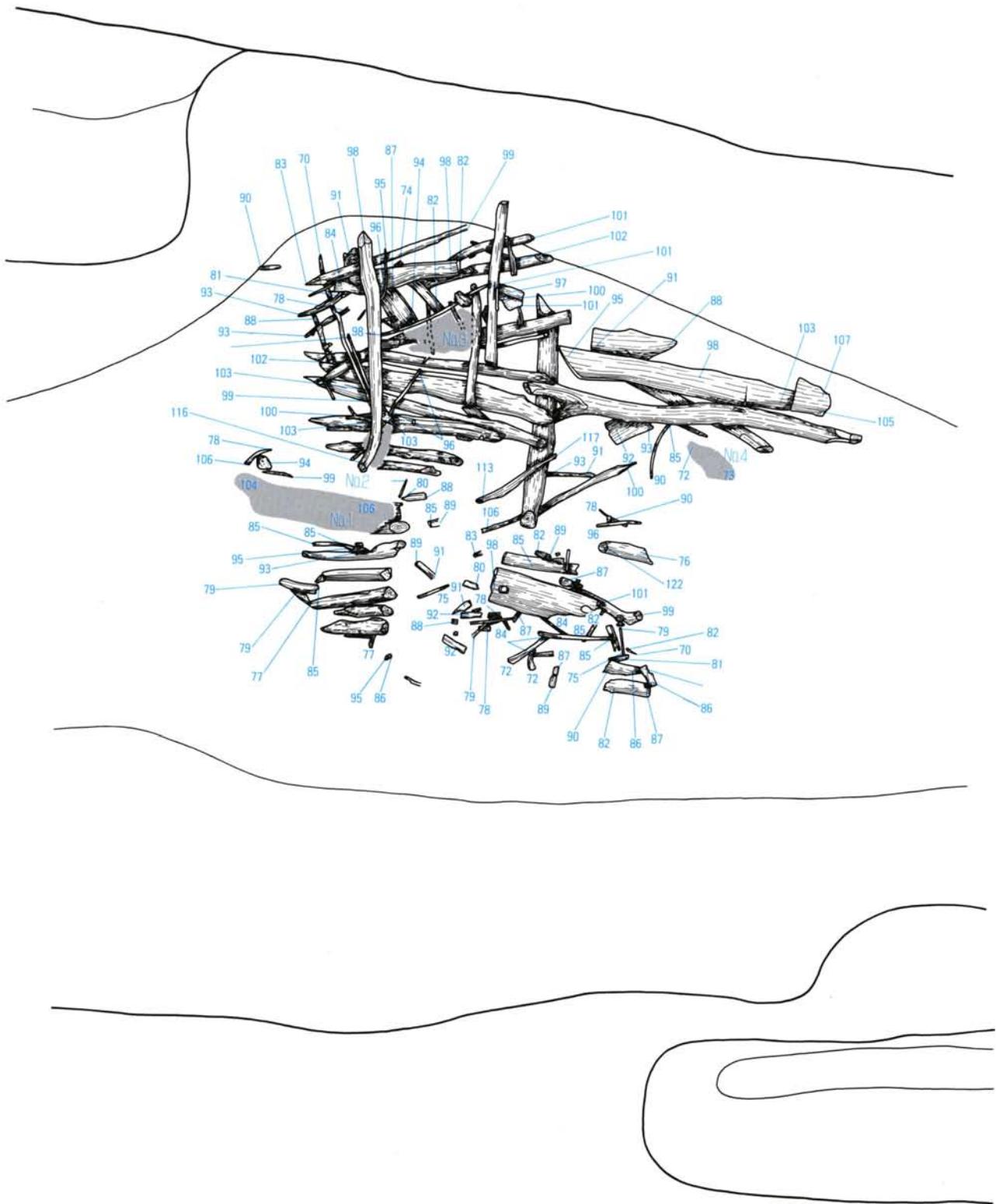
第62図 61E区 ヤナ周辺(1:200)

う。

bは上面がほぼ平坦になっており、これも本来の状態ではない。上面からみると植物の茎が集まっているだけという感じであるが、これをウレタンで固めて取り上げたので下面を観察することができた。次のようになる\*\*。

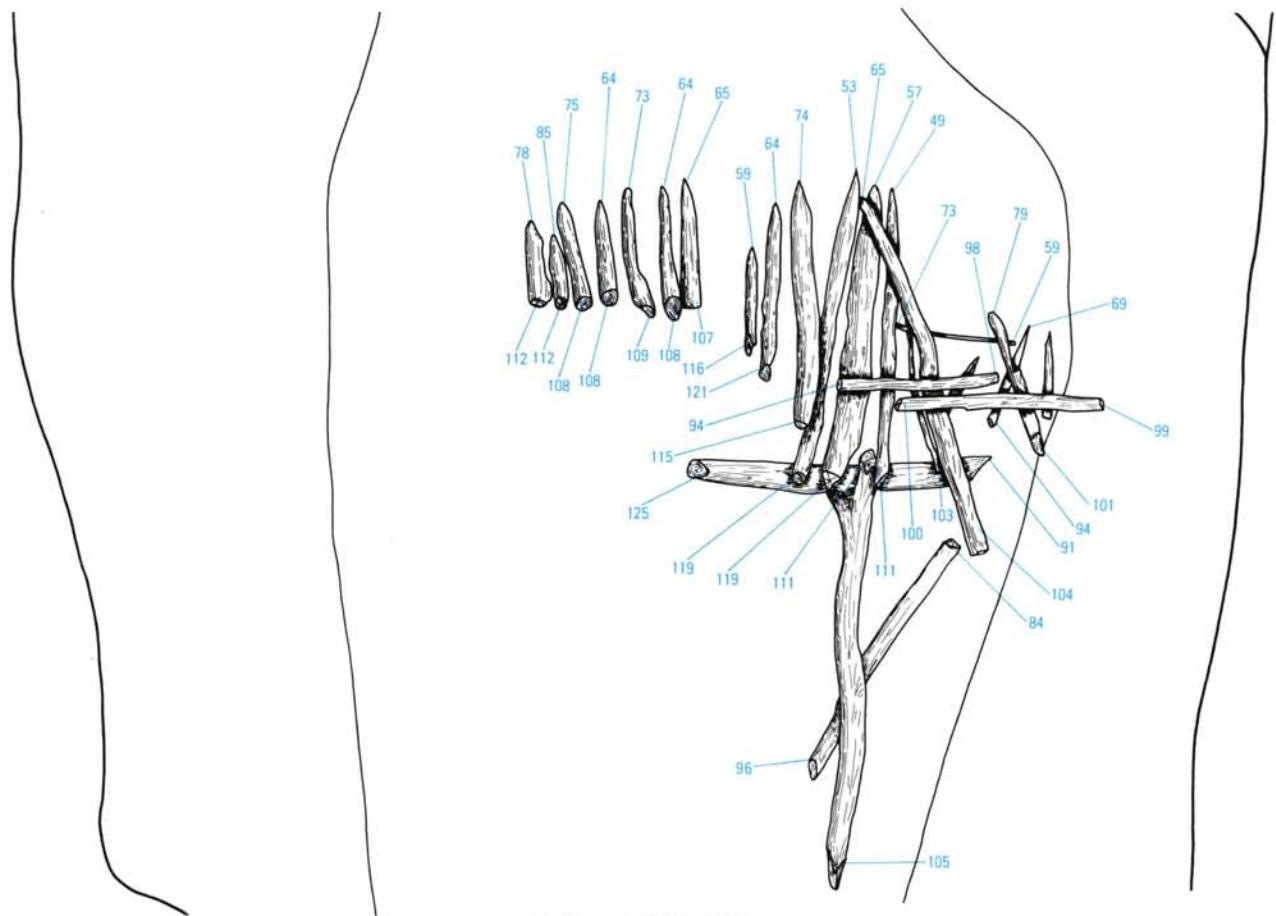
水流と直角に幅2mの間隔で2列の杭列が作られ、その両脇に転用材の横枠が取り付けられる。上に載せる簀は予め作ったものを木枠に固定した可能性がある。簀は溝の方向に対して直角、平行、直角の三重にヨシが重ねられて作られている。北側の下部は一重になっている。

三重の重い簀全体を支えているのが6組の割材の束である。これが簀の裏側に溝の方向とは直交して東西に6ヶ所渡されている。それぞれの束は欠損しているものもあるが、4本から6本の材をねじりあわせて束ねている。一組を構成する割材は幅が約1.5cmで、各所に竹、笹類独特の節が見られる。節は二環状になっている。この束は10~16cmの間隔で渡され、いくつかまん中で交差しているようであるが詳細はわからない。割材の束は、簀に直径2mmほどの蔓によって編み込まれて固定されている。

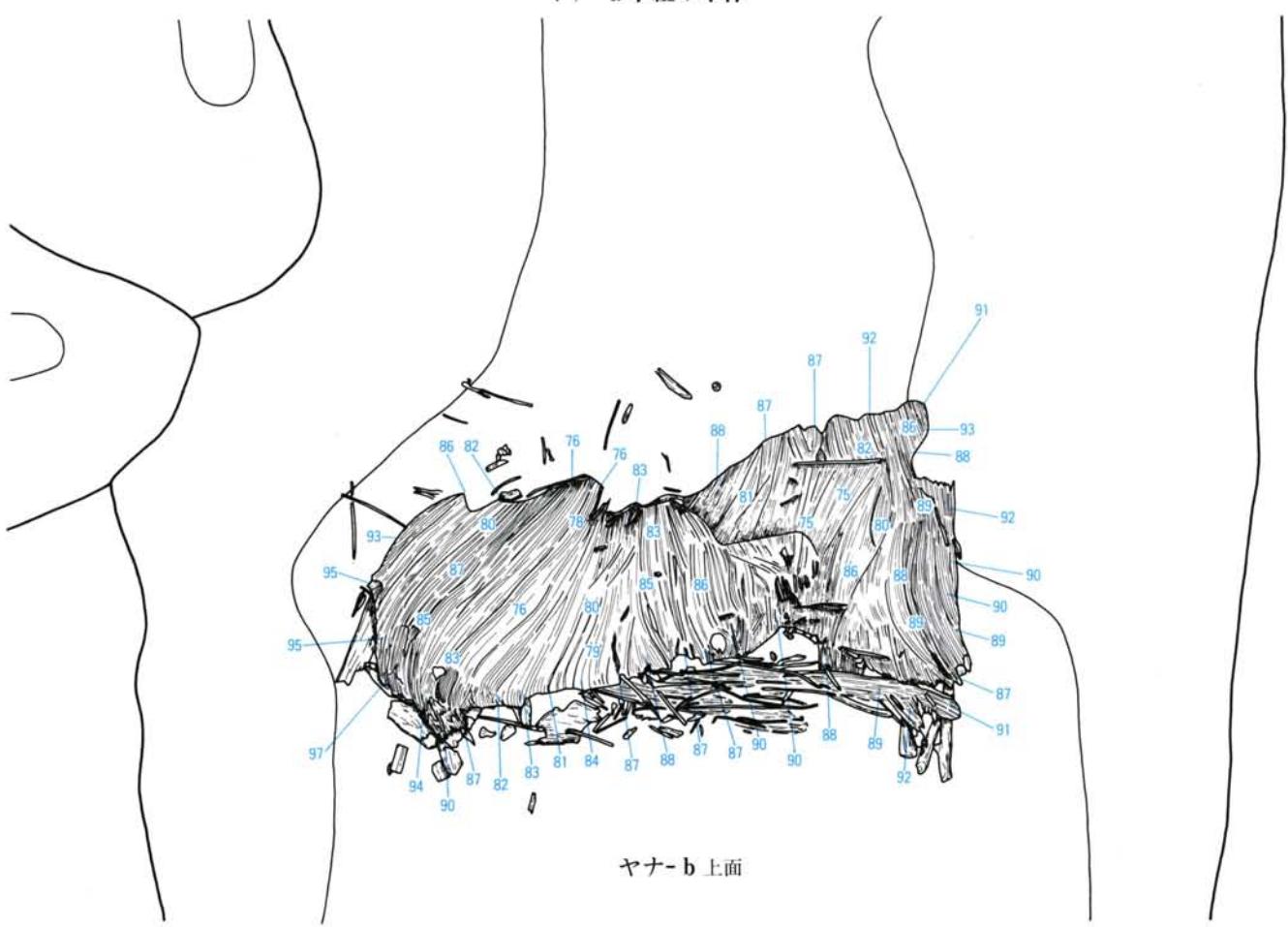


第63図 ヤナ-aプラン(1:40)  
\*数字は標高を示す。スクリーン・トーン部分は編物。

時期は、SD21の掘削時期がほぼV期後半であること、杭の上端はVI期堆積層まで達していないようなので、V期後半からVI期までの間におかれる。



### ヤナ- a 木組み本体



## ヤナ- b 上面

第64図 ヤナーブラン(1:40)



第65図 ヤナb下面(1:80)

### C. 特殊遺構

**台状遺構の基礎構造\*\*\*** SD04がSD05・06と合流する部分の南に、杭・横木・植物（編物を含む）を組み合わせた構築物SX01が存在する。

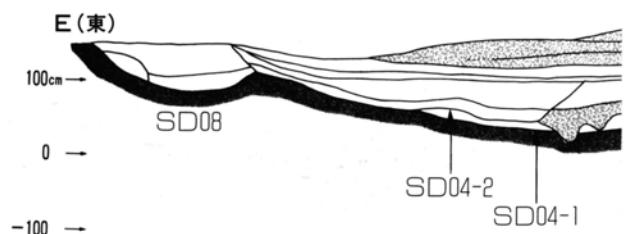
杭は径5～10cmの丸木で、径16～20cmのこれも丸木を横において杭とかませるようにして内側に向かって傾斜して打ち込まれている。杭の上端標高は70～100cmの範囲にある。横木は低いものは標高40～50cm、高いものは標高60cmあたりにある。

編物は2ヵ所で検出された。植物の茎を並べた「経」条「緯」条が1本潜り、1本超え、1本送りで編んでいる。編物以外の部分は植物茎を並べただけのようである。いずれも杭が打ち込まれており、杭よりさきに敷かれたものであることがわかる。この他に編まれていない植物の茎が面的にいくつかの箇所で検出された。標高も40～60cmの範囲でまちまちであり、おそらく杭・横木ともども複数の面（整地面）に分かれることを示すであろう。

SX01は下部に底面標高マイナス65cmを測るスリバチ状の落ち込みがある。打ち込まれた杭先はそこまで達していない。これは全体がベース土を主とした層に埋められているが、それにとどまらずさらに盛り上げられている。上部では編物を敷き、横木を置き、土をかぶせて杭を打ち込むことによって高まりが形成されている。こうした組み合せは築堤に見られる工法と共に通する。



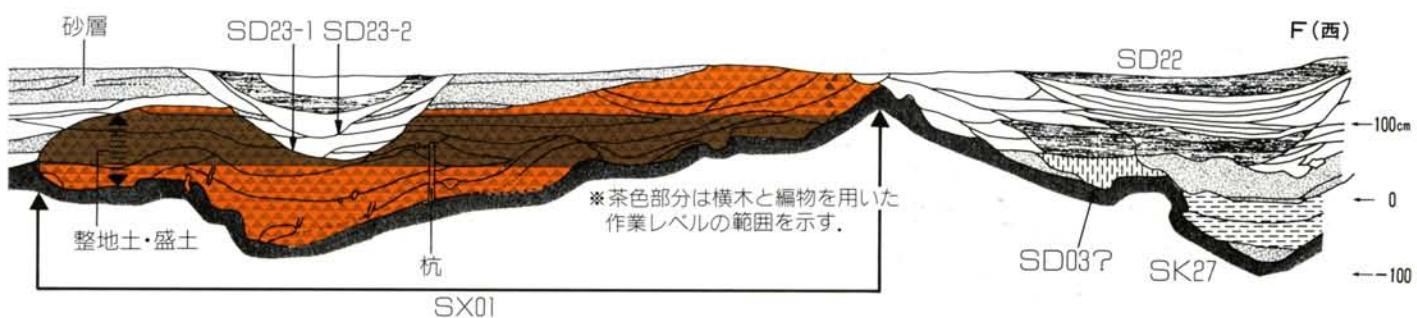
第66図 SX03(南から)





第67図 61E区 SX01(台状遺構基礎部分)プラン(1:80)

\*スクリーン・トーン部分は編物



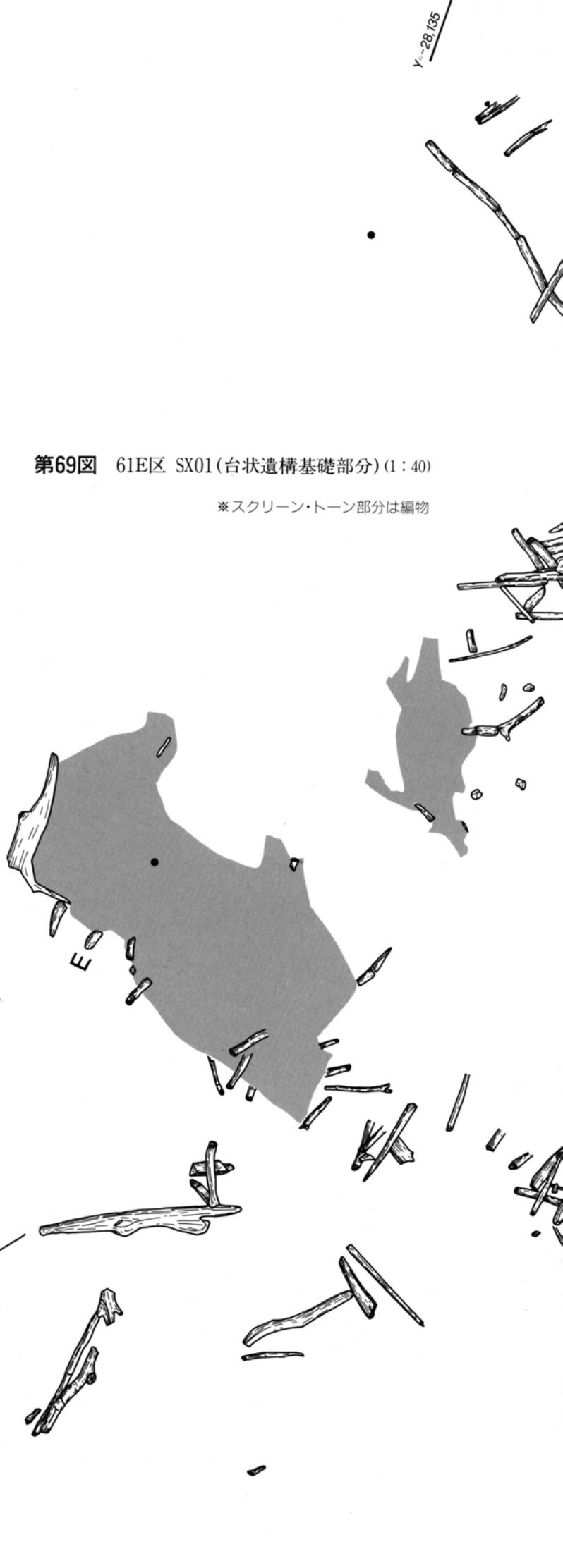
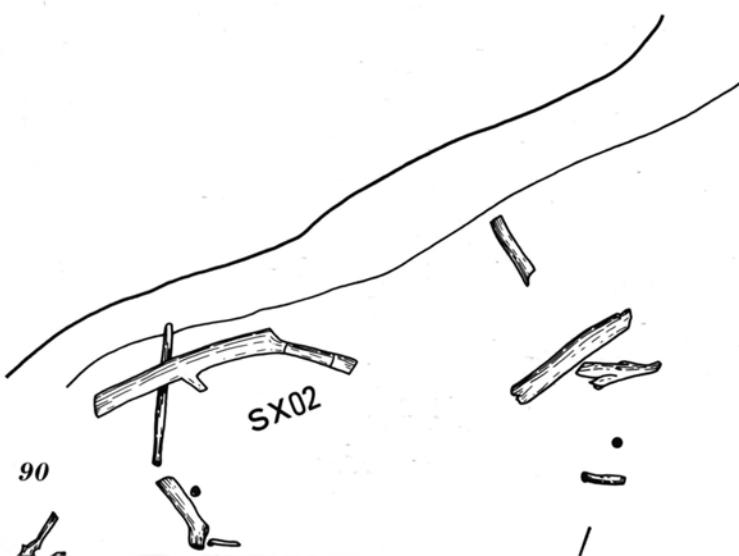
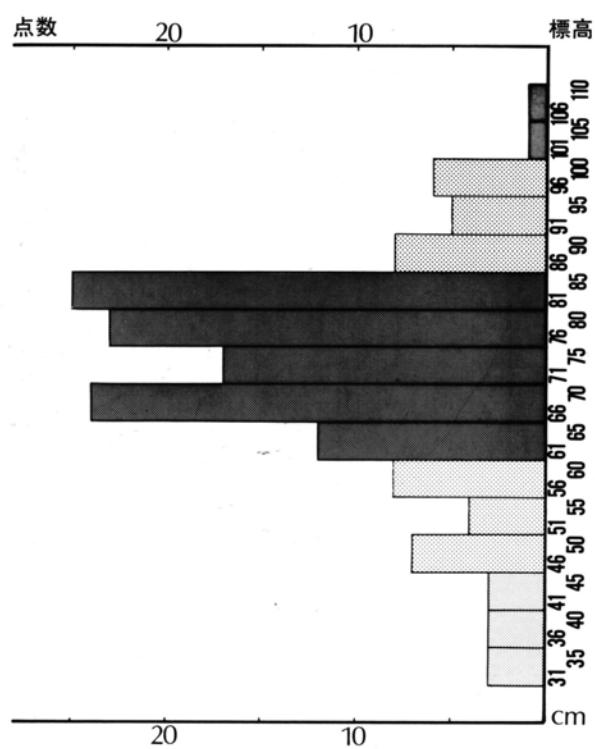
第68図 61E区 SX01(台状遺構基礎部分)土層セクション(1:100)

SD03?

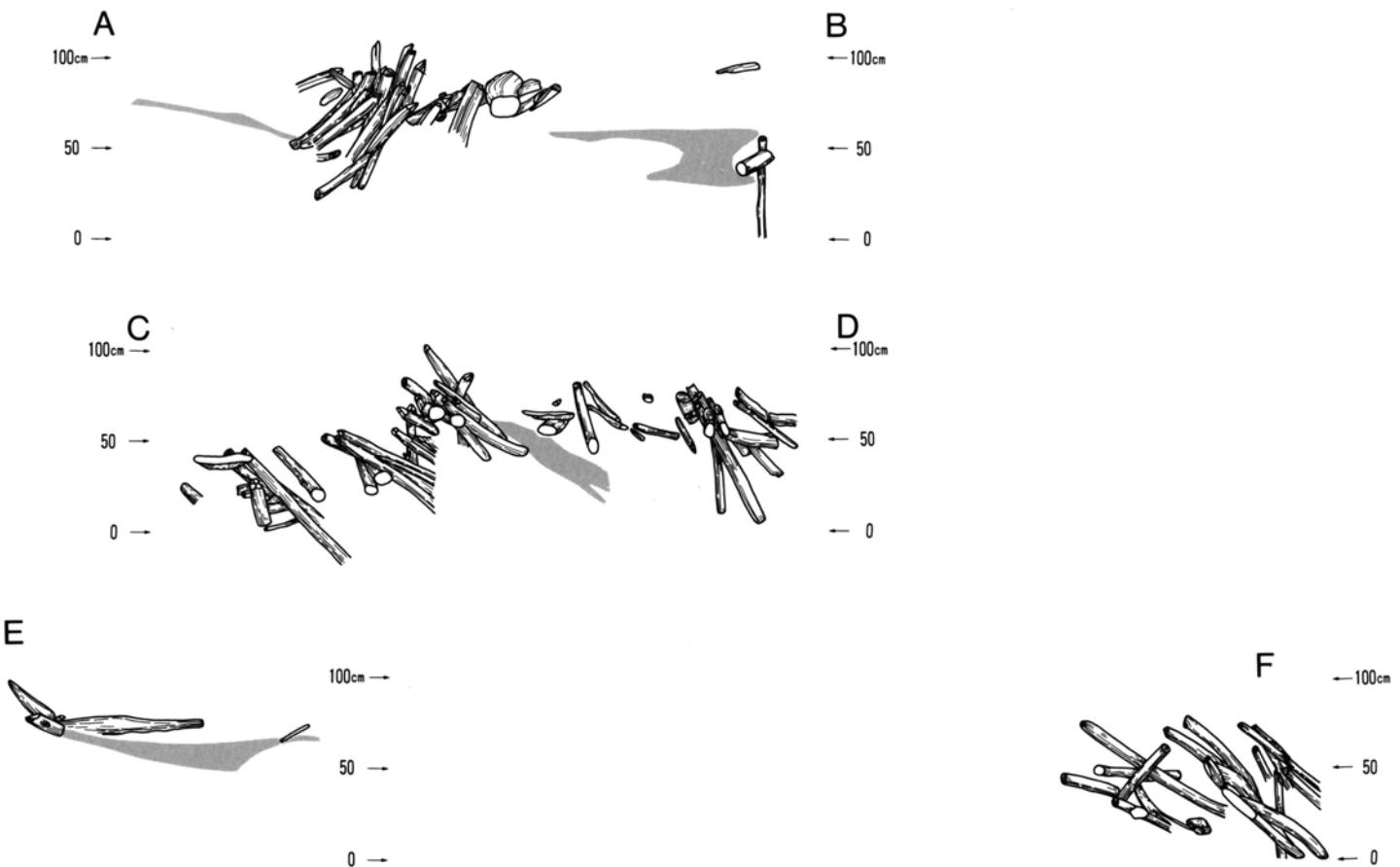
第69図 61E区 SX01(台状遺構基礎部分) (1:40)

※スクリーン・トーン部分は編物

第2表 杭頭部標高度数分布







第70図 61E区 SX01(台状遺構基礎部分)側面図(1:40)

SX01の時期は、SD04-2より先行すること、SD04・05・06相互の位置関係からIIIb期と推測する。

**その他** SX02は溝状をなすが、内部からは61A区で検出したSX02と同様の枝を張った木が出土した。

分類ではcに相当する。SX01との接続部は明確ではなかったが、木組の辺りで終息していることはまちがいない。同時期で一連の遺構である可能性が高い。

SX03は不定形の窪地をなしている。南部ではSD14を切る。底面標高は一定ではなく標高30~100cmまで起伏がある。埋土は大きく3層にわかれる。

上層はベース土の堆積でIV期~V期の土器が含まれており、おそらくSD23掘削に際しての排土が盛られているのであろう。

中層以下はIIIb期~IV期の土器が出土している。中層は植物遺体を含む黑暗褐砂質シルトである。

下層は下部にはベース土(青灰色シルト)を多く含む層が、上部は貝を含む黒褐色砂質シルトが堆積している。SD01南部のSD14に近接した位置で、下層に対応する層位から長軸約1.7m、短軸約1mの大きさの植物茎を束ねたものが標高50~70cmの高低差で出土した。また北部では流木や木製品が出土している。

#### D. 竪穴住居

竪穴住居は北部の溝が平行する区域では全く検出されなかった。この区域では旧表土がそのまま残存しており、全体的に遺構構築頻度の低いことが注目された。

SD18と重複するものはIIIb期以降である。SD18埋土を床面としている。SB12・13は軸線を共有してい

ないので建て替えであろう。

SB03はおそらくIII b期で、床面には炭化した植物（敷物か？）が遺存していた。SB07・08は重複関係にある。II期からIIIa期（初頭）であろう。

## E. 掘立柱建物

SD17・18・20に囲まれた区域には柱穴状の小穴が多数存在する。いちおう4棟復元したけれども、小穴が総て建物に関係するならさらに多く存在することになる。また、SA01周辺のように小穴の配列が円形をなすものもあり、掘立柱建物ではなく「囲い」が存在した可能性もある。

これら小穴群の時期はII期かIIIb期のどちらかである。

## F. 方形周溝墓

SZ137はV期。南周溝はSZ138を切る。SZ138はIV期。SZ139はV期。墳丘からは木棺の可能性は明かでないものの、主体部の可能性が高い土坑2基が検出されている。

\*図版21で見るようSD02～SD13の配置はランダムではない。SX01も含めて相互に規制しあっているような位置関係にある。しかし、溝については掘削時期、そして「…と…が同時並行である」というようなことを指摘することは難しいのだけれども、いくつかの可能性をここでえて指摘しておきたい。

① SD02・03はほぼ並行して掘削されており、同時期と考えてよい。おそらくIII b期である。SD03埋土はSD21の再掘削によって上部は遺存していないが、下部にはベース土の再堆積が観察されており、一部重複する同じくベース土の搅乱土を埋土とするSK27の存在も合わせて、ある時期に埋め立てられた可能性が指摘できる。SD02・03についてはこの区域でIII b期最初期の結界施設である可能性がある。

② SD04aとSD13はSX01を挟んで南北にある。SD4aの底面がSX01北でSD06と段差を形成することは、SX01に先行してSD04aとSD13が一連の溝として掘削されていたことを否定するので、これら三者は同時期であると考えられる。並行するSD02・03も同時期の溝と考えられる。SD05・06は溝底面標高がSD02～04に比べて浅いが、これにSD10・11が並行すること、これらと直角の位置にあるSD09とSD04aが形成するクランクは幅が同じであることから、SD02・03のSD05・06交差部分以南がある時期終息していた。つまりクランクが形成されていた時点に内部は平坦であった可能性が高いのである。そして、SD07はこのクランクを閉じる位置にある。

このクランクを前提すると、SX01は台状遺構の存在を示唆するので、クランクの内部空間がSX01によって分割されることになる。つまり、このクランクは〈囲郭集落〉内郭と外部とをつなぐ外郭に設けられた「回廊」ということになり、SX01はこの「回廊」の開閉に関わる「ゲート」のようなものであった可能性が考えられるのである。

③ SX02はSD13と切り合があり同時期ではない。SD04cはSD09・11と切り合があり、これも同時期ではない。そしてSD04cは2条が重複しているとはいえ、SD04-1のSD11以北での存在は不明瞭である。問題はSD4bが最初から掘削されていたかどうかである。SD08付近と以北では折れて方向が異なるので、もともとこの部分は切れて開口しており、それがある時期に接続された可能性がある。すなわち、まず継続するSX01に接続していたSD13の後続としてSX02がある。そして、SD04b南半部がSD04-1として存在したとすればSX01の外部への前面を画すとともに、北東はSD04aとの間が切れて開口部をなし、また南東のSX03とSD04cの間も開口部として存在した可能性がある。この状況では、この部分でSD03が南北に貫通していたとしても特に問題はない。開口部が他の区域にずれて設けられればよい。

\*\*「ヤナ」の記載に関しては、特に田中禎子氏の観察結果を引用した。

\*\*\*本遺構については、調査当時全くその性格を把握するには至らなかった。岡山県津寺遺跡の築堤工法との対比で、これが土木工法に関わるものであることは最近了解できるにいたったが、なおその構築物との性格は十分検討できていない。

ところで、SX01は密集した杭群を伴っており、この点に関わって61A区、60B区などで検出したSX1との位置関係の類似性をどのように判断するのかという問題が当然生じる。けれども、SX1はすべて南側に傾いて打ち込まれており、それをこの区域まで延長するなら東向きに打ち込まれていなければならないことになるが、上述のSX01では横木を絡めながら西側に傾いて打ち込まれており、連続性は窺えない。

## 13. 61H区 図版49~58

旧調査区では61H・61I(谷A)・61J・61K・61L・61Xの各区を包括する。ただし、説明の都合上SDX・XII以北を北区、以南を南区とし、さらに南区は1と2に区分する。

### 上面遺構群

#### A. 溝・突出部・包含層

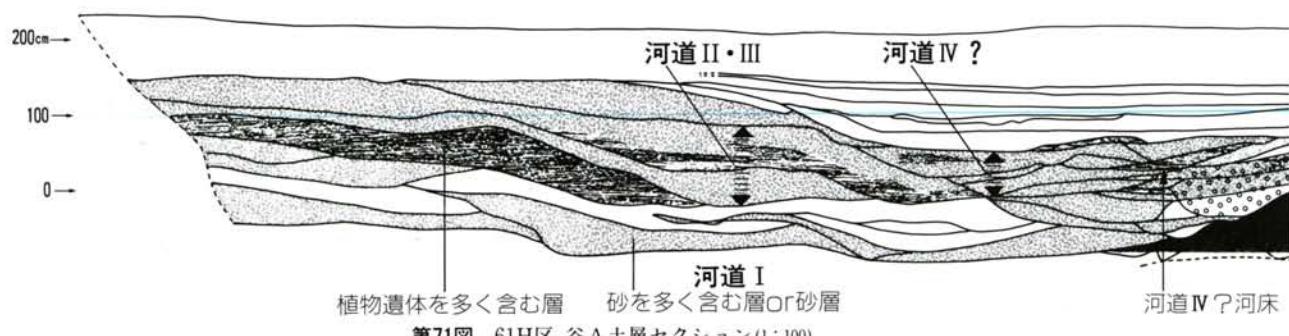
**北地区** 谷A南岸の状況は、SDV・VI以北は溝に隣接する狭い平坦部を除いて基本的に斜面であり、そこにSK13・SX01・SX02のような落ち込みが存在する。このうち、SX01は2ヵ所の湾入部(SX01a、SX01b)があり、SX01b南では比高1m以上の急傾斜の崖面を形成している。SDV・VI外縁の平坦面からの比高約160cmである。

SK13はSDV・VI東端から北東方向に約1.3m離れて位置している土坑である。そしてこれに重複してSX01が存在する。

SX02は略方形の落ち込みである。下部のベース面では一部に掘削による面が形成されており、完全な自然地形ではなく人工的に整えられているようである。そしてここに堆積した層位の状況が上層にまで影響を及ぼして窪地状をなしたとも考えられるが、土層セクションによれば上層堆積層と下部堆積層界面も不整合なのでさらにまた人為的に掘削された可能性がある。最初の掘削はIII期以前、上部はIV期かV期でも早い時期であろう。

SDVはほぼ谷A南岸(南高地北縁)を円弧をして走る。検出時の規模は幅約2m、深さ約1.5mでたいした大きさではない。注目されるのはSX01bの南に位置するあたりで、推定される溝の円弧から約4mほど北に突出した部分SX03が存在する。しかし、突出部からは特に注目すべき遺構の検出はなかった。

この突出部の上面は検出時の標高最高点は約250cmであった。ところが、突出部を含めてそれ以外の溝両(片)側には、ベース面まで達している遺構であれば当然認められるはず(方形周溝墓では周溝はほとんどがベース面まで達しており、普通それに対応すると考えられるベース土の盛土が観察される。また県教育委員会調査や本センター63D区では環濠にそってベース土の積み上げが明瞭に確認されている)のベース土を含む盛土は検出されていない。外縁の平坦面が幅狭いことから排土のかなりの部分は内側に盛られたと推測するが検出されていない。したがって、上部はかなり削られていると考えたほうがよい。おそらくこうした点



を原因として溝の規模も小さかったのであろう。だから残念ではあるが構築物の未検出という状況も仕方ないことかもしれない。

S D VII以南では上面遺構は古墳時代のものが主であり、V期・VI期の遺構は一部土坑が検出できた以外、存在するはずの住居はベース面での検出となった。

この地区の包含層は遺構の深度差を無視すれば概略50~60cmの厚さがある。沖積作用で堆積した部分は谷Aに面する区域以外では存在せず、すべてベースを掘り込んだ遺構の累積、すなわち弥生時代の地層攪乱であり、時期ごとの堆積層が成層するわけではない。したがって、土層セクションでは実線で分層している部分についても、実際はそうしたラインが入るのは稀で、ましてや地表面の検出など不可能である。

ところで、V期以降の遺物を多く含む層位は平均すればS D VIIの周辺を除いて以南の上部10cm程度である。最上部では古墳時代土器が散見される部分もあり、古墳時代遺構分布の散漫な点からみて、地表に近い部分も存在することが窺われた。後述する S D X・XI上面は検出時に浅い落ち込みのつながりとなっており、一部後世の土圧による沈下を除いて自然の窪地と化していたようである。包含層掘り下げに際してV期以降の土器が集中する部分の検出に努めた結果、いくつかのブロックが標高210~230cmの範囲で検出された。問題はこの集中地点の性格であるが、住居廃絶後の土器廃棄と認定した部分が多い。特に古墳時代では多くが竪穴住居となった。

いずれにしても、V期・VI期の遺構は北地区では希薄であるという印象は免れない。

## B. 住居・方形周溝墓

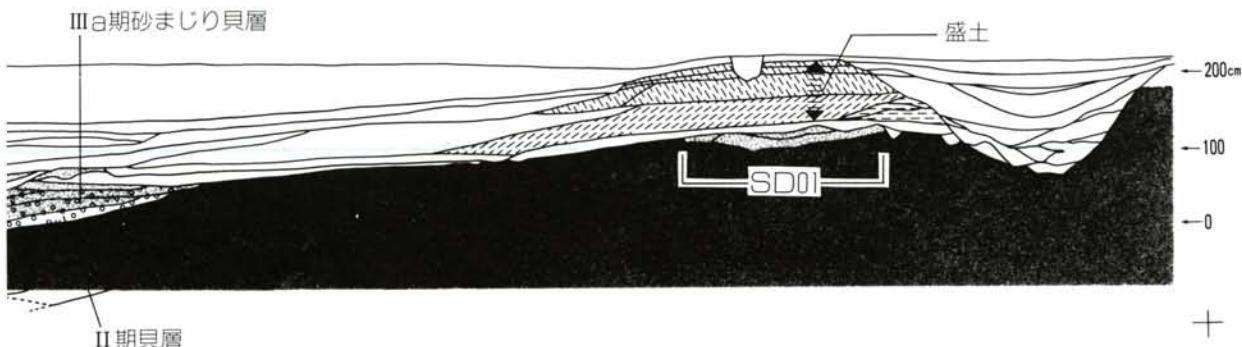
**南地区** 北地区よりもV期以降の住居を多く検出した。多いと言っても10棟ほどに過ぎないが、土層セクションで観察したものを含めれば明らかに北地区よりは密度が高い。とくに、ベース面に達しない例の多いことが想定されることは、以前の竪穴住居より床面標高が高くなっていることを考慮すべきことを強調するものである。

他に方形周溝墓2基を検出した。S Z 155はV期で、一部のみ検出した。S Z 156はVI期で、東辺中央に陸橋部がある。周溝から多量の土器が出土した。

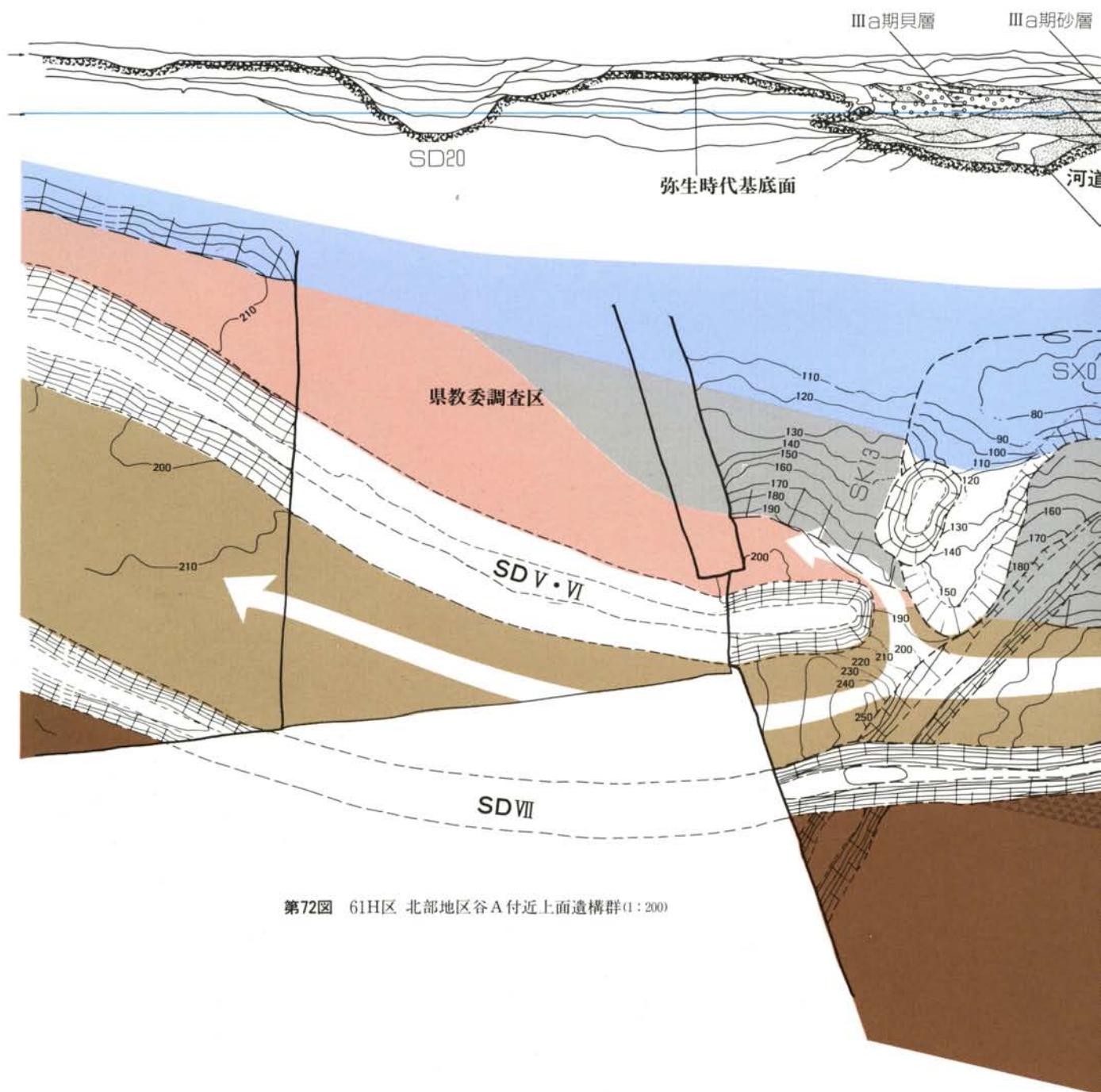
どちらも、主体部は不明である。

## 下面遺構群

谷Aに面する斜面は、南北とも標高50~70cmで段差が形成されている。侵食時期は堆積順序からいってIV期以前であろう。60A区以西の谷A斜面で検出されたIII a期砂層がこの地区では明確に検出され



●谷A 南北横断土層セクション(1:100)



第72図 61H区 北部地区谷A付近上面遺構群(1:200)

ていないいけれども、それは標高120cm辺りまで存在するからそれより下部にある部分の侵食は当然有り得るであろう\*。

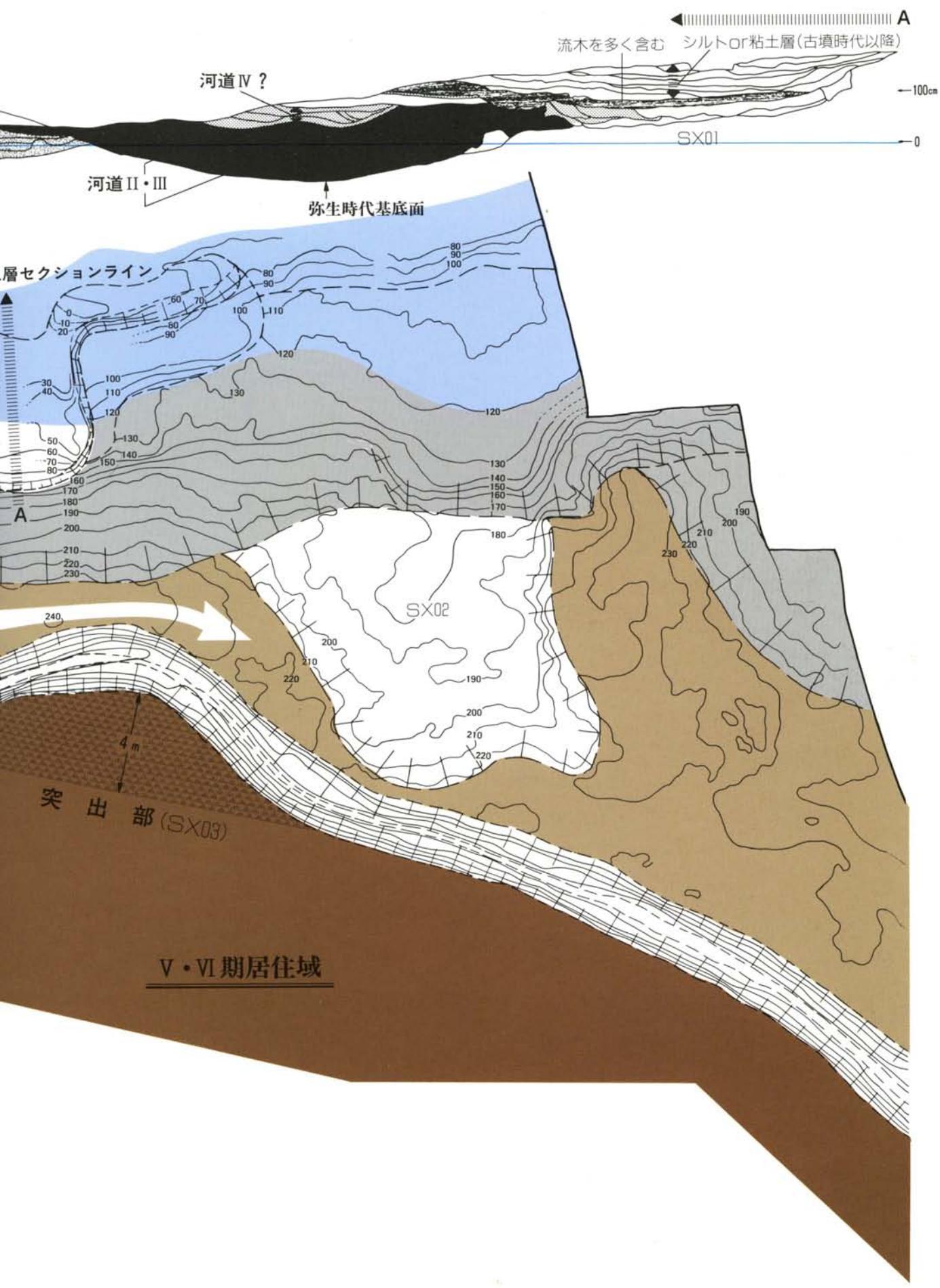
### A. 溝

次に北地区と南地区を分ける S DX・XIについて説明する。

S DXは2時期に分かれる。どちらもS DXIに切られているために規模ははっきりしない。

S DX-1はII期で、埋土に貝層の含まれる量は少ない。水流もそれほど顕著ではない。

S DX-2は埋土下部に発達した砂層と砂質シルトのラミナがあり、調査区東半部ではその上に貝



層が堆積している。注目されるのは、埋土の砂層上面標高が一部の区域で165cmまで達していることがある。そして、S D X - 2 には砂層が貝層を挟んで2層に分かれるところもあるので、溝がそれほど埋没していない段階での水流と埋没が進行した段階での水流という、それほど時間差をおかない二つの水流が考えられる。この点で、S D X - 2 南岸の侵食は後者によるものとなる\*\*。

この侵食面は南岸で顕著であるのに対し、北岸にはほとんど影響を与えていない。地表面の流水による侵食も南岸では認められるもの北岸ははっきりしない。このことは、S D X - 2 北岸に接して盛土が存在したことを示している可能性が高い。

S D XIは幅3.5~4m、深さ約160cmを測る。掘削時期はIV期で、調査区東半部では埋土には多量の貝が含まれている。埋土下部には若干の水流が存在したことを示す砂層堆積がある。底面標高は調査区東端で80cm、西端で75cm、ほぼ中央で90cmと中央から東西に傾斜している。したがって水流は一方指向というわけにはいかない。実際調査区東端では砂層の堆積があり、これは谷Bへ流入するに当たり谷Bの水位の影響で急速に堆積したものであろう。

## B. 井戸

**北地区** 谷A南岸（南高地北斜面）では井戸枠を有するIV期の井戸が4基検出された。

SE01は掘形の径約3cm。井戸枠は臼再利用で、底面標高約70cmを測る。

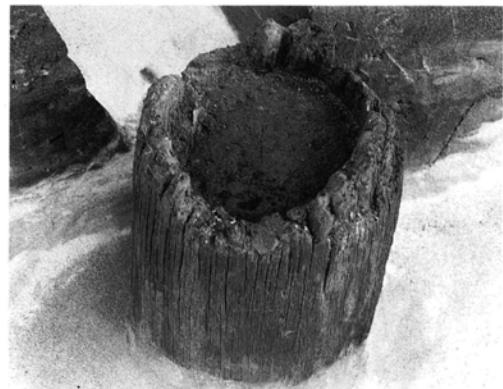
SE02は臼再利用で外観は3段、内部は4段？で高さ75cmを測る。掘形は長径1.9m、短径1.3m、底面標高100cm。

SE03は径3.2m、深さ約1.1mの円形掘形の北東寄りに径42cm、高さ約30cmの丸太くり抜きの井戸枠が埋設されていた。底面標高は約39cmである。

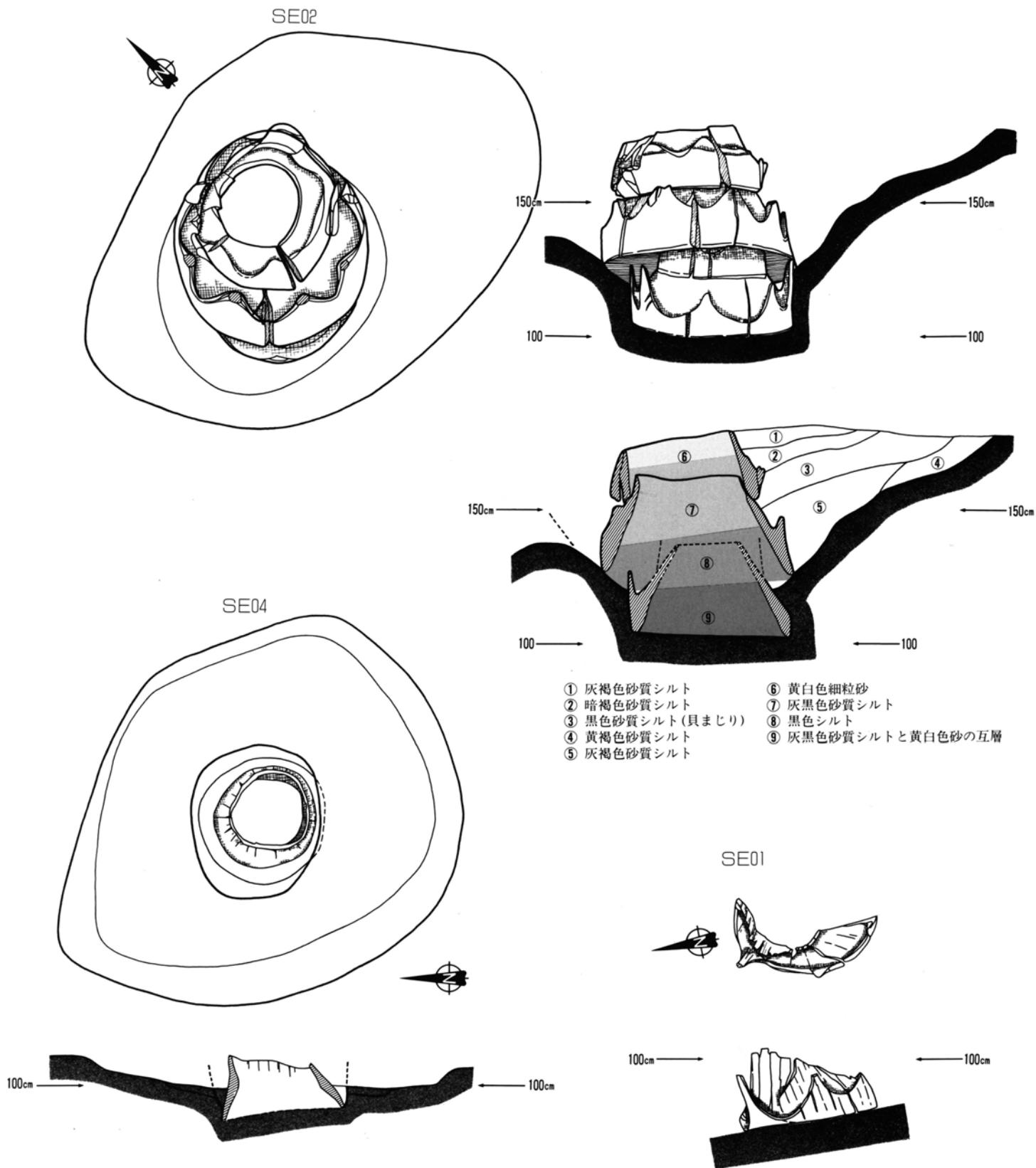
SE04は長径3.2m、短径2.6m、井戸枠はおそらく臼再利用であろう。底面標高90cm。

これら井戸の底面はいずれも砂層に達している。掘形は河道によって削平され本来の井戸の状態はわからない。斜面地に設けられていることから河道が仮に活動していたとしても、その埋設時には河道の活動も低調であったことはまちがいないであろう。その時期がIV期であることは他の調査区で得られた成果と大きく隔たるものではない。

井戸の出現は朝日遺跡においては一つの画期をなす事実である。それ以前には縦に深く掘り込まれた円筒状の土坑も検出されていないから、飲料水獲得の新しい〈様式〉として導入されたものであろう。



第73図 SE03



第74図 61H区(北地区)井戸(1:20)

### C. 住居

北地区 相互の重複が激しく、全形の把握できた例は極めて限られる。

北地区西端で錯綜する周溝群が検出されている。同一場所に継続的に拡張と建て替えを繰り返した結果であるが、時期はⅣ期が主のようである。

北地区で全形の把握できた住居はSB38・45・49・50の4棟だけである。SB38はⅣ期の住居で、拡張が行われている。側縁がやや膨らむ、この時期には普通に見られる形態である。SB43はSB42に切られてしまふため半分が不明である。Ⅳ期。同じくⅣ期のSB34も側縁は張り出している。

SB45はⅡ期からⅢa期初頭の円形プランを呈する住居である。中央にはSK197とその東西に小穴、床面には周溝は1条だが、SK197を中心とした6本柱2単位の同心円的な配置（それぞれの柱穴にとつては求心的な対になった配置）があり、拡張の行われたことが窺える。そのほかにも柱穴が存在することと出土土器がⅢa期まで含まれていることから、さらに重複していた可能性はある。

床面から炉は検出されなかった。SK197内部からも炭化物などの出土はなかった。

SB45から西に約8m離れて位置するSB49・50はどちらもⅡ期の住居で、前者は台形気味の方形プラン、後者は隅円方形プランを呈している。SB51はSB50に切られている。このSB45・SB50の間はベースである黄灰色シルトの上に褐色シルトが堆積し、旧表土が遺存していた。この点で注目されるのはSDXとの関係である。旧表土が遺存していたということは、遺構の配置からもわかるように地表の搅乱が少なかったということである。そして、この部分にⅢ期以降の遺構が希薄であるという以南の状況と比べての著しい相違は、SDXに沿って排土が盛り上げられたことを強く示唆するところである。

**南地区－1** 南地区でも同様に全形の把握できた住居は少ない。

SB56は円形プランで、拡張はない。中央のSK249は炉穴のようであるがはつきりしない。重複しているSB58はⅢb期である。SB65も円形プランだが東半部が不明である。Ⅱ期かⅢ期であろう。

SB60は周溝のみで台形気味の長方形プランを呈し、Ⅲ期であることはまちがいない。周溝が南で切れているのは、出入口の関係であろうか。

SB62は正方形に近い隅円方形プランで、Ⅴ期である。西隣のSB53はⅢb期で、東辺側に拡張している。プランはやや台形気味の隅円方形プランである。

SB68・69・78は全形は不明だがⅤ期である。SB62も含めてこの区域はⅤ期が集中するようである。

SB75・76・86はⅢb期からⅣ期で、同じⅣ期は調査区東部のSB74、SB73はⅣ期からⅤ期の幅が増えられているが、側縁が張り出していることからみてⅣ期でよいだろう。

重複するSA01の柱穴埋土からはⅣ期土器が出土している。Ⅳ期以降である。

SB82はⅢa期初頭でSB81埋土を床面としている。軸線の一致しているSB79もⅢ期である。それに対し軸線の異なるSB85はⅡ期である。検出面で掘形が深さ約90cm残存していた。これまでの検出例で最も深い。しかも、周辺にはベース土の盛土があり、周堤を考えればさらに深かったと推測する。その代わり柱穴は不明確である。

SB85の東側には旧表土が残存していた。上部には暗褐色砂質シルト（弥生時代包含層）がありおそらく削平されていると思うが、それでも標高230cmを測り高い。通常ベースと呼んでいる黄灰色シルト上面は標高210cm、「上部砂層」上面は標高194cmである。この区域は黄灰色シルト上面レベルがほかに比べて高い。SB85の掘形が深かったのは、遺構の重複のなかったことにもよるが、土層セクションによっても多くの深さ50cm未満であるから、構造上の特徴に関わるのかもしれない。

南地区－2 IV期の住居はSB99のみ。他はII期・III期である。隅円方形プランの場合は、平行する短辺の一方が短く台形気味である。

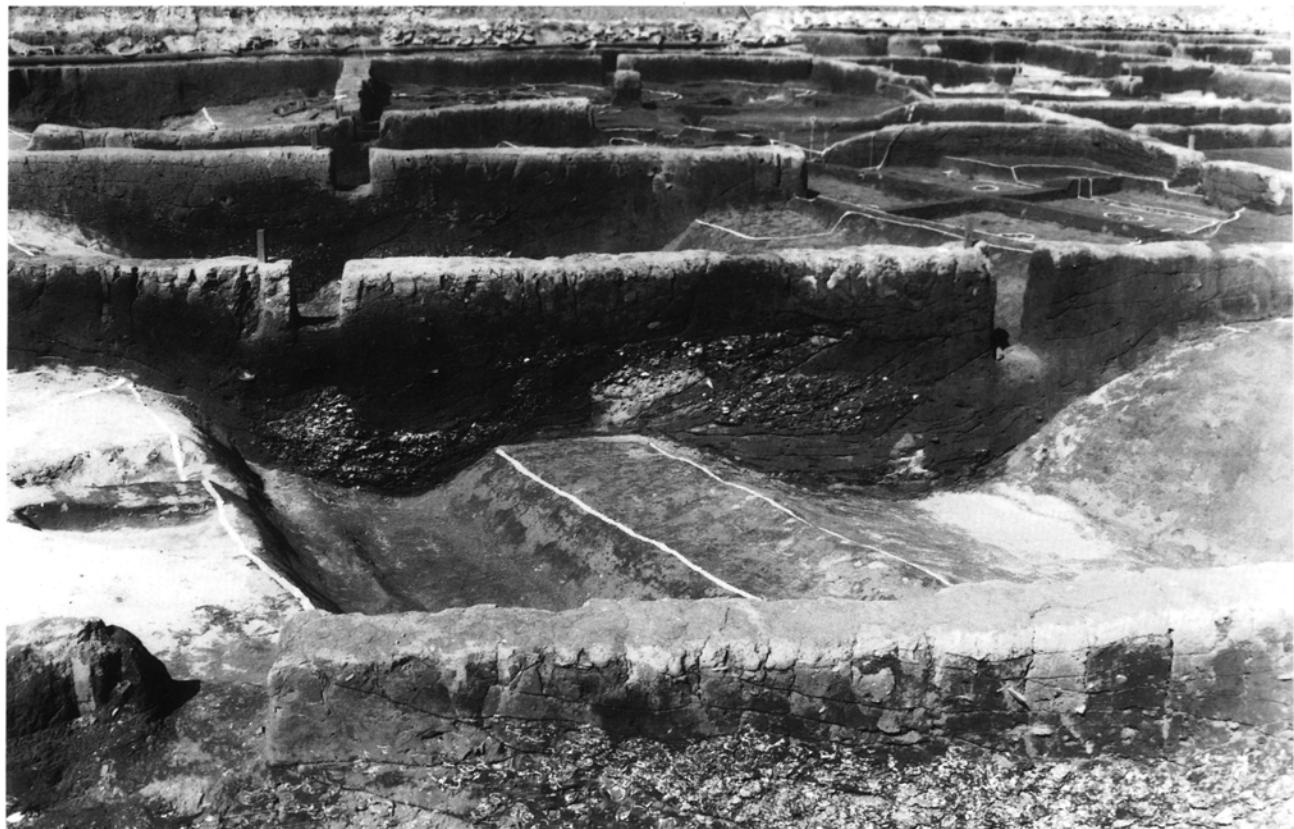
SB100は、東に拡張が認められるII期からIIIa期初頭にかけての竪穴住居である。周溝は南辺で北に折れ中央で途切れ、その南には浅い穴がある。入口に関わる施設と推測するが、朝日遺跡では初例である。SB99は下層と上層に分かれ（建て替え）、どちらも拡張がある。



第75図 61H区 北地区(東から)

\*結果的に遺存した砂層の存在から河道の存在を推測するしかないのだが、河道の水位は堆積層よりもかなり高いはずである。63D区では標高150cmまで侵食面が及んでいる。この点で、61E区微高地南端で上述の段差以上に侵食が及んでいないのは、河道に平行して掘削されている溝とその排土からなる盛土（土堤？）とにそれを防止する役割があったからかもしれない。

\*\*このような侵食は、侵食を生じるだけの水流が谷内部での水位の上昇にともなって発生したことを示唆する。降雨量は短期的には季節的な変化、長期的には気候の変動することにならうが、V期以降の明確な河道形成より遡る谷A内での水流の存在は、土層セクションからII期に小規模ながら存在したことが観察される中で、IIIa期に形成された侵食面や砂層はそれに比べて大きな水流の存在を示唆しており注目される。おそらくIIIa期にはかなり水位が上昇したのであり、それは朝日遺跡の居住域全域を冠水させるほどのものではなかったにしても、尾張平野低地部にとってかなり重大なものであったことは阿弥陀寺遺跡における洪水痕跡から窺うことができる。SDXに関係する侵食は谷A内の水位上昇に対応したものであると考える。



▲SD X・XI 白いのは貝層(東から)

▼南地区2(南から)



第76図 61H区(南から)

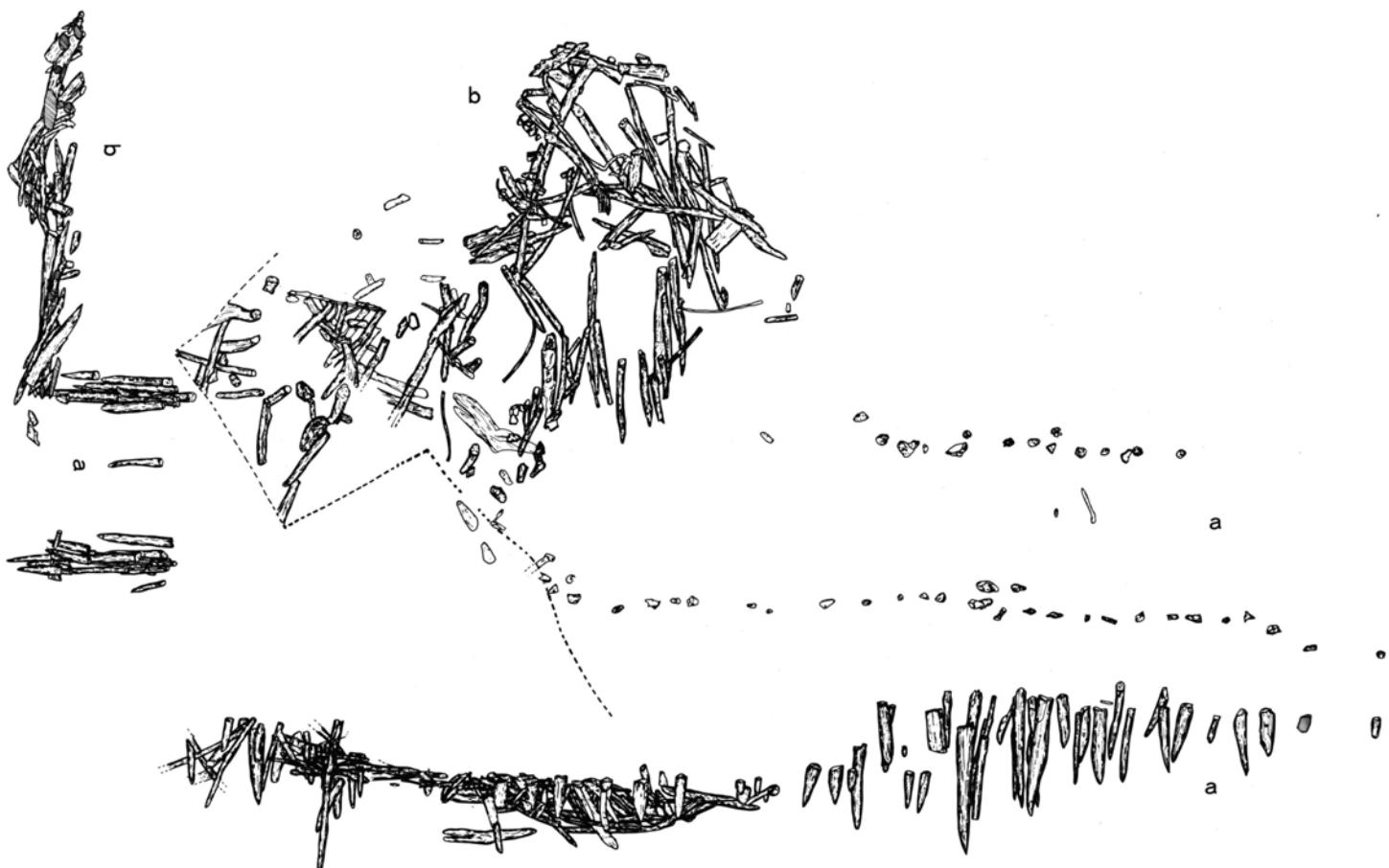
## 14. 61M区 図版63・64

### A. 谷Bと特殊遺構

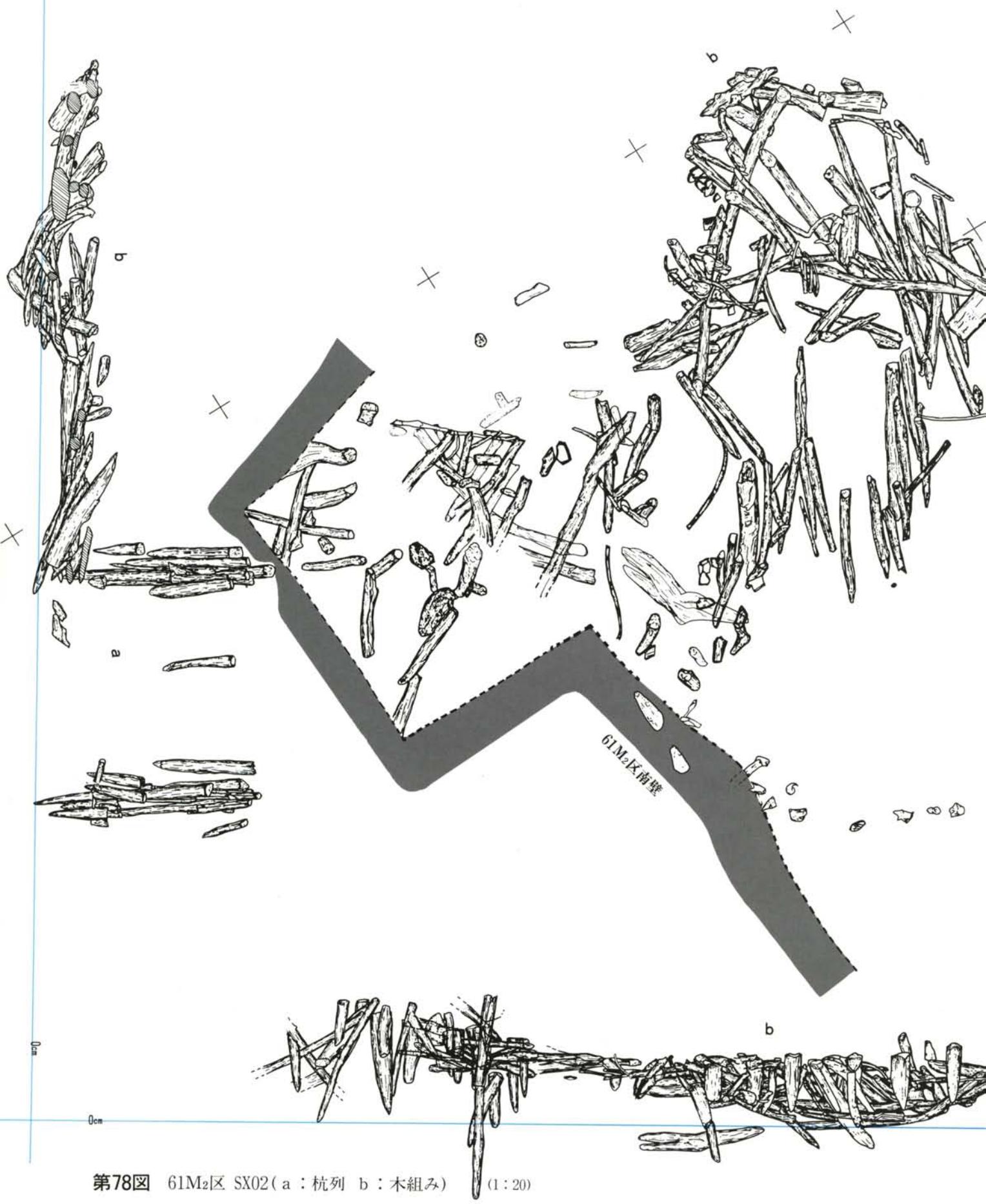
SX02は61M<sub>2</sub>区のちょうど谷BとSDX IIIの合流する位置にあって、谷Bを横断するように、SDX IIIに沿うようにある。aは平行する杭列で列間は約1mある。杭は頭部レベルがほぼ水平であるのに対し杭先のレベルが一定でないことからみて、上部は削平されていると考えられる。そして杭先の傾斜が谷B斜面の傾斜に一致することは、この杭列が斜面に合わせて打ち込まれたものであることを示している。ここで仮に杭の長さを1mとすれば、北端の杭頭標高は約200cmとなる。

bは、横木と杭が組み合わさった構造物が北西側に倒れている状況で検出された部分を典型として、雑然とした部分を含めてaに対して直交して突出部的に存在する。上端の標高は約30cm、下端はマイナス5cm程度であるから、推定される谷Bの基底マイナス15cmより僅かに高いだけである。ほとんど底面に近いことが窺え、おそらく埋没がそれほど進行していない段階で倒壊したのであろう。

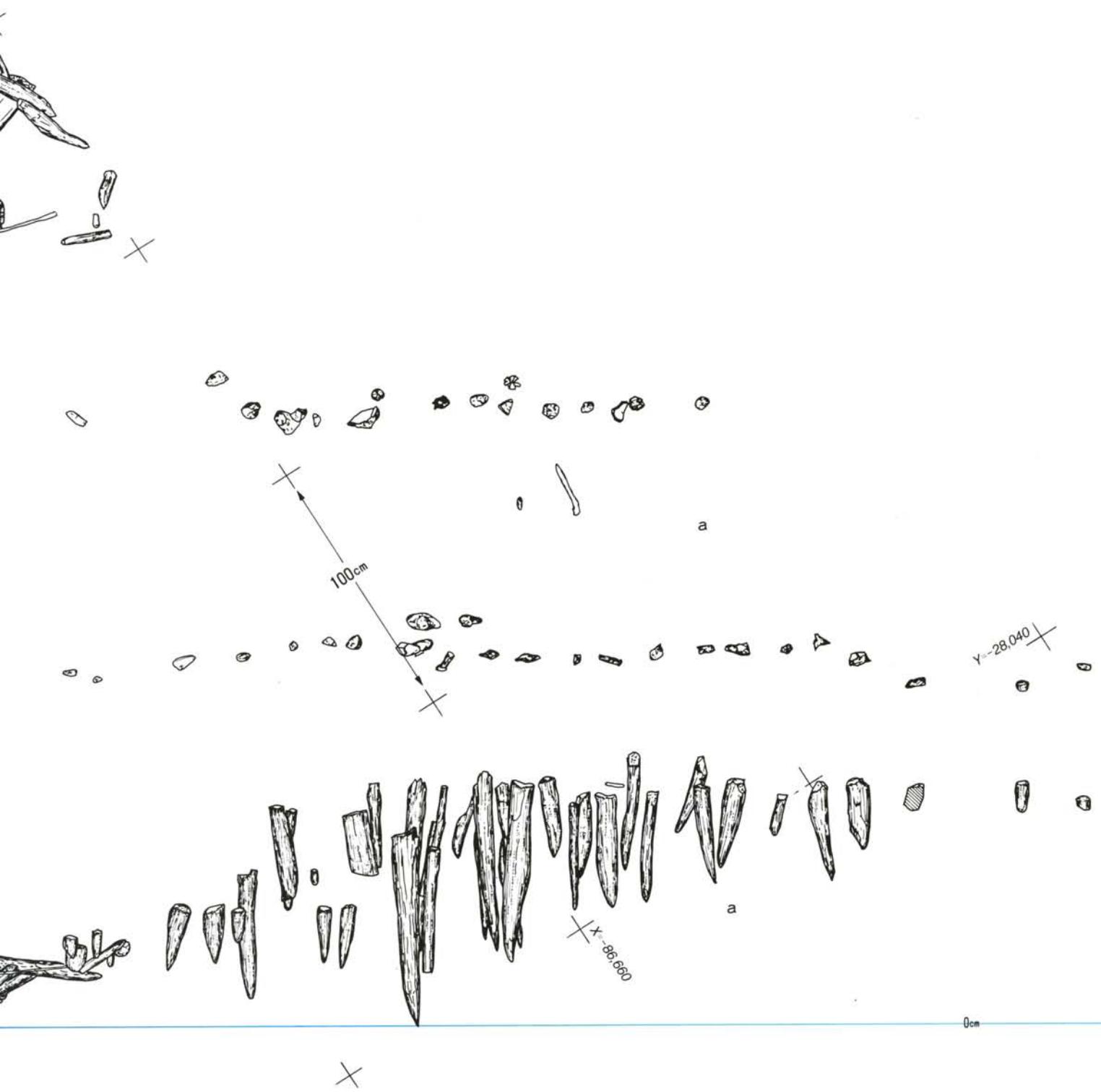
SX02 a・bは時期の特定が難しいが、谷Bの埋積過程を重視し杭上部の削平が河道によるものとするなら弥生時代後期後半から5世紀代までの間に構築されたことになる\*。東微高地はVI期以降居住域



第77図 61M<sub>2</sub>区 SX02(a:杭列 b:木組み)(1:40)



第78図 61M2区 SX02 (a : 杭列 b : 木組み) (1:20)



になっており、こうしたことにかかわるものである可能性はある。つまり、谷Bを横断する通路ということである。ただし、その場合このような構築物が谷Bを横断するとなれば谷Bの水流を止めることになる。あるいはもともと堰である可能性もあるけれども、垂直に打ち込まれた杭列が平行するという例は寡聞にして知らない。矢板で構築される畦畔との類似性もある。いずれにしても全体が調査されたわけではないので、その性格ははっきりしない。

## B. 方形周溝墓

61M<sub>2</sub>区 S DXIIIの南岸でIIIa期、61M<sub>1</sub>・M<sub>2</sub>区 S DXIII北岸、谷Aとの間の狭い微高地上でIIIb期とIV期方形周溝墓の重複例を検出した。

谷A・S DXIII間で検出された2列の方形周溝墓群は谷A側の一列について土層セクションおよび供獻土器の出土によって再利用例であることが確認された。ただし、同じ並びのS Z 176については確認できていない。可能性は全くないわけではない。

S DXIII側の列はS Z 179・178で切り合いが確認できているので、東から西という築造方向が推定できる。

両列間にある土坑SK01からSK04はIV期に属し重複例と同時期である。SK05からはV期土器が出土しているが、混入であろう。これら土坑については墓である可能性があるものの、断面などからは木棺墓である可能性は低い。土塙墓であろうか。

方形周溝墓や土坑は列を構成し、そのため中央に1条の空間が形成されている。あるいはS DXIIIがすでにII期に掘削されており、それに規制されて空間が先にあり方形周溝墓や土坑が列をなすことになった可能性も否定できない。

S Z 175主体部からは石鎚が14点出土し、位置の確認できたものは図示してある。チップなどは混入していないようであり、当初から墓壇内にあったものと考えられる。ただ、被葬者の状況がわからないのでそれらが射込まれたものであるかどうか直接判断できないが、幅90cmの散布範囲ではやや不確かである。

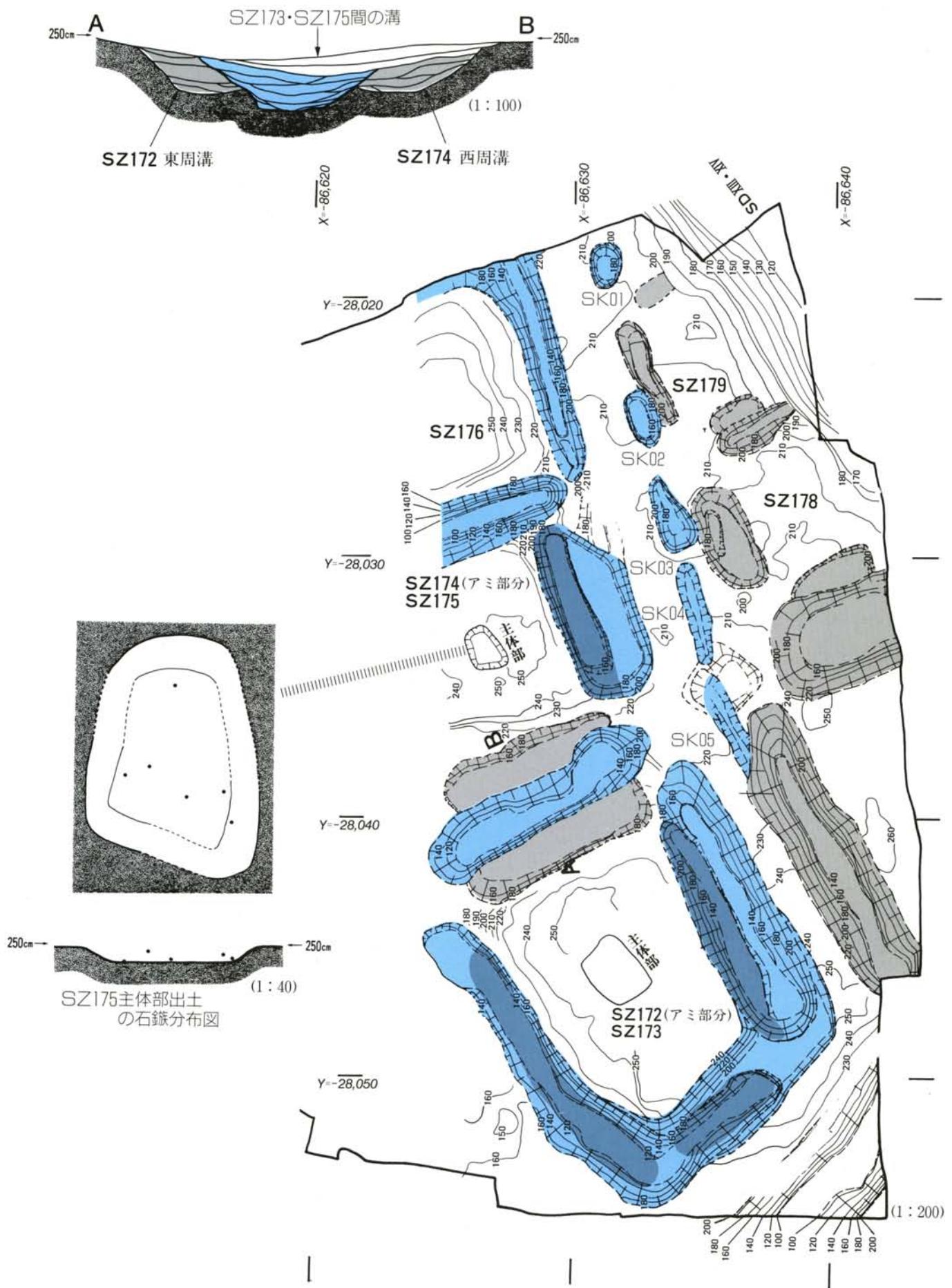
S Z 177は調査区の間壁によって二分されてしまっているが、A4形プランであろう。南東コーナーでは内部に円礫をもったIIIb期瓜郷式壺の体部が正立で出土した。土器棺であろう。

## C. 積穴住居

ベース面でII期の住居を検出した。プランは台形気味の隅円方形が主で、円形プランは検出されていない。ほとんどが周溝のみの検出にとどまり、柱穴は明確ではない。長軸4m内外の小規模な例が多いことに関わる構造的特徴もあるのであろうか。

## D. 溝

S DXIIIは『報告書』では「D河」とされており、61M<sub>2</sub>区でも下部に植物遺体を含む砂のラミナが発達し活発な水流のあったことが知れる。その活発な水流のためこの区域では下刻が進み、II期の溝は明確ではない。砂層の上部には古墳時代前期でも終わりの植物遺体を多く含む層位があり、この段



第79図 61M1区 方形周溝墓の重複

\*スクリーン：スミはIII期、青色はIV期。

階には滞流したことが窺える。そしてその上部はシルトから粘土層に移行する。後述するように谷Bも同様である。

SD01は調査区の端にかかったのみで全容は不明である。S Z 1 7 7 の西溝と接続する可能性もあるが不明である。

## E. 谷

61M区の谷Aでは弥生時代基底層（黒褐色シルト層）から縄文時代後期土器がいくつか出土している。

調査区北端で弥生時代後期と考えられる河道が検出された。



第80図 61M<sub>1</sub>区(西から)

\* 谷Bの形成が果たしてどこまで遡るかについて、現状で明快に答えるだけの材料はない。63B区での調査所見によれば、最下層堆積物（砂層）にはIV期土器が含まれており、IV期以降であることは確実である。しかし、谷Aの埋積過程を含めて考えるなら、森も述べているように谷A内（61H区川西：下流部）での水流の枯渇時期に谷B内へ流路変更していた可能性もあり、そうなるとV期以前にもII期とIIIb期からIV期にかけてある期間の2度谷Bが河道下することになる。あくまで推測にすぎないが、後者とすれば谷B最下部出土土器の時期にも近く、それによる倒壊であればそれ以前にはSX02は構築されていたことになる。

谷AはII期、IIIa期、IV期？以降に河道化する。この河道化と谷Bの非流路化とが対応するなら、それがSX02構築可能時期となる。もっともSX02が谷Bを完全に横断していればあるが。

SX02の性格には遮断と結合の2つの側面が考えられる。おそらくそうした回路の設定は複合した要因にもとづくものであろうから、やはり今ここで特定するのは困難であると言わざるを得ない。



第81図 61M<sub>2</sub>区 SD XIII・XIV 土層セクション

## 15. 61P区 図版66・69~72

### A. 方形周溝墓

IIIa期に属す9基の方形周溝墓が検出され、うち1基はIV期に溝の再掘削が行われていることを確認した。

SZ206は長軸22m、短軸16mの長方形プランのA4形である。溝埋土下部からはIIIa期の土器とIV期の土器が出土した。溝底面の二段掘りの状況や土層セクションからみて2時期の溝が重複していることを確認した。同様の事実は後述する61N区でも確認した。県教育委員会の調査ではIV期の重複関係は明確ではなく、ここに訂正する。

溝埋土は上述のように大きく2時期にわかれる。しかし、IV期掘削後の埋土はそれほど堆積せず、弥生時代末から古墳時代前半期の堆積層が厚く覆っている。つまり、200年以上経過しているにも関わらず埋まりきっていないと言うことになる。この点に関しては、東微高地がVI期以降居住域と化したことと少なからず関係すると思う。後述するように、各調査区で規模の大きい方形周溝墓の場合に特に顕著にこうした事例が観察されるのである。

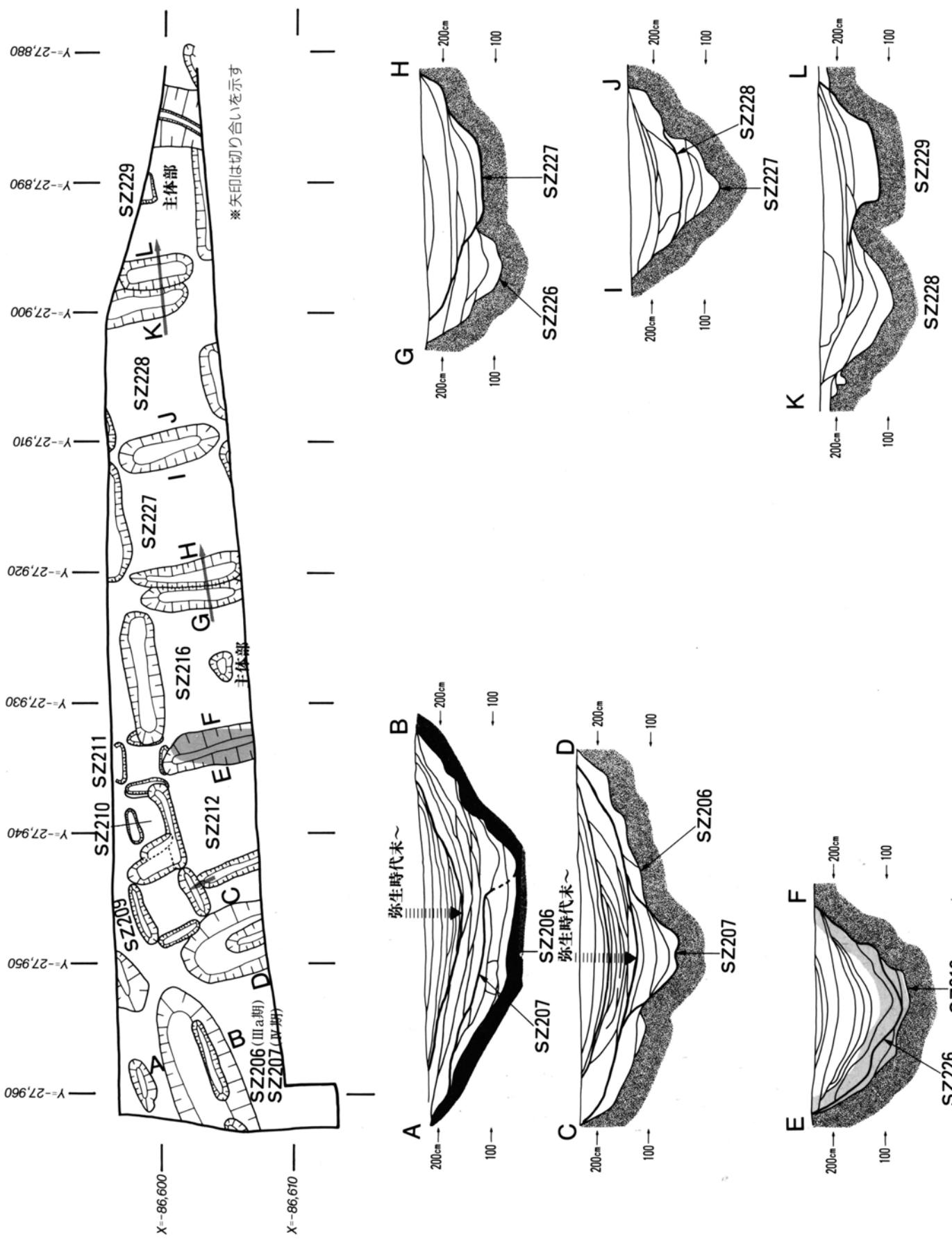
本調査区では2列の方形周溝墓群があり、主列はSZ206を起点として東に連続する。そして、SZ212東周溝とSZ226西周溝は軸線をややずらして重複し、SZ227東周溝とSZ228西周溝は完全に重複している。こういった溝の重複例は他ではあまり見られない。

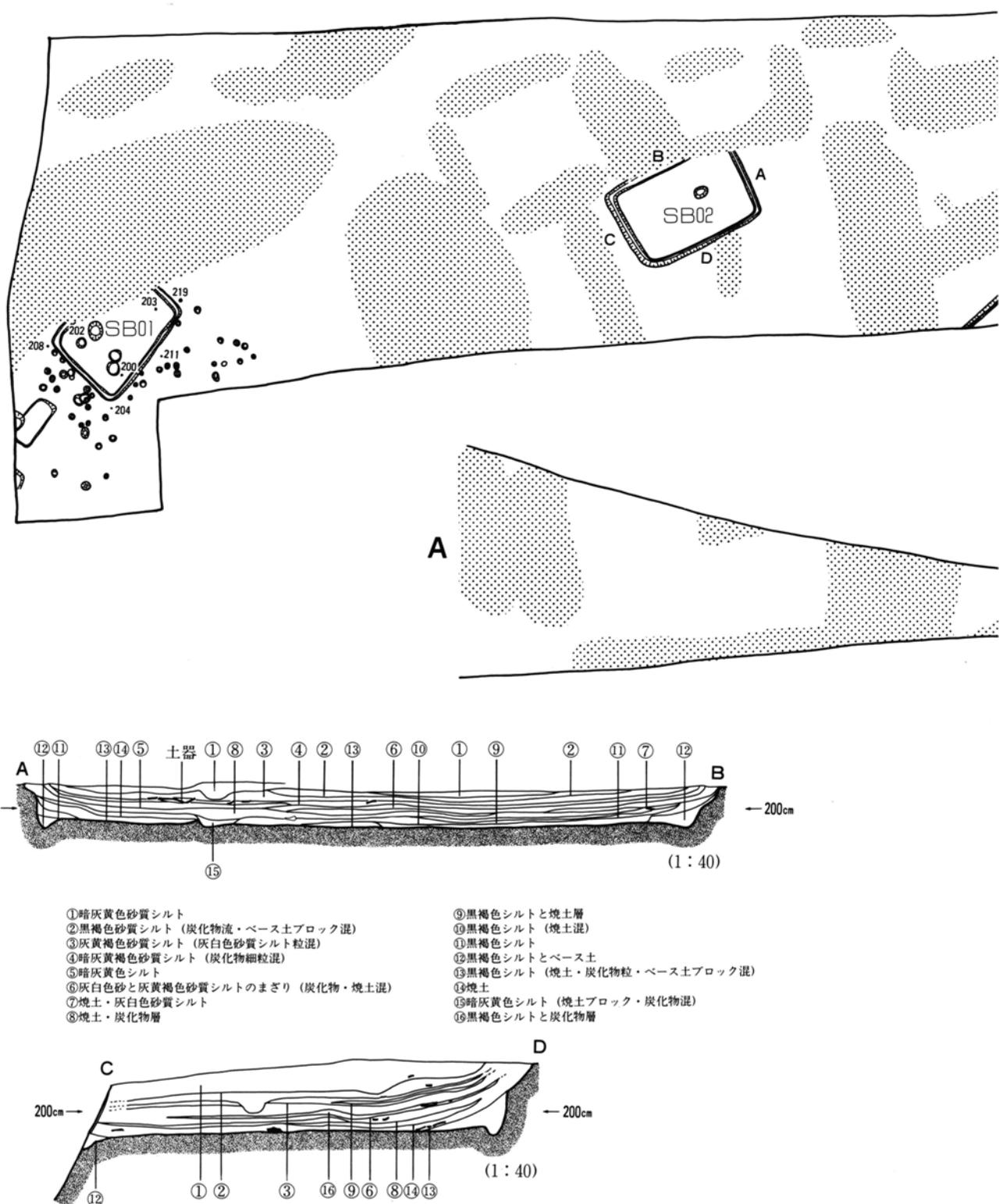
副列のSZ209からSZ211は北周溝をSZ207の北周溝北縁を延長させたラインに一致させて築造されている。非常に限られた空間に無理やり押し込んでいると言った感じである。

主体部とおぼしき土坑は2基から検出されたにとどまる。SZ229は長方形で木棺の可能性がある。現状では一墳一主体部であると考える。

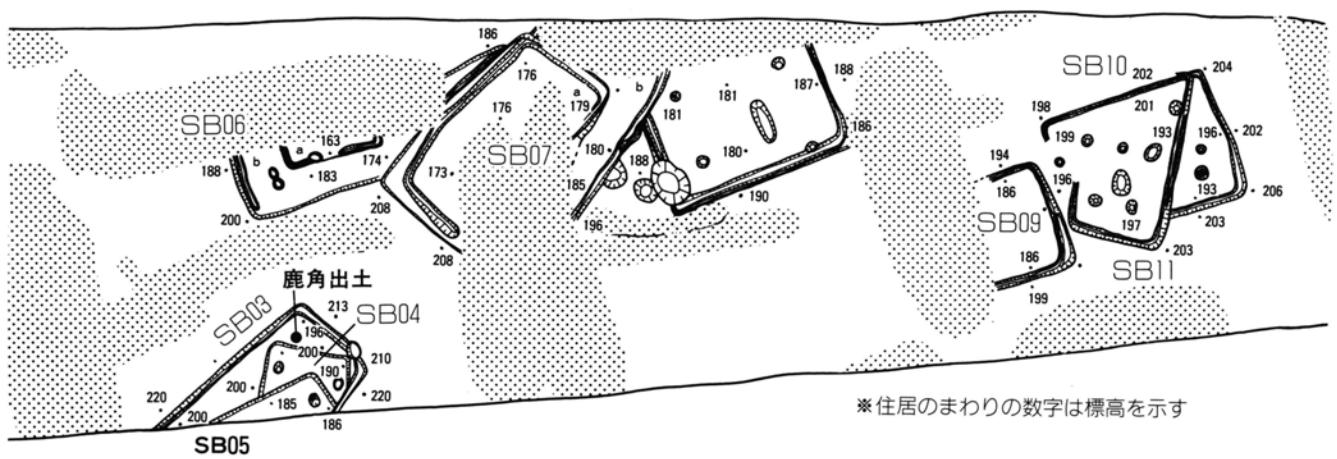


第82図 SZ206・207東周溝南壁土層セクション

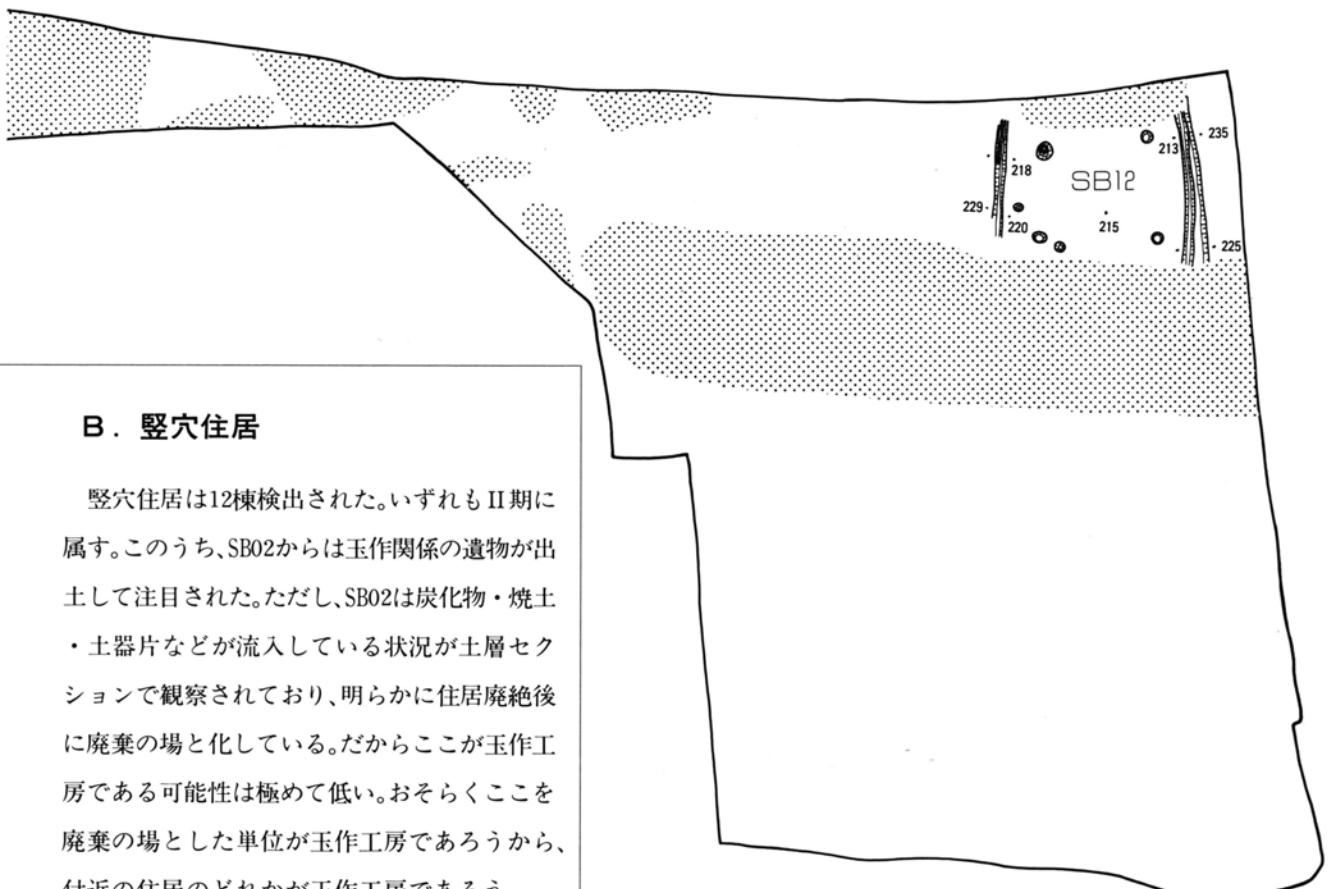




第84図 61P区 備穴住居群(1:200)



※住居のまわりの数字は標高を示す



## B. 壇穴住居

壇穴住居は12棟検出された。いずれもII期に属す。このうち、SB02からは玉作関係の遺物が出土して注目された。ただし、SB02は炭化物・焼土・土器片などが流入している状況が土層セクションで観察されており、明らかに住居廃絶後に廃棄の場と化している。だからここが玉作工房である可能性は極めて低い。おそらくここを廃棄の場とした単位が玉作工房であろうから、付近の住居のどれかが玉作工房であろう。

壇穴住居は離れているSB12を除いて、長軸の方位差で大きく3群に区分できる。すなわち、

a : SB01・03・07、b : SB02・05・06・08・09・10・、そしてc : SB04・11である。このうち切り合いの確認できたSB10とSB11の関係を重視するならb→cという時間差が推測できる。

## 16. 61N区 図版65・67~72

### A. 方形周溝墓

県教育委員会調査で検出された方形周溝墓の連続部分の調査にとどまる中で、SZ190では主体部の検出があった。長軸224cm、短軸184cmの掘形のなかに、長軸196cm、短軸80cmの墓壇が設けられている。棺材の遺存は認められなかったが、おそらく木棺であったと考えられる。ここでは小口板が底板上にあって、他でみるようベース面に痕跡を残してはいない。出土遺物はない。

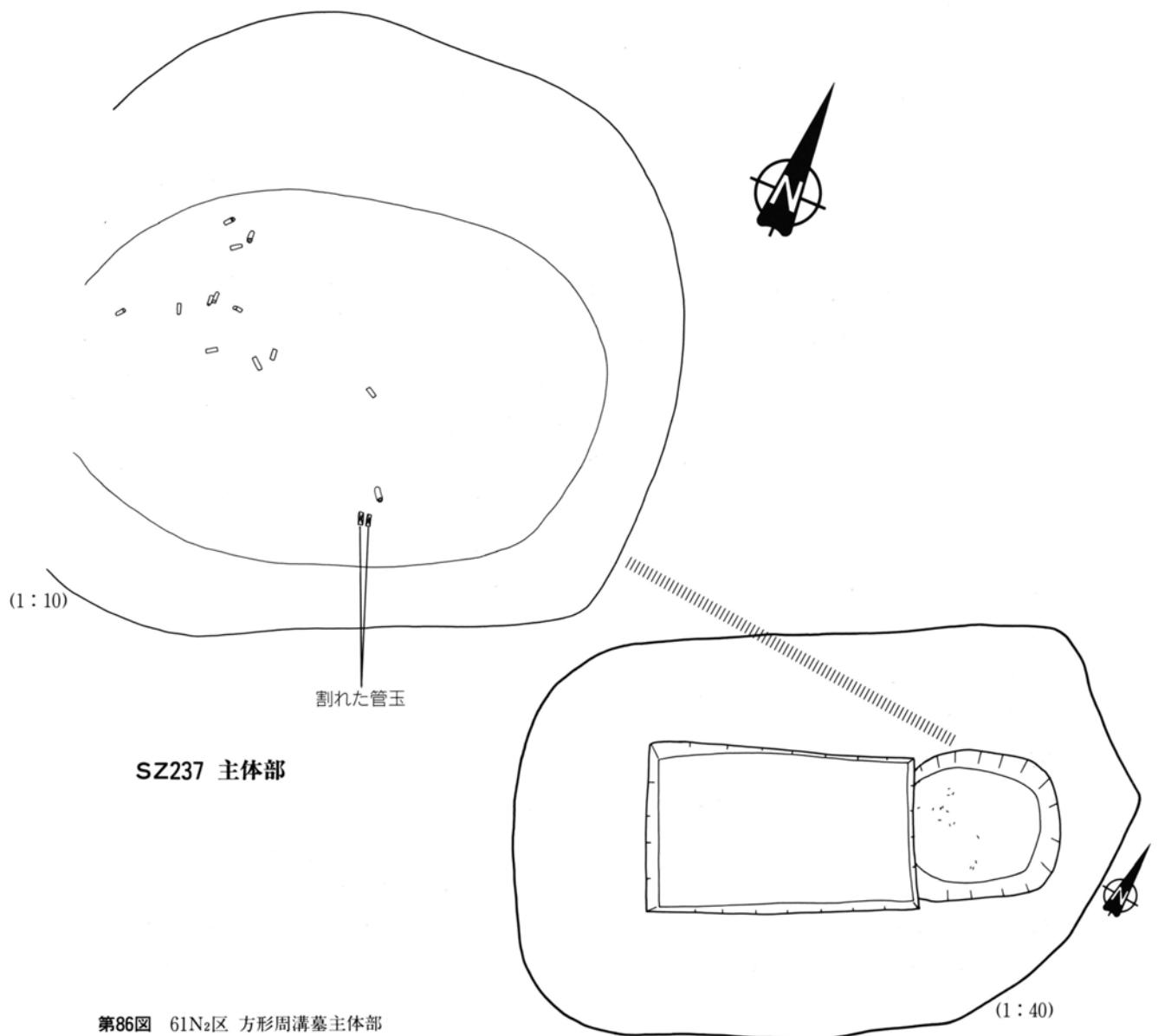
SZ194は北東半分弱の検出である。SZ192との間にある溝SD01はSZ192南周溝に切られている。対応する溝は県教育委員会調査区に存在するが方形周溝墓になるかどうかは不明である。SZ208は県教育委員会調査の段階では南周溝が検出されていたにとどまっていたもので、昭和61年度調査ではじめてそれが方形周溝墓であることが確認された。東西周溝墳丘側下端間で33.5m、南北同22mを計測する長方形である。墳丘については盛土の遺存が明確ではない。主体部は不明である。

東西の周溝は再掘削されているようで、東溝埋土下位からはVI期土器（赤彩広口壺）が出土している。周溝規模は確認面で、西：幅7.5m、深さ1.8m、東：幅6m、深さ1.7m、を測る。北周溝には現代の攪乱があり、完全に検出できていない。溝底は他に比べてやや浅い。西周溝底面からは柄のついたクワが2本出土した。県教育委員会調査区で検出された南周溝相当部分底面からも木製品？が出土しており、方形周溝墓築造後に方台部中央でなんらかの儀礼のおこなわれたことが窺える。

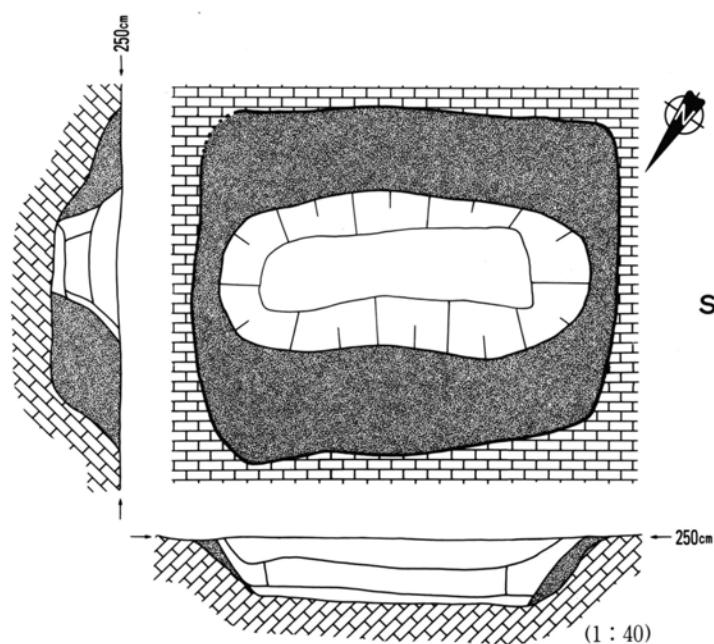
SZ237は検出された主体部から管玉が出土した。東墓域では初めての副葬品である。ただ、主体部の形状は主壇と副壇という組み合せで、副壇から管玉が出土し、内2点は半分に切断されていた。主壇の構造は明かでないが、木棺としても非常に小規模である。

SZ240とSZ241は重複している。前者はII期、後者はIV期である。通有の重複関係である。





第86図 61N<sub>2</sub>区 方形周溝墓主体部



SZ190 主体部

## B. 竪穴住居と掘立柱建物

竪穴住居はSDXIII以北で円形プラン1棟、隅円方形プラン1棟が検出されている。どちらもII期である。

掘立柱建物はSZ208下層で1棟検出された。県教育委員会調査区すでに1検出されており、対になることがほぼ確定できる。このほか、SZ218下層や以東で小穴が多数検出されており、この区域に掘立柱建物が集中することが考えられる。

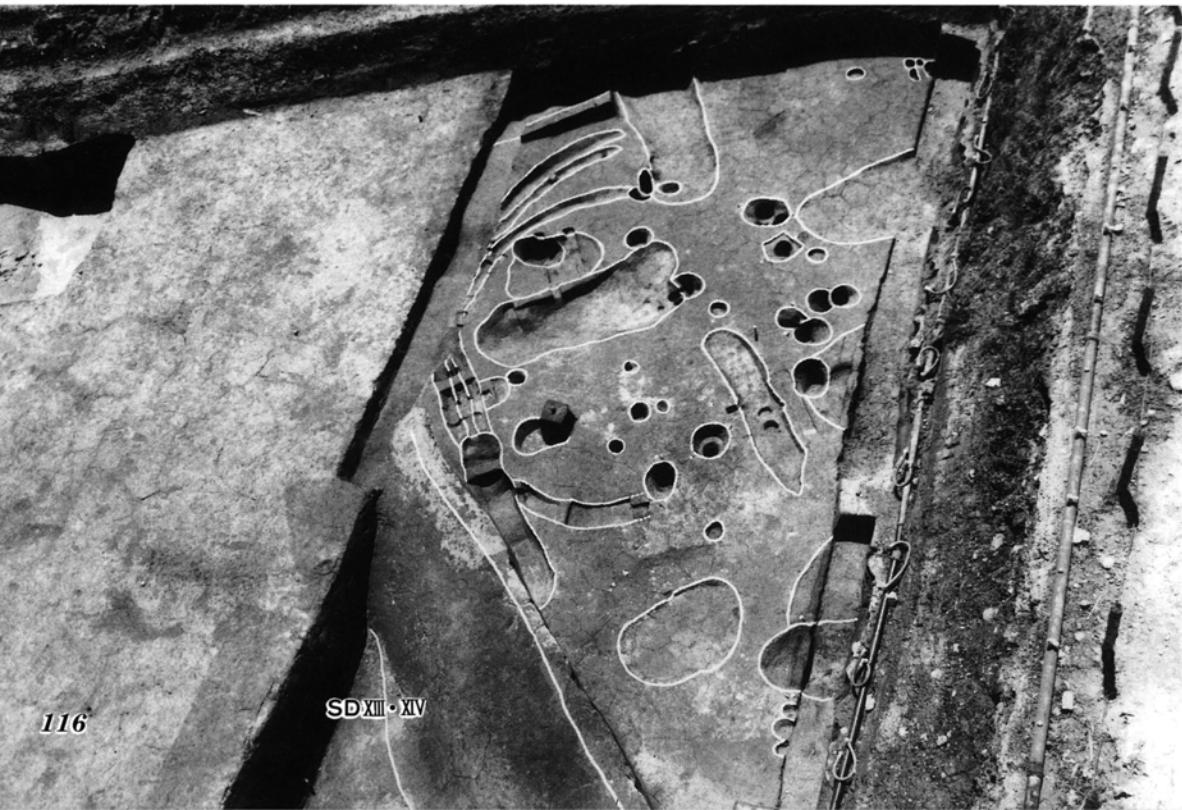
## C. 溝

SDXIIIはII期の溝が掘削された後、V期からVI期にかけての溝があり、顕著な砂層堆積が観察される。上部には植物遺体を含むシルト層が堆積するが、それはVII期以降である。

第87図 61N<sub>1</sub>区



▲SB01  
(東から)



## 17. 61 T区 図版75~77

### A. 竪穴住居

SB01はVI期の竪穴住居である。掘形約5cm残存。周溝はもたない。すでに墓域としての伝承もなく、居住域と化したのであろう。

### B. 溝・小穴列（垣）

SD01はIIIb期方形周溝墓 S Z 3 0 6 に切られているので、それ以前ということになる。性格は不明である。

小穴列は3列検出された。このうちSH02はSD01と軸線が一致し、なんらかの関係が窺える。柱穴は打設された杭を想定させる小規模なものであり、垣というよりは擁壁用の構築物である可能性もある。

SH01はVI期である可能性が高い。

### C. 方形周溝墓

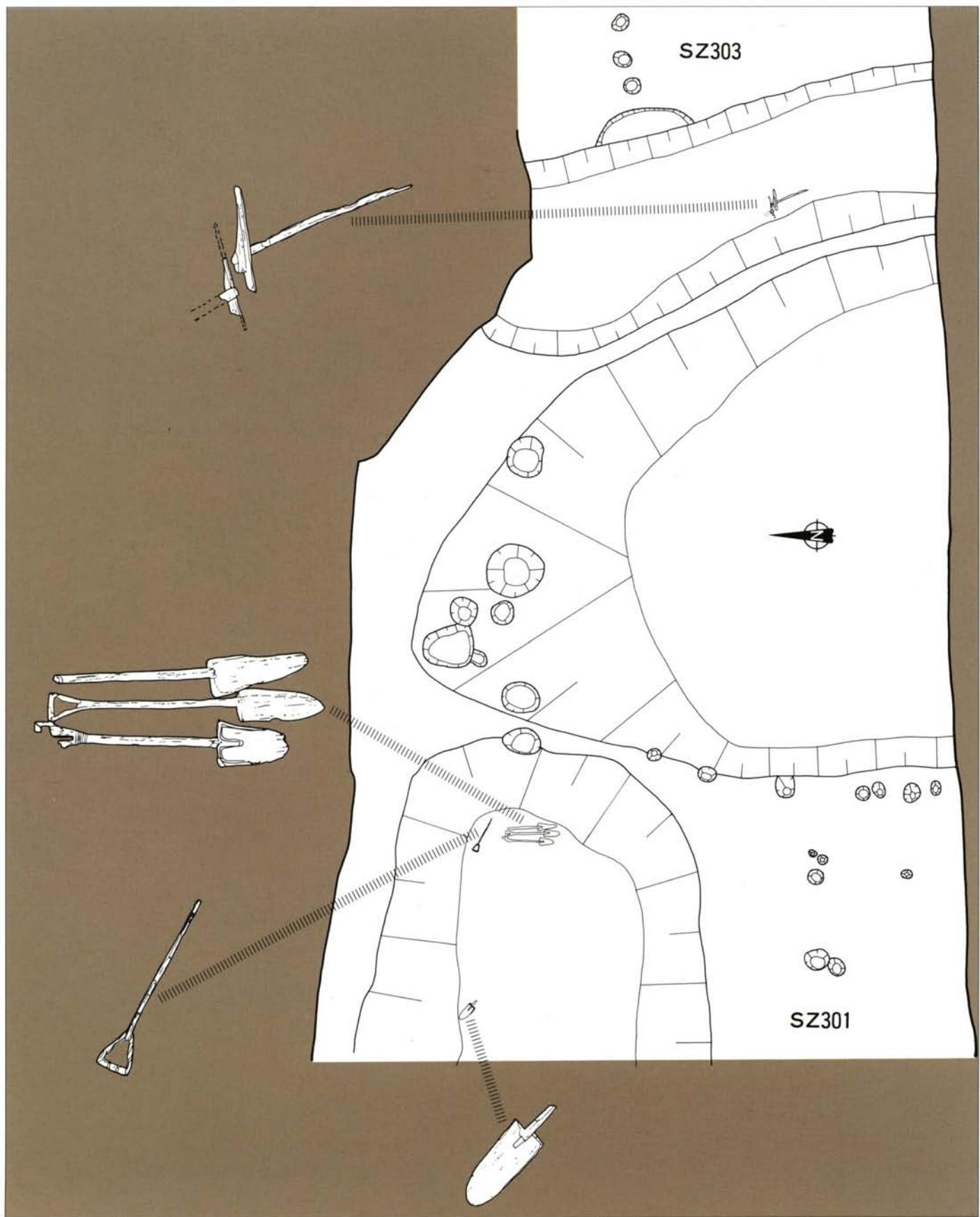
S Z 3 0 1 は東西35mを計測し、南北は残念ながら確認できない。周溝は検出面で幅11m、深さ1.7mを測る巨大なものである。埋土は大きく2層に分かれ、下層はベース土の再堆積でIII b期からIV期、上層は黒褐色砂質シルトでVI期末からVII期の土器群が出土している。下層のベース土はおそらく墳丘を構築した際に積み上げられたもので、それが崩れて流れ込んだのであろう。ところで、下層上部からIV期の土器が出土している点は、S Z 3 0 1 の周溝がIV期に再掘削されて墳丘の再利用が行われた可能性を示唆する。

下層は、北溝西部で広クワ未成品2点が上部から、東部では東端底部から一木スキが3本まとまって出土したほか、おそらく同一個体と考えられる一木スキの身と柄が離れて底部から出土した。東周溝下層上部からも「田下駄」状木製品が出土している。

上層は、VI期に一度埋土を再掘削してそのあと大量の土器を継続的に墳丘側から廃棄したもので、甕が多く炭化物も同時に廃棄している。これは「第3章古墳時代」のところで触れる。

S Z 3 0 3 でも底面から柄のついた広クワが出土した。これはII期のS Z 2 0 8 と異なって、横に離すのではなく、南北に身を接するように置いてあった。

その他の方形周溝墓は規模が小さいだけでなくプランも非A4形が含まれている。調査区東部では周溝の切り合い所見によってS Z 3 0 1 から東方への築造経過が確認されている。西部ではS Z 3 0 3 がS Z 3 0 1 東周溝外縁ラインに規制されて周溝の掘削を行っており、やはりS Z 3 0 1 を起点とする築造経過が窺える。



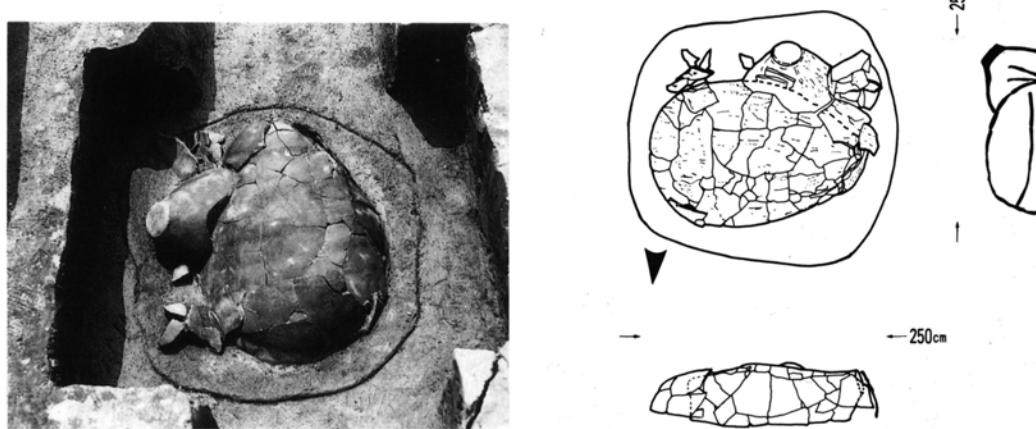
第88図 61T<sub>1</sub>区 SZ301・SZ303周溝出土の木製品(1:100と1:20)



第89図 61T<sub>1</sub>区(東から)

#### D. 土器棺

SX01はIIIa期？の甕が横位につぶれて出土したものである。おそらく甕棺であろう。東墓域での土器棺検出は初めてである。人骨や副葬品の遺存はなかった。



第90図 61T<sub>2</sub>区 出土棺(1:20)

## 18. 62A区 図版78・79

### A. 竪穴住居と掘立柱建物

SB01は側縁の膨らむⅣ期竪穴住居である。拡張が行われている。ほとんど平坦で同一面での検出にとどまり、掘形は残存せず。

掘立柱建物はSA01があるが、柱通りは悪い。他に小穴が多数ある。南にある県教育委員会調査区では掘立柱建物群からなる区域が検出されている。この区域では南北に廂をもつ掘立柱建物も検出されしており、掘立柱建物の卓越する区域であるかもしれない。

### B. 方形周溝墓

S Z 3 1 1 がⅣ期である以外はすべてⅢ期である。細分時期は確定できない。この区域は方形周溝墓の展開が散漫で小規模な例が目だつとともに、軸線の統一も窺えない。微高地としても標高がやや低く、おそらく墓域の南縁に位置していることによるものであろう。

S Z 3 1 1 はⅣ期の方形周溝墓で、プランはA 1形である。他のⅣ期の遺構 (SB01・SA01) と軸線の一一致していることに注意が引かれる。

### C. 溝

SD01は上層からⅣ期とVI期の土器が出土している。SD02は切られているので、それ以前である。



第91図 62A区(西から)

## 19. 62B区 図版80・81

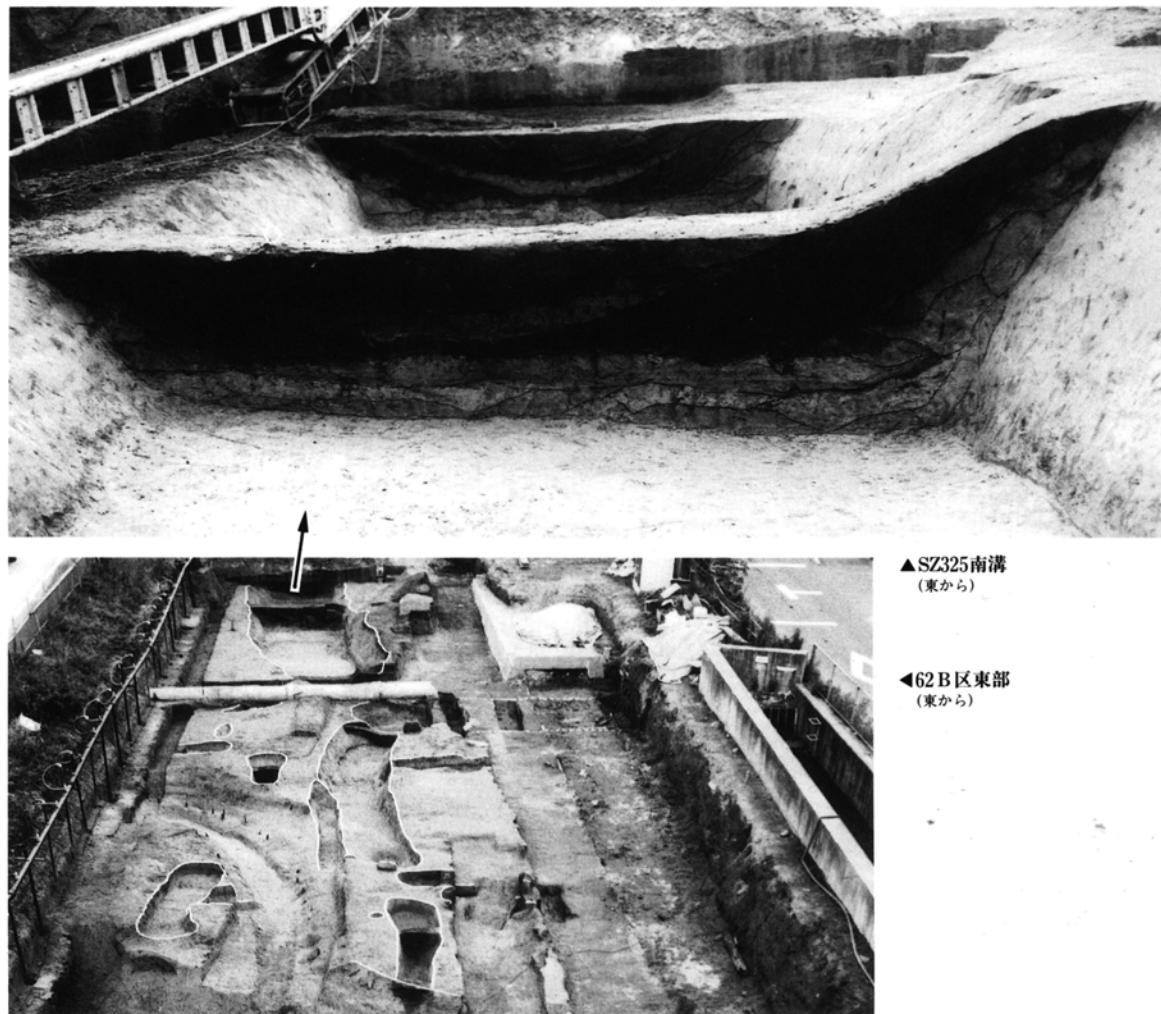
### A. 方形周溝墓

62B区は近世以降の遺構との重複が激しく、弥生時代の遺構は寸断されている。そのなかで、検出されたのはすべて方形周溝墓である。

東西長約20mを測る大形の方形周溝墓SZ325からはIV期の土器が出土している。周溝埋土は大きく3層に分かれ、下層：ベース土の再堆積、中層：黒褐色砂質シルト、上層：おそらく溝を再掘削した後に流れ込んだもの、となる。IV期土器は上層に対応する。大形方形周溝墓はIV期の再掘削が普通に行われているようである。

直接時期決定する資料は出土していないけれども、近接のSZ326はIIIa期であるし、SZ324もIIIa期である。SZ321はSZ324に切られているので、それ以前。

このように、IIIa期の方形周溝墓群は東微高地で西部と東部に大きく分化したことがわかる。



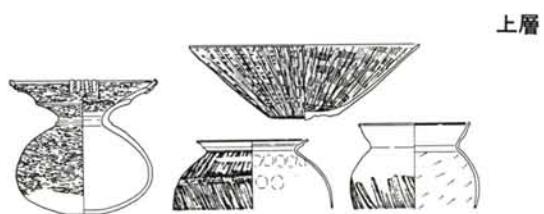
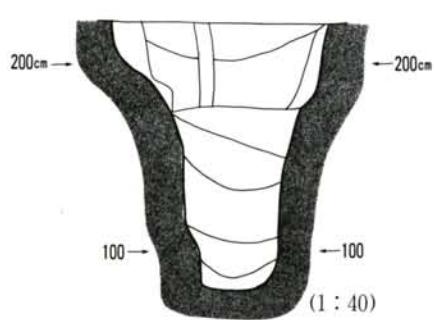
第92図 62B区

## 20. 62C～L区 図版82～84

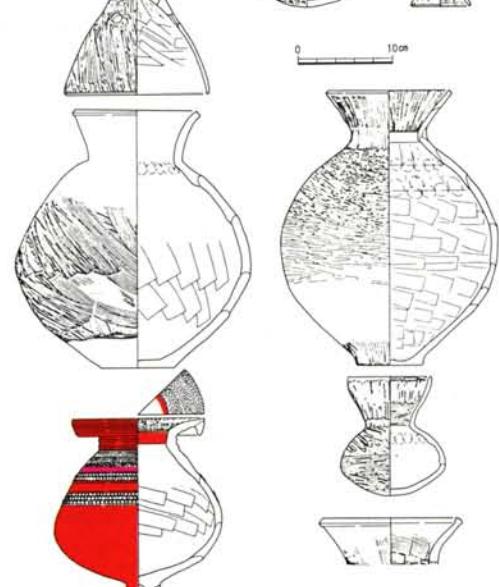
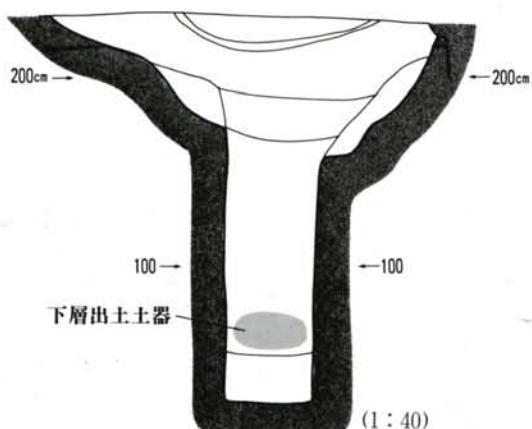
62C区以下は、各調査区とも面積が狭いので、調査区ごとではなく各項目ごと全体的に説明する。

62D区まで方形周溝墓群の範囲が及び、62E区は土坑墓群？となる。いわゆる弥生時代中期の遺構はここまでで、62C区からVI期以降の遺構がほとんどとなり井戸や掘立柱建物が存在する。この居住域の終末はVII期である。そして62K区以東ではほとんど無遺構・無遺物となり、標高も低くなる。この区域

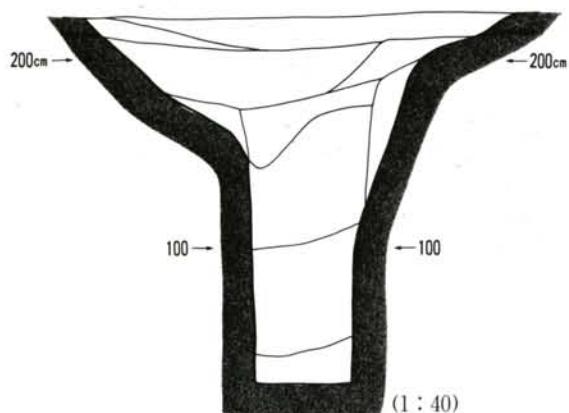
62H区 SE01



62I区 SE01



62J区 SE01



第94図 62I区 SE01出土土器(1:8)

第93図 井戸土層セクション

から水田は検出されていない。朝日遺跡を全体として見た場合には東限にあたる。

### A. 井 戸

62H・I・J各区で1基ずつ検出した。後2者は断面ロート状で、上部には土坑が重複している。62I区SE01では、下層からVI期の土器群が、上層からVII期末の土器群が出土した。このような土器廃棄は井戸が生活施設としてだけでなく付随する儀礼も含めて導入されたことを示す。

### B. 掘立柱建物・小穴列・溝

掘立柱建物は62E区で1棟検出された。62E区ではVI期土器以外出土していないのでVI期でよからう。小穴列は62H区で平行する2列(SH01・02)とそれに直角に交わるSH03を検出した。いずれもVI期であるが、SH03を垣としてよいかどうか迷うところがある。

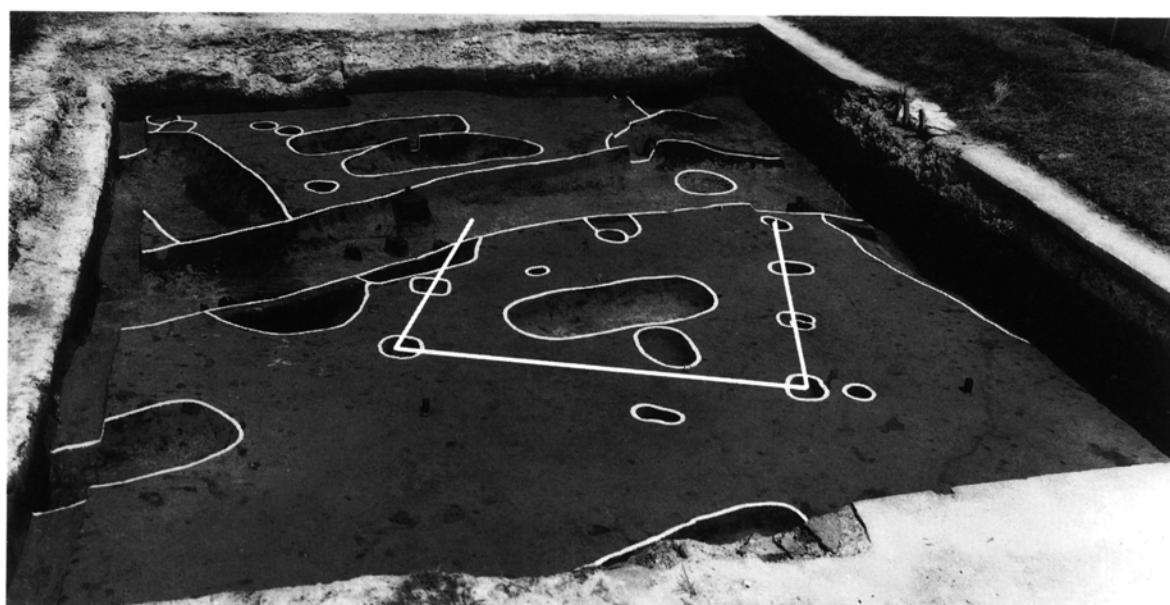
62H区SD01と62J区SD01はほぼ平行しており、後者ではVI期の土器が出土している。

### C. 方形周溝墓・土坑

方形周溝墓は62D区まで検出されている。方形周溝墓かどうか確定できないが、62D区SD01からはIIIa期の土器が出土している。S Z 3 3 7は土器が出土していないけれども、SD01との位置的な平行関係から時期が近いと考える。

S Z 3 3 8はそれより新しいであろうが、時期は確定できない。

土坑は62E区で検出したいくつかが土塙墓である可能性を有する。62D区まで方形周溝墓群があり、それ以東が土塙墓群からなる墓域であると予想できる。



第95図 62E区(西から)

## 21. 63 A区 図版65・66

A<sub>1</sub>区・A<sub>2</sub>区に分かれる。A<sub>1</sub>区では居住域の縁辺と谷Aが検出された。谷Aでは深掘りによって縄文時代後期に相当すると考えられる泥炭層を検出するとともに、流路が複数存在することを確認した。遺物の出土はなかった。

河道は調査区東部で大きく蛇行する縁辺を検出した。

A<sub>2</sub>区ではすでに説明した縄文時代のドングリ貯蔵穴を検出した。弥生時代では、掘立柱建物1棟SA01とS DXIII・XIVを検出した。

SA01は柱穴が1×2間と1×3間の2棟が復元できる。建て替えによるのであろう。時期はII期。

S DXIIIはII期の溝で、有機分の強い埋土が観察された。

S DXIVはV期以降で、砂層と植物遺体層がラミナを形成している。上層はVII期の植物遺体層である。61N区で観察した状況とは大きく異なる。

## 22. 63 B区 図版60・61

### A. 穫穴住居

SB01は隅円方形プランで、床面には薄い貼床を確認した。

SB03(隅円方形プラン)・04(円形プラン)は重複している。土層セクションでは前者から後者への変化を示している。II期からIIIa期である。両者とも拡張している。

### B. 溝

SD01はII期からIIIa期にかけての溝である。断面逆台形を呈する。住居群に先行するようである。

SD02は出土遺物は無いが、ベース直上に掘り込まれており古い。底面は小穴の連続で何等かの構造物(垣)である可能性がある。SD01に平行するような印象を受ける。

SD03には鍵の手状に屈曲する部分があり、方形周溝墓の可能性も考えたが、調査範囲が狭く確定できなかった。IV期の土器が多量に出土した。

SD04はIV期の溝で、埋土上部には土器が密に含まれていた。上層の砂層は、溝が完全に埋まりきっていないために窪地状をなしていた部分が小流路と化したのであろう。

SX01は方形周溝墓でもない、住居の周溝でもない。性格不明である。

### C. 方形周溝墓

谷Bを挟んで、南西(63B<sub>1</sub>区)で後期の、北東(63B<sub>2</sub>区)で中期の方形周溝墓を検出した。

S Z 1 6 0はV期の方形周溝墓で、北周溝から華麗な装飾を施した高杯・器台が出土した。また、北周溝上層からはVII期の土器がまとまって出土し、北にある同時期のSB05との関係が問題となる。

SZ206は西周溝が谷B河道に削られている。ほかの周溝も部分的な検出にとどまった。方台部の中央には土坑があり、主体部と推定した。SZ205とSZ204は周溝が重複している。前後関係は確認できなかった。中央に土坑があり主体部と推定した。木棺の痕跡はどちらも確認できなかった。

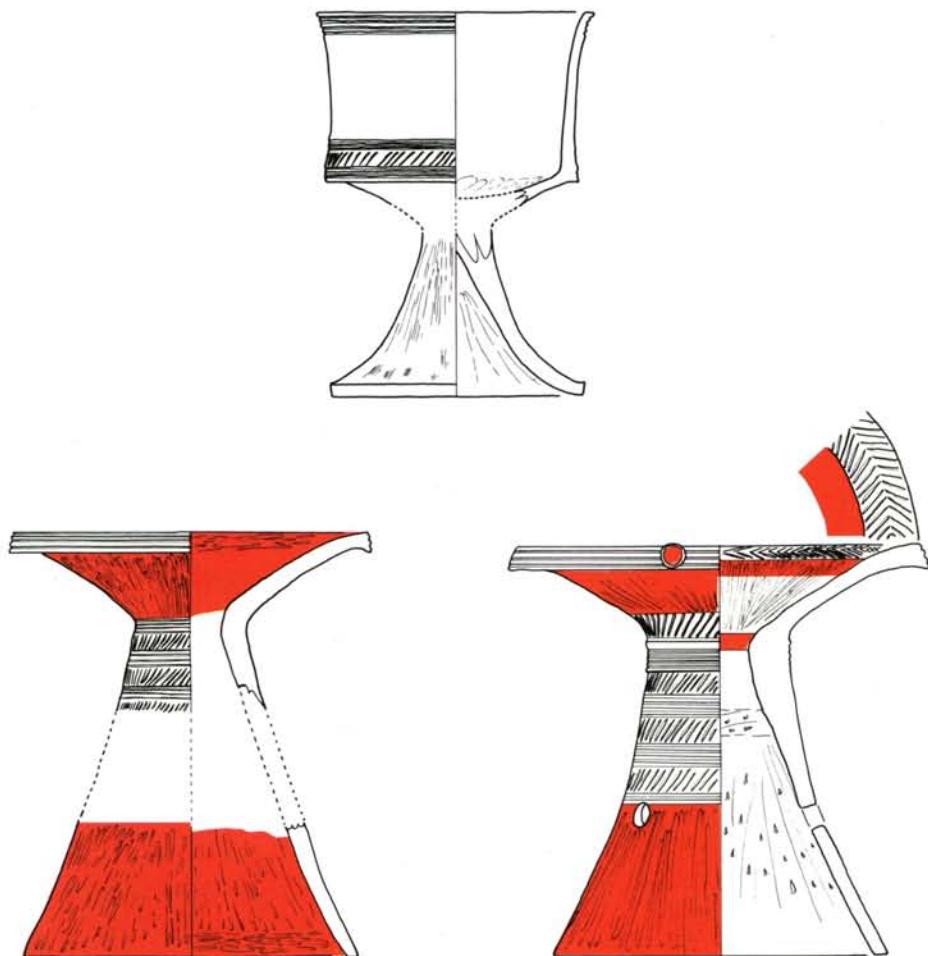
#### D. 谷 B

谷Bは面的な追求は不十分であったが、土層セクションの観察によって従来の説明では理解できない事実がでてきた。すなわち、谷Bでは谷Aと異なり弥生時代包含層の下部に縄文時代の谷は存在せず、谷Aに存在した谷中央に向かって下降する谷斜面傾斜に沿う堆積層の存在もなかった。つまり、谷の形成がそれほど古く遡らないことが把握できたのである。そして、谷基底の堆積層が弥生時代後期を大きく遡らないことから、さらにこの谷自体が自然ではなく一部人工的に掘削されている可能性も完全に否定できないと考える。

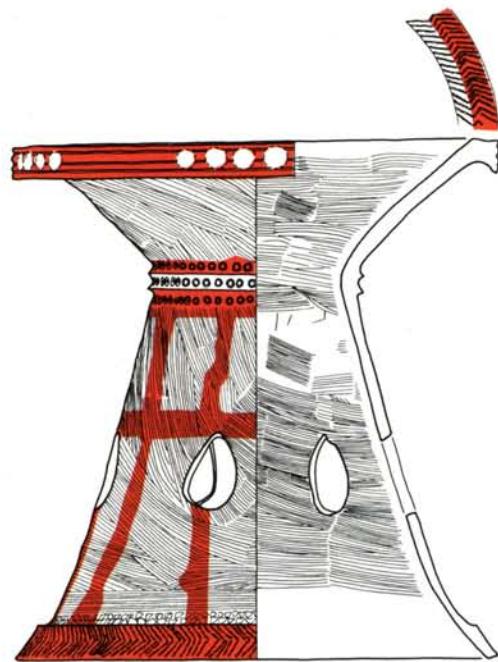
なお、この谷からは標高170cmぐらいのところで13世紀頃の「山茶碗」が出土しており、その高さでは周辺より1m以上深い窪地であったと考えられる。植物質を多く含む粘土層の堆積からみておそらく湿地となっていたのであろう。



第96図 63B区(東から)



第97図 63B区 SZ160北周溝出土土器(1/4)



第98図 63D区 盛土下部出土土器(1/4)

## 23. 63D区 図版14~16

### 上面遺構群

---

#### A. 溝

SD01・02はV期とVI期の溝である。SD01-1は幅約4m、深さ約1.75m、同-2はそれよりやや縮小する。SD02は幅約4m、深さ約1.8m、同-2はそれよりやや縮小する。

溝内への土器廃棄はそれほどないが、かわりにSD01の西部では貝層の堆積が顕著であった。その範囲はIV期以前の貝層範囲に一致しておりほとんど破碎貝層なので、おそらく溝掘削に際して盛り上げた貝層が流れ込んだのであろう。

SD01-2埋土は最下層のベース土に攪乱状堆積があるが、以上は褐色砂質シルトを基調として植物遺体の含有量に変化を見せながら堆積している。特に上半部では植物遺体の量が多くなる。SD02-2も基本的には同様の堆積状況である。水流を示すような砂層の堆積は観察されなかった。

SD03はV期の溝で、灰色砂が植物をまじえながら水面の油模様のような互層を形成している。上部には植物遺体層（VII期）が堆積している。

SD04はSD03下部で検出された溝で、おそらくIV期と推測する。これも、灰色砂が入り組んだ模様を見せている。SD03・04間には南の谷A河道からの氾濫による砂層の流入がある。

上面では遺構として検出できなかったが、SD09はIV期貝層を切り込むV期の溝で、SD01に流れ込む部分では溝の壁をけずってSK10とした土坑をうがっている。

この他、溝ではないが、SD02とSD03の間に灰色シルトの堆積した窪地が存在した。両溝からの排土を盛り上げた結果できたものであろう。SD01以北にも同様の窪地が存在した。

#### B. 土 墓？

SD01・02間には盛土があり西に至ると急激に下降し斜面を形成する。この盛土の斜面寄りの部分でV期の大形器台が出土した。旧地表に浅い土坑を設けて盛土内に封入している。この盛土は検出時では約30cmとそれほど厚いものでなかったが、上部の削平を考慮するなら「土壙」とそれに関わる遺物である可能性が生じる。

朝日遺跡では、これまでのところV期以降の環濠と想定される平行する大溝間でベース土を主にした盛土が顕著に認められるという傾向があり、63D区例もそうした事実を追加するものであるだけではなく、他に知られていない大形器台が埋設されていたという新しい事例も提供したといえる。

## 下面遺構群

### A. 溝

SD05はIV期の溝であるが、土層セクションの擾乱状を呈する下部はIIIb期である可能性が高い。上部でIV期の土器とともに木製品が出土した。

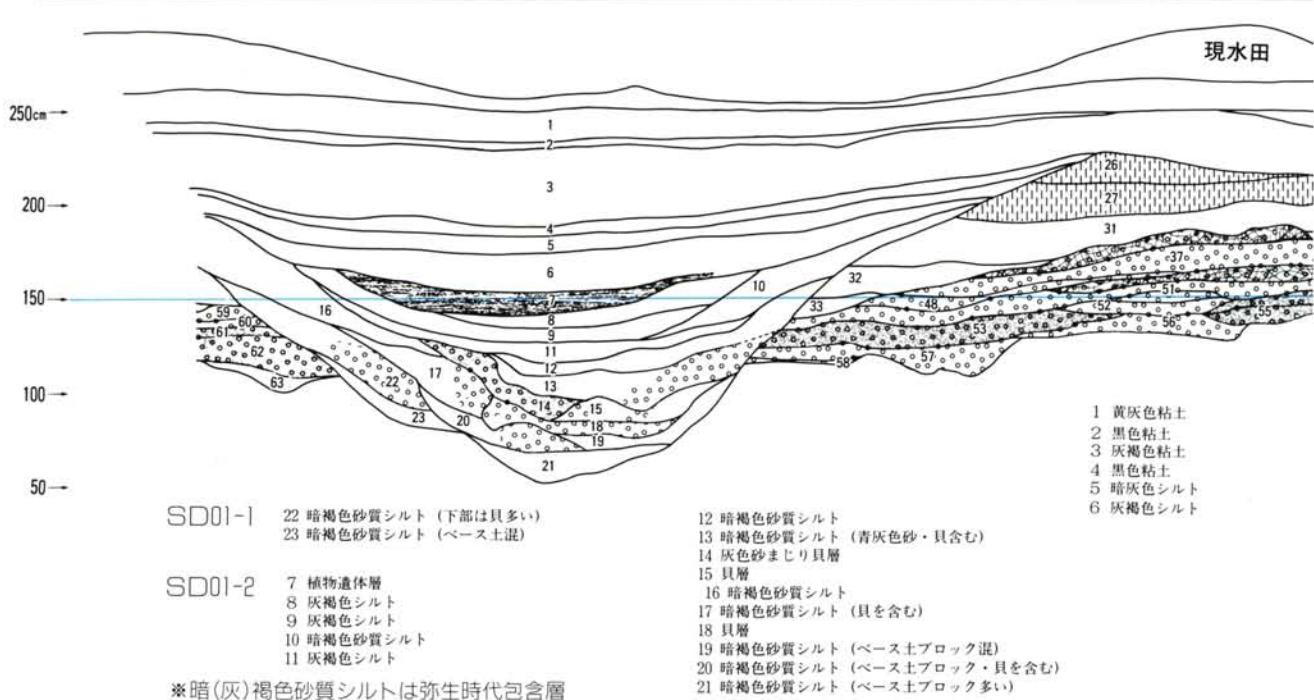
SD06はII期の溝で、幅5m以上、深さ2mを測る。埋土にはベース土が大量に流れ込んでいる。特に北からの流れ込みが著しいのは掘削時の排土が居住域側(内側)に盛られていたことによるのであろう。そして上部にはIIIa期の貝層が堆積している。

SD07はSD06に重複して掘削されており、その掘削はIIIb期である。しかし、埋土のほとんどはIV期で貝層もIV期単純である。上部にはベース土の流入があり、おそらくSD02掘削による排土が盛られのであろう。このことはSD02掘削に至るまでSD07が窪地状をなしていたことを示している。この地区では61E区での事例と異なり重複して再掘削することはなかった。

### B. 貝 層

貝層は貝混じりの黄色砂層以下がIIIa期、上部の暗褐色砂質シルトの上部がIV期である。V期の貝層は再堆積以外検出していない。

IV期貝層は層中に炭化物や灰を含むが焼土は観察できなかった。60A区で検出したII期やIII期の貝層に共通する堆積状況で、貝の煮沸処理が集中して行われたことを示すのであろう。



第99図 63D区 西壁上層セクション(1:40)

それでも、範囲としてはかなり狭く、やはり南微高地北縁とは規模が異なる。

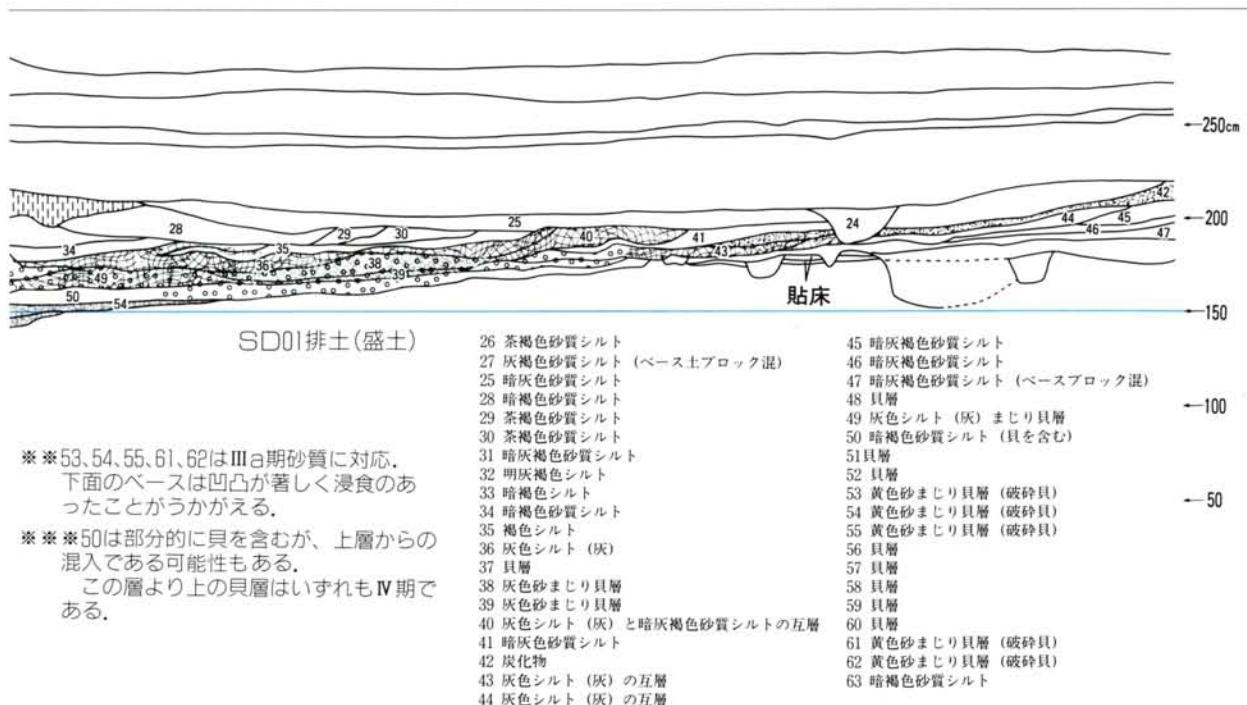
## C. 侵食面

谷Aに面する区域のベース面の侵食についてはすでに61A区で顕著であったことを紹介したが、ここでもベース面の凹凸は著しく、類似の経過があったことが窺える。侵食面直上にはところによって黄色砂が薄く堆積し、その上にさらに貝層が堆積し、そして黄色砂混じり破碎貝層が堆積するというように、侵食に関わると考えられる堆積は1回だけのものではないが、大きくはIIIa期に進行したものであるとして誤りないであろう。

ところがそうなると、この区域は谷Aと分離されていないことになり、したがって谷A寄りにあるSD06の盛土はすでに削平されていたか、あるいはこの区域周辺は谷Aに対して開放していたということになる。しかしSD06には黄色砂の流入は認められないでIIIa期にはすでに埋没して平坦化していた可能性が高い。

## D. 土塙墓

SD02・SD03の間から土塙墓SX01を検出した。確認した段階ではすでに上部を削平してしまっており、深さ約10cmほどが残存していただけであった。そのため、人骨の遺存は認めたものの、詳しい状況は確認できなかった。この部分の盛土はSD06に由来し、土塙墓はその中から検出されたのでそれ以降である。V期である可能性が高い。



## 24. 63 G区 図版41~43

### A. 竪穴住居・掘立柱建物

II期は明確でなく、多くはIIIa期以降である。SX02の西には遺構の希薄な区域があり、ここでは旧表土（黒褐色シルト）が検出された。他はベース面がほとんど灰白色砂であり、遺構の検出はともかく、遺構掘削後は特に検出面の維持に苦労した。

調査区北西部端では炭化物の濃密な分布と焼土面が存在し、焼失家屋があると思われたけれども、遺構としては検出できなかった。下部で検出したSD01は周溝のようでもあるが確定できない。土層セクションでは何層もの炭化物層を確認した。

SB07はIIIa期で木整円形プランを呈する。床面は灰色砂であり、中央部から地床炉を検出した。SB03はプランが台形気味なのでIII期であろう。

SB12・14はIV期。両者は軸線が一致している。同じ軸線を有するSB10もIV期かもしれない。

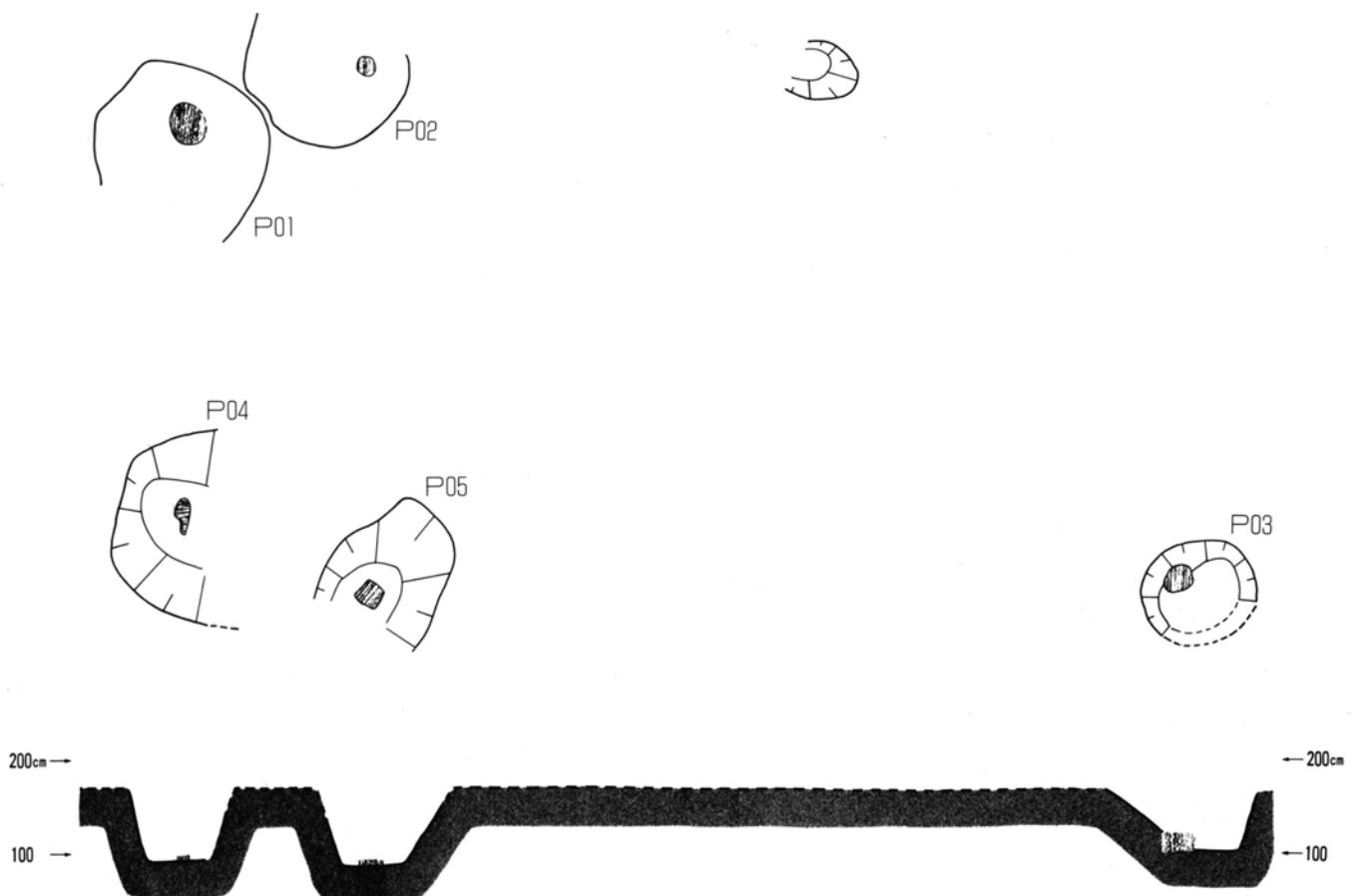
SB08・09はV期。接近しているので時間差はあるだろう。軸線は一致している。この軸線は南の89A区住居群とも共有されている。しかし、同じV期のSB02は軸線が異なる。軸線を共有する単位が異なるのであろう。

SA01は炭化物層下部で検出された柱穴群からなる。柱根の遺存したもの（P01・02・03）と、礎板の遺存したもの（P04・05・06）とがある。掘形は径1～2m、深さも残存部で1mと大きく、柱根もP03は径40cmを測る。柱根の遺存した坑は60 I区でも検出されており（P1・2）、この区域に集中することが窺えるが、柱の通りを見た場合はSA01としての組み合せ以外はっきりしない。だからこれらが実際建物として建つかどうか確証はない。

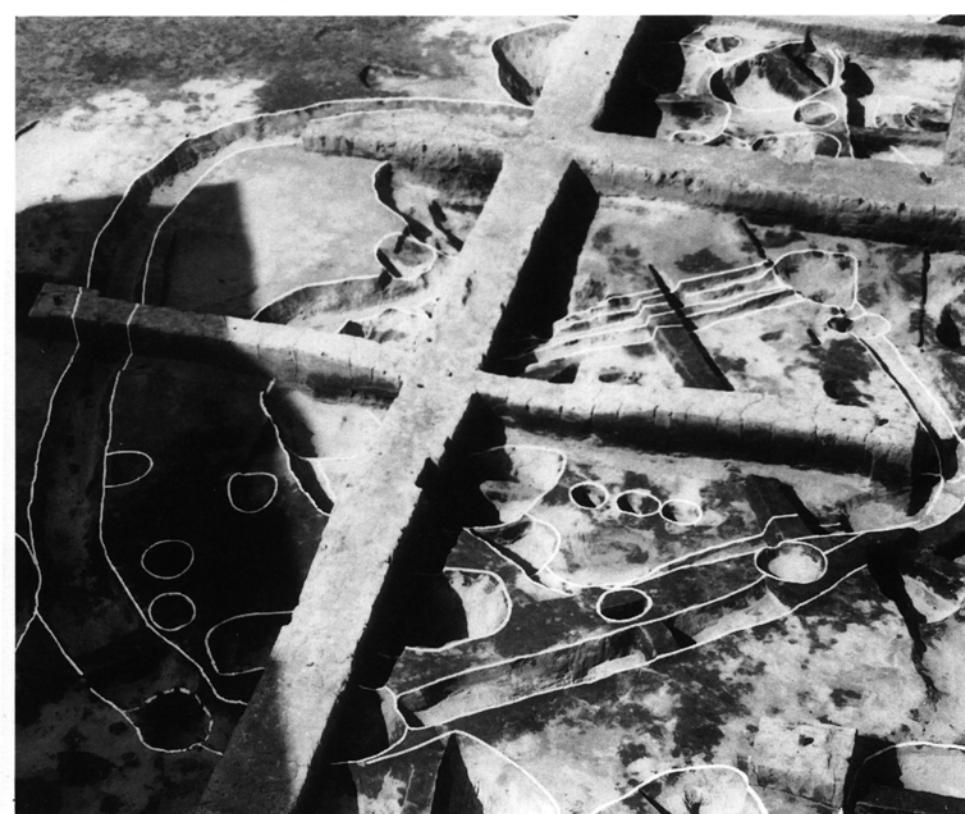
### B. 区画遺構

SX01は隅円台形プランの区画である。溝幅は約0.7～1m、深さ40cm以上である。遺物の出土はなく直接の時期決定は難しいが、土層セクションではIV期のSB12より新しく、V期のSK98には切られている。その期間に置くことができる。

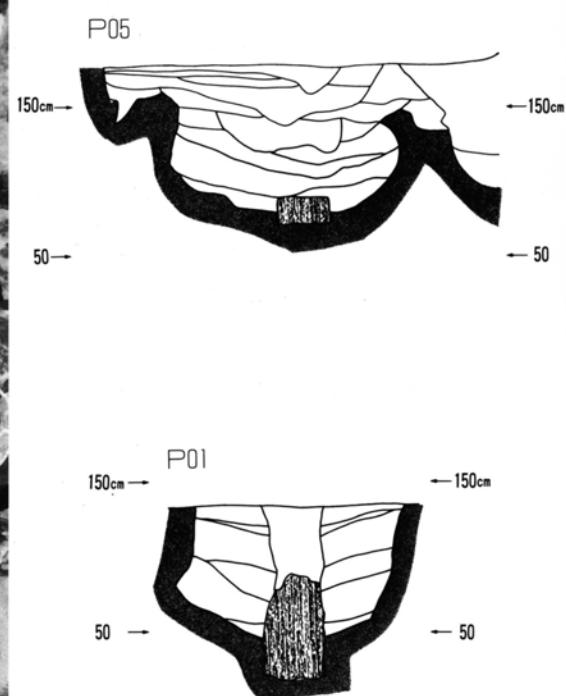
この区画の性格は、重複しないSB11との位置関係では竪穴住居外縁周堤に伴う溝のようであるが、SB11はSB12に切られており時期は異なり無関係である。独立した遺構として考えるならば、境界設定に関わる特殊な遺構ということになる。



第100図 63G区 SA01(1:80)



第101図 SX01(南から)



## 25. 63 J 区 図版45

### A. 竪穴住居と土坑

IV期まで 土坑はII期 (SK20・21) からあるが、住居はIII期以降しかない。SB05はIIIb期、SB06はIII期。SB04は拡張があるIV期。

V期から SB01からSB03は周溝の集中が激しい。SB01→SB02という順序で、後者の床面には土器がまとまって遺存していた。

SB11は正方形に近いプランで、VI期の住居である。これに切られるSD01は周溝と思われるが、とすれば確認長で約10mあるから大形住居となる。溝埋土からはV期の土器片が出土しているのでV期以降である。

同じくSB11に切られるSB10はV期の住居である。拡張している。

同時期の住居と土坑には軸線の共有が観察できる。すなわち、V期にはSB10bとSK27、VI期にはSB11に一致するSK19・22、そして対応する住居はないがSK18・23の組み合せである。このうち、SK18・19・22・23については埋土が炭化物と焼土粒からなり、しかもそれらが互層をなすことから継続的な廃棄のために設けられたものであることが窺える。

このような軸線の存在はII期・III期にもあり、V期以降に関してもとりたてて注意する必要のないものかもしれないが、63J区では住居との対応が明確である点で、住居を中心とする一定空間の構成が行われている可能性を指摘しておきたい。

## 26. 63 L 区 図版48

### A. 溝

V期はS DXV・XVII、VI期はS DXVI。

S DXVIIはVI期にはすでに埋没して再掘削もされていない。この溝の東延長は県教育委員会調査では検出されていないので、終息していると考える。対応するであろうS DXIIは、我々の調査対象となっていないので直接検討することはできないが、『報告書』によればV期とVI期なので次に述べるS DXVに対応する溝の掘削があったと考えられる\*。

S DXVIは63L区でそれほど明確に掘めたわけではないが、となりの89B区では上下に重複しているのが確認でき、明確に区別できたのでそれに合わせた。実際はS DXVがそれ自体どれだけの長さがあるかは問題である。

おそらくS DXIVに対応するものと思われるが、調査区東端の溝北肩部分で底面標高が190cm～200cmを測る2m四方の平坦部を検出した。この部分の堆積は特殊で、下部には黒色砂質シルトと灰色砂の互層、上部には炭化物と灰色シルト・灰褐色砂質シルトの互層が主に堆積しており、溝斜面における通

常の堆積状況とは異なっている。

S DXV・XVIとS DXVIIの間は、黒色砂質シルトの上にベース土（黄灰色シルト）ブロックを含む層位があり、盛土と考えられる。

## B. 竪穴住居

SB09はII期の住居。それ以外の区域にもII期の遺物は多かったが、住居は検出できなかった。

SB05は円形プランでIII期。重複するSB06はIV期。SB03・07・08もIV期である。

## C. 土 坑

SK26は包含層上面に窪地ができており、当初新しい時期の遺構と考えていたが、掘り下げた結果、II期でも古い様相を示す土器群を含む貝層が出土した。貝層以上の埋土はIV期の包含層であった。上部が窪んでいたのは貝層が腐食によって圧縮され沈下したためであろう。第103図の東西土層セクションベルト上面が沈下面である。



第102図 63L区 SK26(北から)

\* S DXVIIは〈南居住区〉最外縁の溝であり、本調査によってV期にはS DXVとともに2条並走していることが確実となった。

ところで、『昭和60年度 年報』執筆時には、内側の溝をIV期単純と考え、そして他の地区におけるS DXVII相当部分(S DV・VIbなど)でIV期土器が出土していたために、V期からVI期初めにかけての2度の環濠掘削を1条→2条という図式で理解した。〈南居住区〉北縁では、SD VI西部の経具部分寄りの溝底からVI期土器が出土しており、VI期における2条の時間的並行が確実視されたからである。

さて今回の調査によって、〈南居住区〉南縁においては溝が2条→1条という変化をしていることが明らかとなっただけでなく、S DXVIIが東接する県教育委員会調査区において検出されていないことから、それが途切れで出入口用の通路を形成することがほぼ確実となった。ここに訂正するとともに、V期以降における一度目の環濠掘削（おそらくV期中頃）時における設計が二度目に比べて厳重である点を改めて注目したい。

## 27. 63M区 図版41・44

### A. 穫穴住居

II期はSB09が円形プランを呈する。SB05もII期のようだ。他はIV期以降を確認している。III期は不明。IV期のSB06はSB07を切る。後者はIII期かもしれない。

V期はSB01・02・03・10の4棟ある。SB03は周溝とは別に掘形周囲に幅広の溝がめぐる。埋土は貼床と同じベース土ブロックで、床面構造に関わる下部施設であろうか。

SB02は県教育委員会調査区と対応する。県資料(SB55)はV期だが、ここでの出土土器はVI期である。

SB10は県教育委員会調査区との対応があるけれども、県資料(SB56)はV期であるがここではVI期の土器が出土しているし、周溝の幅が極端に狭い。ただ、県資料では周溝は貼床下にあるので構造的にSB03と同様であり、周溝として考えれば問題はない。問題はその規模である。短軸は不明だが長軸で約10mを測り、規模が大きいのである。問題を残す。

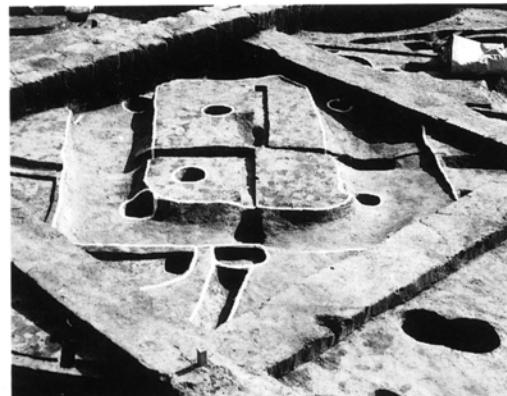
以上はベース面で検出した遺構であるが、包含層中でも炭化物や焼土を伴なう面を確認している。おそらく焼失住居であったろうけれども、プランを明確にすることはできなかった。

### B. 土坑

土坑は北部で時期の異なるものが重複している。重複が激しく特定できないものが多い\*。



▲炭火物と焼土(焼失家屋?)



SB 03(南西から)

第103図 63M区 近景

\* 本調査区も63G区と同様遺構面が砂層であるために遺構の掘削と遺構面の維持に苦労するとともに、地下水位の高いことと度重なる降雨に悩まされた。そうした悪条件もあって激しく重複し合う遺構の識別は不充分に終わった。

## 28. 63N区 図版23・24

### 上面遺構群 IIIa期

#### A. 方形周溝墓

SZ150・152は墳丘を確認した。SZ150はおそらくA4形プランである。IIIa期。SZ152は南北の溝はSD01・02と重複してはっきりしなかったが、東西溝は検出した。IIIa期。どちらも、主体部の検出はできなかった。

ほかの方形周溝墓は墳丘の検出ができなかった。SZ152はプランがA2形またはA3形で、周溝からの遺物の出土はなかった。IIIb期に下るかもしれない。

#### B. 土坑

SK01・06・12・13・14はいずれもの細長い土坑で、ほとんど遺物の出土がなかった。埋土は下部に攪乱状の部分があること、方形周溝墓とは離れていることから土塙墓の可能性がある。SK02～06は切り合いで激しく連結したようになっている。

### 下面遺構群 II期

#### A. 壇穴住居と土坑

SB01は上面の段階で中央部がスリバチ状に窪んでおり、壇穴の存在が予想できた。注目されるのは壇穴の周辺にベース土を含む土が認められしかも高いことで、それが周堤であったとは確定できないが、ベース土からなる土が周囲に盛り上げてあった可能性は高い。壇穴埋土もベース土の流入が顕著で、それらが崩壊して流れ込んだものであろう。

壇穴掘形は検出段階で壁の高さが約60cmあり、遺存状態は良かった。床面中央に炉穴があり、炉穴や床面直上には土器・貝が散布していた。また、壇穴を埋めている土には炭化物・焼土・貝が含まれており、しかも薄い層をなしている。おそらく、住居廃絶後に廃棄場所となったのであろう。

SB02は隅円方形プランと推測される。

SB04は北に周溝があるけれども柱穴は6本ある。長軸方向への拡張の可能性もあるが、それでは幅が縮小する。並びも良いので1棟分と考える。隅円方形プランで6本柱という珍しい例である。あるいは地床炉をもつ土間構造の掘立柱建物であった可能性も高い。周溝は壁下端の痕跡かも知れない。

そのほか、SZ150下面では小穴が多数存在したが建物になる並びは認められなかった。

土坑のうちSK09・10・11には炭化物・焼土が含まれており、SB01・02に付属する廃棄物処理土坑であろう。

## B. 溝 II期からIIIa期初頭

SD02は明らかに上下に分かれる。下層は上部に黒色砂質シルトが堆積し、木材断片や貝が含まれていた。下部は黒色砂質シルトとベース土(青灰色シルト)の攪乱した層で、ベース面そのものが不安定になっていることから堆積層としての特徴だけではない印象を受けた\*。上層は灰色砂質シルトで遺物もあり出土していない。時期は特定できないが上部には砂層の堆積が見られた。

SD03は土層セクションでは重複している可能性が窺えたが、SD02ほど明確ではない。

この2条の溝は時期・位置とも並行しており、同時に掘削されたものと考える。その性格は、溝自体より溝間に焦点があると考える。すなわち、居住域と谷Aとの間にあることから、谷Aの水位上昇に対応した防水的性格と、「道」的な性格である。



第104図 63N区(南東から)

\*ベース面の不安定さは、特に西肩から溝西斜面にかけて面的に認められ、東側が安定しているのとは対照的であった。この不安定さについて、少なくとも遺構埋没過程中に生じたものではなく、後世の何らかの物理的压力かによって生じたものではないかという印象を持った。

## 29. 89 A 区 図版43~45

### A. 竪穴住居と土坑

重複が激しく、検出できたのはIV期以降がほとんどである。正方形プランが目だつのは、これらの住居がV期、VI期だからである。ほとんど貼床をもち、柱穴も4ヵ所確実に存在する。

SB08はV期で、63M区SB03と同様に掘形に幅の広い溝がある。SB09も幅が広い。

SB19はVI期の住居で、V期の住居群とは軸線が異なる。

SB41はIV期で、同時期の溝であるS DXIと軸線があう。規制されているのであろう。

SK68はIV期の土坑で、炭化物・灰・焼土が互層をなし、また土器も大量廃棄されていた。土器には被熱して変色したものがある。

V期・VI期の住居には貯蔵穴を有する例がほとんど無い。

### B. 溝

S DXはII期からIIIa期にかけての溝である。この区域では貝殻廃棄は目だたない。砂とシルトの互層が顕著である。

S DXIはIV期で、炭化物を含み有機分も多いが、61H区で見られたような大量の貝殻廃棄はない。しかし、獸骨などを多く含み、貝殻も腐食して遺存していないのかもしれない。

## 30. 89 B 区 図版46~48

### 上面遺構群

### A. 溝

S DXVとS DXVIIはV期、S DXVIはVI期である。調査区のほぼ中央で方形周溝墓S Z 1 6 2と関係があるように屈折する\*。

S DXVは幅不明、深さ約1.4m、S DXVIは幅約4.5m、深さ約1mである。溝の北側には排土を盛り上げたと推測されるベース土を含む土層がある。厚さ約20cmで、土壘というには程遠い。しかし、これだけの溝を掘削した排土にしては少ない。上部の削平はあきらかである。

S DXVIIは幅約3m、深さ約1.2mを測る。埋土は下部には黒褐色砂質シルトが堆積し、東部ではベース土の流入が見られた。上部にはS DXVI上層と同様の層位があり、VI期には溝状の窪地となっていたようである。

両溝間には上部に厚さ約10cmの盛土があるが、上述したように量は少なすぎる。最終的に溝に流入したにしても、当初掘削時には高いものであったろう。

S DXVIはS DXVを改修した溝である。底面下部にはS DXV埋土が遺存し、大量の土器群が出土した。埋没は、人為的にはVI期の土器廃棄に始まり、VII期まで土器廃棄が継続する。そのあとは無遺物層である灰褐色シルトの堆積となる。

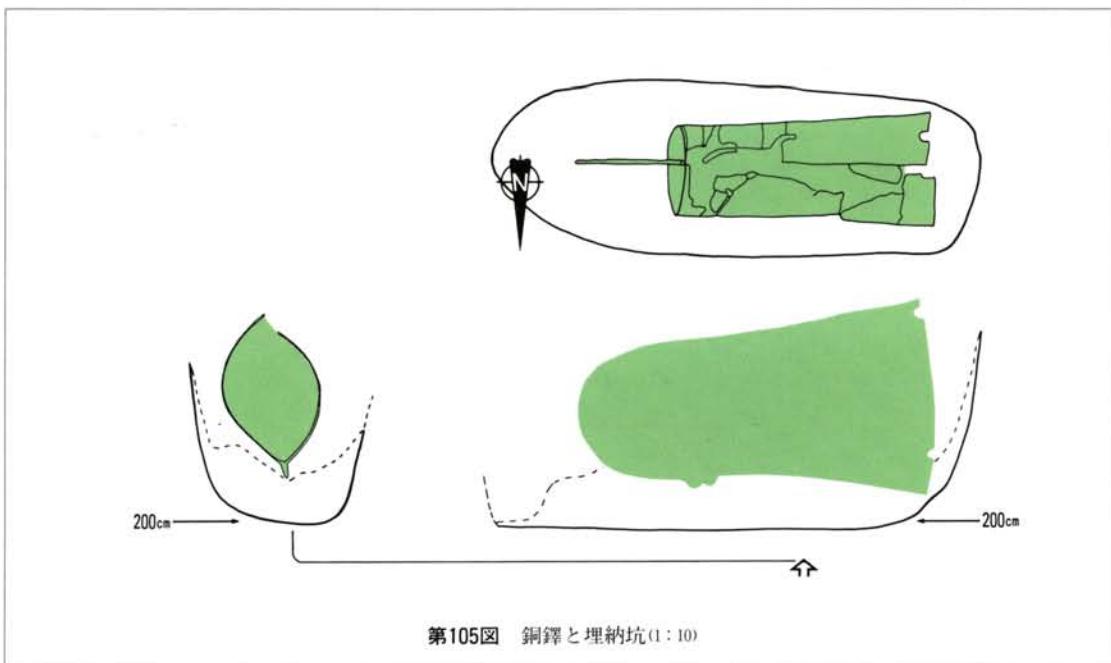
## B. 方形周溝墓

S Z 1 6 2は正方形プランで、ほぼ独立して築造されており、群は形成しない。南東に陸橋部があり、東周溝南端にはテラスが存在した。

主体部は明らかにならなかったが、墳丘にはベース土ブロックが顕著に認められた。周溝からは底面より浮いて各種土器が出土した。埋土は上下2層に分かれ、下層には黒褐色砂質シルト、上層には暗灰褐色シルトが堆積していた。土層セクションの観察では周溝を再掘削した印象をうけた。特にVI期の土器が含まれていることが注意された。

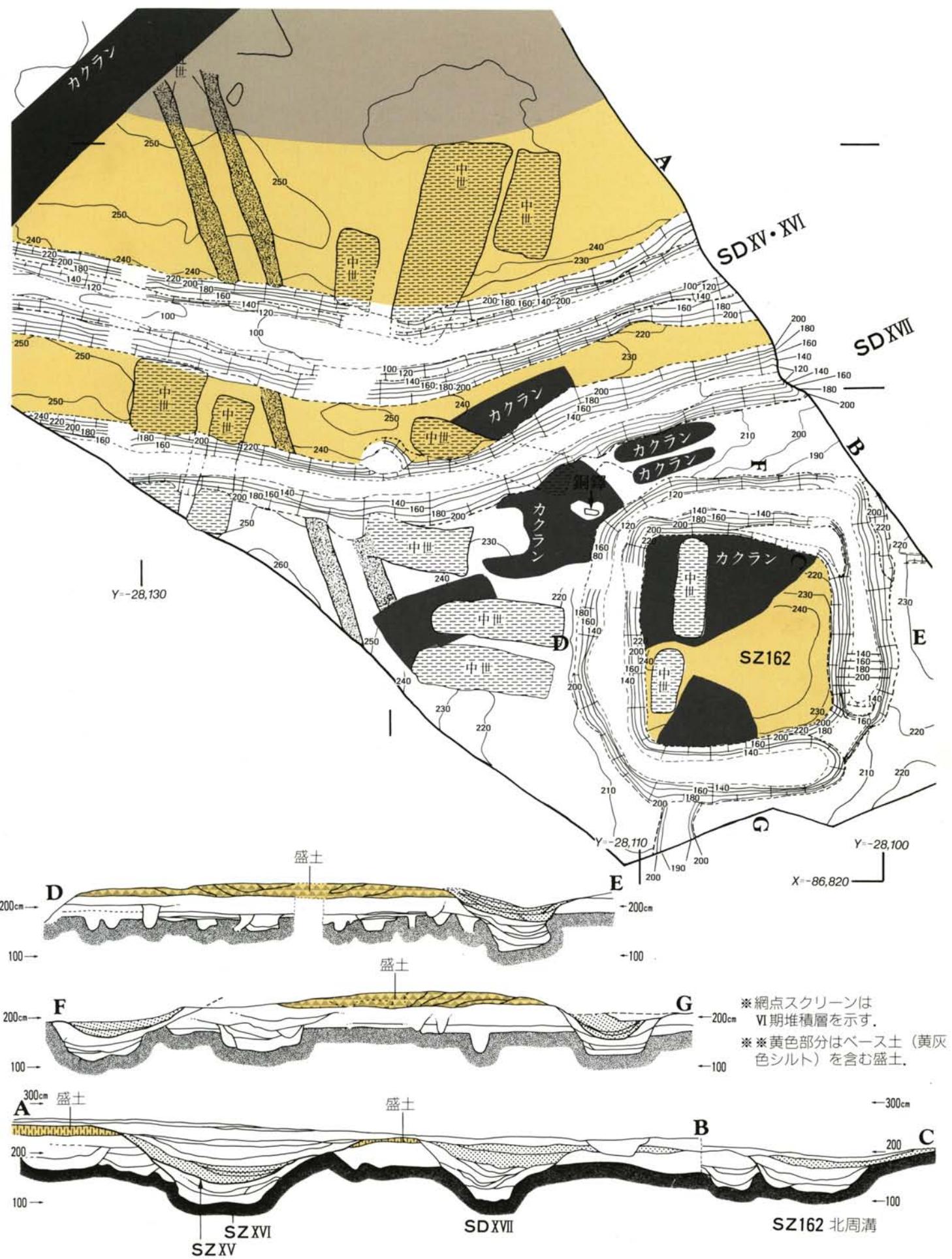
## C. 銅鐸埋納坑

長軸がほぼ東西になる $64 \times 22\text{cm}$ の長楕円形のプランで、断面はU字形を呈し、深さは25cmを測るが、銅鐸本体は坑底から5cmほど浮いて出土した。埋土はまわりの包含層(VI期)と同じ土で、埋納坑下部5cmは、銅鐸をうまくねかせるために土を詰めたものと考えられる。銅鐸の内部にも同様の土が詰められ、VI期の土器片が入っていた。



## D. 土 坑

SK77・78はVI期の土坑である。



第106図 89B区 上面遺構群(1:200)と土層セクション(1:100)



第107図 89B区 SZ162出土土器一部

## 下面遺構群

---

### A. 竪穴住居

II期 SB20は隅円方形プランでS DXVIIに大きく切られている。長軸方向への拡張がある。SB19も出土土器はないがII期の可能性が高い。SB04はSB03に切られ、IIIa期でも古相を示し、II期に遡るかも知れない。

SB01は、埋土がベース土の攪乱土であり、III期までの特徴を示している。II期に遡る可能性もある。SB10はSB01のような整地状況を見せていないが、すぐ西には旧地表が残存しており、これまでの事例で判断すればII期に遡る可能性がある。ちょうど中央にあるSK40はII期であり、これが中央土坑である可能性は高い。

SB12はII期、SB13もII期と推定される。下ってもIII期である。

IIIa期 SB21はSB20に重複し、一部の検出にとどまった。SB22は台形気味のプランを呈する。SB23も同様である。SB25は小規模で、北辺では層位の乱れがあり、周溝は明確ではなかった。軸線はSB22に一致している。

IIIb期 調査区北半部に集中している。

SB14は台形気味のプランで上層にはIV期土器の廃棄がみられた。SB08はベース土ブロックで整地され上部にSB09床面が形成されている。SB07はSB09よりは古い。

IV期 SB05は焼失住居で礫・焼土・炭化した編物が出土した。SB06はこれに切られている。南西部から延びる溝はSB06の周溝と接続しており、まるで排水溝のようであるが、性格は不明である。

SB15は下部にもう一面床があり拡張したものかもしれない。下部にある土坑SK25・32はIIIb期である。

SB16・17・18は辺の張り出しがあり、IV期の可能性が高い。

### B. 土 坑

a：炭化物や焼土を含む例には、土器を含まないために時期のわかる例が少ない。SK72はIIIa期で、焼土が多量に含まれていた。SK08はIV期で炭化物・焼土・灰が層を形成して含まれていた。SK05は上下二つの土坑の重複のようであるが、上部はIV期で灰を多量に含み、下部はベース土の攪乱土を埋土としている。これらから出土した灰のうち、粒子が明瞭なものはほぼ植物ケイ酸体からなり、木材などを燃やしたものとは異なる。

b：土器廃棄の例には、SK06・17・68がある。SK06はIIIa期の土器とIIIb期の土器が密に出土し、異なる時期の土器の一括出土の典型となっている。SK17は埋土上部からIV期古相が大量に出土した。SK68は上層はIV期だが、下層にII期の土器群が含まれていた。

c：上記とは別に、IIIb期のSK11ではベース土の攪乱を埋土としている。ベース面が高ければ土坑の深さに対応してベース土ブロックが形成されることになるが、それでも包含層を埋土とするものもあるから、埋め方（整地方法）の違いとして注意する必要があると考える。

この、ベース土の攪乱を埋土にするということは、土坑の用途にも関わることである。土坑が「穴」

として開放されている期間の短いことを示しているのであろう。

これら以外は多くが包含層（黒褐色シルト）を埋土としており、遺物に特徴もない。有機物は廃棄されれば分解して残らないことも考えられ、竪穴住居との位置関係を検討する必要がある。

\*埋納坑の時期について石黒は、これまでいくつかの紹介文で弥生時代後期末としてきたが、ここで2、3の問題点を提示しておく。

埋納坑の時期についてわれわれは、当初極力層位関係を重視して決定した。すなわち、「近接する方形周溝墓や環濠は山中期（本書のⅤ期に相当する：筆者註）に属すこと、それらを埋める包含層の二次堆積のさらに上部を埋める明灰色シルト層との漸移層に続くと思われる層を埋納坑が切っていることなどから、山中期を遡ることはないと考える。そして、より近接する方形周溝墓の溝上半を埋める明灰色シルト層下部から欠山期（本書のⅥ期に相当する：筆者註）の土器が出土しているので、埋納坑の年代はそのあたりにあるものと推測する。」と解釈した。しかし、そのなかで発見当時から気がかりだったのは、銅鐸埋納坑、2条の環濠、方形周溝墓3者の位置関係であった。

問題となる点は

①S DXVIIを屈曲させないとそのままS Z 1 6 2北溝に達して重複する。

②環濠は銅鐸埋納坑付近で屈曲するが、溝はそのまま直線的に延びないで方形周溝墓の北でまた南にもどる。

③S Z 1 6 2は出土土器が環濠出土土器よりはやや先行する印象をうける。同時としてもそれは土器編年上の同時であって遺構の実時間では逆転する余地を含む。

④環濠と方形周溝墓の関係では、朝日遺跡では環濠が新しい場合には方形周溝墓の溝に重複させて通すことは何ら珍しいことではない。かえって、方形周溝墓の溝を避けることが珍しい。

つまり、S DXVIIは方形周溝墓を避けたのではなくて、銅鐸を避けたのではないかと思うのである。そして結果的にはたまたまその延長線上に方形周溝墓があったにすぎないのではないか。もちろん、だからと言って銅鐸と方形周溝墓の時間的関係が確定できたわけではない。銅鐸の製作年代はⅣ期末からⅤ期初頭である可能性もあるから、銅鐸埋納が先になるかも知れない。しかし少なくとも、銅鐸の埋められていることが確實に伝承される期間内であれば起こり得るであろう。

このように言うと、これまでの紹介文での立場との相違が問題となるけれども、それもまた可能性としてあると考えている。

## 31. 89D区

25平方メートルという狭い調査区である。ベース土が覚乱状をなす整地土を埋土とするⅢ期以前の竪穴住居2棟を検出した。注目される遺物には住居外の包含層下部で出土した銅鋤片がある。

# 第4章 古墳時代



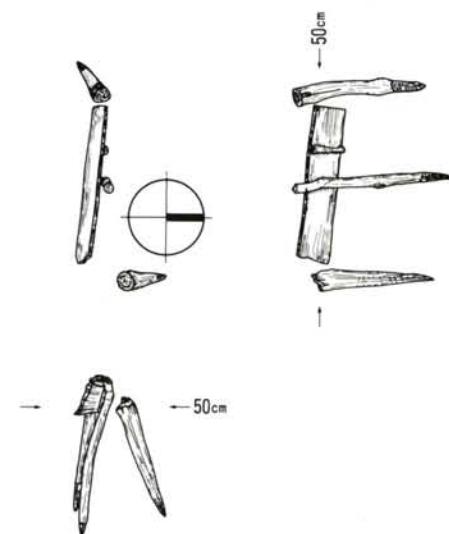
ここでは、調査区ごと個別に説明するほどの遺構数があるわけではないので、微高地単位で西・北・南・東まとめて説明する。

## 1. 谷A内の遺構

61H区SX03 杖と横板の構築物である。本来は東西にさらに続く護岸施設の一部であろう。出土位置・標高からみておそらく河道IVに対応すると考える。南側に対応す



第109図 61H区(北地区)谷A  
SX04(1:40)



第108図 61H区(北地区)谷A  
SX03(1:40)

る遺構はなかった。

61H区SX04 河道を横断する杭列と、杭によって打ちつけられた丸太である。多量に集積した流木群(若干の木製品を含む)下から検出された。流木は杭列の両側にあり、杭列のために集積したものではない。杭列は流木を集めるほどのものではなく、水量の低下によって取り残されたなど別の原因で集まつたのであろう。杭列の役割

は不明である。

谷Aの河道は、おそらくⅦ期末にはかなり埋没が進行し、また水量も低下したことが関連する遺構の状態から推測できる。その場合、60E区では他の地区には対応しない河道が観察されているので、弥生時代から続く流路の衰退と新しい流路の形成があった可能性が高い。県教育委員会調査区のうち最北端では新しい時期の河道が検出されており、朝日遺跡付近全体の自然流路の走向に変更が生じているかもしれない。

谷Aは古墳時代後半期以降は遺物の出土もなく、また粘土やシルトの堆積が進行するけれども、61A区では上部で厚さ約10cmの砂層が検出され、また面的に続くことから一時期流路の形成があった可能性が高い。遺物を伴わないので時期決定は難しい。土層セクションでは中世土塙（13世紀～14世紀）の切込み面より35cmほど標高が低い。

## 2. 西部地区

北東から南西に向かう溝が検出されている。包含層最上部からⅦ期の土器（甕を含む）が出土しているので、この時期には墓域ではなくなっていた（水田か？）かもしれない。

## 3. 北部地区

61E区SD21・22・23は完全に埋没しきらないでⅦ期まで窪地状をなしている。水流があったとしてもそれは水路と言うほどではなく、地表の水を集めて流す程度の間欠的なものであろう。ヤナはすでに崩壊している。

## 4. 南部地区

**61A区・C区** SDⅧ上部の砂層は自然流路の堆積層と考えられるもので、61C区南部でSDⅧと走向がずれてSZ115南溝を貫通し、県教育委員会調査区においても方形周溝墓周溝に重複して調査区外へと続いている。谷A河道の氾濫による現象であろう。

**61H区** 包含層上部を約10cm掘り下げた段階で土器廃棄の集積とそれを伴う落ち込みをいくつか検出した。平坦部での土器集積はⅥ期土器を中心とし、黄灰色粘土を埋土とする落ち込みへの土器廃棄はⅦ期末を中心とし、時期と状態の差は明確である。両者とも住居と認定した。

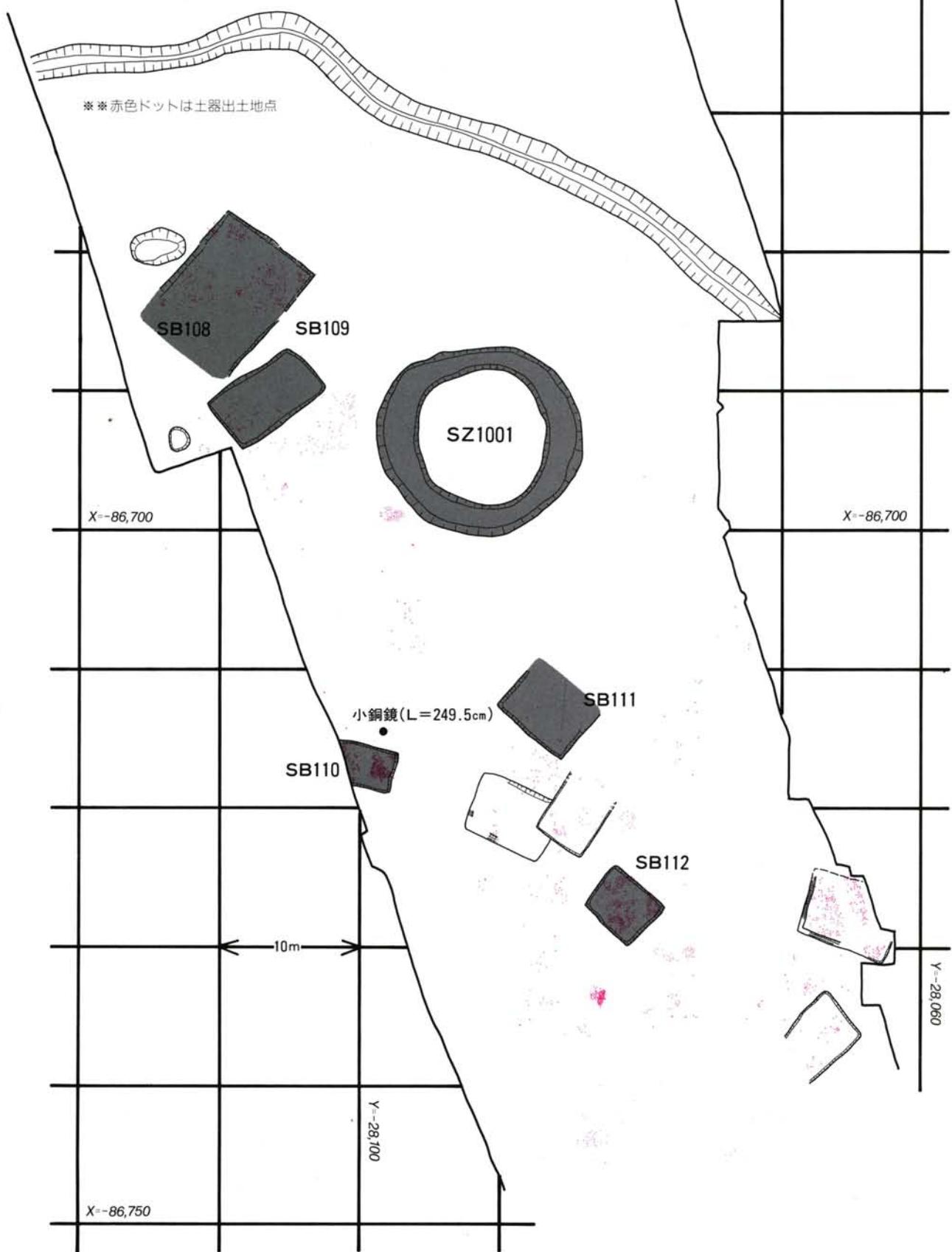
SB109からは、床面と考えられる炭化物薄層面直上より完全なS字状口縁甕が出土した。他の竪穴住居も認定根拠は炭化物薄層面の有無であるが、遺物の多くは推定床面から遊離している。

SZ1001は5世紀末の円形周溝である。周溝は深さ20cmなどを検出したに過ぎない。溝南部から須恵器甕が潰れて細片となって出土した。本来正立に置かれていたものを考えられる。西にある検見塚との関係が問題となる。

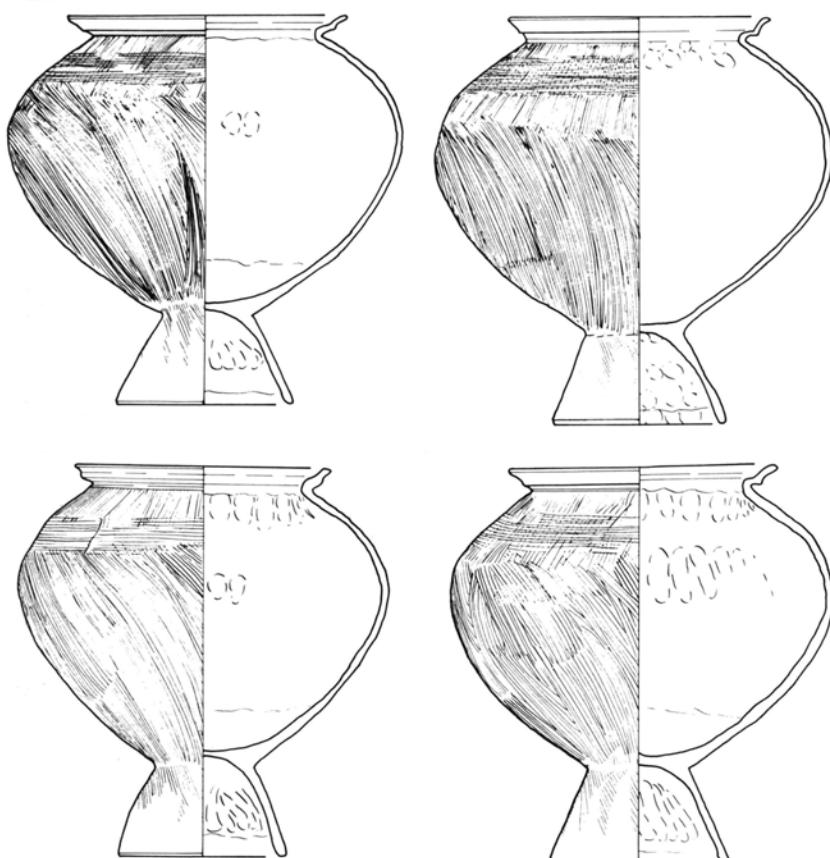
**63B区** 住居を1棟検出した。SB05は1辺6.8mの正方形で、深さ約50cm。埋土は自然埋没で、黄灰色

第110図 61H区 上面遺構群(1:400)

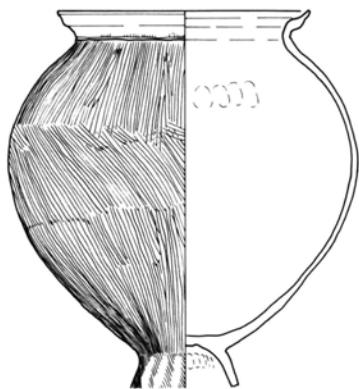
\* アミはVII期以降



61H区  
SB109



89A区  
SB30



第111図 壺穴住居出土土器の一部(1/4)

粘土が上部に堆積していた。床面には貼床があり、その上に土器群と砥石が遺棄されていた。甕は出土していない。土層セクションでは周堤の存在が窺えた。南西にある弥生時代後期（V期）の方形周溝墓 S Z 1 6 0 北周溝埋土上部からはS字状口縁甕が出土している。先の壺穴内出土土器では小型丸底壺が目だつことは対照的である。

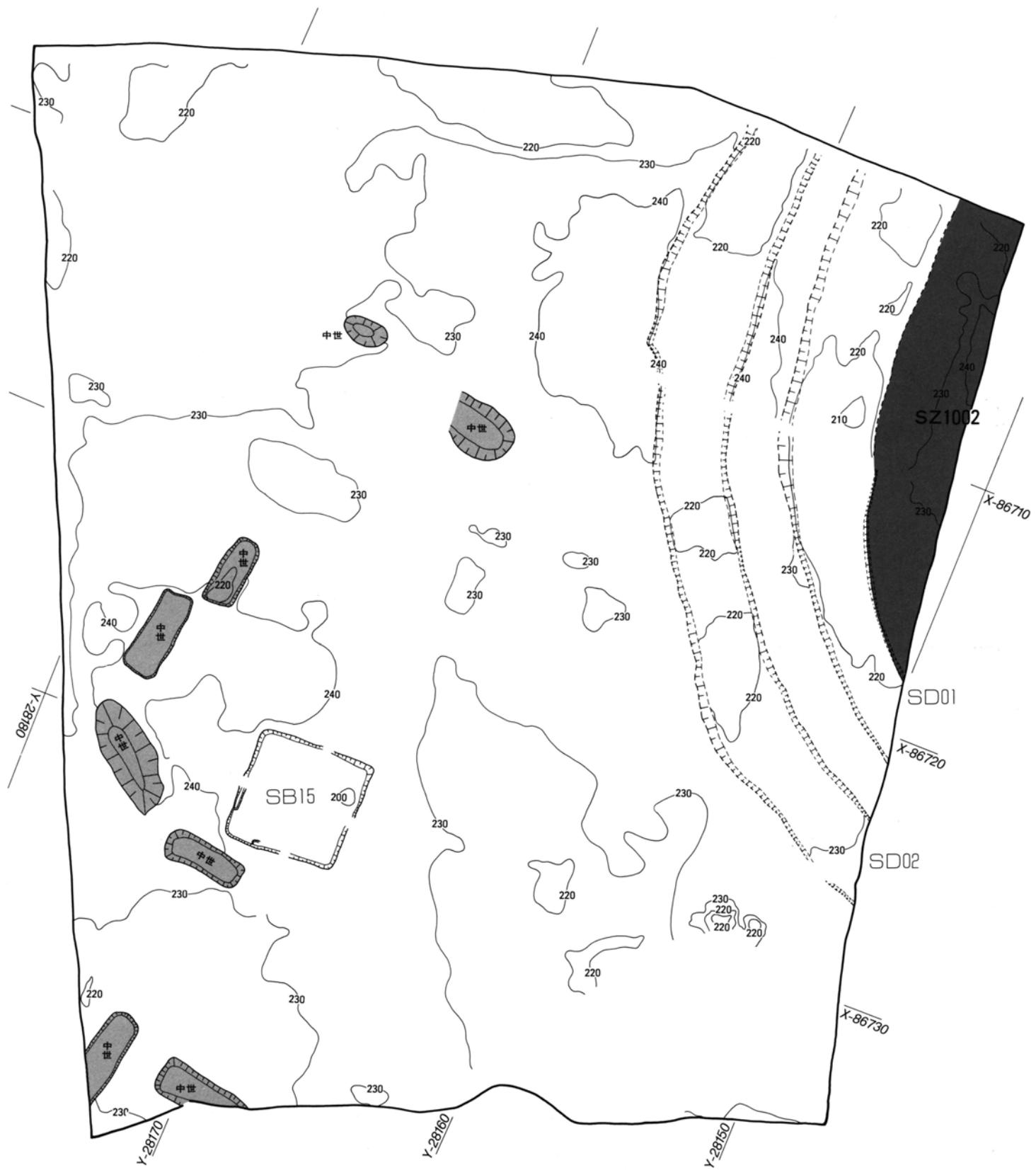
63G区 弥生時代包含層上面で検見塚を中心として弧を描く2条の溝(S Z 1 0 0 2)、1辺4.6mの正方形プランの壺穴住居SB15を検出した。

2条の溝は、外側の溝(SD02)幅約3m、内側の溝(SD01)幅約4m、溝間約4mを測る。両溝とも浅くて、その平均は25cmである。これら弧状溝の円周を正円として復元すると、内側の溝内周で径36m、外溝外周では53mという規模となる。溝からの出土遺物はほとんど無いが、付近で出土した埴輪片や61H区の円形周溝 S Z 1 0 0 1 の時期から考えて、5世紀後半から6世紀初頭の間におくことができる。そして S Z 1 0 0 1 と同じ性格の遺構、つまり墳丘の削平された古墳の痕跡と考えられる。

63J区 埋土上部に黄灰色粘土が堆積する住居を1棟検出した。SB12は1辺約4m×3.8m、深さ約40cmと小規模である。床面の北東柱穴脇の小穴からVII期末の高杯部と完全な小形器台が重なって出土した。

63M区 埋土が黄灰色粘土の深さが約40cmの落ち込みを検出したが、壺穴住居とは認定できなかった。

89A区 埋土上部に黄灰色粘土が堆積する壺穴住居を1棟検出した。SB30は隅円長方形プランで5.2m×3.9m、深さ約50cmを測る。床面はベース面に達していない。検出面で比高約10cmの周堤を検出した。本来はさらに高かったであろう。



第112図 63G区 上面遺構群 (1:200)

## 5. 東地区

**61N区・P区** 調査区東部で弥生時代中期（III a期）のS Z 2 2 9・S Z 2 4 4両方形周溝墓東周溝に重複する溝状の遺構（SD X IX）を検出した。県教育委員会調査区でも連続部が調査されており、砂層と流木の堆積が観察されている。谷A河道氾濫による出水によって方形周溝墓周溝のような低い部分に水流が集中して流路が形成されたか、周溝間を掘削して人工的に流路を設けたか判断は難しいが、溝は直線的ではなく方形周溝墓の周溝に沿う形で蛇行しているので、あまり計画的なものでは無かろう。

**61T区** 弥生時代中期（III b期末）の大形方形周溝墓S Z 3 0 1北周溝埋土上部から多量の土器が出土した。壺・甕など器種がそろい炭化物なども出土している。他の周溝の調査が十分でないので確定できないが、このようなあり方から当初、この「溝」は「居館の溝」ではないかとも考えたぐらいである。方台部は1辺約35mで居住区画として狭いものではない。

これら土器群はいずれも生活痕跡と考えられるのであり、県教育委員会調査の「S A 0 0 1」がすぐ北に位置するのでおそらくそれとの関連であろう。なお「S A 0 0 1」はVII期の大形方形堅穴住居である。

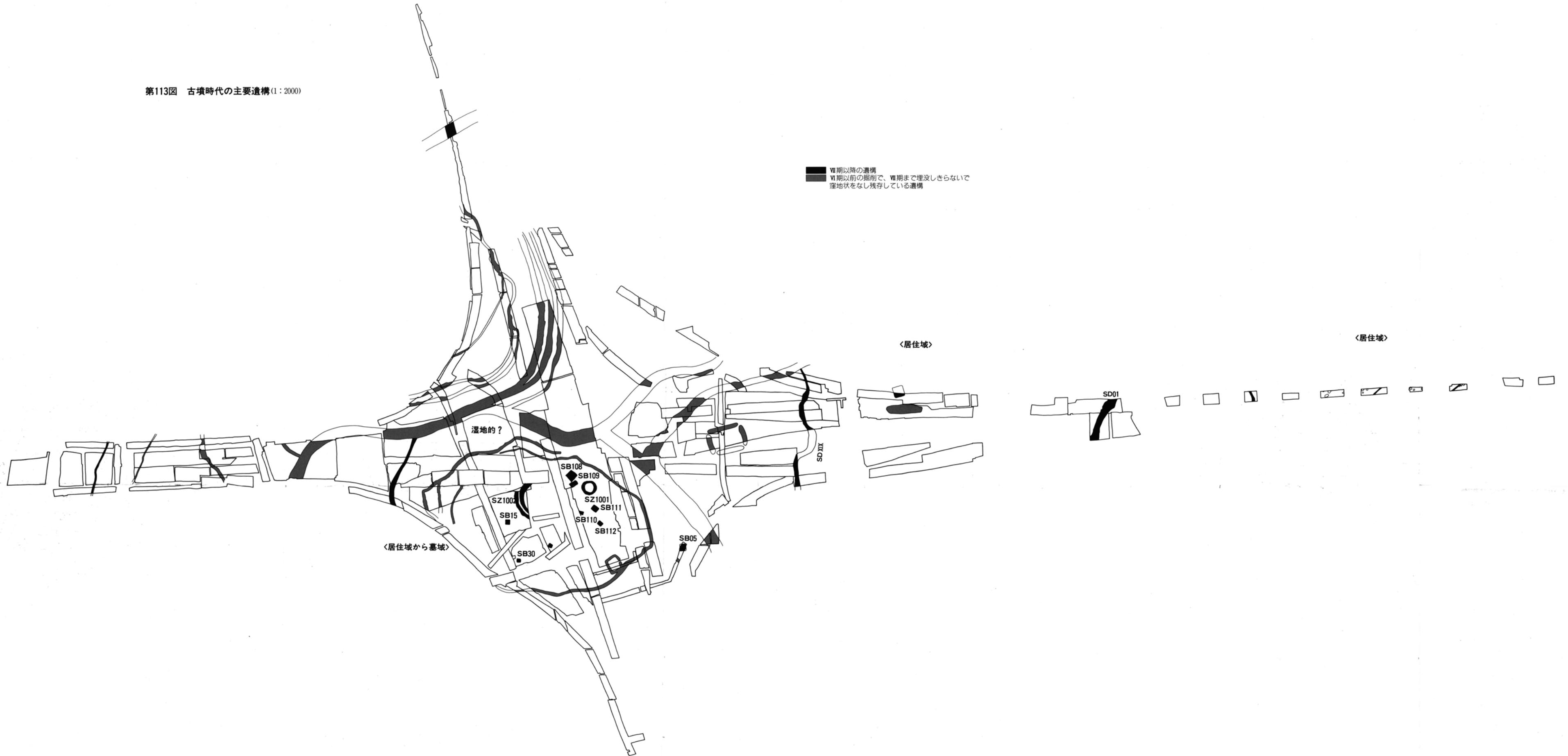
**62B区** 調査区東部で近世以降の溝に切られる古墳時代の溝（SD01）を検出した。検出時での幅約10m、深さ約1.8mを計測する。埋土には新旧の切り合い関係を示す部分があり、弥生時代後期まで遡る可能性がある。すなわちこの溝以東にひろがるVI期以降の居住域との対応が考えられる。

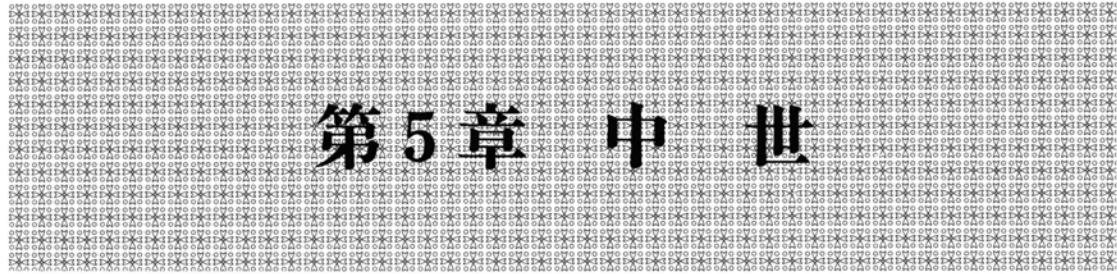
新であるSD01-2では底面から20cmは砂層が堆積し、それ以上はシルトまたは粘土の堆積となっている。この溝の続きを検出した県教育委員会調査区では下部からVII期末の土器が出土している。

幅が10m、深さが2m以上と推定されるこの大溝は、VII期以降は水流の低下によるシルト・粘土の堆積となっていくが、こうした変化は60E区を除く谷A河道IVがVII期には植物遺体やシルト層の堆積によって活動の低下・終息することに対応すると考えられる。61E区SD21・22・23、SD X IIIなどが埋没するのもVII期末であり、谷Aの動向と関係している。このような関係は水域としての連続性を示すものとして、それら溝が谷A河道から分流した水路である可能性が考えられる。そして、規模の大きなことは導水だけではなく交通運送手段としての運河の役割をも考える必要があるだろう。

**62C区～J区** VII期単純の遺構は62G区に集中している他はVII期からの継続である。調査面積は狭いが居住域であることはまちがいない。

第113図 古墳時代の主要遺構(1:2000)





## 1. 土 坡

谷Aを除く西・北・南の各地区と、東地区の一部で検出した。しかし、遺物を伴う例がきわめて少ないことから時期決定できた例は少ない。

土坡は長方形プランと正方形プランを基本としてその変形したものもある。軸線の存在は明かで、東西南北の方角線が抽出できる。この点に関わって、分布上の全体的な粗密は特に認識できないのに対し、61H区・89B区では方角による単位の形成が窺える。

方角単位aは北東に開くコ字形で幅約18m、方角単位bは南西に開くコ字形でこれも幅約18mを測る。両者とも閉じるかどうかは確定できない。

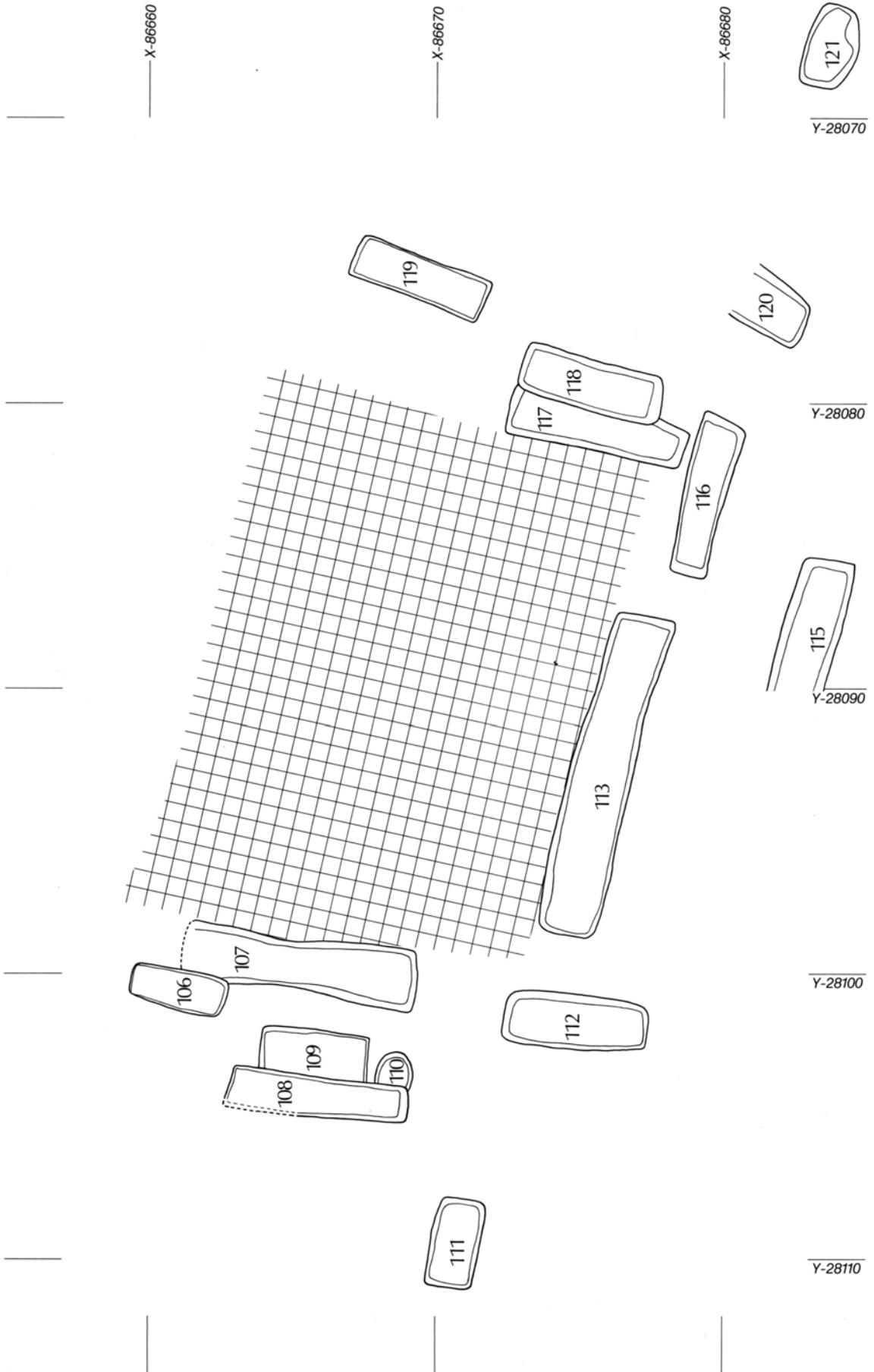
通常は、埋土は黄灰色あるいは灰褐色のシルト・粘土と弥生時代包含層（黒褐色砂質シルト）のブロックがまざりあう擾乱土であるが、89A区の方角単位bでは大形の89・91が珍らしく自然埋没であった。89では埋土の灰色粘土からヒシの実が出土した。おそらく周辺は湿地的であり、漂着したのであろう。

遺物を伴う例は非常に少ないが、方角単位bでは内部にある97・99から山茶碗と小皿が出土した。97では土坡の東部から坡底より5cmほど浮いて山茶碗と小皿が正立て、99も土坡東部から山茶碗が5cmほど浮いて正立て出土した。

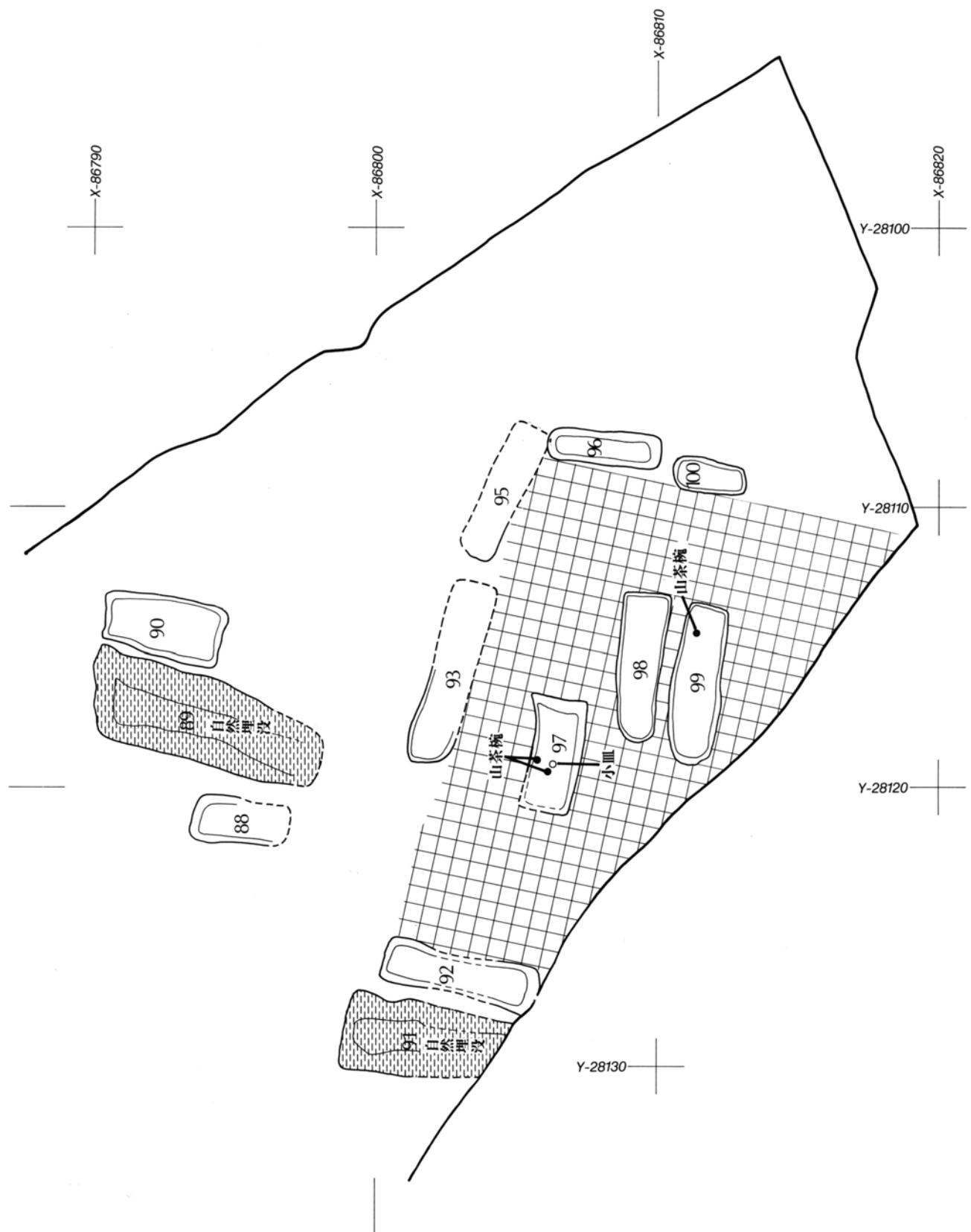
これら多数の土坡が掘削された時期にこの地域が湛水する環境であったことはヒシの実が自然堆積層から出土していることから窺える。これまでの名古屋環状2号線関係諸遺跡の調査において同類の遺構の検出があり、「墓」である可能性も説かれている。おそらく、これらの土坡は墓であり、無住の荒れ地であったこの区域が墓地として利用された可能性は高い。その場合には、西方600mに位置している朝日西遺跡との関係が問題となる。

## 2. 谷

この時期谷Aは、面的には検出できなかったけれども土層セクションに土坡の存在が確認できるので、ほとんど埋没していたと考える。それに対し、谷Bは地表面より2m内外低い窪地であったことが山茶碗の出土レベルから推定でき、このことを示すかのように61H区土坡群は東西の軸線がやや南東に振れている。おそらく地表の水を集め水域として沼澤状の区域であったのであろう。



第114図 61H区 中世土塙群 方角単位 a (1:200)



第115図 89B区 中世土塙群 方角単位b(1:200)

## 第6章 その他

近世以降の遺構は西・北・南各地区では明確ではない。89A区では水田に関わるものと考えられる南北方向に平行する2条の溝が検出されたにとどまる。

それに対し東部地区ではやや密度が高い。61N区では南北に直進する溝が検出されたほか、62B区調査区東部で杭列を伴う幹線水路と推測される溝とそこから分流する溝、西北西から東南東に走る幅1.6mの溝とそれに平行する輻状の溝が検出されている。また62C区以東では水田（造成）によると考えられるベース面の削平が確認されている。

全体的に東部での近世以降の遺構が密である傾向を示すが、これは近世集落の「小田井」に近づくからであり、それに対し西部は集落の無い水田の広がる区域であったことによるのであろう。

# 第7章 分析と若干の考察、そして展開

## —弥生時代を中心にして—

朝日遺跡の整理・研究はまだ始まったばかりである。遺構に関する説明は行ったが、遺物などを含めての全体像の提示はこれからである。遺構は遺物と共にあることに重要な意味があるとするなら、本書に十全の意味は与えられていないことになる。

第6章までは記載の都合上、断片的な説明に終始した。いわゆる事実の説明である。そこで、以下では断片的資料を少しでも全体に関連づけるべく、鍵となる項目ごとに要約的に整理する。ただし、細部にわたる検討は今後に予定される遺物の検討を経なければならないので、以下では全体的様相について概観しておくにとどめ、詳細な検討および比較研究は「第IX部 総論」(1994年刊行予定『朝日遺跡V』収載)において新たに行うこととした。

### 1. 遺跡の地表面

朝日遺跡の最終地表面において標高260cm以上は、中世から近世・近代にかけて削平されている。そのため、存在が想定される土壘など地表面に突出していた遺構は検出できることになる。

地表面は時間的変化に対応したその時々の凹凸のある遺構面とそれ以外の平坦面とからなる。その自然地形としての性格は人間活動の最初期こそ保持されたものの、時間経過とともにすべて人工的地表面となる。

我々が「ベース土」と呼ぶ黄灰色シルト面は、初めて朝日遺跡周辺に人間が接近した時点では地表に露呈することなく、おそらく黒褐色シルトに覆われていたものである。それが地表の攪乱(生活痕跡の累重)によって、ある部分は黒褐色シルトが失われてゆきその下の黄灰色シルトが遺構構築面として、つまりベース面として我々の前に姿を現すことになった。黒褐色シルトの遺存区域は決して広くないが、多くは偶然遺構が構築されないことによって保護された。だいたい上部に盛土が観察されることからみて、景観的には隆起部を形成していたようである。

我々が包含層と呼ぶ地層は砂質シルトで、黒色から黒褐色・茶褐色というように鉄分の酸化度ともからんで色調は変化している。包含層は基本的に攪乱土であるため、深く掘られて黄灰色シルト下の砂層まで達している場合には、含まれる砂の量が多くなり、砂質シルトではなく砂となる。

これら包含層は遺構掘削という垂直方向の攪乱を主な原因として形成される。そして、地点によっては61D区のように黒褐色シルトが面的に遺存しているところもあり、そこでは包含層が水平移動によってたらされたと考えられる。この点は、遺存している黒褐色シルトの上面標高の比較から、当初起伏のあった地表面が人工的改変によって平坦に均されていったことが窺える。

地表面に関わって重要なのは、谷A周辺や61H区 S D X南岸の侵食面の存在とは対照的な現象の存

在である。例えば、61E区南端ではIII b期の居住域が検出されたけれども、標高が低いにも関わらず侵食は受けていなかった。包含層の堆積がベース面の露呈を防止したと言うこともできようが、谷Aに平行して掘削されている溝の存在も無視できない。この点で61H区SDX北岸の状態が注目される。このSDXでは、南岸が平坦面を形成するほど侵食されているのに対し、北岸にはそうした痕跡は皆無であり、黒褐色シルトの遺存および遺構分布の散漫さにも関わって、北岸に盛土が行われていた可能性を強く思われる。

すでに述べたように地表面が人工的であることは、それが平坦であれ起伏が存在するのであれ、いずれも人工環境であることに変わりはない。

## 2. 住居

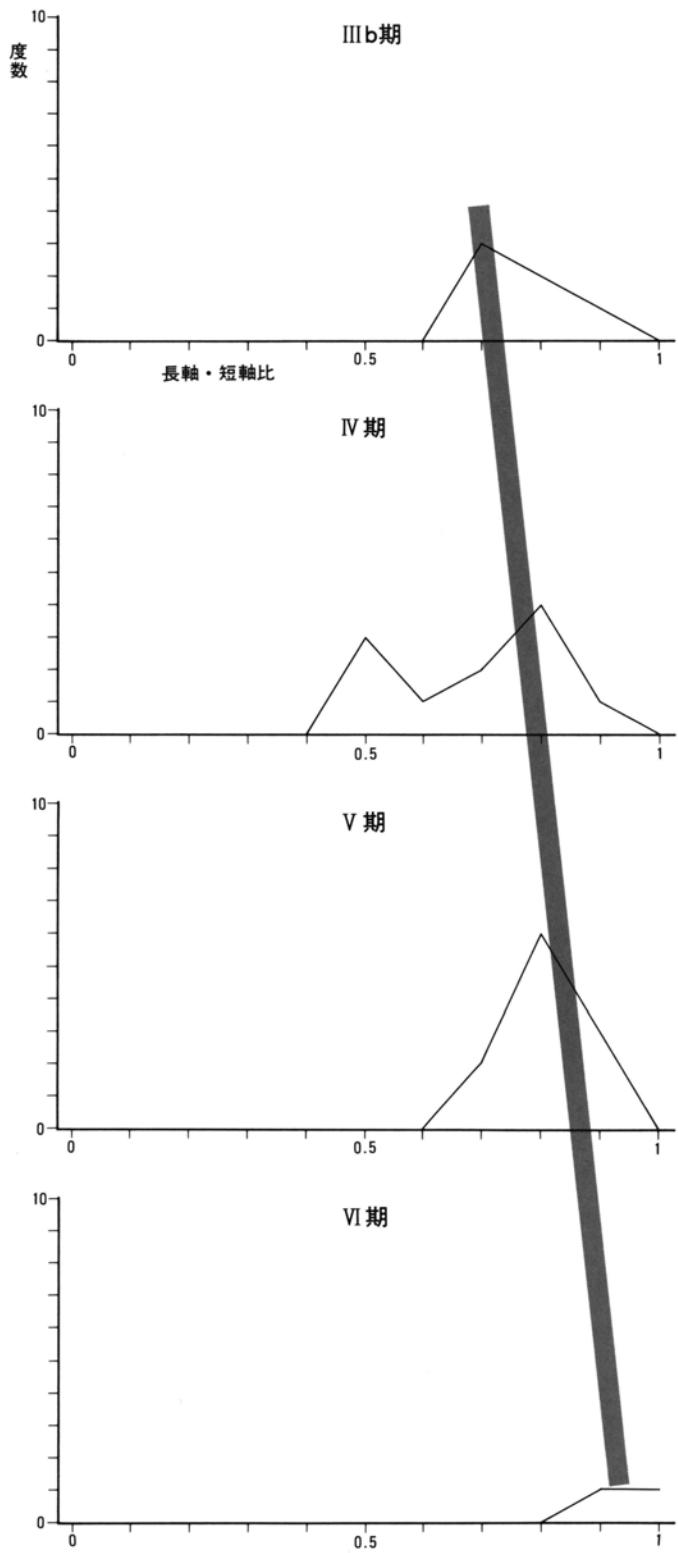
住居には竪穴住居と掘立柱建物がある。前者を竪穴建物、あるいは半地下式建物と呼ぶむきもあるが、ここでは用途（機能）を含めて用語上の問題は問わない。

### A. プラン・規模

**竪穴住居** 円形と方形の2項を基本とする。後者には変異がある。III期までは、長方形プランとともに、短辺の一方がもう一方よりも短い台形気味の方形が存在する。IV期は小判形ほど胴は張らないものの、各頂点（隅）の円みが強く、極めて定形的である。V期以降は長軸と短軸の比が小さくなり、正方形も出現するようになる。住居の拡張を示す周壁溝の多重する例は円形に顕著である。

規模は、II期・III期では円・方形問わず径2m前後という小規模例が存在する。大形はIV期にある。V期以降は全体的に規模の縮小と平均化が特徴的となる。

柱穴は、III期までは本数も定まらず特定するのに困難である場合があるので対し、IV期以降は4本



第3表 方形住居長短比度数分布

柱が主となって検出も容易である。上屋構造の差異に関わるのであろうか。

**掘立柱建物** 遺構の密集する区域では検出が困難であるため、いきおい例数は少ない。

II期は東微高地の掘立柱建物群が典型的である。我々の調査では61N<sub>2</sub>区で大形方形周溝墓下から1棟検出したが、周辺ではすでに県教育委員会調査においていくつか検出されている。梁間2間、桁行3間以上と梁間1間、桁行2間の2棟を1単位として、少なくとも3単位の存在が明かとなっている。他、各調査区に散在する。III期まではプランに竪穴住居と同様の台形傾向が認められる。

III期は特定できない。61E区南端の谷A北岸部でII期からIII期の掘立柱建物群が存在している。

IV期は上述のII期と同様に東微高地に群が存在する。『報告書』によれば、南北に廂をもつ主棟と梁間1間の副棟が展開する。61G区で検出した大形掘立柱建物はIV期である可能性が高い。

V期は61H区南地区1で大形掘立柱建物1棟を検出した。

## B. 群と配置

住居は単独で存在することではなく、基本的に群在する。時期ごとの分布は別図に示してある。県教育委員会資料も含めて概観するなら、IV期を境にして大きな変化がある。

**II期** II期は南微高地・東微高地とともに住居跡群を検出しており、後者に特長がある。61M区・61P区では竪穴住居が中心で、しかも方形プランが卓越している。円形プランは61N<sub>1</sub>区北部で確認されているが（おそらく県教育委員会調査区を含めてもそれほど多くはないであろう）、どうも方形プランとは混在しないようである。そして、さらにそれら竪穴住居と区域を異にして掘立柱建物群が展開する。住居構造の差異が分布差に連関している観がある。

南微高地では錯綜する遺構のために掘立柱建物の分布を明らかにすることはできなかった。竪穴住居は、東微高地のような床面プランの差異に基づく分布差はそれほど明確ではない。円形プラン群、方形プラン群は境界をもたず漸移的に移行する。従って、両形プランを含めた混在群を認めるこができる。

東微高地では明確でなかった分布の持続に関しては、円形プランには周壁溝が4条めぐるものがあり、方形プランの2条に対してより固定的である。しかし、それでも60B区SB03・04の関係のように、拡張住居と非拡張住居とのセットがあり、〈定点としての住居〉と〈移動点としての住居〉を区別する必要を示している。

分布の持続は上述のような定点としての住居を中心を形成することによって安定するものであり、これまでのところ方形プランは定点とはなりえていないようである。方形プラン群は絶えず移動する点として遊動している。ただし、61P区に特長的に見るように、竪穴住居群が群として軸線を共有（相互規定）していることは重視してよいであろう。

**III期** 東微高地の居住域が移動した以外、基本的にはII期との差異はない。前半と後半では集落としての様相に変化があると予想されるけれども、個別的に変化があるかどうかは資料的制約もあり明かではない。

**IV期** プランは円形が消え、隅の円さが目だつ方形（胴張隅円方形）プランに限定される。南微高地ではほぼ竪穴住居群が主となり、東微高地では上述したような掘立柱建物群が竪穴住居を僅かに伴いな

がら一角を占める。

南微高地では、61D区・61H区北地区などにおいて周壁溝の著しい重複例が検出されている。個別に時期決定することは困難であるけれども、それらが方位性を有する周壁溝群であることから時間的に近接していることが窺われる。だとすれば、激しい建て替えがあったということになる。

方形プランでは、通常建て替えの連続性は把握できない。拡張は連続として認められるものの、主軸が変化すれば連続性の根拠は低下する。したがって、61D区・61H区北地区例のように主軸が一致したまま周溝が錯綜する例は逆に特異でさえある。このようなあり方は、通常の住居構築例から大きく逸脱するのである。ある意味では、こうした区域も定点であることを示していることになる。すなわち、III期までは拡張する円形プラン住居に中心点が設定されていたのに対し、円形プランの無くなつたIV期では、住居ではなく区域に中心点が固定され、そこで連続して竪穴住居が構築されたのである。おそらくその反復は短期に繰り返されたものと考えられ、通常の集落での生活（日常的性格）ではなく、別の意味（非日常的性格）が与えられていた可能性がある。

**V期** IV期までの住居群のような広範な分布は窺うことができなくなる。床面高度の上昇によって検出できる住居数が減少するということもあるけれども、遺物の分布そのものがIV期までの範囲から縮小して、後に環濠が形成される範囲内に限定される。そして、環濠構築後にはその範囲はさらに縮小するようで、例えば63J区や89A区ではV期住居が検出されているのに対し、その南の63L区・89B区ではV期の住居はほとんど検出されていない。おそらく、環濠構築とともに内部構造が形成され、環濠集落では環濠→環状空白地→住居群という年輪状の空間構成が採られた可能性がある。

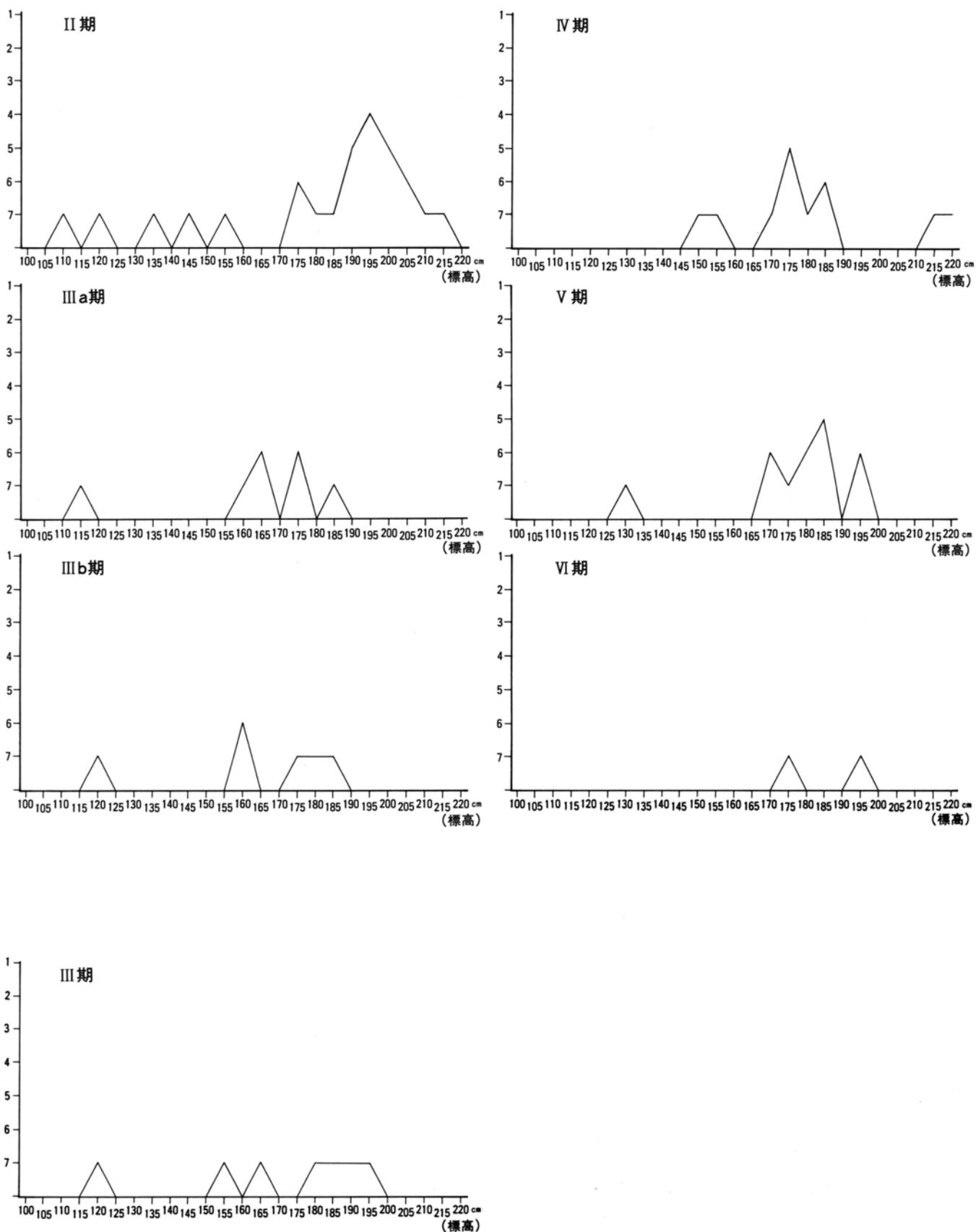
**VI期** V期以上に住居跡の検出数が少なく検討することは難しいけれども、南北微高地の居住域としての継続性とは別に、かつての墓域Bの一部が居住域化するという大きな変化がある。そして東微高地では東部への居住域の展開もみられ、散漫な中に広域化する傾向が窺える。

どうもそれまでの配列に密度の濃淡が窺えるような集村的景観から、散村的な景観へ移行したようだ。

### 3. 集落の形式

朝日遺跡は、II期に環濠を造成する以前は散村的で、特にどこが中心と言うわけでもなく、住居形式差によるグループがいくつか分散的に並存する状態であった。それが、環濠造成と集住の開始によって居住域の外縁が確定しただけでなく、居住域の展開に密度の差ができた。つまり、環濠（大溝）で囲まれた範囲は密度が上昇することになったのである。

II期になって初めて外縁に結界を設けることになる北微高地の居住域であるが、その囲み（囲郭）の全周は明かでない。それでも南部と東部の状況を見ると決して単純な外郭線ではないことは明らかだ。南部（60A区・60B区・61A区）では谷Aに並行して南微高地北縁を東西に横切る溝がいくつの小区画を形成して、溝間の隙間や陸橋部を通路的部分としながら配置している。東部（61E区）では、現状で（IIIb期に下る可能性も高く）未確認であるけれども方形区画を形成する部分が内側の大溝に取り付く様子を見せており、また別に平行する溝が東方へ延びるという、外郭が多少あいまいともいえる部分を



第4表 住居底面レベル度数分布

含みながら空間として形成されている觀がある。

現状の知見では南微高地に環濠が存在する可能性は低いが、SDXのような大溝の存在は気にかかるところである。SDXは南微高地を東北東から西南西方向に走る溝で、居住域を分割する条濠的な存在である。ところが、溝掘削に際して生じる堆土は、状況的に見て北側に盛られている可能性がきわめて高く、谷地形との関係などからこれを囲まれた部分とすることも可能なのである。つまり、朝日遺跡のII期居住域はそれぞれの単位がなんらかの形で区画（居住区）を形成しているのである。SDX以南についても63B区SD01のように断面逆台形の大溝が存在し、これについて特に盛土の状態を確認できたわけではないが、SD02のような並行する細い溝の存在から「柴垣」的な構築物が並行して存在する可能性がある。

このように、南微高地には分割単位（居住区）の境界となる溝がいくつか造成されており、空白地ではなく溝という明示的・固定的な構造物による区画が行われていることは各単位の性格が比較的自立的であった可能性を示唆している。そして、機能的には専ら居住域としての地区と、南微高地北縁（谷A南斜面）での貝殻および炭化物・灰の多量廃棄から窺われる二枚貝の集中処理を行った地区という、北居住域には見られない様相が南微高地には観察できる。

北微高地の内容が決して十分ではないというマイナス面はあるが、こうした空間的配置を類型的に捉えるならば、最大の低地帯であり絶えず河道化する可能性を内在させた谷A（北居住域に取り込まれるという事実は重要）を挟んで二つの機能空間が並存するということが、朝日遺跡の特質として浮かび上がってくるようだ。つまり北は中心部分を含みつつもおそらく比較的均質であり、それに対して南は混成的（モザイク的）ではないかということである。しかし、果たしてこれがII期からIII期にかけての朝日遺跡の基本構造であり、かつ朝日遺跡としての固有性であるのかどうかは今後の検討課題である。

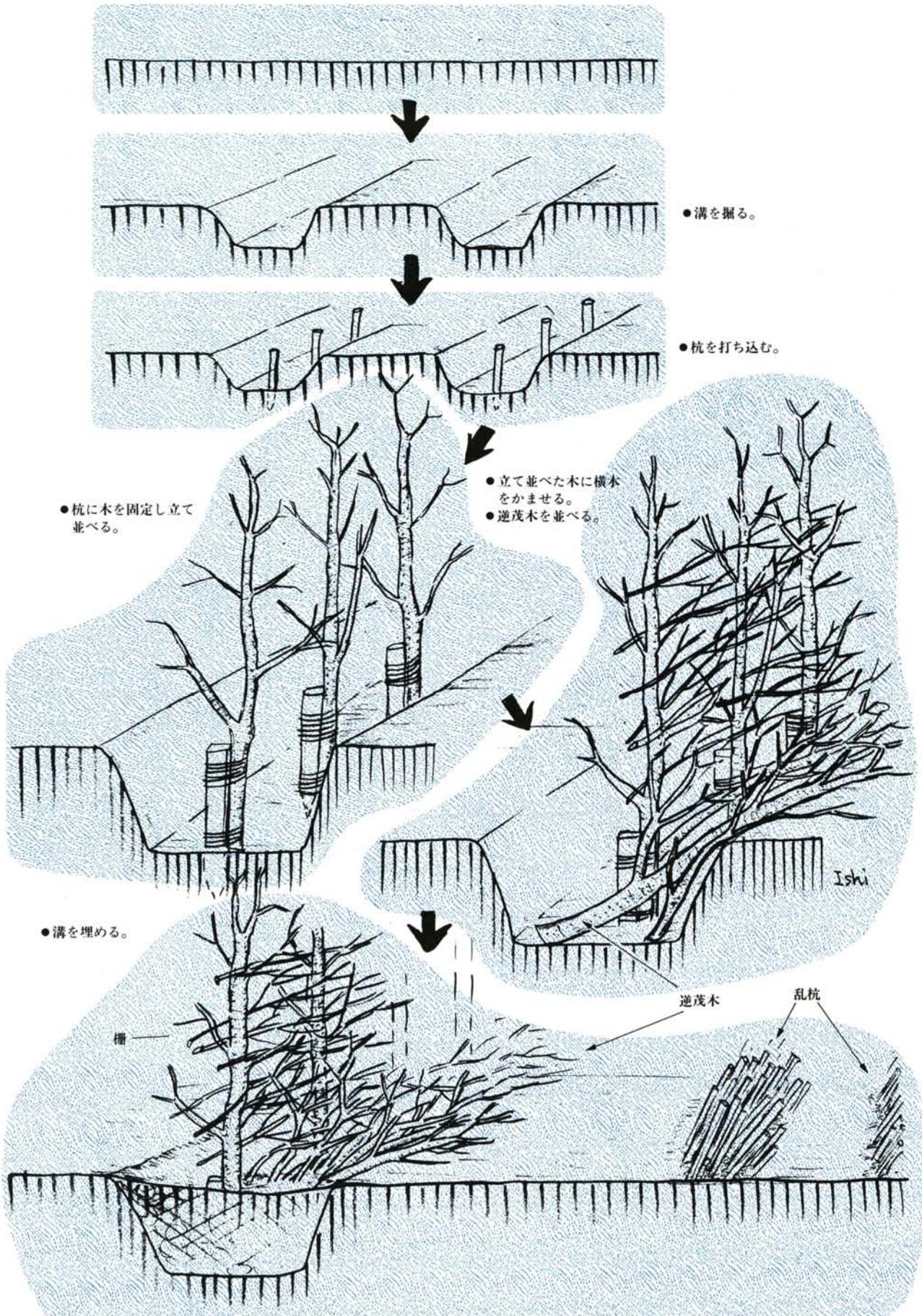
II期後半には上述のように朝日遺跡の基本構造が確立されたとして、その大幅な変形がIII b期後半から末にかけて行われた。すなわち、外郭の多重化・重装化である。

III b期後半から末にかけての時期には、谷A以外で大溝3条を造成し、谷A内では外郭最外縁となるSX1とした乱杭以下の非常に特異な構造を作っている。

谷A内では、乱杭の北側（北居住域に対しては内側）に60B区SX01、61A区SX01・SX02（これは61E区SX02と連続するかもしれない）という特殊な遺構がある。これらは、溝内に遺存していた枝をもつ樹木a・b・c、断片化した小枝、61A区SX02東部に見られた溝底面に打ち込まれた杭およびそれ以外の部分にあった遊離した杭などから、本来の形状は次のように推定される。構築工程をたどりながら説明する。

- ①溝を掘削し、底面に杭を打ち込む（調査では3本検出した）。
- ②杭に枝の張った樹木を固定し立て並べる。
- ③溝に直交して、枝の張った樹木を南（北居住域にとって外側）に斜めにねかせて多数並べる。小さなものは溝内南寄りに立て並べる。基本的には上部を南に傾斜させる。
- ④溝を埋めてそれらを固定する。

以上が検出された遺構・遺物から推定される部分であるが、それらは基礎部分に過ぎない。上部の様子を推定すると次のようになる。



第116図 棚、逆茂木、乱杭想像復元図

②で立て並べた枝の張った樹木に、横木（貫）を渡す。どの程度の密度であったか知るすべはないが、構造的には密に立て並べた木柱列からなる壁面のように完全に塞ぐまでには至らず、比較的粗密があったと思われる。

このように、Ⅲ b 期には下部に逆茂木を配した地上部分の高さ 2 m ほどの、全周せず部分的ではあるが〈垣〉というよりは〈柵〉を構築したのである。そして最も内側にはおそらく東部から連続する可能性の非常に高い大溝（61 E 区 SD02、63 D 区 SD08）があり、さらに内側に土塁が構築されていたかもしれない。

61 E 区で検出した台状遺構の基礎部分と考えられる SX01 は、残念ながら上部構造は不明だが、基礎部分に関して定型的な土木工法の存在を窺わせるに足る遺構であり、これもⅢ b 期後半から末なのである。おそらく高さをもった一定の平坦地を造成するために採られた工法であろうが、その技術は岡山県津寺遺跡で検出された「堤」との共通性を示している。

このような変形はまさに、城郭の改修に匹敵するような大幅な集落構造の変更といった観がある。朝日遺跡のエネルギーが最大に集約された時期である。

Ⅳ 期はⅢ b 期の多重化・重装化した集落形式とは異なって、Ⅱ 期前半のような居住域の散漫で広範な分布が東微高地にまで及ぶ。南微高地の中央をほぼ東西に、かつての S DX に重複して S XI が掘削されるが、各ブロックの確定という側面はそれほど窺えない。基本的には散村の復活という観が強い。

V 期は 2 度の環濠造成が行われる。状況的には北居住域の環濠が南のそれより重装的である。

南居住域の環濠は、一回目の造成は北部 1 条・南部 2 条として、北部に突出部と切れ目（出入口）、西部には区画状の部分（これも出入口に関係か？）、南部には互い違いになる切れ目（出入口）、そしておそらく東部にも切れ目（出入口）が存在する。南部 2 条・北部 1 条という差異は、北部が谷 A の河道によって補完されていることによるので、もともと 2 条巡らすことを基本としていたのかもしれない。

二回目は溝の改修を基本として一回目のプランを踏襲するが、北部と西部に新たに濠を付加して二重環濠としたのに対し、南部は改修を行わず一条のみとなっている。

VI 期以降は東微高地への居住域の拡散があり、南微高地に関してはかつての環濠内部も密度は低下するようである。散村的様相への移行が窺える。

このように、朝日遺跡はⅡ 期から VI 期にかけて南微高地の居住域が集村的様相と散村的様相を繰り返している。そのうちⅡ 期からⅢ 期にかけては持続的な集村であったことが恒常的な区画の存在に示されており、そこに安定した秩序形成が窺える。この秩序は南微高地の居住域を占拠した集団が独自に形成したというよりは、北微高地の居住域を占拠した集団の主導のもとに全体的に行われたと考える方が、大形方形周溝墓の存在等からみて実態に即していると思う。つまり、この期間に限っては中心としての〈北〉と、それに付随する〈南〉という構造の維持が図られていたのであり、それはあくまで朝日遺跡に限定された内的秩序であったと考えられるのである。

しかし、こうした関係もⅣ 期には停止し、以後は各居住域が自立的傾向を強めただろうことが、それぞれの〈囲郭集落化〉に表れている。

## 4. 墓制について

朝日遺跡で確認された墓制では方形周溝墓が特筆される。方形周溝墓は総数338基（県教育委員会調査分を含む）検出されており、時期別の検出数は一覧表のとおりである。他には土器棺墓、土塙墓がある。しかし、木棺墓は方形周溝墓の主体部としての木棺以外には未確認であり、土塙墓もまたその認定は難しい。

朝日遺跡の墓域は最終的には広大な範囲にわたるようになるが、当初は貝殻山貝塚北方のⅠ期には居住域であった微高地に方形周溝墓の築造が開始されたことを端緒とする。これが墓域Aである。

その後、方形周溝墓は暫時増加していき、墓域も分化するなどして複数形成されるようになる。そしてⅣ期にはそれ以前の築造方式とは異なる大きな変化が現れ、連続した墓域形成が一旦途絶える。Ⅲ期までとⅣ期では大きな落差が生じているのである。このことを重視して、ここではⅢ期までを第1期、Ⅳ期からを第2期として説明する。

### ●—第1期

#### 墓域A

方形周溝墓の築造開始によって墓域Aの始まりとなるが、その時期はⅠ期末からⅡ期初頭である。

墓域Aの方形周溝墓は全体的に遺物の出土量が少なく、時期決定に困難を伴う例が多いのも事実である。そのため、時期決定の方法は方形周溝墓の全体的な配置状況を踏まえた上で、時期の確定している例を定点とした相互関係の読み取りに頼らざるをえないものとなっている。

方形周溝墓の規模はほぼCランク\*に限定される。

**第1段階（Ⅰ期末からⅡ期）** 上述の観点から墓域Aを分析すると、この時期（第1期）の方形周溝墓プランの特徴である長軸方向への軸線の存在から、この点ではかつてⅠ期とされた方形周溝墓付近を中心とする一見放射状をなす配置が観察できる。そして、あたかも性格不明の溝の走向に一致するように築造されて列構成を見せる西側の一群（A 1 w）、それよりやや列構成の不明瞭な東部の一群（A 1 e）という、大きくは2群に区分できる（なおA 1 wの南には主軸を異にする一群A 1 sがある）。直接の前後関係を確認するすべはないが、基本となる方形周溝墓群とその間隙を埋めて築造される方形周溝墓群という区分も可能である。詳細な築造経過に即して群構成の変化を見る方法とは別に、結果としての方形周溝墓群をその内部構成の状態から空間的に区分してみたのが別図である。

**第2段階（Ⅲ期）** 第1段階の展開は大きくA 1 w・（A 1 s）・A 1 eという東西の二つのグループに分化して範囲を拡大する方向で形成された。第2段階も基本的には2群の関係を踏襲するようではあるが拡大傾向はそれほど顕著ではなく、西のグループ（A 2 w）、両グループ間の隙間を埋める中央のグループ（A 2 c）、そして東方の谷Aに面する地区に形成されるグループ（A 2 e）に区分できる。

方形周溝墓群全体の範囲が不明であるため第1段階との関係は完全に了解できないけれども、墓域Aにおける方形周溝墓築造数の極端な減少という觀は免れない。土器編年上の時期幅では第2段階の

方が長い可能性が高いので、やはり減少と考えるのが妥当であろう。この点に関わって、墓域Aの東半部には土塙墓と考えられるものが比較的多く分布していることを重視する必要があるのかもしれない。また、この段階に墓域数が増加する（墓域Cの形成）ことは自然増分の補完であったかもしれない。

## 墓域B

朝日遺跡の基幹的墓域で大形方形周溝墓（超Aランク）を含む。墓域の展開はこの大形方形周溝墓を軸にして進行する。

**第1段階（II期からIIIa期初頭）** 墓域の形成は墓域Aより若干遅れる。すなわち、墓域Aはその前段階がI期の居住域であったのに対し、墓域BはII期まで居住域であった。しかし、墓域AではCランク相当の方形周溝墓ばかりであり、プランもA4形以外を含み特定プランへの集中度が墓域B（ほぼA4形で統一されている）に比べて低いという差が生じていることは注意しなければならない。

この段階の大形方形周溝墓は超AランクとしてSZ208、AランクとしてSZ244、SZ254が存在する。このうち超AランクのSZ208とAランクのSZ254が隣接している。直接の切り合い関係が無いので前後関係を把握することは難しいが、墓域の展開方式からみて、同時期の方形周溝墓に囲まれるSZ254が先行しIII期以降の方形周溝墓群に隣接するSZ208が後続すると考える。そのほか、Bランクも付近に集中する傾向にあり、墓域Bの〈核域〉を形成している。

墓域Bでは、〈核域〉以北の周辺域も大形方形周溝墓と主軸を一致させた展開を示すだけでなく、B・Cランクまで含み規模格差が強く表面に出ているのに対し、以南のグループは主軸を異にしてほぼCランクから構成されているという違いを見せている。北部の谷A寄りの一群や北東でA・Bランク方形周溝墓間を埋めるように築造されている——恐らく時期的には後出である——Cランクでも下位にくる一群は、そうした主軸を異にする一群と対応する部分であると考えられる。つまり、墓域Bにおいては展開の軸線を異にする二つのグループがあり、北群が中心的で南群は従属的であるということが言えるのである。前者をB1n、後者をB1sと呼ぶ。そして、B1nとB1sは大形方形周溝墓を軸として対称的な位置関係にあり、そのため規模格差が際だつことになる。

B1nは大形方形周溝墓から北へ遠ざかるにつれて漸移的に規模が縮小していくような展開を示し、いくつかのブロックに一見列構成的な展開を窺わせる部分があるものの基本的には平面分割的に展開している。この点で大形方形周溝墓に隣接する空白——Cランクに一部埋められている——が2ヶ所あることは、Bランクの展開には分散ではなく集中が企図されていた可能性を示すものと考える。このことは墓域構成が単なる累積の結果ではなく、あらかじめ一定の方針によってプランが描かれていたことを示すのである。それは対照的大別2分割を含めて全体設計としての墓域の存在を暗示する。

**第2段階（IIIa期）** 第1段階のB1nに接続して谷A縁辺に位置するB2w、谷Aを越えて北西に展開するB2n、南に展開するB2s、さらに東に新しく飛び地的に形成されるB2eの4グループが並存する。B2eを除き主軸線は〈核域〉のB1nとは異なる。

4グループのうちB2wとB2eにはAランクの大形方形周溝墓がそれぞれ1基づつ検出されている。しかし、規模は超Aランクには及ばないので、この段階にも〈核域〉が存続している可能性を考えてSZ208を時間的に並行させるか、同じ主軸線の超Aランク相当の大形方形周溝墓が未検出で

どこかに存在するのかもしれないと考えるか、選択の余地がある。

上述のように第2段階にはAランクの展開を契機とする小群の析出が窺え、第1段階の超Aランクを中心とする一群とそれ以外という単純な二極構造からやや複雑化するといえる。そして、超Aランクの存在が不確かとはいえ、それでも第1段階の超Aランクであった大形方形周溝墓S Z 208に隣接してAランク——同時期のグループでは相対的に大形——の方形周溝墓が築造されていることは、それが第1段階B 1 nからの連続性を示している可能性を考慮する余地があると考える。

**第3段階（IIIb期）** 中心となるのは超AランクのS Z 301を核として規模格差の内在する墓域B 3 cで、それとともに規模格差が小さく全体としてもCランク相当であるB 3 sが細々と存続する。墓域B 3 eはCランクが散在しBランク以上の展開はよくわからない。

それぞれの群を規制する軸線は、B 3 cではS Z 301の東西で線対称になる傾きでBランク以下の2群が並存し、B 3 eではB 2 eに連続した軸線とそれとは異なる軸線の二者が存在する。このようにS Z 301を核とするB 3 cで東西の小群に区分できるのであり、第2段階における墓域分割主体の表面化とは異なる極めて整った成層化として把握する必要があると考える。

さて、第1段階の軸線を異にするグループは規模格差の顕著なB 1 nと格差の小さいB 1 sというまさに対照的な関係であった。それが第2、第3と段階を経るにしたがい、超Aランク大形方形周溝墓とそれ以外という規模構成上の規準枠のような区分がまず成立し、次に後者内部でAランクあるいはBランクがそれ以外のランクを伴いそれぞれ分散して各単位を形成するようになったと考えられるのである。このような墓域B内部の動向は、まさに重層化に突き進む觀がある。それは第1段階の三角形を斜行分割して相似形の入れ子をつくるような関係から、いくつかの三角形を積み上げてさらに大きな三角形を作るというような重層的な関係への移行を示すものと考える。

## ●— 第2期

第2期の特徴は、①それまで基幹的であった墓域Bの衰退、②墓域Aでは古い方形周溝墓を破壊して新しい方形周溝墓が築かれる、③南微高地北西縁に新しく方形周溝墓が築かれる、というような全く新しい様相で墓域が形成されることにある。

**墓域Bの衰退** 墓域BはIII b期には累積で東西600mという広大な範囲に及んだが、それでも微高地南部には空白地もあり築造の余地はまだ残っていた。しかし、IV期にはIII期以前の方形周溝墓のうち一部の周溝を再掘削して整え新たに墓として利用している例が観察されるようになる。多くはプランを変形することも無かったようだが、谷Aに面するCランクのS Z 172は周溝の再掘削によってプランの変形が行われS Z 173となっていた。おそらくBランク上位規模までは再掘削に際してプランが変形されることは無さそうだ。そして、こうした再利用墓とは別に墓域周辺ではIII期以前の方形周溝墓を破壊して築造される例S Z 240（S Z 241を破壊）とともに独立して築造される例も存在する。

いずれにしても墓域Bでの新しい方形周溝墓築造は低調となるのである。そしてV期には墓域ではなくなり、VI期以降は居住域となる。

**方形周溝墓の破壊** 第1期の方形周溝墓については周溝の重複・切り合いはあったが、墳丘に関しては墓域Aの一部に不明確な例があるものの、基本的にはそうした事例は生じていないと考えられる。

もちろん拡張などの墳丘全体の重複例はある（例えばSZ61・62）。けれども、それは破壊ではないし、極めて偶発的な事例に過ぎない。

旧墓域AにおけるIV期の方形周溝墓重複（破壊）は、墓域Bのように再利用というかたちを全く採らない。無視するかのように築造されているけれども、実際IV期には以前の方形周溝墓はどのようにであったのだろうか。周溝が埋没して地表からはその存在が観察できなかつたのであろうか。しかし、仮に判別不可能な程度埋没していたとしても、そこが墓域であるということが伝承されており尊重されているならば、同じ場所に方形周溝墓を築造するとは考えられない。内的な連続性が安定的に維持されているならば第1期のようになるはずである。だが、事実はそうではない。これは、墓域AがIV期にはその意味を変えたことを示すものと考える。

つまり、墓域Bも墓域Aも共に意味を変えたのであり、ただ現象が異なっただけなのである。その意味変換は朝日遺跡固有の定住集団が独自に行ったのではなく、遺跡そのものの集落としての内的連続性が不安定化するか途絶えるかした状況に深く関与した集団によって行われた可能性が高い。このように考えるならば、A・B両墓域は新しい墓域として把握する必要が生じる。そして新しく意味づけられた「墓域A」はIV期以降安定した内的連続性を見せる。

**新しい墓域** IV期には、かつてのA・B両墓域が断絶を介して新しく形成される（それぞれE・Gと呼ぶ：A→E、B→G）のに並行して、南微高地北縁部や北居住域北縁にも新しく方形周溝墓が築造される。前者を墓域D、後者を墓域Fと呼ぶ。

墓域Dの方形周溝墓は、最初は長方形プランで後に正方形プランとなる。最初が長方形プランというのは墓域B（B3w）の再利用墓も再利用するために長方形を呈するとの相関する可能性を示唆するが、墓域Eはいずれも正方形であること、V期の方形周溝墓にも最初期の例に長方形プランが存在することなどから系譜差である可能性もある。墓域E・Fでは方形周溝墓は周溝の重複・切り合いもほとんどなく比較的散在傾向を示すのに対し、墓域Dではかなり近接し周溝の重複・切り合いも行われる。

V期には、墓域D・Eのように平面的に展開する地区とは別にブロック的に分散していくつかの墓域が新しく形成される。または方形周溝墓が他とはなれて一見単独であるかのように築造される例もまた見られるようになり、全体に離散的傾向が表面化するような状況を呈する。

第1段階では規模格差があることによって全体が成層的に構成され緊密にまとまっていたと言えるのに対し、V期以降は全体的な平準化において全体の統合度が低下しそれぞの単独な動きを許容する体制に移行したと言えそうである。つまり、朝日遺跡に限定していえば、**差異化／統合から平準化／分散（自立）\*\*への移行**とでも表現できようか。

\*超Aランク：一边30m以上、Aランク：一边18m以上、Bランク：一边12m～16m、Cランク：一边12m以下

\*\*朝日遺跡における分散傾向が社会全体の分散傾向を意味するのではない。朝日遺跡がV期になって二つの環濠集落を形成することに分散傾向が示されているのであり、それを規制する全体は朝日遺跡ではなく、それを含めたより大きな領域的包括体であったと考える。

\*\*\*付図を参照されたい。

## 遺構一覧表

※底レベルは標高を示す。

西部地区						調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
<b>堅穴住居</b>													
調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	61E	SB10	(G-D)SB07, SB11	472	412	117 IIIb(後半)	
60E	SB01	SD76.77				II	61E	SB11	(G-D)SB14		290	112 IIIb	
60E	SB02	SB02	336	302	154	II 末	61E	SB12	(G-D)SB04		250	130 III	
60E	SB03	SD66				II	61E	SB13	(G-I)SB17		286	123 III	
60E	SB04	SD33				II	61E	SB14	(G-I)SB08			IIIb	
<b>土坑</b>						63N	SB01	SB02	608		167 II		
調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	63N	SB03	SB03			156 II	
56A	SK01	SK008	260	180	113	V	63N	SB04	SB01			159 II	
60E	SK01	SK13	102	76	89	III	<b>掘立柱建物</b>						
60E	SK02	SK08	326	126	81	IIIa	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
60E	SK03	SK09	70	64	113	III	61E	SA01	P49,46,41	320	225		
60E	SK04	SK07		78	119	III	61E	SA02	(I)P238,241	379	155		
60E	SK05	SK20	43	34	120	III	61E	SA03	(I)P189,224	360	185		
60E	SK06	SK19	90		110	III	61E	SA04	(I)P146,144		130		
60E	SK07	SK24	100	72	109	III	<b>土坑</b>						
60E	SK08	SK36			113	III	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
60E	SK09	SD27	295		106	III	61E	SK01	SK38		170	126 II	
60E	SK10	SK26	206	152	94	IIIb	61E	SK02	SD23		276	124 IIIb末	
60E	SK11	SK27	352		85	III	61E	SK03	SK56			178 IIIb	
60E	SK12	SK40	61	44	109	III	61E	SK04	SK38			106 Vb	
60E	SK13	SK29	372	136	111	III	61E	SK05	SK22		64	170 III	
60E	SK14	SK41	152	42	136	IIIa	61E	SK06	SK24	200	64	127 IIIa	
60E	SK15	SK42	208	68	116	III	61E	SK07	SD26		212		IIIb末~IV
60E	SK16	SK33	170	129	140	III	61E	SK08	SD21		206	78	IIIb末
60E	SK17	SK32	170	92	147	III	61E	SK09	SK44			177 IIIa最古	
60E	SK18	SK35	149	110	123	IIIa	61E	SK10	SD11		84	171 IIIa最古	
60E	SK19	SK49	158	74	115	III	61E	SK11	SK57	282	228	-16 II~IIIa最古	
60E	SK20	SK38	107	60	128	III	61E	SK12	SK05	146	62	126 VI	
60E	SK21	SD54	278		94	III	61E	SK13	SK04	116	42	132 II	
60E	SK22	SK39	240	108	93	III	61E	SK14	GSD16	534	138	102 IIIb	
60E	SK23	SK74		72	138	III	61E	SK15	SK03		146	130 IV	
60E	SK24	SD63	260		99	II	61E	SK16	SK06	152	72	105 IIIa最古	
60E	SK26	SK61	270	160	104	IIIa	61E	SK17	SK13	168	82	108 II	
60E	SK27	SK71	242	98	132	III	61E	SK18	SK08	146	70	103 IIIa最古	
60E	SK28	SK77	131	98	147	III	61E	SK19	SD13		166	91 IIIa	
60E	SK29	SK67	164	86	135		61E	SK20	SK10		84	110 IIIa	
60E	SK30	SK72	208	132	137		61E	SK21	SK09		86	108 IIIa	
60E	SK31	SK68	260	74	116	IIIa最古	61E	SK22	SD21		206	78 IIIb	
60E	SK32	WIG15a東	200	88	131		61E	SK23	SD22			84 IIIb	
60E	SK33	SK62	188	122	128		61E	SK24	SK15			93 IIIa	
60E	SK34	SD59	340	65	129		61E	SK25	SK21	130	118	97 III	
60E	SK35	SD60	324	64	146		61E	SK26	SD14	570	125	143	
60E	SK36	SK70			151	IIIa	61E	SK27	SK62			-97	
60E	SK37	SK63	49	40	145	IIIa	63D	SK01	SK19	39	33	161 III	
60E	SK38	SD73	298	70	144		63D	SK02	SK20			153 IIIa	
<b>SX</b>						63D	SK03	SK21	29	20	167 IV		
調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	63D	SK04	SK23	46	24	155 IIIb	
60E	SX01		76	66	139	IIIa	63D	SK05	SK07	170	128	140 IIIa	
60E	SX02		34	30	118	II	63D	SK06	SK06	176		108 上層IV、下層IIIa	
60E	SX03a					V ~	63D	SK07	SK14	107	(50)	123	
	SX03b						63D	SK08	SK08	192	166	65 IIIa	
56A	SX01	SK006				IV	63D	SK09	SK15	70	22	134 IIIb	
<b>北部地区</b>						63D	SK10	SK17			92 IIIa		
<b>堅穴住居</b>						63D	SK11	SK04	(320)	210	80 IV		
調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	63D	SK12	SK12	86	42	140 III	
61E	SB01	(G)SB03	250		130		63D	SK13	SK10	58	19	132 III	
61E	SB02	(G)SB01	382		123		63D	SK14	SK28	53	38	136 III	
61E	SB03	(G)SB02	346	258	126		63D	SK15	SK55	29	25	111 III	
61E	SB04	(G)SB16	262	218	109		63D	SK16	SK40	70		161 III	
61E	SB05	(G)SB18			113		63D	SK17	SK45	47	26	138 III	
61E	SB06	(G)SB10		306	101	IIIb	63D	SK18	SK54	35	(26)	149 IIIa	
61E	SB07	(G)SB06		446	111	上層IV、下層IIIa	63D	SK19	SK50	34	30	152 III	
61E	SB08	(G-I)SB12			112	II ?	63D	SK20	SK35	44	38	157 III	
61E	SB09	(G-I)SB05		290	114	IIIb	63D	SK21	SK33	59	34	134 III	

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
63D	SK22	SK44	34	23	146	III	61A	SB04	SB08			141	II or III	
63D	SK23	SK32	54		130	III	61A	SB05	SB01・07			123	II or III	
63D	SK24	SK36	(130)	(100)	141	IV	61C	SB01	SB23			127	II or III	
63D	SK25	SK30	120	82	133	III	61C	SB02	(SD15)			135		
63D	SK26	SK29	50	40	115	III b	61C	SB03	(SD18・19)		480	157		
63D	SK27	SK31	34	30	158	III	61C	SB04				153		
63D	SK28	SK56		56	154	II	61D	SB01	SD51					
63N	SK01	SK04	(470)	161	98		61D	SB02	SB14(SD50)		346	170	II	
63N	SK02	SK05左部分		86	108		61D	SB03	SB15			161	III a	
63N	SK03	SK05中央部分	161	105	91		61D	SB04	SB18			182	IV	
63N	SK04	SK05右部分		89	115		61D	SB05	SB18(SD45)			185	IV	
63N	SK05	SK12			124		61D	SB06	SB08	467	370	177	II	
63N	SK06	SK08		106	144		61D	SB07	SB32			181	II	
63N	SK07	SK06	427	128	94		61D	SB08	SB07	565	540	183	II	
63N	SK08	SK03	180		158		61D	SB09	SB31			179	IV	
63N	SK09	SK02	162	110	138		61D	SB10	SB17			185	II	
63N	SK10	SD05		134	152		61D	SB11	SB13	489	346	182	IV	
63N	SK11	SD16	272	70	140		61D	SB12	SB11			175	V	
63N	SK12	SK01	373	190	102		61D	SB13	SB16			194	III	
63N	SK13	SD07	367	115	96		61D	SB14	SB05		464	191	II	
63N	SK14	SD14		178	100		61D	SB15	SB12			183	III a	
<b>SX</b>							61D	SB16	(SD22)			183		
調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	61D	SB17	(SD23)	460	232	212	IV ?	
61E	SX01	SK57の木組				III b 末 ?	61D	SB18				210		
61E	SX02					III b 末	61D	SB19a	(SD62)			168		
61E	SX03					III b 末	61D	SB19b	SB02	718	578	183	V	
63DE	SX01	SK05	232	122	130	III a	61D	SB21	SB01(SD56)			185	IV	
<b>南部地区</b>							61D	SB22	SB09	268	218	191	II	
<b>竪穴住居</b>							61D	SB23	SB32			II		
調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	61H	SB01	(H)(SD10)		362	184	IV ?	
60A	SB01	SB19		344	147		61H	SB02	(H)(SD69)		506	169	IV ?	
60A	SB02	SB13	430	348	157	III b ?	61H	SB03	(H)(SD63)		718	171	IV ?	
60B	SB01	SB13			135	III	61H	SB04	(H)(SD62)		430	177	IV ?	
60B	SB02	SB15		340	143	III	61H	SB05	(H)(SD77)		306	172	IV ?	
60B	SB03	SB12	530	454	132	II	61H	SB06	(H)(SD80)			175	IV ?	
60B	SB04	SB11			715	120	II	61H	SB07	(H)(SD83)			180	IV ?
60B	SB05		652	376	120	II	61H	SB08	(H)(SD31)	712	608	172	IV ?	
60B	SB06	SB08			124	III	61H	SB09	(H)(SD32)	614	604	171	IV ?	
60B	SB07	SB06		498	123	II	61H	SB10	(H)(SD33)			169	IV ?	
60B	SB08	SB02		694	124	II ~ (III ?)	61H	SB11	(H)(SD24)	758		176	IV ?	
60B	SB09	(SD19)			132	III	61H	SB12	(H)(SD38)			173	IV ?	
60B	SB10	SB03			129	III	61H	SB13	(H)(SD23)		374	177	IV ?	
60B	SB11	SB05	405	326	110	II	61H	SB14	(H)(SD20)		488	180	IV ?	
60B	SB12	SB01	362	302	116	III	61H	SB15	(H)(SD11)		592	193	IV ?	
60B	SB13	SB15			152	III	61H	SB16a	(J)(SD12)	484	392	200		
60I	SB01	(A)SB09			151	IV	61H	SB16b	(J)(SD05)	484	476	200		
60I	SB02	(A)SB10			168	III b 末	61H	SB17a	(J)(SD01)	586		188		
60I	SB03	(A)SB14	334		188		61H	SB17b	(J)(SD03)	628	514	173	IV	
60I	SB04	(A)SB18			188		61H	SB18a	(J)(SD22)		458	183	IV	
60I	SB05	(A)SB16	415		184		61H	SB18b	(J)(SD20)		520	179	III	
60I	SB06	(A)SB15		474	186		61H	SB19	(J)(SD01)		378	196		
60I	SB07	(A)SB17			187		61H	SB20	(J)(SD17)	(414)		165		
60I	SB08	(A)SB07	774		162	IV	61H	SB21	(J)(SD02)			174	IV	
60I	SB09	(A)SB06			169	III b ・ IV	61H	SB22	(J)(SD35)			179	III	
60I	SB10	(A)SB03			166	IV	61H	SB23	(J)(SD33)			175	III b	
60I	SB11	(A)SB05	376		190		61H	SB24	(J)(SD09)			179		
60I	SB12	(A)SB02			182	V a	61H	SB25	(J)(SD07)			177		
60I	SB13	(A)SB04	730		176	III	61H	SB26	(J)(SD05)			178		
60I	SB14	(SD13, SD20)			194		61H	SB27	(J)(SD04)			178	III b ~ IV	
60I	SB15	(SD15)			182		61H	SB28	(J)(SD07)	508	412	179		
60I	SB16	(SD19, 21)			194		61H	SB29a	(J)(SD02)			181		
60I	SB17	(SD22)			180	III b	61H	SB29b	(J)(SD09)			179	III	
61A	SB01	SB02	440	194	115	III a	61H	SB30	(J)(SD21)			189		
61A	SB02	SB03	302	231	145	II	61H	SB31a	(J)(SD13)	380	320	163	III a	
61A	SB03	SB04			147	II or III	61H	SB31b	(J)(SD11)	520	396	170		

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
61H	SB32a	(Jき)(SD07)	392		173		61H	SB92	(X-北)(SD01), (SD02)			183	
61H	SB32b	(Jき)(SD08)	(570)		171		61H	SB93	(X-北)(SD10)			180	
61H	SB33	(Jこ)(SD25)		80	166		61H	SB94	(X)SB07		395	159	
61H	SB34	(Jこ)(SD23)	790		162	IV	61H	SB95	(X-北)(SD03), (SD04), (SD09)	655	595	155	III
61H	SB35a	(Jこ)(SD12)		468	161	IV	61H	SB96	(X-北)SB04	335	300	156	IIIa
61H	SB35b	(Jせ?) (SD36?)		502	168		61H	SB97				153	
61H	SB36a	(Jせ)(SD26)			184		61H	SB98	(X-南)(SD02)			181	II or III
61H	SB36b	(Jせ)(SD25)			185		61H	SB99	(X-南)(SD02)	620	510	168	IV
61H	SB37	(Jき)(SD12)	760		172		61H	SB100	(X-南)SB03	490	395	150	II ~ IIIa
61H	SB38a	(Jき)SB01	694	476	154	IV	61H	SB101	(X-南)SB04			168	II ~ IIIa
61H	SB38b	(Jき)(SD09)	746	470	161		61H	SB102	(X-南)SB10		385	180	III
61H	SB39	(Jき)(SD12)			159		61H	SB103	(X-南)SB07	375	330	155	
61H	SB40	(Jき)	750		161		61H	SB104	(X-南)(SD14)			174	III
61H	SB41	(Jき)(SD19)	558	396	150	IV ?	61H	SB105	(X-南)	250	230	154	II or III
61H	SB42	(Jき)(SD37)		564	167	IV	61H	SB106	(X-南)SB05			157	IIIa
61H	SB43	(Jき)(SD18)		656	175	IV	61H	SB107	(X-南)		290	170	
61H	SB44	(Jき)(SD28)			183	III	61H	SB108	(J1)SB02		780	218	古墳時代
61H	SB45	(Jそ)SB01	730	710	190	II	61H	SB109	(J1)SB01	740	430	210	古墳時代
61H	SB46	(KLあ)(SD03)			197		61H	SB110	(K1L1)SB07		292	206	古墳時代
61H	SB47	(KLあ)(SD02)	432		192		61H	SB111	(K1L1)SB02	599		220	古墳時代
61H	SB48	(KLあ)SB01			183	IV	61H	SB120	(K1L1)SB01	465	386	216	古墳時代
61H	SB49	(KLい)SB03	370	316	192	II	61M	SB01	SB03	590	404	189	II
61H	SB50	(KLい)SB01	500	350	199	II	61M	SB02	SB02		280	196	II
61H	SB51	(KLい)SB02			201		61M	SB03ab	SB01	282	254	195	II
61H	SB52	(KLい)(SD04)			190		61M	SB04	SB08			187	II
61H	SB53	(KLい)SB04		380	169	IIIb	61M	SB05	SB09		240	191	II
61H	SB54	(KLい)(SD09)			193		61M	SB06	SB04	370	256	194	II
61H	SB55				182		61M	SB07	SB05			203	II
61H	SB56	(KLい)(SD02)	508	490	183	IIIa	61M	SB08	SX04		212	220	II
61H	SB57	(KLい)SB04		310	192	III	61M	SB09	SX05		362	213	II
61H	SB58	(KLい)SB03		396	203	IIIb	61M	SB10	SX01		284	204	II
61H	SB59	(KLい)SB08		480	188	III	61M	SB11	SX07	404	270	204	II
61H	SB60	(KLい)SB07	424	308	190	III	61M	SB12	SX08	510	196	205	II
61H	SB61	(KLい)(SB02)	530	330	185	III	61M	SB13	SX06	410	376	213	II
61H	SB62	(KLい)SB08	542	474	185	Va	61M	SB14	SB06		290	225	II
61H	SB63	(KLい)SB09		478	189	IV	61M	SB15	SB07		460	223	II
61H	SB64		(256)	186			63B	SB01			340	164	III
61H	SB65a	(KLい)(SB01)	694		165	II or III	63B	SB02	(SD09)		475	163	II ?
61H	SB65b				196	II or III	63B	SB03	SB01	500	470	157	IIIb
61H	SB66	(KLか)SB01		524	160		63B	SB04	(SD07)		700	160	III
61H	SB67	(KLか)(SD03)		414	160		63B	SB05	SB02	655	645	178	古墳時代
61H	SB68	(KLか)(SB04)			187	V	63G	SB01	(B)(SD01)		392	170	
61H	SB69	(KLか)SB01			178	V	63G	SB02	(B)SB02	346	258	126	V
61H	SB70			686	176		63G	SB03	(C)SB06		446	111	IIIa
61H	SB71	(KLか)(SB01)			175		63G	SB04	(B)	476		171	
61H	SB72	(KLか)(SB13)			168		63G	SB05	(E)SB112	716	654	164	III
61H	SB73	(KLか)SB02			166	IV	63G	SB06	(F)SB09			168	III
61H	SB74				169	IV ?	63G	SB07	(E)SB08	806		142	IIIa
61H	SB75	(KLか)SB01	(500)	440	176	IV	63G	SB08	(I)SB102			157	V
61H	SB76	(KLか)(SB11)		494	184	IIIb ~ IV	63G	SB09	(I)SB101			197	V
61H	SB77	(KLか)SB03	668	482	182	IIIb	63G	SB10	(I)(SD101)			162	IV ?
61H	SB78	(KLか)(SD08)	624	570	181	V	63G	SB11	(G)SB110			177	III ?
61H	SB79	(KLか)(SD12)	576	358	180	III	63G	SB12	(H)SB101	514	302	176	IV
61H	SB80	(KLか)(SD09)			167	II or III	63G	SB13	(G-J)SB01		380	176	
61H	SB81	(KLか)(SB21)			161	II or III	63G	SB14	(J-SB102, 103)			168	IV
61H	SB82	(KLせ)SB02			189	IIIa(最古?)	63G	SB15	(G-I)SB01	443	428	204	古墳時代
61H	SB83				185	II or III	63J	SB01a	SB16		334	181	V
61H	SB84				182	II or III	63J	SB01b	SB18		504	181	VI
61H	SB85	(KLか)SB07		462	171	II	63J	SB01c	SB05	652		184	Vb
61H	SB86	(KLせ)SB01			174	IV	63J	SB02	SB04	710		187	V
61H	SB87	(KLせ)(SD09)			191		63J	SB03	SB15	486		198	V
61H	SB88	(X)(SD05)			173	IIIa	63J	SB04a	SD04		250	193	IV
61H	SB89	(X-南)(SD05)			185		63J	SB04b	SB02		466	187	IV
61H	SB90				195	II or III	63J	SB05	SB03		486	190	IIIb
61H	SB91	(X-北)(SD11)		530	175		63J	SB06	SD06	400	250	194	III

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期					
63J	SB07	SB10			189	VI	89B	SB07	(ア)SB07		462	192	IIIb					
63J	SB08	SB17			180	IIIb	89B	SB08	(ア)SB08			170	IIIb					
63J	SB09	SB07			199	IV	89B	SB09	(ア)SB09			170	IIIb					
63J	SB10a	SB11			187	V	89B	SB10	(ア)SB01		910	193	II?					
63J	SB10b	SB06	570		191	V	89B	SB11	(ア)SB05		416	193	IIIb					
63J	SB11	SB01	526	526	195	VI	89B	SB12	(イ)(SD01)			192	II					
63J	SB12		358	352	197	古墳時代	89B	SB13	(イ)SB02			168	II?					
63L	SB01	(ア)SD01		415	184		89B	SB14	(イ)SB06	564	434	173	IIIb					
63L	SB02	(ア)SD02		420	184		89B	SB15	(イ)SB03			186	IV					
63L	SB03	(ア)SB01			180	IV	89B	SB16	(イ)SB27		460	169	IV?					
63L	SB04a	(ア)SD03			184	IV	89B	SB17			480	169	IV?					
63L	SB04b	(ア)SD04	576		186		89B	SB18		560		183	IV?					
63L	SB04c	(ア)SD05	510		187		89B	SB19	(ウ)SB02		416	206	II					
63L	SB05	(カ)SB03		470	176		89B	SB20	(ウ)SB05	518	312	175	II					
63L	SB06a	(カ)SB02		400	174	IIIb	89B	SB21	(エ)SB03			184	IIIa					
63L	SB06b	(カ)SB01			185	IV	89B	SB22	(エ)SB07	542	462	173	IIIa					
63L	SB07	(ク)SB02	432	356	184	IV	89B	SB23	(エ)SB06		320	168	IIIa					
63L	SB08	(ケ)SB01		484	183	IV	89B	SB24	(エ)SB01			176						
63L	SB09	(オ)SB01		290	188	II	89B	SB25	(エ)SB05	348	324	161	IIIa					
63M	SB01	SB07	564	416	195	V	89D	SB01	SB01		240	182						
63M	SB02	SB09			183	V~VI	89D	SB02	SB02			169						
63M	SB03	SB04	470	379	195	V	60B	SA01		236	140							
63M	SB04	SB13		392	194	VI	60B	SA02		240	152							
63M	SB05	SB01, SD03		434	192	II?	60B	SA03		240	112							
63M	SB06	SB06			198	IV	60B	SA04		298	135							
63M	SB07	SB10		423	198	III?	61A	SA01		266	152							
63M	SB08	SB12		448	183	IV?	61C	SA01	P38, 46, 37	320	190							
63M	SB09	SB08			175	II	61D	SA01	Pit95, 162	380	140							
63M	SB10	SB05	1000		195	V~VI	61K	SA01	†SK17, 11 †Pit2	704	410		IV~					
89A	SB01	SB30			172	II or III	63G	SA01	(A)SK108, (A)SK124	1050	550							
89A	SB02	SB41	868		183	IV	<b>土坑</b>											
89A	SB03	SB16			176		調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期					
89A	SB04	SB14	586	484	176	V	60A	SK01	SK64	(108)	70	144	IIIb					
89A	SB05	SB33		130	178	IIIa	60A	SK02	SK62			138	II					
89A	SB06	SB38		98	180	IIIb	60A	SK03	SK85	206	90	110						
89A	SB07	SB31			178	IIIa・IV	60B	SK01	SK48	86	64	109	II					
89A	SB08	SB13	636	580	175	V	60B	SK02	SK50	98	82	107	II					
89A	SB09	SB20	624	520	188	IV or V	60B	SK03	SK56	138	90	98	II					
89A	SB10	SB22			185	V	60B	SK04	SK36		60		II~IIIb					
89A	SB11	SB40			188	II・IV	60B	SK05	SK13	176	66	100	III					
89A	SB12	SB21			189	IV	60B	SK06	SK14	514	188	45	IIIa最古					
89A	SB13	SB23			188	IV	60B	SK07	SK29	174	105	102						
89A	SB14	SB24		204	179	IV	60B	SK08		218	110	101						
89A	SB15	SB17		480	180	IIIb	60B	SK09	SK27	184	150	98						
89A	SB16	SB18	464	340	180	IIIb	60B	SK10	SK24	70	54	106						
89A	SB17	SB15	614	612	173	IIIa	60B	SK11	SK09	153	102	103	IIIa最古					
89A	SB18	SB11	440	386	170	V	60B	SK12	SK10	280	116	80	IIIa最古					
89A	SB19	SB12	572	554	172	VI	60B	SK13	SK16	184	103	87						
89A	SB20	SB47			182	III?	60B	SK14	SK26	40	40	90	IIIb					
89A	SB21	SB34		346	174		60B	SK15		390	126	75						
89A	SB22	SB19	472	388	177	V	60B	SK16	SK42	128		79						
89A	SB23	SB25	446	410	166	V	60B	SK17	SK45	304	206	80	II~IIIb					
89A	SB24	SB46			176	IIIb末~IV	60B	SK18	SK37	165	106	101	IIIa最古					
89A	SB25	SB36			182	IIIb	60B	SK19		102	86	119						
89A	SB26	SB35			175	IV	60B	SK20		86	76	127						
89A	SB27	SB45			182	IIIb末~IV	60B	SK21	SK25				II					
89A	SB28	SB26			175	IV	60I	SK01	SK04		44	147	IV					
89A	SB29	SB37			182	IIIb	60I	SK02	SK05	96	58	157	IIIbor V					
89A	SB30	(A)SB01	533	380	190	古墳時代	60I	SK03	SK09			137	V(古)					
89B	SB01	(ア)SB02			157	II?	60I	SK04	SK07	182	118	143	IV					
89B	SB02				200		60I	SK05	SK34	282	114	120	IV					
89B	SB03	(ア)SB06			182	IIIa	60I	SK06	SK33	72	70	127	IV					
89B	SB04	(ア)SB05			192	IIIa(最古)	60I	SK07	SK16	282	122	92	IIIb					
89B	SB05	(ア)SB03			186	IV	60I	SK08	SK12	184	90	149	III					
89B	SB06	(ア)SB04		428	198	IV	60I	SK09	SK15	106	62	106	IIIb					

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
60I	SK10	SK17	99	82	137	III	61D	SK19	SK117	154	88	131	III
60I	SK11	SK18	122	82	175	IV	61D	SK20	SK118		108	116	II~IIIb末
60I	SK12	SK45	150	114	152	II	61D	SK21	SK38	190	164	159	II
60I	SK13	SK38			II~IIIa最古		61D	SK22	SK150	111	82	151	II~IIIa
60I	SK14	SK19	60	50	162	IV	61D	SK23	SK151			155	II
60I	SK15	SK67			V		61D	SK24	SK153		120	175	III
60I	SK16	SK66	(284)	80	142	IV	61D	SK25	SK152	144		156	II
60I	SK17	SK58	332	132	114	II	61D	SK26	SK154		66	141	II
60I	SK18	SK54	196	160	162	IIIa	61D	SK27	SK129			118	IIIb末
60I	SK19	SK49	236	86	112	IIIa	61D	SK28	SK130	198		136	IIIb末
60I	SK20	SK53	63	44	166	IIIb	61D	SK29	SK132	100	84	147	III
60I	SK21	SK47	96	70.1	172	IIIb	61D	SK30	SK126	184	87	138	IIIb~IV
60I	SK22	SK52	94	74	158	IIIb	61D	SK31	SK127	268	116	135	IIIb
60I	SK23	SK50	196	80	163	IIIb末~IV	61D	SK32	SK136		128	147	II
60I	SK24	SK51	154	112	154	IV	61D	SK33	SK135	111	90	148	III
60I	SK25	SK29	(284)	128	159	IIIa	61D	SK34	SK137	145	88	139	II~IIIa
60I	SK26	SK28	450	116	152	IV	61D	SK35	SK36	246	126	133	II
60I	SK27	SK27	(232)	105	152	V	61D	SK36	SK33	284	92	149	II
60I	SK28	SK30	160	106	157	IIIa	61D	SK37	SK35	114	112	163	II
60I	SK29	SK23		38	168	IV	61D	SK38	SK114	136	122	163	II~IV
60I	SK30	SK24	62	54	158	V	61D	SK39	SK37	342		101	IV
60I	SK31	SK25	110	86	122	IV	61D	SK40	SK147	98	72	174	IIIa
60I	SK32	SK21	(144)	60	134	IV	61D	SK41	SK79	104	96	161	IIIa
61A	SK01	SK22	390	304	-175	II	61D	SK42	SK113	148	98	159	IIIb末
61A	SK02	SK09	320	280	-51	VIIb末	61D	SK43	SK73	103		123	III~V(古)
61A	SK03	SK21	280	202	-29	IV	61D	SK44	SK78	162	96	145	II~IIIa
61A	SK04	SK27			134	II	61D	SK45	SK112	76	72	168	II
61A	SK05	SK12	120	104	89	IIIb	61D	SK46	SK111	70	62	162	IV
61A	SK06	SK20	166	150	74	IV	61D	SK47	SK80	130	126	161	III
61A	SK07	SK17			92	IIIb	61D	SK48	SK75		90	150	III~?
61A	SK08	SK25		90	129	IIIb	61D	SK49	SK146		190	110	II~IIIa
61A	SK09	SK16		156	129	IIIb末	61D	SK50	SK165		108	183	IIIa
61A	SK10	SK30		40	122	IIIa	61D	SK51	SK55	110	84	175	II~III?
61A	SK11	SK15	222	124	131	IIIa	61D	SK52	SK11			145	II
61A	SK12	SK31	110	48	119	IIIb	61D	SK53	SK140	290	156	172	III~V
61A	SK13	SK37	148	80	108	IIIb	61D	SK54	SK143	98	96	156	III~V
61A	SK14	SK35		86	148	IIIb	61D	SK55	SK66	128	110	140	IIIb~IV
61C	SK01	SK42		110	135	II	61D	SK56	SK144	186		177	III~V
61C	SK02	SK41		132	141	III	61D	SK57	SK60		198	145	II~III
61C	SK03	SK40	442		73	III~V	61D	SK58	SK61	126	90	161	II
61C	SK04	SK48		88	146	IIIb	61D	SK59	SZ03東隣構内	170	70	94	VI
61C	SK05	SK47	162	82	143	III	61D	SK60	SK62	290	110	133	IIIa
61C	SK06	SK106	166	134	126	III~V	61H	SK001	(H)SK60		80		
61C	SK07	SK44	146	88	140	II	61H	SK002	(H)SK08	80	76	113	IIIa
61C	SK08	SK92			129	II	61H	SK003	(H)SK58		110	94	II
61C	SK09	SK97		60	118	III~IV	61H	SK004	(H)SK45	178	68	142	IV
61C	SK10	SK94	164	88	134	III	61H	SK005	(H)SK02	138	25	81	V~VI
61D	SK01	SK51	285	84	118	II~III	61H	SK006	(H)SK37	160	114	104	II
61D	SK02	SK52		76	160	II~III	61H	SK007	(H)SK35	164	112	118	II
61D	SK03	SK119	74	62	123	IIIb~IV	61H	SK008	(H)SK27	48	36	171	IIIb
61D	SK04	SK161		112	121	IIIa	61H	SK009	(H)SK68			158	IV
61D	SK05	SK160		140	112	III	61H	SK010	(H)SK14		80	162	IIIa
61D	SK06	SK155	99	95	169	II	61H	SK011	(H)SK13	170	135	136	IIIb
61D	SK07	SK59		118	147	III	61H	SK012	(I)SK04	(1170)	(740)	-29	IV
61D	SK08	SK123	146	94	119	III	61H	SK013		344	202	66	
61D	SK09	SK122	214		130	IIIa	61H	SK014	(J)SK03		54	145	IV
61D	SK10	SK63	290	88	112	II~IV	61H	SK015	(J)SK05	120	110	174	IIIb末
61D	SK11	SK120	150	118	123	IIIa	61H	SK016	(J)SK09	42	38	179	IV
61D	SK12	SK121	196	102	137	IIIa	61H	SK017	(J)SK06		126	193	IV
61D	SK13	SK125			126	III	61H	SK018	(J)SK04	181	56	161	II
61D	SK14	SK159	68	60	138	IIIa	61H	SK019	(J)SK03		172	188	IIIb
61D	SK15	SK124			141	III~IIIb	61H	SK020	(J)SK17	100	42	171	IV
61D	SK16	SK56	222	112	128	II	61H	SK021	(J)SK19			166	VI
61D	SK17	SK54	310	126	134	II	61H	SK022	(J)SK14	84	64	67	II
61D	SK18	SK116	188	60	131	II~III	61H	SK023	(J)SK16		144	47	IIIa

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
61H	SK024	(Jう)SK17	84	64	73	II	61H	SK089	(Jこ)SK03	74	66	135	IV
61H	SK025	(Jう)SK01	340	334	155	IV	61H	SK090	(Jか)SK10			156	IIIa
61H	SK026	(Jき)SK25	194	94	121	IIIb	61H	SK091	(Jか)SK05	274	114	168	Va
61H	SK027	(Jき)SK21	60	58	146	III	61H	SK092	(Jお)SK01	143	100	164	I・II・IIIb ・IV・VI
61H	SK028	(Jき)SK22	70	70	140	IIIa	61H	SK093	(Jお)SK05	152	76	156	V
61H	SK029	(Jき)SK19	78	76	125	IIIb	61H	SK094	(Jお)SK06	350	122	143	V
61H	SK030	(Jき)SK20	104	56	132	III	61H	SK095	(Jお)SK07	180	76	155	IIIb末
61H	SK031	(Jき)SK27	72	46	118	IV	61H	SK096	(Jけ)SK02			64	154
61H	SK032	(Jき)SK13	58	48	175	IIIa最古	61H	SK097	(Jけ)SK01			62	153
61H	SK033	(Jう)SK11			156	III	61H	SK098	(Jお)SK09	116	64	177	IIIb末～IV初
61H	SK034	(Jう)SK09			147	IV	61H	SK099	(Jけ)SK04	76	70	145	IV
61H	SK035	(Jき)SK12			117	IIIb	61H	SK100	(Jけ)SK03	66	56	155	IIIb
61H	SK036	(Jき)SK03	52	44	167	IIIa	61H	SK101	(Jけ)SK05			42	150
61H	SK037	(Jき)SK04	134	76	134	IIIa	61H	SK102	(Jけ)SK07	150	130	143	IIIb末～IV初
61H	SK038	(Jき)SK14	122	66	140	IIIb～IV	61H	SK103	(Jけ)SK09			42	178
61H	SK039	(Jき)SK15	164	74	135	IIIb	61H	SK104	(Jけ)SK10			153	IV
61H	SK040	(Jき)SK34	154	102	142	V	61H	SK105	(Jけ)SK13			160	VI
61H	SK041	(Jき)SK35	126		145	IV	61H	SK106	(Jこ)SK13	110	84	140	IV
61H	SK042	(Jき)SK23	252	170	144	IV	61H	SK107	(Jこ)SK12			80	150
61H	SK043	(Jき)SK21	134	114	131	IV	61H	SK108	(Jけ)SK15			161	IV
61H	SK044	(Jき)SK13			124	IV	61H	SK109	(Jこ)SK11	86	60	149	III
61H	SK045	(Jき)SK15		56	155	IV	61H	SK110	(Jこ)SK10	184	82	134	V
61H	SK046	(Jき)SK10	116	54	145	IV	61H	SK111	(Jせ)SK15			97	IV・V
61H	SK047	(Jか)SK12			195	III	61H	SK112	(Jこ)SK23	89	77	116	IIIa
61H	SK048	(Jこ)SK90			149	IIIa	61H	SK113	(Jこ)SK27	40	32	160	III
61H	SK049	(Jこ)SK89	92	80	134	IIIa	61H	SK114	(Jこ)SK09	116	90	148	IIIb
61H	SK050	(Jこ)SK85	76	70	134	IIIa	61H	SK115	(Jこ)SK30	110	86	140	VI
61H	SK051	(Jこ)SK94	96	74	130	IIIb	61H	SK116	(Jこ)SK33	110	64	163	IV
61H	SK052	(Jこ)SK93	78	72	152	IIIb	61H	SK117	(Jこ)SK34	56	42	140	III
61H	SK053	(Jこ)SK92	66	58	146	V	61H	SK118	(Jこ)SK36			52	161
61H	SK054	(Jか)SK33		98	152	IIIb末	61H	SK119	(Jこ)SK35	58	52	159	IV
61H	SK055	(Jか)SK46	92	80	172	III	61H	SK120	(Jこ)SK32	58	56	175	III
61H	SK056	(Jか)SK36	78	66	143	IV	61H	SK121	(Jこ)SK31	68	62	168	III
61H	SK057	(Jか)SK45		46	175	III	61H	SK122	(Jこ)SK29			42	164
61H	SK058	(Jか)SK32			145	IV	61H	SK123	(Jこ)SK28	86		176	IV
61H	SK059	(Jか)SK31		156	141	IV	61H	SK124	(Jこ)SK25			72	142
61H	SK060	(Jか)SK35	395	110	139	IIIa	61H	SK125	(Jせ)SK34			172	V
61H	SK061	(Jか)SK44	56	44	183	II	61H	SK126	(Jせ)SK33			70	165
61H	SK062	(Jか)SK14	94	82	190	III	61H	SK127	(Jせ)SK18			100	145
61H	SK063	(Jか)SK43	80	66	181	IV	61H	SK128	(Jせ)SK16	140	122	129	IIIb末～IV
61H	SK064	(Jか)SK42	48	44	175	Va	61H	SK129	(Jせ)SK13	70		135	V
61H	SK065	(Jか)SK37	120	102	167	IV	61H	SK130	(Jせ)SK12	84	54	139	IIIb
61H	SK066	(Jか)SK41		80	172	IV	61H	SK131	(Jせ)SK10	68	54	151	IV
61H	SK067	(Jか)SK52	56	50	134	IV	61H	SK132	(Jせ)SK17	88	52	138	IIIb
61H	SK068	(Jか)SK50		77	159	IV	61H	SK133	(Jせ)SK14	122	104	122	IV
61H	SK069	(Jか)SK30		62	164	VI	61H	SK134	(Jす)SK02			88	131
61H	SK070	(Jか)SK27	82	70	154	III	61H	SK135	(Jす)SK01			98	170
61H	SK071	(Jか)SK29	68	38	166	IV	61H	SK136	(Jす)SK05			94	127
61H	SK072	(Jか)SK26	126	64	147	IV	61H	SK137	(Jせ)SK11			68	151
61H	SK073	(Jか)SK25		170	145	V	61H	SK138	(Jせ)SK35	52	36	125	IIIb
61H	SK074	(Jか)SK22	94	122	154	V	61H	SK139	(Jせ)SK26			62	136
61H	SK075	(Jか)SK20	328	212	136	IV	61H	SK140	(Jせ)SK27	96	65	109	III
61H	SK076	(Jこ)SK83	52	48	129	IV	61H	SK141	(Jせ)SK01			120	184
61H	SK077	(Jか)SK18			153	IIIb末	61H	SK142	(Jせ)SK02	182	102	149	IIIa
61H	SK078	(Jこ)SK77	70	48	134	IIIa	61H	SK143	(Jせ)SK05			145	II～III
61H	SK079	(Jこ)SK37			170	V	61H	SK144	(Jせ)SK03	76	60	141	IV
61H	SK080	(Jこ)SK81	60	56	146	IV	61H	SK145	(Jせ)SK04	94	68	139	IV
61H	SK081	(Jこ)SK75	50	36	141	IIIa	61H	SK146	(Jせ)SK25	80	62	169	III
61H	SK082	(Jこ)SK74	310	92	152	II～IIIa最古	61H	SK147	(Jせ)SK21	88	36	173	V
61H	SK083	(Jこ)SK98	112	56	150	IIIa	61H	SK148	(Jせ)SK29			42	158
61H	SK084	(Jこ)SK07	158	124	125	IV	61H	SK149	(Jせ)SK32			88	142
61H	SK085	(Jこ)SK05	124	108	163	IIIa	61H	SK150	(Jせ)SK51			46	170
61H	SK086	(Jこ)SK01		90	134	IV	61H	SK151	(Jせ)SK24			84	184
61H	SK087	(Jこ)SK04			175	IIIa	61H	SK152	(Jせ)SK42	44	42	163	III
61H	SK088	(Jこ)SK02		194	153	IIIa	61H	SK153	(Jせ)SK44	216	88	179	IV

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
61H	SK154	(Jセ)SK49	84	46	160	IV	61H	SK219	(KLき)SK05			177	IV	
61H	SK155	(Jセ)SK47		96	163	V	61H	SK220	(KLき)SK11	124	52	177	IV	
61H	SK156	(Jセ)SK50			162	IV	61H	SK221	(KLき)SK06		87	147	V	
61H	SK157	(Jこ)SK18			162	IIIa	61H	SK222	(KLき)SK10		96	180	V	
61H	SK158	(Jこ)SK16		64	137	IIIa	61H	SK223	(KLき)SK02			190	IV	
61H	SK159	(Jこ)SK21	80	68	140	III	61H	SK224	(KLき)SK07			157	V	
61H	SK160	(Jこ)SK19	108	101	168	IV・VI	61H	SK225	(KLき)SK08	174	132	158	III	
61H	SK161	(Jこ)SK15	138	94	122	IIIa	61H	SK226	(KLく)SK01	207	89	123	IV	
61H	SK162	(Jこ)SK22		66	106	V	61H	SK227	(KLく)SK03			124	IV	
61H	SK163	(Jこ)SK39		38	133	II	61H	SK228	(KLく)SK06		114	158	II・IIIa	
61H	SK164	(Jこ)SK38		22	125	IIIb	61H	SK229	(KLく)SK04		118	150	IIIb	
61H	SK165	(Jこ)SK40	34	30	116	III	61H	SK230	(KLく)SK05			153	IV	
61H	SK166	(Jこ)SK49			109	IIIb	61H	SK231	(KLく)SK33	90	74	153	V	
61H	SK167	(Jこ)SK41	36	32	109	IIIa	61H	SK232	(KLく)SK32	130	94	156	IIIa	
61H	SK168	(Jこ)SK52	48	48	113	IIIa	61H	SK233	(KLく)SK16	120	56	182	IIIb	
61H	SK169	(Jこ)SK73			154	IIIa	61H	SK234	(KLく)SK31	82		180	V	
61H	SK170	(Jこ)SK72		44	114	IIIa最古・V	61H	SK235	(KLく)SK18	164	118	170	IV	
61H	SK171	(Jこ)SK55	120	64	117	IV	61H	SK236	(KLく)SK17			154	IIIb～IV	
61H	SK172	(Jこ)SK53	134	88	133	IIIa	61H	SK237	(KLく)SK12	178	88	141	III	
61H	SK173	(Jこ)SK58	50	28	142	III	61H	SK238	(KLく)SK13	164	79	136	IIIa	
61H	SK174	(Jこ)SK57			159	IV	61H	SK239	(KLく)SK28			194	VI	
61H	SK175	(Jこ)SK61	36	34	115	IIIb	61H	SK240	(KLく)SK29	154	146	163	IIIa	
61H	SK176	(Jこ)SK63			128	III	61H	SK241	(KLく)SK30	120	100	176	IIIb	
61H	SK177	(Jこ)SK48	56	44	126	IIIb	61H	SK242	(KLお)SK15	230	98	95	IV	
61H	SK178	(Jセ)SK53	66	62	132	II	61H	SK243	(KLお)SK17			172	V	
61H	SK179	(Jセ)SK54	168	88	156	IIIa	61H	SK244	(KLお)SK16	146	102	152	IIIa	
61H	SK180	(Jそ)SK30	54	42	178	III	61H	SK245	(KLお)SK13	194	154	137	III	
61H	SK181	(Jそ)SK27	54	36	176	III	61H	SK246	(KLお)SK18		76	138	V	
61H	SK182	(Jそ)SK25	146	94	163	IV	61H	SK247	(KLお)SK22	48	24	155	IIIa	
61H	SK183	(Jき)SK29	88	62	180	IIIa	61H	SK248	(KLお)SK24	50	38	143	IIIa最古	
61H	SK184	(Jき)SK28	198	73	143	III	61H	SK249	(KLお)SK19	120	108	157	IIIb末	
61H	SK185	(Jき)SK33			139	III	61H	SK250	(KLお)SK23	60	28	160	IIIa	
61H	SK186	(Jき)SK32		108	173	IV・VI	61H	SK251	(KLお)SK04	115	86	176	IIIa最古	
61H	SK187	(Jき)SK17	64	56	150	IV	61H	SK252	(KLお)SK05	152	76	156	IIIa	
61H	SK188	(Jき)SK19	150	134	153	IV	61H	SK253	(KLお)SK03		143	150	IIIb	
61H	SK189	(Jき)SK18	88	56	160	VI	61H	SK254	(KLお)SK06	350	122	143	II	
61H	SK190	(Jき)SK22	156	136	146	VI 円窓あり	61H	SK255	(KLお)SK07		108	168	IIIa	
61H	SK191	(Jし)SK12			139	IV	61H	SK256	(KLお)SK09	116	64	177	IIIa最古	
61H	SK192	(Jそ)SK12	106	55	183	IV・VI	61H	SK257	(KLお)SK12	406	82	157	IIIb末	
61H	SK193	(Jそ)SK13	66	42	184	VI	61H	SK258	(KLお)SK11	92	52		IIIb	
61H	SK194	(Jそ)SK15			189	IV	61H	SK259	(KLお)SK10	170	84	185	IIIb	
61H	SK195	(Jそ)SK14			181	IIIb	61H	SK260	(KLか)SK02	112	122	163	IIIa	
61H	SK196	(Jそ)SK16	86	80	183	VI	61H	SK261	(KLか)SK01	212	186	121	VI～VII	
61H	SK197	(Jそ)SK05	128	114	135	II	61H	SK262	(KLお)SK20	247	180	138	IV	
61H	SK198	(Jそ)SK23			44	172	II	61H	SK263	(KLお)SK21	102	78	127	IIIb
61H	SK199	(Jそ)SK20	166	64	160	VI	61H	SK264	(KLく)SK22	240	101	161	II	
61H	SK200	(KLう)SK02			108	III	61H	SK265	(KLく)SK24	110	78	158	IIIa	
61H	SK201	(KLう)SK01	162	142	102	IIIb	61H	SK266	(KLく)SK20	250	202	135	VI～VII	
61H	SK202	(KLう)SK03	144	76	172	III	61H	SK267	(KLく)SK26	136	66	153	IIIa	
61H	SK203	(KLい)SK02			96	105	IIIb	61H	SK268	(KLく)SK19			123	III
61H	SK204	(KLい)SK03	128		170	IV	61H	SK269	(KLけ)SK09			123	IV	
61H	SK205	(KLあ)SK16	244	116	156	V	61H	SK270	(KLく)SK21		136	132	VI	
61H	SK206	(KLあ)SK11	146	142	157	II	61H	SK271	(KLけ)SK06	118	78	90	IV	
61H	SK207	(KLあ)SK14			156	IIIa最古	61H	SK272	(KLく)SK25	268	82	129	IV	
61H	SK208	(KLあ)SK20			151	IIIb dm a?	61H	SK272	(KLけ)SK14	154	76	121	IIIb	
61H	SK209	(KLあ)SK18			177	V	61H	SK274	(KLく)SK23	212	104	147	IIIa最古	
61H	SK210	(KLあ)SK19	124	108	181	V	61H	SK275	(KLけ)SK15	168	124	135	IIIa～IV	
61H	SK211	(KLあ)SK07			179	IIa	61H	SK276	(KLけ)SK19	118	94	124	IIIb末	
61H	SK212	(KLあ)SK04	90	38	190	IIIb	61H	SK277	(KLけ)SK05		100	145	IV	
61H	SK213	(KLあ)SK03			189	III	61H	SK278	(KLけ)SK22	246	108	162	IV	
61H	SK214	(Jセ)SK38		154	159	V	61H	SK279	(KLけ)SK18			135	V	
61H	SK215	(KLえ)SK03		126	146	II	61H	SK280	(KLか)SK07			147	V	
61H	SK216	(KLえ)SK01		172	157	IV・VI	61H	SK281	(KLか)SK06	210	109.1	137	IIIb～IV	
61H	SK217	(KLき)SK12	82		158	V	61H	SK282	(KLけ)SK17	100	96	136	IV	
61H	SK218	(KLき)SK04			146	130	VI	61H	SK282	(KLか)SK08			146	IIIb

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
61H	SK283	(KLか)SK15		74	148	II	61H	SK347	(X北)SK05	55	45	148	III	
61H	SK284	(KLか)SK04		86	141	IIIb未	61H	SK348	(X北)SK06			151	II	
61H	SK285	(KLか)SK03			172	IV	61H	SK349	(X北)SK07			147	IV	
61H	SK286	(KLか)SK14	72	64	145	IV	61H	SK349	(X南)SK41	60	60	160	III	
61H	SK287	(KLか)SK12	104	96	132	IV	61H	SK350	(X南)SK39	95	75	171	III	
61H	SK288	(KLか)SK23	200	74	135	IV	61H	SK351	(X南)SK40	50	47	177	III	
61H	SK289	(KLか)SK13	76		146	III	61H	SK352	(X北)SK04			133	III	
61H	SK290	(KLか)SK04	118		162	IV	61H	SK353	(X南)SK69	75	75	144	II	
61H	SK291	(KLか)SK02	126	96	141	IIIa最古	61H	SK354	(X南)SK70	65		164	II	
61H	SK292	(KLか)SK03	88	72	174	II	61H	SK355	(X南)SK55	60	30	126	IV	
61H	SK293	(KLか)SK21	72	50	125	IIIa~IV	61H	SK356	(X南)SK56			117	IV	
61H	SK294	(KLか)SK16	132	112	113	IIIa~IV	61H	SK357	(X北)SK14			65	110	III
61H	SK294	(KLか)SK11	114	92	136	IV	61H	SK358	(X北)SK13	120	105	117	IIIa最古	
61H	SK295	(KLか)SK14			154	III	61H	SK359	(X北)SK18	45	40	143	III	
61H	SK296	(KLか)SK01	260	138	146	IIIb	61H	SK360	(X北)SK17			148	IIIa	
61H	SK296	(KLか)SK12	118	98	148	IIIb	61H	SK361	(X北)SK16			153	II	
61H	SK297	(KLか)SK11			124	IIIb	61H	SK362	(X北)SK15			133	IIIa	
61H	SK298	(KLか)SK13	162	158	138	II~III	61H	SK363	(X北)SK19			45	133	II
61H	SK299	(KLき)SK25	74	68	153	IV	61H	SK364	(X北)SK31			40	162	III
61H	SK300	(KLき)SK30			98	106	IIIb~V	61H	SK365	(X南)SK51	155	60	151	II
61H	SK301	(KLき)SK08			123	IV	61H	SK366	(X南)SK68	175		117	IIIa	
61H	SK302	(KLき)SK24			106	IIIb~IV	61H	SK367	(X南)SK53			114	IIIa最古	
61H	SK303	(KLき)SK23	252	170	144	IIIb~IV	61H	SK368	(X南)SK58			118	II	
61H	SK304	(KLき)SK28	198	73	143	Va	61H	SK369	(X南)SK59	135	85	147	IV	
61H	SK305	(KLき)SK27	163	142	152	IIIb	61H	SK370	(X南)SK50	60	50	150	IV	
61H	SK306	(KLき)SK13	130	93	140	Vb	61H	SK371	(X南)SK52	70	65	100	IV	
61H	SK307	(KLき)SK21			191	132	VI	61H	SK372	(X南)SK67	140	90	134	II
61H	SK308	(KLき)SK22	228	108	180	V	61H	SK373	(X南)SK37	85	55	145	IV	
61H	SK309	(KLき)SK20			165	IIIb	61H	SK374	(X南)SK36	75	60	135	II	
61H	SK310	(KLき)SK09	72	46	141	IV	61H	SK375	(X南)SK06	165	105	130	IIIb	
61H	SK312	(KLき)SK07			147	IIIa	61H	SK376	(X南)SK05			125	142	II
61H	SK313	(KLき)SK10	96	58	144	IIIb	61H	SK377	(X南)SK04			170	IIIa	
61H	SK314	(KLき)SK08	198	154	151	IIIb	61H	SK378	(X南)SK01			35	163	IIIa
61H	SK314	(KLき)SK03	110	76	160	Va	61H	SK379	(X南)SK02			123	IIIa	
61H	SK315	(KLき)SK11	158	96	170	V	63B	SK01	SK219	360	190	135	IIIa~IIIb?	
61H	SK316	(KLき)SK02			180	IV	63B	SK02	SK217			165	IIIa	
61H	SK317	(KLこ)SK01			90	134	II	63B	SK03	SK216	240	120	149	IIIa
61H	SK318	(KLき)SK01	224	156	149	IV	63B	SK04	SK214			166	III	
61H	SK319	(KLき)SK38	136		136	IIIa	63B	SK05	SK212	40	40	136	IIIa	
61H	SK320	(KLか)SK10	123	91	173	IIIb	63B	SK06	SK213			110	171	IV
61H	SK321	(KLか)SK14	114	78	174	V	63B	SK07	SK210	160	80	128	IIIa	
61H	SK322	(KLか)SK15			181	V	63B	SK08	SK209			148	IIIa	
61H	SK323	(KLか)SK13	140	134	166	IIIa最古	63B	SK09	SK208			340	135	IIIa
61H	SK324	(KLか)SK11			172	IV	63B	SK10	SK206	205	101	130	IIIa	
61H	SK325	(KLか)SK21			171	IIIb	63B	SK11	SK207	145	105	142	II	
61H	SK326	(KLか)SK12		84	164	IIIb	63B	SK12	SK203			139	IV	
61H	SK327	(KLか)SK05	260	60	165	IIIb	63B	SK13	SK202			320	139	IV
61H	SK328	(KLか)SK01			174	VI	63B	SK14	SK201			112	II	
61H	SK329	(KLか)SK02		56	176	IIIb	63B	SK15	SK204	100	100	144	IIIa	
61H	SK330	(KLか)SK03	114	76	185	IV	63B	SK16	SK63			64	117	IIIa
61H	SK331	(KLか)SK04			188	III	63B	SK17	SK62	96	72	122	IIIa	
61H	SK332	(KLか)SK07			160	IIIa	63B	SK18	SK04	42	42	165	IIIa	
61H	SK333	(KLか)SK17			157	IV	63B	SK19	SK01			122	133	IIIa
61H	SK334	(KLか)SK30	128	110	173	Va	63B	SK20	SK02			136	125	IIIb
61H	SK335	(KLか)SK20	146	48	179	IV	63B	SK21	SK03	100	86	146	IIIa	
61H	SK336	(KLか)SK19		80	174	IIIb~IV	63B	SK22	SK08	76	66	137	IIIa	
61H	SK337	(KLか)SK18		99	144	IIIb	63B	SK23	SK06			126	IIIb	
61H	SK338	(KLか)SK28	228	146	160	V	63B	SK24	SK05			124	152	IIIa
61H	SK339	(KLせ)SK07			192	IIIa最古	63B	SK25	SK09	222	62	132	IV	
61H	SK340	(KLせ)SK09			194	IV	63B	SK26	SK11			90	157	IV
61H	SK341	(KLせ)SK01	120	184	II		63B	SK27	SK15	80	76	130	IV	
61H	SK342	(KLせ)SK08			180	II	63B	SK28	SK17	56	52	144	IIIa	
61H	SK343	(KLせ)SK10			124	IV	63B	SK29	SK10	36	36	150	IIIb	
61H	SK344	(KLせ)SK04		72	104	II	63B	SK30	SK18	90	52	158	IIIa	
61H	SK345	(KLせ)SK05			164	IV	63B	SK31	SK14	160	66	158	IIIb	

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
63B	SK32	SK19	74	38	173	IIIa	63G	SK038	(C)SK111			175	IV
63B	SK33	SK34	60	50	122	IIIa	63G	SK039	(C)SK112	60	56	135	IIIb
63B	SK34	SK59		46	147	IIIa	63G	SK040	(C)SK102	38	36	151	III
63B	SK35	SK35	38	30	148	IIIa	63G	SK041	(C)SK09	122	72	166	
63B	SK36	SK41	66	66	120	IIIa	63G	SK042	(C)SK105	30	26	173	IV
63B	SK37	SK39	149	98	114	IIIa	63G	SK043	(C)SK24	188	180.1	181	IIIa, IIIb
63B	SK38	SK38	68	42	110	IIIa	63G	SK044	(C)SK110	58	58	138	III
63B	SK39	SK37	26	26	142	IIIa	63G	SK045	(C)SK119	136	79	155	IIIa
63B	SK40	SK57	62	60	139	IIIa	63G	SK046	(C)SK118	156	97	157	IV
63B	SK41	SK36	50	40	113	IIIa	63G	SK047	(C)SK117	85	49	160	IV
63B	SK42	SK58	80	60	135	IIIa	63G	SK048	(C)SK108	38	34	166	IIIa
63B	SK43	SK56		150	128	IIIa	63G	SK049	(F)SK123		54	163	V
63B	SK44	SK32	44	36	141	IIIa	63G	SK050	(C,F)SK101		278	140	IIIb, IV
63B	SK45	SK20	30	28	151	III	63G	SK051	(F)SK103	180	118	164	IIIa最古
63B	SK46	SK21		44	147	IIIa	63G	SK052	(F)SK102	122	110	133	IIIa
63B	SK47	SK16	158	110	133	IIIb	63G	SK053	(F)SK69		314	137	IV
63B	SK48	SK22	134	52	136	IIIa	63G	SK054	(F)SK115	126	100	156	IIIa
63B	SK49	SK23	26	18	153	IIIa	63G	SK055	(F)SK114	64	(58)	158	IV
63B	SK50	SK24	50	40	144	IIIa	63G	SK056	(F)SK116			160	III
63B	SK51	SK31	62	60	157	IV	63G	SK057	(F)SK105		234	123	II
63B	SK52	SK51	70	46		IIIa	63G	SK058	(F)SK118	48	(44)	145	V
63B	SK53	SK40		40	142	IIIa	63G	SK059	(F)SK124	92	58	165	IV
63B	SK54	SK29	108	64	126	IIIa	63G	SK060	(F)SK108	84	68	157	IV
63B	SK55	SK30	26	22	154	IIIa	63G	SK061	(F)SK107	230	162	131	IIIa
63B	SK56	SK25	74	54	139	IIIa	63G	SK062	(F)SK106	212	94	141	IV
63B	SK57	SK26	124	110	129	IIIa	63G	SK063	(F)SK117	72	46	162	IV
63B	SK58	SK60	188	116	133	IIIa	63G	SK064	(F)SK109		88	128	IIIb
63B	SK59	SK64			137	IIIa	63G	SK065	(F)SK119	86	48	173	IV
63G	SK001	(A)SK118	126	103	95	IV	63G	SK066	(F)SK110	170	100	170	IV
63G	SK002	(A)SK116	102	76	120	IV	63G	SK067	(F)SK121	41	32	160	IIIb
63G	SK003	(A)SK121	192	162	99	III	63G	SK068	(F)SK126		94	171	IV
63G	SK004	(A)SK115		86	116	IIIb	63G	SK069	(F)SK113			166	IIIb
63G	SK005	(A)SK119	72	66	105	III	63G	SK070	(F)SK122	40	38	168	IV
63G	SK006	(A)SK122			143	IIIb	63G	SK071	(F)SK112	(114)	84	153	IV
63G	SK007	(A)SK125		64	121	IV	63G	SK072	(F)SK111	172		162	IV
63G	SK008	(A)SK114	99	79	132	IV	63G	SK073	(I)SK105		150	108	IV
63G	SK009	(A)SK101	162	158	102	IV, IIIb	63G	SK074	(I)SK104	160	68	158	IV
63G	SK010	(A)SK113	—	—	—	IV	63G	SK075	(I)SK106	124	44	150	III
63G	SK011	(A)SK109		196	100	IIIb	63G	SK076	(I)SK101		146	139	IV
63G	SK012	(A)SK105			134	III	63G	SK077	(I)SK103	102	68	149	IV
63G	SK013	(A)SK106	370	194	77	IV	63G	SK078	(I)SK108	91	78	171	V
63G	SK014	(A)SK110		360	91	IV	63G	SK079	(I)SK110			114	IV
63G	SK015	(A)SK111			114	IIIb	63G	SK080	(I)SK102		96	135	V
63G	SK016	(A)SK123	116	100	109	IIIb末	63G	SK081	(I)SK107			155	IV
63G	SK017	(A)SK102	238	180	92	IV	63G	SK082	(I)SK113	64	52	136	V
63G	SK018	(A)SK103	174	124	111	IIIb	63G	SK083	(I)SK111		202	127	IIIb末~V
63G	SK019	(A)SK126	74	54	131	IIIa	63G	SK084	(J)SK118	(188)	87	139	VII
63G	SK020	(A)SK112			94	IIIb・IV	63G	SK085	(H,J)SK110	212	180	156	IV
63G	SK021	(B)SK41	94	72	127	IIIa	63G	SK086	(J)SK105	200	90	149	V
63G	SK022	(B)SK105		168	98	II・IV	63G	SK087	(J)SK112		74	?	IIIb
63G	SK023	(B)SK103			157	III	63G	SK088	(J)SK113	113	66	?	IIIa
63G	SK024	(B)SK42	124	70	138	IIIa	63G	SK089	(J)SK107		80	132	IV
63G	SK025	(B)SK48	118	102	147	II	63G	SK090	(J)SK120	(70)	70	133	III
63G	SK026	(B)SK49	180	62	145	IIIa	63G	SK091	(J)SK111			145	IV
63G	SK027	(B)SK101	68	62	145	IIIa	63G	SK092	(J)SK106	82	72	133	IIIb
63G	SK028	(B)SK102	60	52	153	III	63G	SK093	(J)SK101		248	110	IV
63G	SK029	(B)SK106			156	IIIa	63G	SK094	(J)SK104	184	106	171	IV
63G	SK030	(B)SK107	40	36	158	IV	63G	SK095	(J)SK121	100		171	V
63G	SK031	(B)SK109	70	60	169	IV	63G	SK096	(H)SK108		130	128	IV
63G	SK032	(B)SK112			156	IIIa	63G	SK097	(H)SK112	70	46	180	IV
63G	SK033	(C)SK10	138		186	IV	63G	SK098	(H)SK101	262	132	145	IV
63G	SK034	(C)SK115	20	20		IV	63G	SK099	(H)SK107	130	124	169	IIIb
63G	SK035	(C)SK116	22	18	173	IV	63G	SK100	(H)SK115	174	130	100	IV
63G	SK036	(C)SK13	144	62	150	IIIb末~IV	63G	SK101	(H)SK102	182	102	125	IIIb末
63G	SK037	(C)SK25	202	140	175	IIIa, IIIb	63G	SK102	(H)SK103	122	90	156	III

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
63G	SK103	(H)SK111		124	120	III	63G	SK168	(J)SK124	84	80	123	III	
63G	SK104	(H)SK118	(100)	82	134	IIIb、VII	63G	SK169	(J)SK125		98	148	IV	
63G	SK105	(H)SK116		94	154	IV	63G	SK170	(J)SK11	414	124	171	VII	
63G	SK106	(H)SK106		142	134	IV	63G	SK171	(J)SK111	70	64	135	V	
63G	SK107	(E)SK127	114	96	111	IIIa	63G	SK172	(J)SK117	95	80	145	IV	
63G	SK108	(E)SK108	96	80	165	IIIb	63G	SK173	(J)SK116	102	80	141	IV	
63G	SK109	(E)SK107		296	151	IV	63G	SK174	(J)SK119	(197)	103	138	IIIb	
63G	SK110	(E)SK109	204	144	123	IIIa	63G	SK175	(J)SK103	130	106	135	IV	
63G	SK111	(E)SK106	168		130	IIIb	63G	SK176	(J)SK108		104	111	IV	
63G	SK112	(E)SK111			101	IV	63G	SK177	(J)SK114	66	43	143	III	
63G	SK113	(E)SK132	66	46	126	IIIa	63G	SK178	(J)SK115		60	128	III	
63G	SK114	(E)SK110		134	138	III	63J	SK01	SK37		70	144	IIIa	
63G	SK115	(E)SK113		168	109	IIIb	63J	SK02	SK36	96	80	150	IIIa	
63G	SK116	(E)SK112	264	146	111	IIIa・IIIb	63J	SK03	SK34	160	116	140	IIIa	
63G	SK117	(E)SK134		54	142	III	63J	SK04	SK33	86	84	140	IIIa	
63G	SK118	(E)SK118			118	III	63J	SK05	SK15	208	128	124	V	
63G	SK119	(E)SK128	94		121	IIIb	63J	SK06	SK22	88	80	158	VI	
63G	SK120	(E)SK115	74	44	125	II	63J	SK07	SK21	60	44	142	IV	
63G	SK121	(E)SK114	84	68	102	IV	63J	SK08	SK16		80	130	IV	
63G	SK122	(E)SK129	62	58	116	IIIa	63J	SK09	SK20	244	210	135	IIIa・IV	
63G	SK123	(E)SK131		102	149	IIIa	63J	SK10	SK40		70	182	VI	
63G	SK124	(E)SK105		248	119	IIIb	63J	SK11	SK06	186	112	194	VII	
63G	SK125	(E)SK117		108	139	IV	63J	SK12	SK10		138	180	IV	
63G	SK126	(E)SK119	254	206	131	IIIb末～IV	63J	SK13	SK09	170	146	194	III	
63G	SK127	(E)SK130			138	IIIa	63J	SK14	SK11		114	179	II	
63G	SK128	(E)SK126	258		131	IIIa	63J	SK15	SK08	282	108	132	IIIa	
63G	SK129	(E)SK124	134	102	136	IIIa	63J	SK16	SK07	110	74	186	VI	
63G	SK130	(E)SK122	132	102	121	IV	63J	SK17	SK26	140	96	148	IIIb	
63G	SK131	(E)SK135	106	96	122	IIIa	63J	SK18	SK04	298	112	144	VI～VII	
63G	SK132	(E)SK103		198	132	IIIb末～IV	63J	SK19	SK03	376	86	114	VI～VII	
63G	SK133	(E)SK102			171	IIIb	63J	SK20	SK12	260	90	136	VI	
63G	SK134	(E)SK101		116	131	V	63J	SK21	SK29		100	II		
63G	SK135	(E)SK125	110	60	141	IIIb	63J	SK22	SK02	326	174	154	VI or VII	
63G	SK136	(E)SK121	62	(55)	148	II	63J	SK23	SK01		119	192	VI or VII	
63G	SK137	(E)SK120			132	IIIa	63J	SK24	SK31		134	183	IV	
63G	SK138	(D)SK40	250	168	126	IV	63J	SK25	SK14	176	104	182	IV	
63G	SK139	(D)SK39		94	146	II	63J	SK26	SK24		100	140	V	
63G	SK140	(D)SK23	164	128	128	II	63J	SK27	SK13	254	137	162	V	
63G	SK141	(D)SK102			98	141	IIIb	63J	SK28	SK23		144	182	IV
63G	SK142	(D)SK38		172	120	IIIa最古	63J	SK29	SK19	224			Va	
63G	SK143	(D)SK21	192	168	93	IIIb、IV	63J	SK30	SK39	150	42	143	IV	
63G	SK144	(D)SK29	242		122	IIIb、IV	63J	SK31	SK18	168	78	170	V	
63G	SK145	(D)SK19	180	160	135	IIIb	63J	SK32	SK28	112	74	160	III	
63G	SK146	(D)SK20	86	54	143	IV	63J	SK33	SK27		210	152	IIIb	
63G	SK147	(D)SK66	198	114	127	II	63J	SK34	SK25			171	II	
63G	SK148	(D)SK22	124	78	99	IV	63J	SK35	SK42		184	146	VI	
63G	SK149	(D)SK18	420	100	135	IV	63J	SK36	SK30	170	66	148	VII	
63G	SK150	(D)SK14	290	168	75	II・IIIb	63J	SK37	SK38	80	62	160	IIIa	
63G	SK151	(D)SK28	168	100	155	IIIa	63J	SK38	SK17	100	74	152	V	
63G	SK152	(D)SK33			157	IIIa	63L	SK01	(ア)SK02		114	157	IV	
63G	SK153	(D)SK16	90	84	166	III	63L	SK02	(ア・イ)SK01		98	140	IV	
63G	SK154	(D)SK27	224	120	160	IIIa	63L	SK03	(イ)SK02		86	150	VII	
63G	SK155	(D)SK113	74	70	104	IV	63L	SK04	(イ)SK03	174	80	153	IV	
63G	SK156	(D)SK110		102	107	IV	63L	SK05	(イ)SK04	302		136	IIIa	
63G	SK157	(D)SK105			129	IV	63L	SK06	(オ)SK02			172	II	
63G	SK158	(D)SK107	82	64	108	IV	63L	SK07	(オ)SK03	88	82	177	II	
63G	SK159	(D)SK14	480		140	II or III a 故	63L	SK08	(オ)SK04		(110)	156	II	
63G	SK160	(D)SK34	180	120	175	IV	63L	SK09	(エ)SK01	122		175	IIIa	
63G	SK161	(D)SK30	122	72	189	IIIb	63L	SK10	(エ)SK05	133	88	156	I・IIIb・IV	
63G	SK162	(D)SK37		228		IV	63L	SK11	(エ)SK02	90	83	159	IV	
63G	SK163	(G)SK102			129	IV	63L	SK12	(エ)SK06		104	146	IIIa	
63G	SK164	(G)SK103			114	V	63L	SK13	(ウ)SK01		100	131	V	
63G	SK165	(G)SK104			134	IV	63L	SK14	(ウ)SK03	130	48	144	IIIb末	
63G	SK166	(G)SK107	52	50	157	IV	63L	SK15	(ウ)SK02		118	167	IV	
63G	SK167	(G)SK105			74	167	IV	63L	SK16	(ウ)SK05		145	IV	

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
63L	SK17	(エ)SK03			163	IV	63M	SK33	SK68	156	124	152	IV	
63L	SK18	(エ)SK07	92	68	159	IIIb	63M	SK34	SK69	154	96	170	IIIb	
63L	SK19	(カ)SK01			136	IIIa	63M	SK35	SK42	218	172	135	IIIa	
63L	SK20	(キ)SK01	170	150	143	V	63M	SK36	SK102	116	110	169	IV	
63L	SK21	(ク)SK06			171	IV	89A	SK01	SK90	20	20	150	III	
63L	SK22	(ク)SK08			150	III	89A	SK02	SK89	146	120	160	IIIa	
63L	SK23	(キ)SK02			118	II・IV	89A	SK03	SK85	130	114	149	IIIb	
63L	SK24	(ク)SK07	76		155	III	89A	SK04	SK86	92	88	159	IIIb	
63L	SK25	(ク)SK05	198	112	165	IV	89A	SK05	SK46	192	168	165	IV	
63L	SK26	(ク)SK01			192	105	lla Ⅰ期あり	89A	SK06	SK91			149	V
63L	SK27	(ク)SK02			61	178	II	89A	SK07	SK47	98	76	122	IIIb末～IV
63L	SK28	(ケ)SK01	140	89	172	IIIa	89A	SK08	SK48	198	94	169	IV	
63L	SK29	(ケ)SK03			147	IIIa	89A	SK09	SK58	136	110	152	IV	
63L	SK30	(ケ)SK02	210		143	IIIa	89A	SK10	SK61	104	68	133	IV	
63L	SK31	(サ)SK01	67	38	143	IIIb	89A	SK11	SK84		86	153	II	
63L	SK32	(コ)SK03			150	IV	89A	SK12	SK65	112	84	151	IV	
63L	SK33	(ク)SK03	(80)	40	165	IIIa	89A	SK13	SK64	142	112	132	IV	
63L	SK34	(ク)SK04	82	66	163	IV	89A	SK14	SK83	106	100	150	IV	
63L	SK35	(ク)SK09	120		170	IV	89A	SK15	SK43	144	120	129	II・IV	
63L	SK36	(コ)SK02			155	II・IIIa・IV	89A	SK16	SK35	152	114	111	II	
63L	SK37	(コ)SK01			102	II～IIIa	89A	SK17	SK63	114	94	96	II	
63L	SK38	(コ)SK04	53	38	167	III	89A	SK18	SK82	110	80	162	IV	
63L	SK39	(コ)SK05			84	133	II	89A	SK19	SK29			157	IIIa
63L	SK40	(コ)SK07			153	II	89A	SK20	SK95			180	IV	
63L	SK41	(コ)SK06			171	IV	89A	SK21	SK72			121	IIIa	
63L	SK42	(シ)SK01			161	IIIa	89A	SK22	SK49	60	58	170	IV	
63L	SK43	(ス)SK04		100	100	IV	89A	SK23	SK50	168	66	165	II	
63L	SK44	(ス)SK03		170	88	II・IV	89A	SK24	SK33	198	122	153	V	
63L	SK45	(ス)SK01			128	IV	89A	SK25	SK78	106	62	162	VI	
63L	SK46	(ス)SK06	176	105	107	IIIb末～IV	89A	SK26	SK98	168	104	137	IIIb	
63L	SK47	(スセ)SK02		92	143	II・IV	89A	SK27	SK70	122	108	152	IIIb	
63L	SK48	(セ)SK09		148	142	III	89A	SK28	SK74	134	76	159	V	
63L	SK49	(セ)SK03	158		171	II	89A	SK29	SK32		118	108	IV	
63M	SK01	SK96			160	IV	89A	SK30	SK92		72	144	IIIa	
63M	SK02	SK12			157	IV	89A	SK31	SK93		92	137	II・IV	
63M	SK03	SK10	100	74	161	IIIb	89A	SK32	SK19	38	36	141	IIIa	
63M	SK04	SK11	72	68	162	IIIa～IV	89A	SK33	SK20	184	130	139	V	
63M	SK05	SK93	116	80	166	IIIa	89A	SK34	SK56		70	149	IIIa	
63M	SK06	SK86	374	328	133	IV・VI	89A	SK35	SK97		62	152	IIIa	
63M	SK07	SK85		110	181	IIIa・V	89A	SK36	SK57	66	62	154	V	
63M	SK08	SK84	110	80	167	IIIb	89A	SK37	SK17	248	166	142	IIIb末～IV	
63M	SK09	SK82	262	216	131	IV	89A	SK38	SK78	(126)	74	116	VI	
63M	SK10	SK81	100	68	149	V	89A	SK39	SK94			152	IV	
63M	SK11	SK79	112	98	158	IV	89A	SK40	SK77			168	V	
63M	SK12	SK48	(140)	126	152	IIIb末～IV	89A	SK41	SK44			126	V	
63M	SK13	SK04	222		148	IIIb末～IV	89A	SK42	SK67			176	IIIa	
63M	SK14	SK89	116	88	150	II・IV	89A	SK43	SK96		118	139	IV	
63M	SK15	SK33			189	IV	89A	SK44	SK51		76	132	IIIa最古	
63M	SK16	SK05	70	60	150	IV	89A	SK45	SK45	142		108	IIIa最古	
63M	SK17	SK25			64	144	V	89A	SK46	SK16	156	156	114	IIIb
63M	SK18	SK18	62	26	158	IIIb	89A	SK47	SK31	120	102	118	IIIb	
63M	SK19	SK19	90	74	168	III	89A	SK48	SK37	118	116	117	IIIb	
63M	SK20	SK24	100	98	166	IV	89A	SK49	SK39	140	82	128	IIIa	
63M	SK21	SK21	172	138	150	II	89A	SK50	SK22	134	94	148	IIIb	
63M	SK22	SK08		143	132	IIIb	89A	SK51	SK30			169	VI	
63M	SK23	SK13	86	56	181	IV	89A	SK52	SK25			106	IIIa最古	
63M	SK24	SK16	92	78	186	IV	89A	SK53	SK36		180	143	IIIb	
63M	SK25	SK23	205	154	146	V	89A	SK54	SK55			154	IIIb	
63M	SK26	SK22	68	62	152	IIIb	89A	SK55	SK41			148	IIIa	
63M	SK27	SK44	110	60	159	V	89A	SK56	SK54	374		171	IIIa	
63M	SK28	SK43			148	IV・V	89A	SK57	SK34	178	106	169	II末～IIIa最古	
63M	SK29	SK45	130	68	150	V	89A	SK58	SK23	122	86	136	III	
63M	SK30	SK46	146	68	148	IV	89A	SK59	SK38	140	126	169	IIIb	
63M	SK31	SK76	310		134	IIIb	89A	SK60	SK21	174	126	149	II～IIIa最古	
63M	SK32	SK101	124	54	160	IIIb末	89A	SK61	SK40	72	58	174	IIIb	

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
89A	SK62	SK73	306	88	89	II	89B	SK59	(エ)SK25			134	IIIa	
89A	SK63	SK88			155	IIIa最古	89B	SK60	(エ)SK02			158	IIIa	
89A	SK64	SK24	106	88	174	VII	89B	SK61	(ウ)SK03			186	V	
89A	SK65	SK87	98	88	147	IIIb	89B	SK62	(ウ)SK04	240	120	102	II・IV	
89A	SK66	SK18	172	166	169	IIIa最古	89B	SK63	(ウ)SK08			114	IV	
89A	SK67	SK80	104	100	151	IV	89B	SK64	(ウ)SK07	228	186	142	IIIb末	
89A	SK68	SK15		94	67	IV	89B	SK65	(エ)SK03	206	184	146	IV	
89B	SK01	(ア)SK47	80	46	137	IIIa最古	89B	SK66	(エ)SK01			160	IV	
89B	SK02	(ア)SK18		144	124	IIIb末	89B	SK67	(エ)SK10		70	136	IV	
89B	SK03	(ア)SK23		116	158	Va	89B	SK68	(エ)SK37	356	114	114	IV(上層)	
89B	SK04	(ア)SK48	138	94	157	IIIa最古	89B	SK69	(エ)SK39		72	128	IV	
89B	SK05	(ア)SK24	246	210	121	IV	89B	SK70	(エ)SK38	(138)	98	150	IV	
89B	SK06	(ア)SK17	212	108	133	IIIa末	89B	SK71	(エ)SK26			175	II	
89B	SK07	(ア)SK02下層	250	240	118	IV	89B	SK72	(エ)SK06	222	128	122	IIIa	
89B	SK08	(ア)SK21	300	186	118	IV	89B	SK73	(エ)SK13	76	42	142	VI	
89B	SK09	(ア)SK10		118	165	V	89B	SK74	(エ)SK14	236	80	144	III	
89B	SK10	(ア)SK03	194	156	144	IIIb	89B	SK75	(エ)SK15		100	143	IV	
89B	SK11	(ア)SK07・12	440	142	146	IIIa	89B	SK76	(エ)SK28	106	76	141	III	
89B	SK12	(ア)SK04	162		167	IIIa	89B	SK77	(ア)SK02上層	176	(150)	148	VI	
89B	SK13	(ア)SK15	110	64	166	V	89B	SK78	(ウ)SK01			160	VI	
89B	SK14	(ア)SK05		174	166	IV	<b>S X</b>							
89B	SK15	(ア)SK14		162	183	IIIb	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
89B	SK16	(ア)SK08	252	188	156	IV	60A	SX01	SD11					
89B	SK17	(ア)SK19	156	116	130	IV	60A	SX02						
89B	SK18	(ア)SK06			149	IV	60B	SX01	SK125					
89B	SK19	(ア)SK16	330		133	IIIa	60B	SX02						
89B	SK20	(イ)SK07	144	94	146	IV	60B	SX03						
89B	SK21	(イ)SK26	192	144	142	III	61H	SX01						
89B	SK22	(イ)SK17		184	134	IV	61H	SX02						
89B	SK23	(イ)SK16			195	IV	61M2	SX01						
89B	SK24	(イ)SK23		120	156	IV	63B	SX01						
89B	SK25	(イ)SK09	178	156	125	IIIb	63G	SX01						
89B	SK26	(イ)SK18		108	140	IIIb末	63G	SX02						
89B	SK27	(イ)SK21	105		118	IIIb	東部地区							
89B	SK28	(イ)SK11			123	IIIa	<b>堅穴住居</b>							
89B	SK29	(イ)SK08		122	111	II	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
89B	SK30	(イ)SK13		138	163	IV	61N	SB01abc	SB02			8153 8159	II	
89B	SK31	(イ)SK29		200	102	IV	61N	SB02	SB01			167		
89B	SK32	(イ)SK12	264	165	111	IIIb	61P	SB01	SB01	790	610	208	II	
89B	SK33	(イ)SK25	152		164	Va	61P	SB02	SB02	920	610	187	II	
89B	SK34	(イ)SK15			157	IV	61P	SB03	SB03		590	200	II	
89B	SK35	(イ)SK22		124	149	III	61P	SB04	SB12		460	191	II	
89B	SK36	(イ)SK28	86	62	166	III	61P	SB05	SB13		270	186	II	
89B	SK37	(イ)SK20	232	138	146	IV	61P	SB06a	SB14		510	168	II	
89B	SK38	(イ)SK24	141		135	IIIb	61P	SB06b	SB15			177	II	
89B	SK39	(イ)SK02	136		147	IV	61P	SB07a	SB08	1160	590	173	II	
89B	SK40	(イ)SK05	209	143	136	II	61P	SB07b	SB09			185	II	
89B	SK41	(イ)SK06			56	158	II	61P	SB08	SB10	970		183	II
89B	SK42	(イ)SK03	119	86	164	IIIb	61P	SB09	SB05		600	186	II	
89B	SK43	(イ)SK10			154	II	61P	SB10	SB07	900	710	197	II	
89B	SK44	(ウ)SK21		164	145	IIIb	61P	SB11	SB06	920	530	200	II	
89B	SK45	(ウ)SK09	182	178	146	IIIa	61P	SB12	SB04		1050	214	II	
89B	SK46	(ウ)SK25		148	141	IIIa	61T	SB01	(T)SB01		420	236	VI	
89B	SK47	(ウ)SK20	132		154	IIIa最古	62A	SB01ab	(A1)SB01	604	302	217	IV(a,bとも)	
89B	SK48	(ウ)SK22	190	160	142	IIIa	<b>掘立柱建物</b>							
89B	SK49	(ウ)SK23			80	160	IIIb末	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期
89B	SK50	(ウ)SK24		(80)	147	II	61N	SA01	(R・S)	680	390		II	
89B	SK51	(エ)SK24	144	46	165	IIIa	62A	SA01	Pit61,62,63	482	393		IV?	
89B	SK52	(エ)SK22	158	88	136	II	62C	SA01	P6,7,8	420	380		VI~?	
89B	SK53	(エ)SK23	60	48	152	II	63A	SA01	Pit10,4,3	288	234		II	
89B	SK54	(ウ)SK06	104	109	152	II	<b>土坑</b>							
89B	SK55	(ウ)SK05			142	IIIa最古	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	
89B	SK56	(エ)SK12	172	128	141	IIIa	61M1	SK01	SK04	166	118	160	IV	
89B	SK57	(エ)SK27	136	70	169	III	61M1	SK02	SK05	230	118	154	IV	
89B	SK58	(エ)SK07	192	114	144	III	61M1	SK03	SK02	294	106	144	IV	

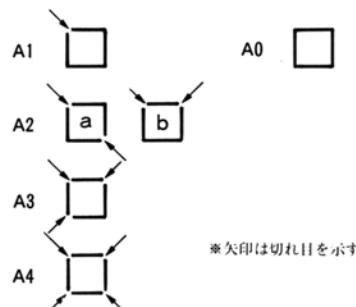
調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	南部地区						
							中世方形土塙						
61M1	SK04	SK03	390	76	152	IV	60A	SK59	(A)SK13	276	136	166	
61M1	SK05	SD36		70	153		60A	SK60	(A)SK12	258	55		
61N	SK01	(N)SK02			103	III	60A	SK61	(A)SK08	210		194	
61N	SK02	(N)SK03			163	III	60B	SK23	(B)SK05	210	122	204	
61P	SK01	(P)SK02		186	228	II ~ IIIa後古	60B	SK24	(B)SK04	94	91	221	
61P	SK02	(P)SK04		126	174	II	60B	SK25	(B)SK02		174	179	
61P	SK03	(P)SK05	416	182	210	II ~ IIIb	60B	SK26	(B)SK01			183	
61P	SK04	(P)SK14		72	214	IIIa最古	60I	SK62	(I)SK01	356	120	221	
61T	SK01	(T)SK84		74	200	VII	60I	SK63	(I)SK02	344	128	194	
61T	SK02	(T)SK86	116	104	193	VI	61A	SK30	(AB)SK06	234	188	168	
61T	SK03	(T)SK74	36	32	202	IV	61A	SK31	(AB)SK05	298	174	204	
62C	SK01	SK04		90	232	VI	61A	SK27	(C)SK29	194		228	
62D	SK01	SK01	175	150	228	VI	61C	SK28	(C)SK30	252	160	223	
62D	SK02	SD02		265	171		61C	SK29	(C)SK23	482	142	194	
62E	SK01	SD05		93	187		61D	SK33	(D)SK01	298	168	227	
62E	SK02	SD02	320	65	185		61D	SK34	(D)SK02		190	214	
62E	SK03	SD06	660	150	167		61D	SK35	(D)SK03		186	202	
62E	SK04	SK01	233	100	189		61D	SK36	(D)SK28	292	128	204	
62F	SK05	SK06	282	110	192		61D	SK37	(D)SK19		114	202	
62F	SK06	SK07	262	108	187		61D	SK38	(D)SK04	244		230	
62F	SK07	SK01		120	152	VI	61D	SK39	(D)SK05		160	225	
62G	SK01	SK02	365	195	192	VII	61D	SK40	(D)SK12	298		217	
62G	SK02	SK04		55	193	VII	61D	SK41	(D)SK16			221	
62G	SK03	SK05		105	199	VII	61D	SK42	(D)SK13			241	
62G	SK04	SK01	250	130	211	VI	61D	SK43	(D)SK18			194	
62H	SK01	SK03	150	100	207	VI	61D	SK44	(D)SK15	296	94	224	
62H	SK02	SK07	120	98	106	II ~ IIIa後古	61D	SK45	(D)SK14	296	100	238	
63A1	SK01	SK07	154	100	100	II	61D	SK46	(D)SK20	200	136	241	
63A1	SK02	SK05	120	147	II		61D	SK47	(D)SK26	412	158	207	
63A2	SK03	SK04		190	96	151	II	61D	SK48	(D)SK25	163	90	237
63A2	SK04	SK01					61D	SK49	(D)SK17		212	203	
<b>SX</b>							61D	SK50	(D)SK07	454	204	196	
調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	61D	SK51	(D)SK31	270	116	211	
61M2	SX01	瓜郷式壺		172			61D	SK52	(D)SK08	358	210	187	
62A	SX01		460	195			61D	SK53	(D)SK10	268	79	229	
62A	SX02		506	194			61D	SK54	(D)SK09	462	272	157	
62A	SX03	(A2)SB01		195			61D	SK55	(D)SK06		172	238	
<b>北部地区</b>							61H	SK106	(J)SK11	340	140	191	
<b>中世方形土塙</b>							61H	SK107	(J)SK10	820	210	203	
調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	時期	61H	SK108	(J)SK16	630	140	210	
61E	SK01	(EF)SK16	280	200	211		61H	SK109	(J)SK17	375		197	
61E	SK02	(EF)SK17	360	230	206		61H	SK110	(J)SK18			227	
61E	SK03	(EF)SK14	240	200			61H	SK111	(J)SK01	310	170	185	
61E	SK04	(EF)SK15		160			61H	SK112	(J)SK05	500	190	207	
61E	SK05	(EF)SK01	200	180			61H	SK113	(J)SK12		220	184	
61E	SK06	(EF)SK02	460	180	206		61H	SK114	(J)SK02	335	130	200	
61E	SK07	(EF)SK03	230	200	203		61H	SK115	(J)SK03		200	192	
61E	SK08	(EF)SK18	200	105	192		61H	SK116	(J)SK04	570	150	202	
61E	SK09	(EF)SK19	220	200	208		61H	SK117	(J)SK09	630	160	189	
61E	SK10	(EF)SK13	680	310	186		61H	SK118	(J)SK08	500	175	185	
61E	SK11	(EF)SK04	330	150			61H	SK119	(J)SK06	480	150	186	
61E	SK12	(EF)SK05		120			61H	SK120	(J)SK19		195	191	
61E	SK13	(EF)SK06		140			61H	SK121	(J)SK07	290	180	171	
61E	SK14	(EF)SK09		130			61H	SK122	(J)SK13	1020	170	185	
61E	SK15	(EF)SK07	170	130			61H	SK123	(KL)SK42	580	200	170	
61E	SK16	(EF)SK08	160	100			61H	SK124	(KL)SK43			219	
61E	SK17	(EF)SK12	200	150	212		61H	SK125	(KL)SK39	760	200	184	
61E	SK18	(EF)SK10		130			61H	SK126	(KL)SK37	300	140	205	
61E	SK19	(EF)SK11		190			61H	SK127	(KL)SK41	250	160	230	
63D	SK20	(DE)SK03	260	102	203		61H	SK128	(KL)SK01	280	145	183	
63D	SK21	(DE)SK01	230		177		61H	SK129	(KL)SK02	320	170	186	
63D	SK22	(DE)SK02	214	115	169		61H	SK130	(KL)SK34	280	130	187	

調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル	調査区番号	遺構新番	遺構旧番	規模長軸	規模短軸	底レベル
61H	SK131	(KL)SK35	250	135	205	63J	SK84	SK07	230	170	232
61H	SK132	(KL)SK36	230		208	63J	SK85	SK08	300	155	232
61H	SK133	(KL)SK40	380	180	202	63L	SK102	SK01			223
61H	SK134	(KL)SK38	370	150	189	63L	SK103	SK02			222
61H	SK135	(KL)SK03	380	130	180	63L	SK104	SK03		135	
61H	SK136	(KL)SK04			204	63L	SK105	SK04			
61H	SK137	(KL)SK05	560	275	173	63M	SK56	SK01	300	140	225
61H	SK138	(KL)SK06	295	160	209	63M	SK57	SK02			199
61H	SK139	(KL)SK07	460	140	190	63M	SK58	SK03	280	135	228
61H	SK140	(KL)SK32	290	190	196	89A	SK72	SK01	215	60	152
61H	SK141	(KL)SK09			179	89A	SK73	SK03	90	50	212
61H	SK142	(KL)SK10	370	100	180	89A	SK74	SK02	125	55	172
61H	SK143	(KL)SK12			203	89A	SK75	SK04	85	80	179
61H	SK144	(KL)SK11			176	89A	SK76	SK05		80	221
61H	SK145	(KL)SK13	460	200	227	89A	SK77	SK08	160	65	214
61H	SK146	(KL)SK08	460	180	190	89B	SK86	SK04	400	114	206
61H	SK147	(KL)SK15		180	172	89B	SK87	SK05			182
61H	SK148	(KL)SK14	280	130	158	89B	SK88	SK06	334	156	208
61H	SK149	(KL)SK16		155	168	89B	SK89	SK01	930	300	173
61H	SK150	(KL)SK17			192	89B	SK90	SK07	416	208	213
61H	SK151	(KL)SK44	200	100	197	89B	SK91	SK08		254	181
61H	SK152	(KL)SK45	260	160	176	89B	SK92	SK09	554	154	195
61H	SK153	(KL)SK18	440	180	194	89B	SK93	SK10	662	156	205
61H	SK154	(KL)SK22	420	170	155	89B	SK94	SK11			196
61H	SK155	(KL)SK19	360	195	199	89B	SK95	SK12	505	135	116
61H	SK156	(KL)SK20		150	211	89B	SK96	SK13	410	126	176
61H	SK157	(KL)SK21		150	211	89B	SK97	SK02	416	176	200
61H	SK158	(KL)SK24	460		204	89B	SK98	SK14	528	154	194
61H	SK159	(KL)SK23	900	230	198	89B	SK99	SK03	562	178	168
61H	SK160	(KL)SK33		155	201	89B	SK100	SK15	258	122	215
61H	SK161	(KL)SK31	165	60	256	89B	SK101	SK16		140	191
61H	SK162	(X)SK26	340	130	188						
61H	SK163	(X)SK25	270	165	215						
61H	SK164	(X)SK28	270	150	192						
61H	SK165	(X)SK27	440	180	205						
61H	SK166	(X)SK29	310	150	185						
61H	SK167	(X)SK30			230	190					
63B	SK168	SK01			80	217					
63B	SK169	SK02				226					
63B	SK170	SK03			80	223					
63B	SK171	SK04				221					
63B	SK172	SK05	270	105		220					
63B	SK173	SK06			120	210					
63B	SK174	SK07				201					
63B	SK175	SK08	420	140		205					
63B	SK176	SK09			85	205					
63B	SK177	SK10			180	190					
63B	SK178	SK11			230	196					
63B	SK179	SK12	520	100		190					
63B	SK180	SK13	240	195		194					
63B	SK181	SK14			160	157					
63G	SK64	SK04	166	102		175					
63G	SK65	SK05			166	200					
63G	SK66	SK03	270	116		217					
63G	SK67	SK02	334	126		199					
63G	SK68	SK01	430	168		193					
63G	SK69	SK06	306	108		208					
63G	SK70	SK07			128	208					
63G	SK71	SK08			136	181					
63J	SK78	SK01	320	170		221					
63J	SK79	SK03	260	110		204					
63J	SK80	SK02	470	120		209					
63J	SK81	SK04	400	220		152					
63J	SK82	SK05	150	120		233					
63J	SK83	SK06	235	215		229					

方形周溝墓							新番号	県教育委員会 「報告書」番号	56年度番号	センターライン番号	長軸	短軸	時期	備考	
							新番号	県教育委員会 「報告書」番号	56年度番号	センターライン番号	長軸	短軸	時期	備考	
新番号	県教育委員会 「報告書」番号	56年度番号	センターライン番号	調査時番号	長軸	短軸	時期	備考							
001		(60I)04	820	630	III	(A4)	065	62[X]159			1250	1150	IV	A1	
002		(60I)03	—	—	III		066	61・62[X]151			720	—	IV		
003		(60I)01	—	780	III	(A1)	067	62[X]152			680	—			
004		(60I)02	—	—	III		068	62[X]153		030	880	—	IV		
005	59[X]123		—	—	II		069				460	—	III		
006	001		—	—	II		070				620	—			
007	002		700	—	II	A4	071	62[X]154			870	850		A1	
008	59[X]124		—	600	II		072		033		580	530	III	A4	
009	005		830	620	II	A4	073		034		630	470	II	A3	
010	004		680	550	II	A4	074	62[X]160	037		1100	760	II	A4	
011	006		920	600	II	A4	075		040		520	420	II	A4	
012	59・60[X]125		—	5.2	II		076		042		340	—		A4	
013	60[X]126		—	5.2	II		077		039		430	380	II	A4	
014	60[X]127		—	—	II		078		041		420	290	II	A4	
015	008		720	580	II	A4	079	62[X]SX161-D2	SK030		470	350			
016	010		450	430	II	A2	080	62[X]SX161	038		1130	1120	IV	A1	
017	011		770	600	II	A4	081		043		780		III		
018	007		1080	630	II	A4	082	62・63[X]164			800	680	II		
019	009		620	570	II	A4	083	62[X]165			530	470	II	A4	
020	SD 003 SD 003 SK 004		500	340	II	A2	084	62[X]163			680	520	II	A4	
021	60[X]134	012	600	—	II	A4	085	62・63[X]183			750	750	V	A2	
022	59[X]121		700	560	II		086	62・63[X]183			760	6800	V	A2	
023	59[X]122		—	—	II		087	63[X]182			870	570	II		
024	60[X]128		—	—	II		088	63[X]184			750	—	V	A2	
025	60[X]129		400	—	II		089	63[X]169			1150	—	IV		
026	013		530	—	II		090	63[X]172			880	530	II	A4	
027	014		920	680	II	A4	091	63[X]173			—	—	II		
028	60[X]130		—	660	II		092	63[X]174			530	—	II		
029	60[X]131		—	420	II		093	63[X]176			470	460		A4	
030	015		430	350	II	A2	094	63[X]178			750	710	V	A2	
031	017		350	330	II	A4	095	63[X]177			800	780	V		
032	60[X]132		630	430	II	A2	096	63[X]180			720	630	V	A2	
033	60[X]SK 133- 134 SD 287 SD 287		290	—	II		097	64[X]187			370	360		A4	
034	60[X]133		—	400	II		098	64[X]186			800	780	V		
035	61[X]135		520	420	II	A4	099	64[X]188			420	—			
036	61[X]136		—	—	II		100	63・64[X]185			870	810	V		
037	61[X]137		—	—			101	63・64[X]189			1000	630	II		
038	61・62[X]138		—	—	II		102	64[X]192			860	720	V	A0	
039	018		620	490	II	A4	103	64[X]190			810	—	IV		
040	019		620	480	II	A2	104	64[X]191			780	—	V		
041	61[X]139	020	980	700	II	A1	105	64[X]193			—	—	III		
042	61[X]140		480	480	II	A4	106			(60E-F-G)02	598	564	IIIb		
043	61[X]141		730	680	IIIb~IV	A0	107			(60E-F-G)03	—	568	IIIb	A4	
044	61[X]142		710	460	II	(A4)	108			1150	—	IV ?			
045	61[X]148		710	—	VI		109	58[X]118			—	—	IV or V		
046	61[X]149		650	—	VI		110	57・58[X]117			(60B-C-D)02	1270	930	IV	A3
047	021		650	620	II	A4	111			(60B-C-D)01	1080	830	IV	A1	
048	024		410	300	III	A4	112			—	—	IV			
049	61[X]143	022	930	680	III	A4	113	57[X]116			(61A-B)01	1188	950	IV	
050	61[X]144		510	470	III		114			(61C)01	1570	—	IV		
051	61・62[X]147		850	820	IV	A1	115			1050	—	IV			
052	62[X]SX 156- 157 SD 287 283-294		410	370			116	57[X]115			(61A-B)02	850	800	IV	
053	61・62[X]156		630	620		A4	117			(61C)02	1516	1340	IV		
054	61・62[X]		680	680	V		118			—	—	V			
055	62[X]166		—	—	V		119	51[X]109			830	640	IV~V		
056	028		350	300		A4	120	52[X]110			930	820	V	A0	
057	025		820	750	III	A4	121	52[X]110			(61D)04	792	740	IIIb~IV	
058	027		430	420	III		122			(61D)01	1500	850	V	A1	
059	61・62[X]146	026	720	580	IIIb~IV	A2	123	56・57[X]114	029		830	740	V	A2	
060	029		450	420	III	A4	124	50[X]106			530	—	V		
061	031		460	420	III	A2	125	51[X]108			(61D)03	730	690	V	A1
062	62[X]155		1020	700	II		126	50・51[X]107			(61D)02	800	800	V	
063	62[X]157		550	520			127			(61D)01	1500	850	V		
064	62[X]SD 286- SD 287		480	480		A4	128	55[X]113			—	—	V		

新番号	出教育委員会 「報告書」番号	56年度番号	センター 調査時番号	長軸	短軸	時期	備考	新番号	出教育委員会 「報告書」番号	56年度番号	センター 調査時番号	長軸	短軸	時期	備考
130	54区111			800	750	V		195	20区098			820	690	IIIa	A4
131	45・54区105			790	—	V		196	20区097			820	660	IIIa	A4
132		(60A)01	870	650	IV			197	12区072			830	—	II	
133	78区194	(60A)01	870	650	IV			198	12区073			660	500	II	
134	89区197		—	1090	V			199	12区071			440	360	II	A4
135	88区196		700	—	IV			200	12区070			580	—	IIaIIIa	
136	87区195		700	—	IV			201	12区・13区076			620	530	II	A4
137		(61E-F-G)01	970	—	V			202	13区077			790	—	IIIa	
138		(61E-F-G)02	730	730	III	A2		203	13区078		(63B)02	800	—	IIIa	
139		(61E-F-G)03	682	556	V	A2		204		(63B)03	420	—	IIIa		
140		(61E-F-G)04	—	—	III	A2		205		(63B)04	550	—	IIIa		
141	16区085		780	—	III			206	9・18区048	(61N)06	1980	1520	IIIa	A4	
142	16区号台状構		1080	450	IIIb ?	(A0)		207	9・18区048	(61N)06	1980	1520	IV		
143	16区号台状構		580	580	IIIb	(A0)		208		(61O)10	3350	2220	IIIa	A4	
144	16区号台状構		1250	480	IIIb	(A0)		209		(61P-Q)11	472	410	IIIa	A4	
145	17区号台状構		550	—	IIIb	(A1)		210		(61P-Q)12	378	235	IIIa	A4	
146	17区086		800	—	IIIb	A1		211		(61P-Q)13	312	292	IIIa	A4	
147		(61E-F-G)05	520	—	IIIb	A4		212	8・9区047	(61P-Q)14	868	755	IIIa	A4	
148		(63N)02	500	—	III			213	9区046		430	410	II	A4	
149		(63N)03	1100	—	IIIa			214	9区045		450	—	II		
150		(63N)06	668	624	IIIa	A4		215	16・17区044		450	—			
151		(63N)07	362	3100	III			216	8区043		430	—			
152		(63N)08	630	—	IIIa			217		(61R-S)21	486	—	II	A4	
153	14区084		1150	—	IV			218		(61R-S)20	1392	—	II		
154	14区198		580	—				219	8区038		780	—	II		
155		(61K-L-X)02	850	780	V	A1		220	8区037		800	—	II		
156		(61K-L-X)01	1250	1050	VI	B1		221	6区028		400	—		A4	
157	23区SD178		—	—	V			222	6区027		610	520		A4	
158	23区		—	—	V			223	6区025		400	305		A4	
159	23区SD186		—	—				224	6区024		400	360		A4	
160			—	—				225	6区023		530	—			
161	24区SD193	(63B)01	850	—	III			226	8区041	(61P-Q)15	1120	1080	IIIa	A4	
162		(89B-C)01	1084	908	V	A1		227		(61P-Q)16	1052	870	IIIa	A4	
163	28区104	(89B-C)01	1500	1250	III			228		(61P-Q)17	1036	850	IIIa	A4	
164	27区SD210		—	—				229		(61P-Q)18	1000	—	IIIa	A4	
165	26区SD206		880	—				230	8区040		900	810	II	A4	
166	26区SD203・ SD205		—	—				231	8区039		1050	930	II	A4	
167	25区103		730	—	III			232	7区032		740	560	II	A4	
168	25区102		—	—	VI			233	7区031		430	410	II	A4	
169	25区101		460	420				234	7区030		800	690	II	A4	
170	25区100		670	—	III			235		(61P-Q)SK 18・SD40	440	—	IIIa		
170	25区99		650	650	III			236	7区029		460	350	IIIa	A4	
172		(61M)01a	1160	815	IIIb			237	8区042	(61R-S)22	1430	980	II	A4	
173		(61M)01b	1310	895	IV	A2		238		(61R-S)23	392	328	II	A4	
174	18・19区096	(61M)02a	906	668	III	A4		239		(61R-S)D18	230	—	II ?		
175	18・19区096	(61M)02b	1110	668	IV	A4		240		(61R-S)24	890	—	IV		
176	18区091	(61M)03	992	830	IV	A1		241		(61R-S)SD 08・SD15	660	—	II		
177		(61M)04	1256	1030	III			242		(61R-S)SD 16・SD17	335	—	IIaIIIa		
178		(61M)05	578	—	III	A4		243	7区036	(61R-S)25	1600	1040	II	A4	
179		(61M)06	508	—	IIIa	A4		244		(61R-S)28	1800	—	II		
180	18区090		550	530	IIIa	A4		245	7区033		700	580	II	A4	
181		(61N-O)01	—	—	IIIa			246	7区035		570	—	II		
182		(61N-O)02	590	450	IIIa	A4		247	7区034		920	—	IV		
183		(61N-O)03	516	392	IIIa	A4		248		(61R-S)26	570	—	II		
184		(61M)08	706	612	IIIa	A4		249		(61R-S)27		—	II		
185		(61M)07	1280	—	IIIa			250	19・21区067		1330	1070	II	A4	
186		(61M)SD 21・SD26	255	—	IIIa			251	11区058		620	580		A4	
187		(61M)09	675	—	IIIa			252	12区069		610	490		A2	
188	18区094		570	550	IIIa	A4		253	11・12区059		410	240		A4	
189	18区092		640	580	IIIa	A4		254	11区057		2350	2070	II	A4	
190		(61R-S)05	1500	1340	IIIa	A4		255	10・11区056		620	—			
191	18区087		550	—	IIIa			256	11区		1400	—	II	A4	
192	18区095	(61O)07	1035	990	IIIa	A4		257	13区083		410	320		A4	
193	18区093		620	—	IIIa			258	13区082		680	630	IV	A2	
194		(61O)08	1220	—	IIIa			259	13区081		360	—	III		

新番号	「報告書」番号	56年度番号	センター調査番号	長軸	短軸	時期	備考	新番号	「報告書」番号	56年度番号	センター調査番号	長軸	短軸	時期	備考
260	13区079			640				325		(62B)07	1870			IIIa	
261	13区080			580	520	II	A4	326		(62B)10				III	
262	11区065			495				327		(62B)SD1209	1210				
263	11区066			800	540	IV	A1	328		(62B)08	674			III	
264	11区064			590	340		A4	329		(62B)09					
265	11区							330		(62B)11				III	
266	11区SD108・SK099			420	385		A4	331	1区003			450			
267	11区063			450	365		A1	332	1区004			1070			
268	11区062			580	490			333	1区001			850	820		
269	11区061			1190	890	II		334		(62C~L)02	580			IIIb	
270	11区060			550				335		(62C~L)04				IIIb	
271	10区SD103			800				336		(62C~L)01	680			IIIb	
272	10区055			350	340	III		337		(62C~L)03	320				
273	10区053			340	330	III	A1	338		(62C~L)SD05・SD07					
274	10区054			290		III		1001		(61J)	1050	1000	5世紀末		
275	10区051			470		III		1002		(63GH)SD01・SD02				5世紀後半	
276	10区052			450	420	III									
277	10区049			320	290		A4								
278	10区SD099			1200		IV									
279	6区022			675	560	III	A4								
280		(61P・Q)		1720		IIIa									
281	7区SK041														
282		(61T)04				IIIb									
283	3区018			340		IIIb ?									
284	3区SK009				350	IIIb ?									
285		(61T)01		860		IIIb									
286	3区017			340		IIIb ?									
287		(61T)02		870	750	IIIb	A4								
288		(61T)05		820	668	IIIb	A3								
289		(61T)03		778	718	IIIb	A4								
290	3区016			270		IIIb ?									
291	3区015			660	480	IIIb ?	A4								
292	3区SD037・SD038					IIIb ?									
293	3区014	(61T)06		960	760	IV	A2								
294	3区012			450		IIIb									
295	3区			520		IIIb ?									
296	3区010			520		IIIb									
297	2区008			490		IIIb									
298	3区011			690	620	IIIb	A4								
299	3区009			590		IIIb	A4								
300	2区007			970	770	IIIb									
301		(61T)07		3300		IIIb末									
302	2区006			1340	750	IIIb									
303		(61U)08		1520	1150	IIIb	A4								
304	3区SD032・SD033			340		IIIb	A4								
305	3区SD027・SD029			360		IIIb									
306	2区005	(61U)09		1550	1050	IIIb									
307		(62A)01				IIIb									
308		(62A)02		430	350	IIIb	A4								
309		(62A)04		800		IIIb									
310		(62A)07		362		IIIb ?									
311		(62A)03		822	808	IV	A1								
312		(62A)05		400		IIIb									
313		(62A)06		260	250	IIIb ?	A4								
314		(62A)08		500		IIIb ?									
315		(62A)09		318	314	IIIb	A4								
316		(62A)10		744		IIIb									
317	4区020			790		IV									
318	4区019			260	250		A4								
319		(62B)01				IIIa ?									
320		(62B)02		728		IIIa ?	A4								
321		(62B)05				IIIa ?									
322		(62B)03		750		IIIa ?									
323		(62B)06		420		IIIa	A4								
324		(62B)04		1074		IIIa									



方形周溝墓プラン分類

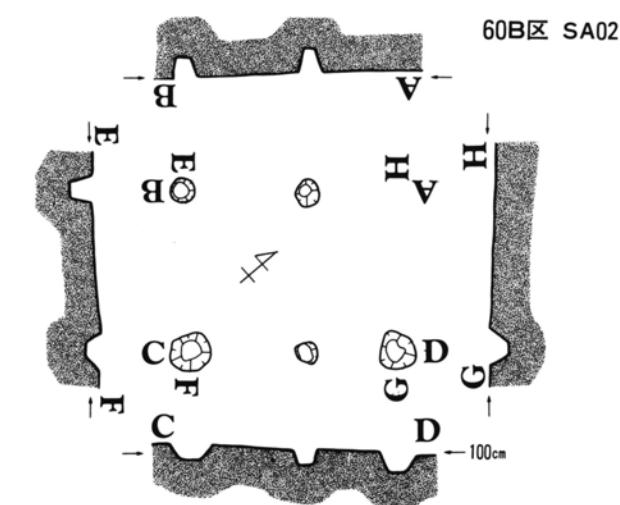


※墳丘側下端間を計測する

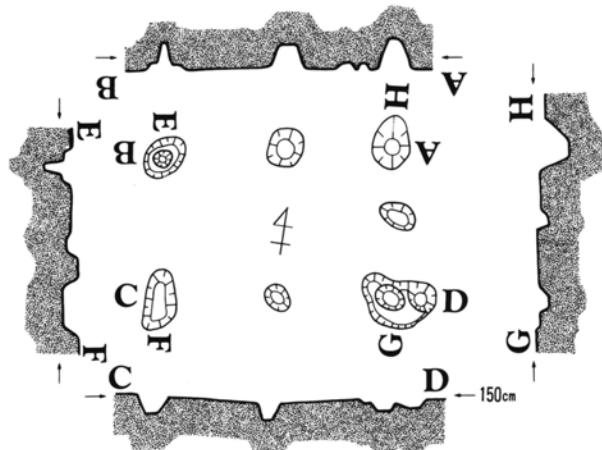
方形周溝墓の規模計測方法

**掘立柱建物集成 1** (1:80)

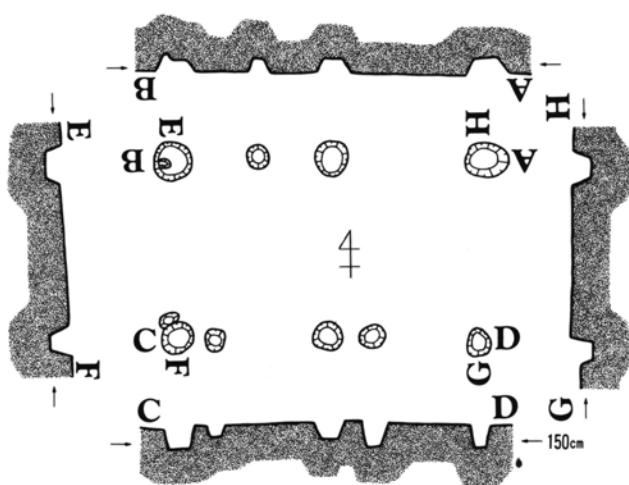
※矢印の標高は各遺構ごとに統一してあるので、すべてに数値を付していない。



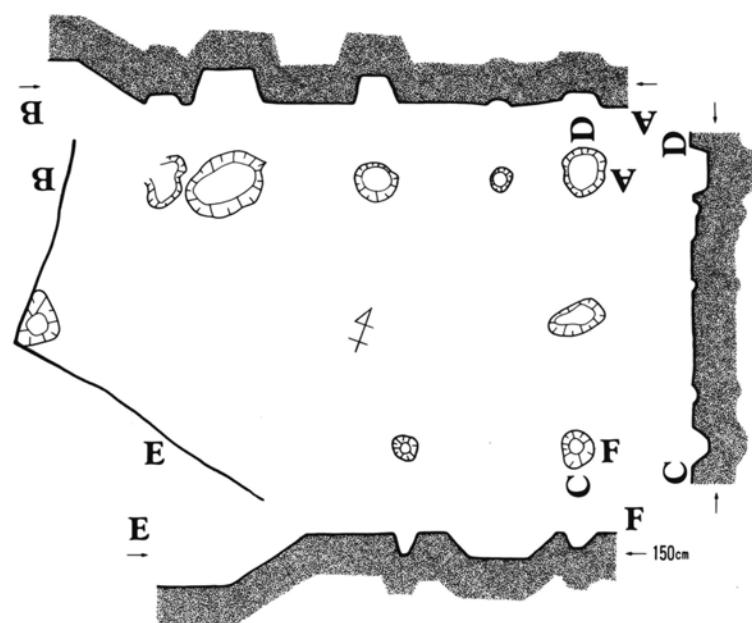
61A区 SA01



61C区 SA01

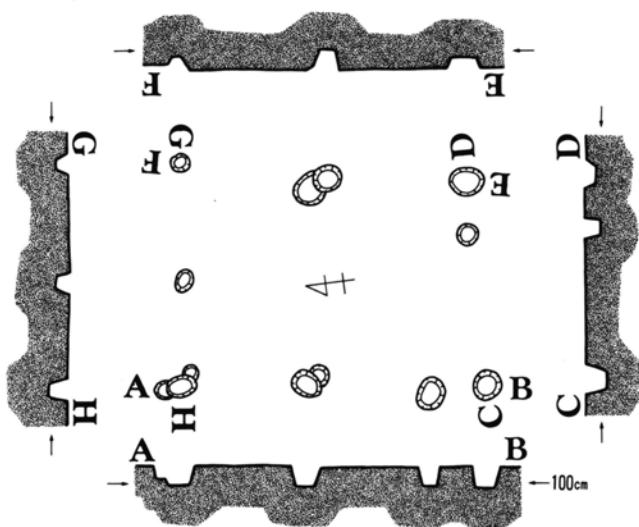


61D区 SA01

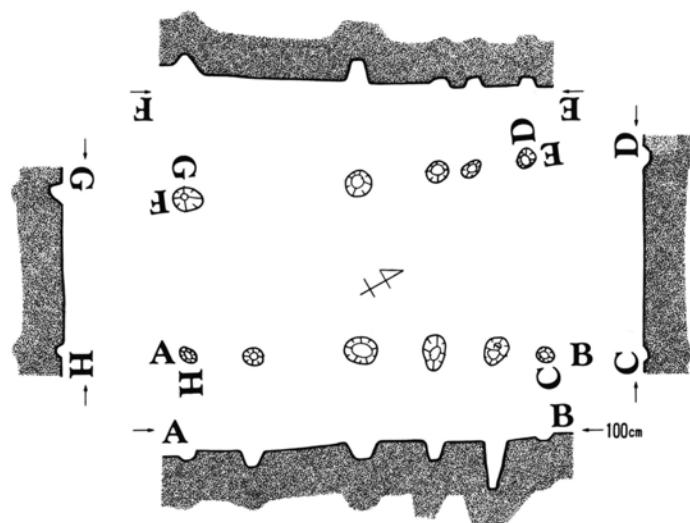


掘立柱建物集成 2 (1:80)

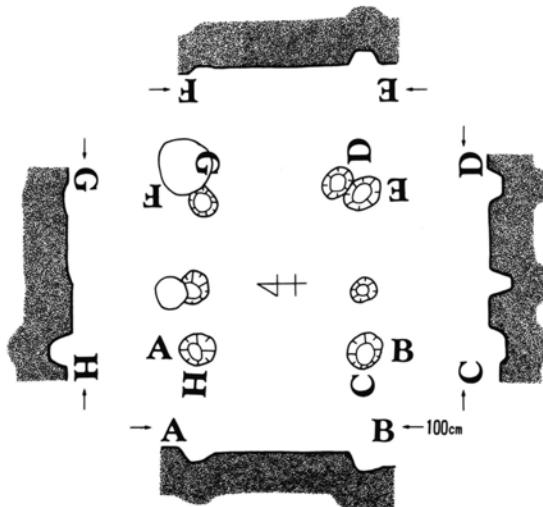
61E区 SA04



61E区 SA03

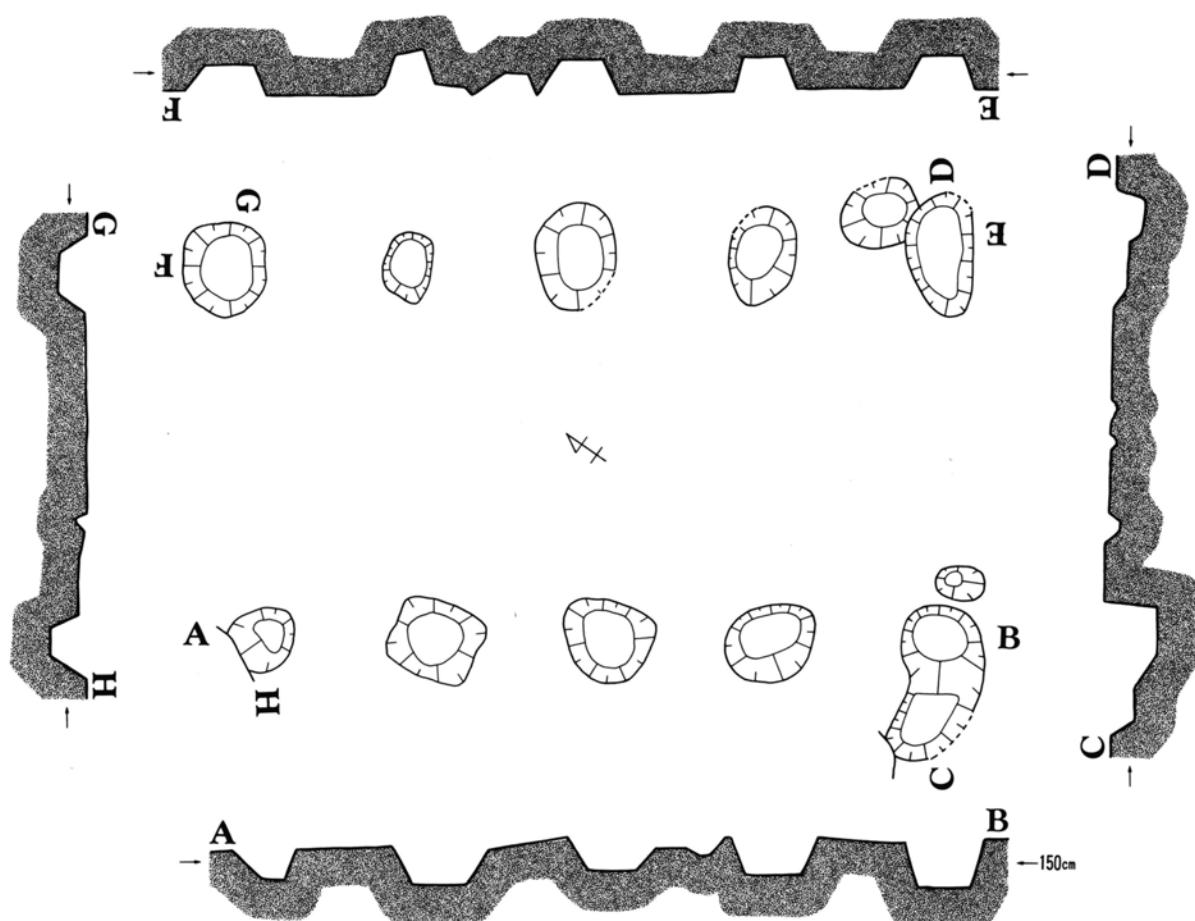


61E区 SA04

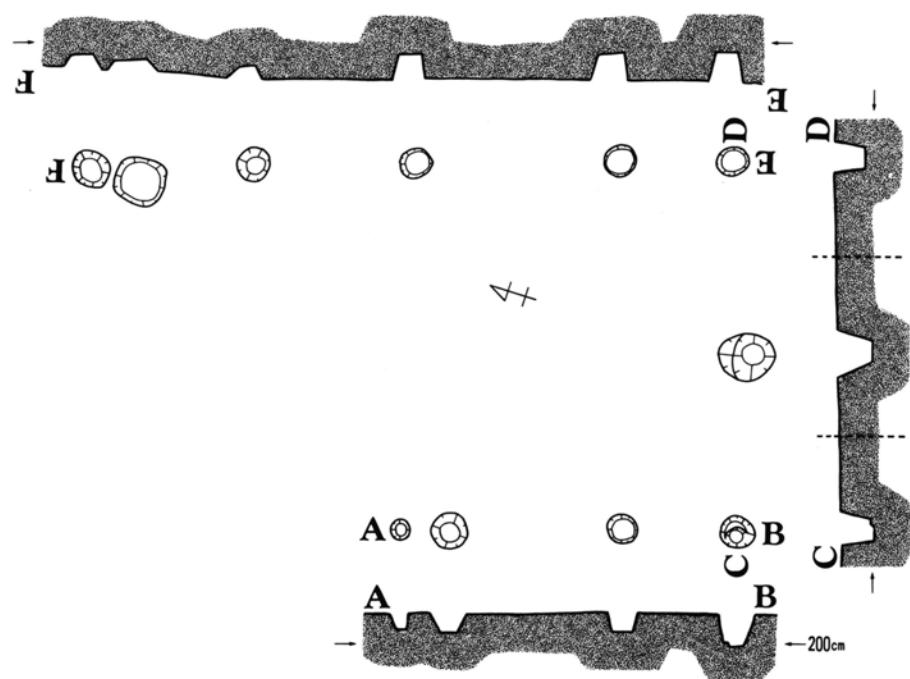


掘立柱建物集成 3 (1:80)

61H区 SA01

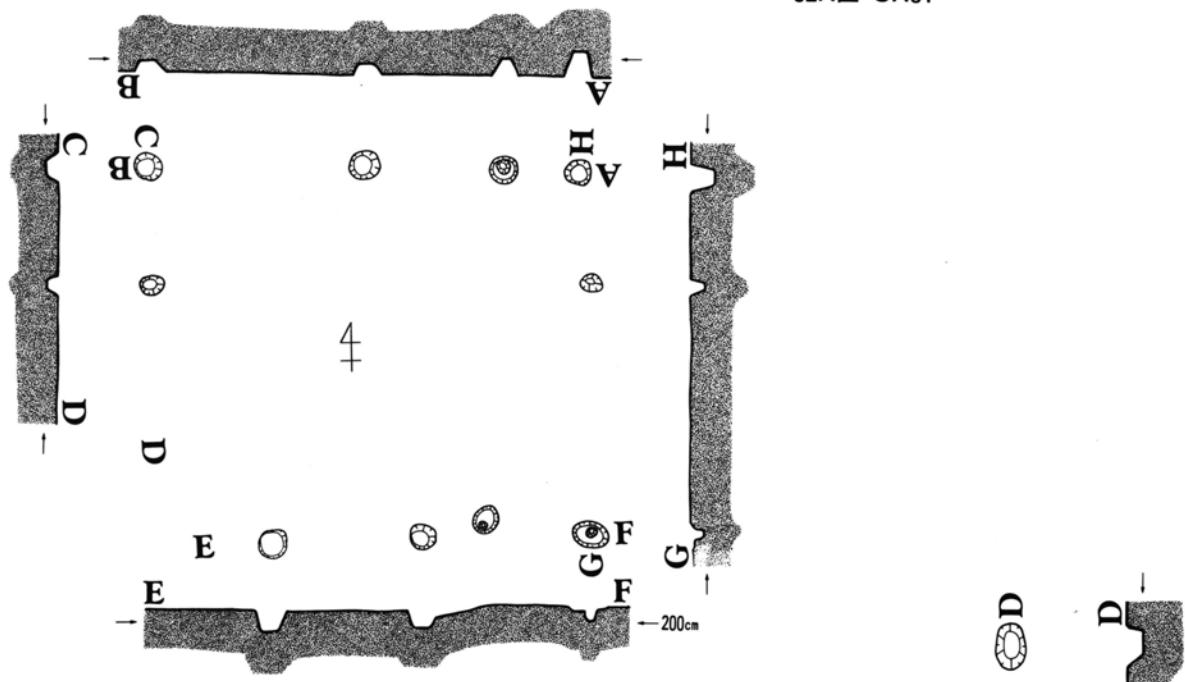


61N<sub>2</sub>区 SA01

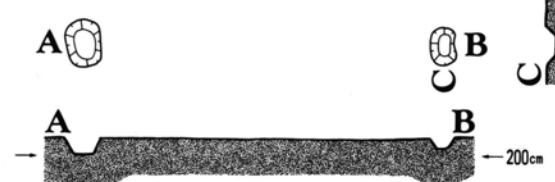


掘立柱建物集成 4 (1:80)

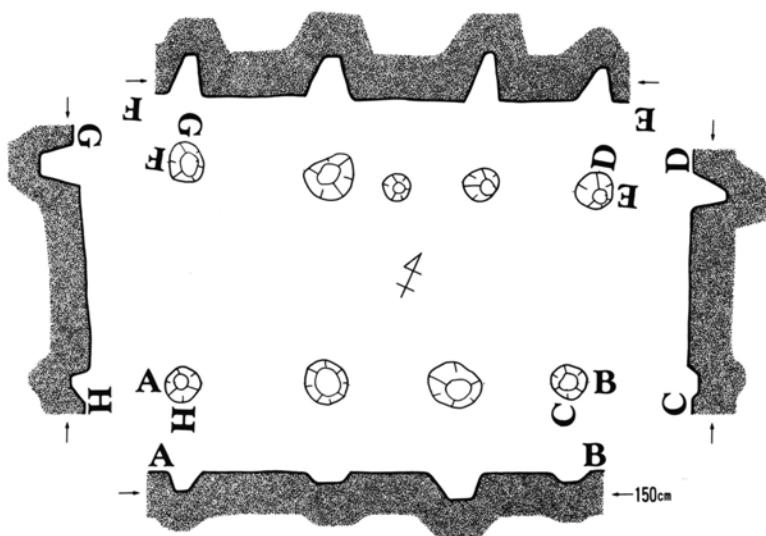
62A区 SA01



62E区 SA01

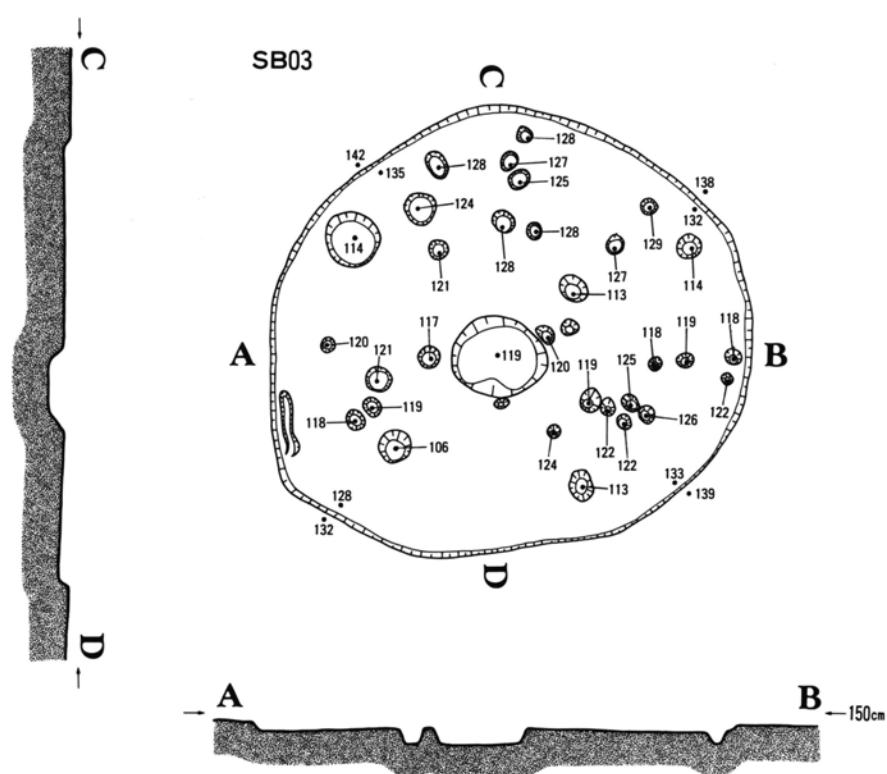


63A区 SA01



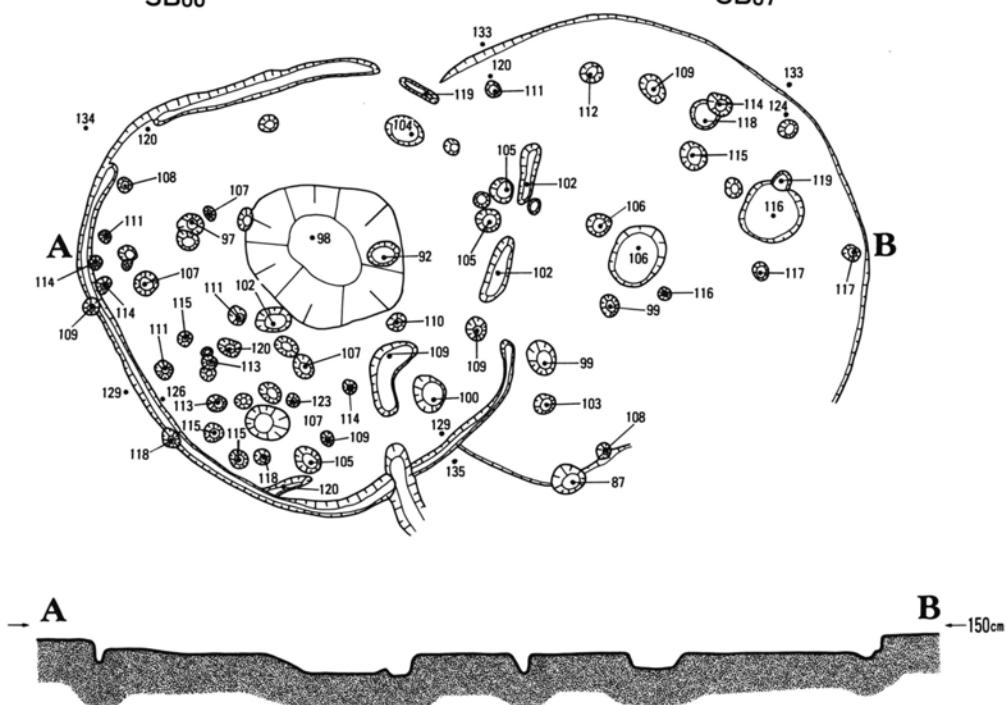
竖穴住居集成 1 (1:80)

60B区



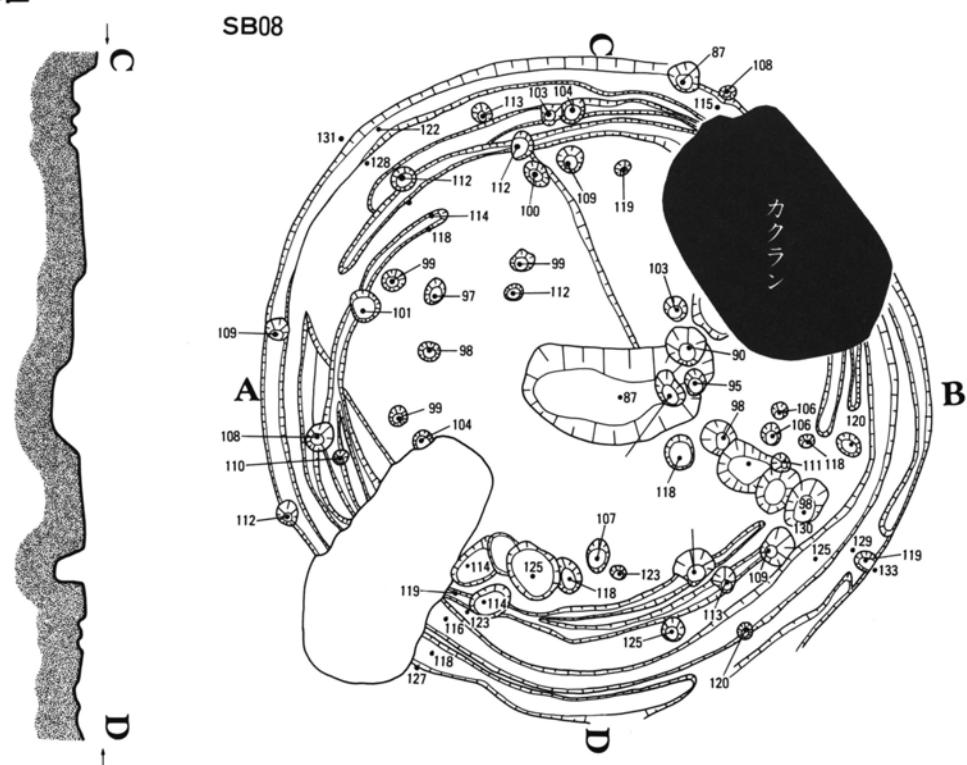
SB06

SB07

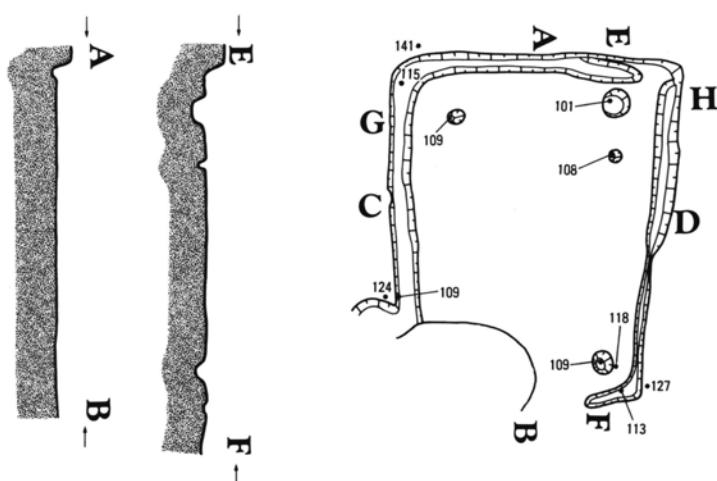


竪穴住居集成 2 (1:80)

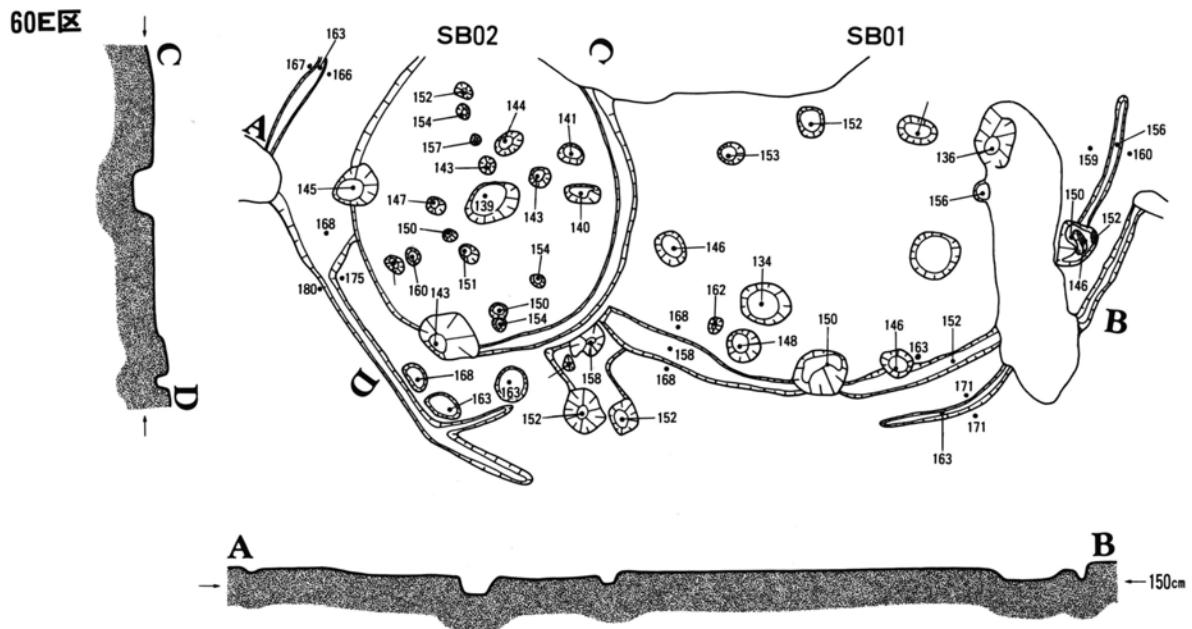
60B区



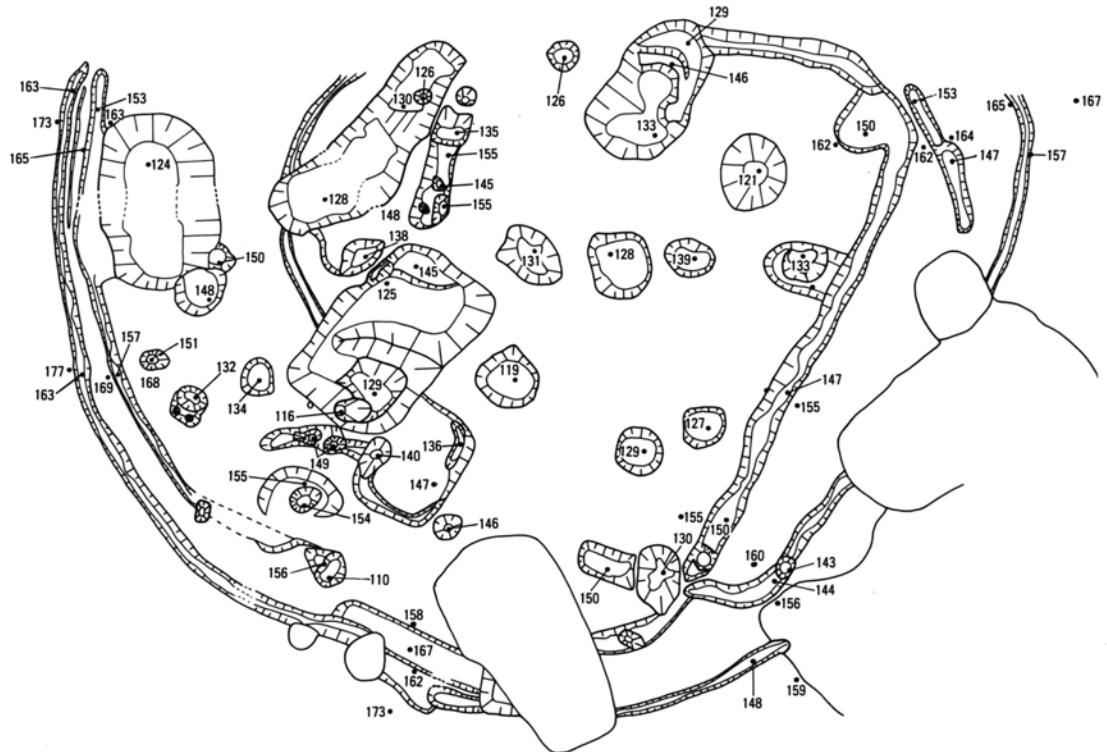
SB12



竪穴住居集成 3 (1:80)

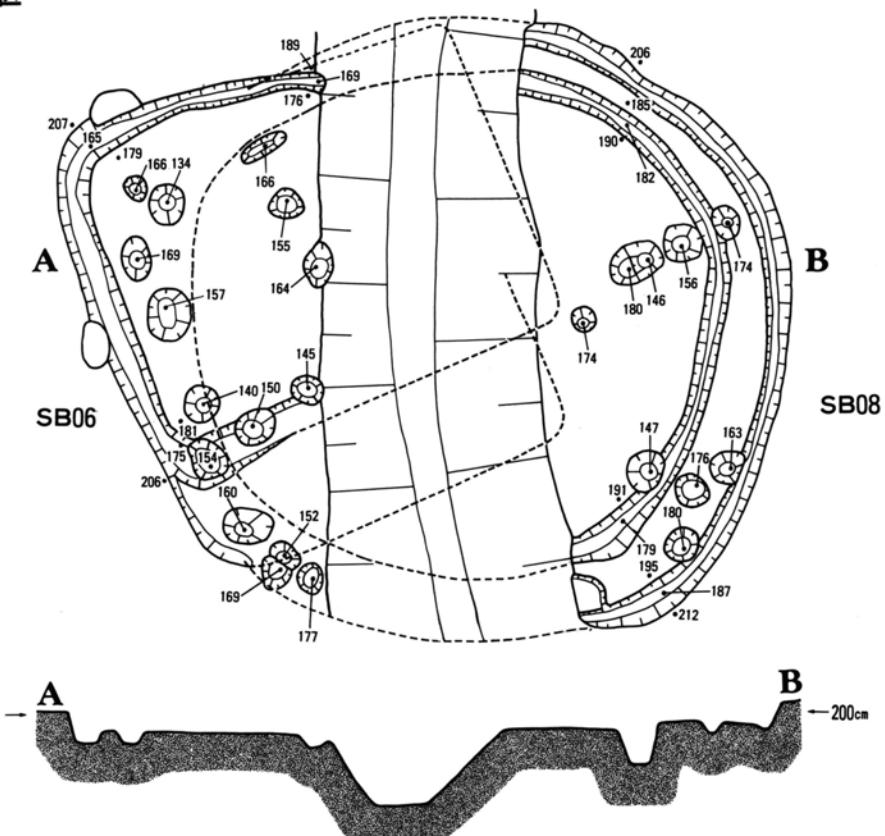


SB03(玉作工房)

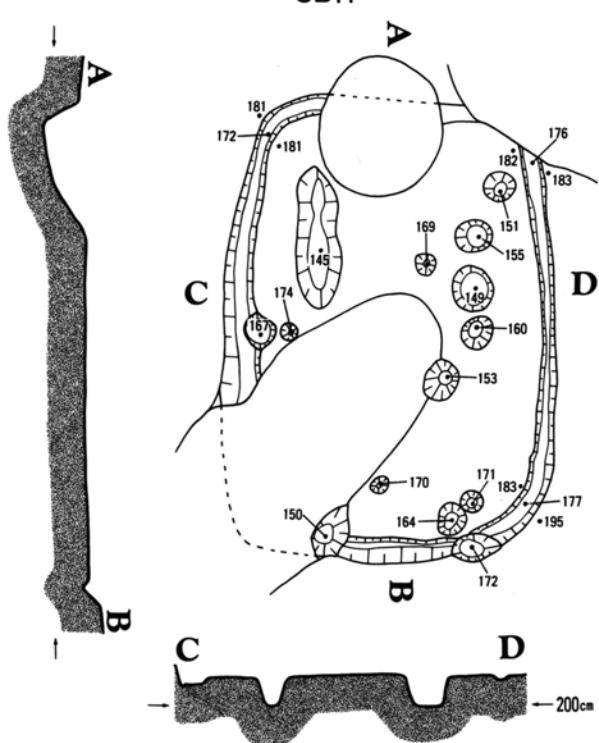


豊穴住居集成 4 (1:80)

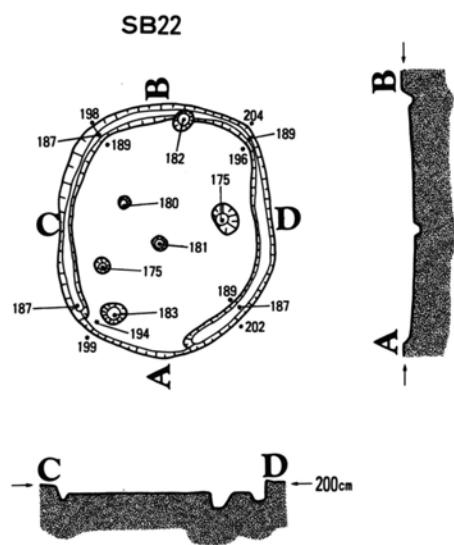
61D区



SB11

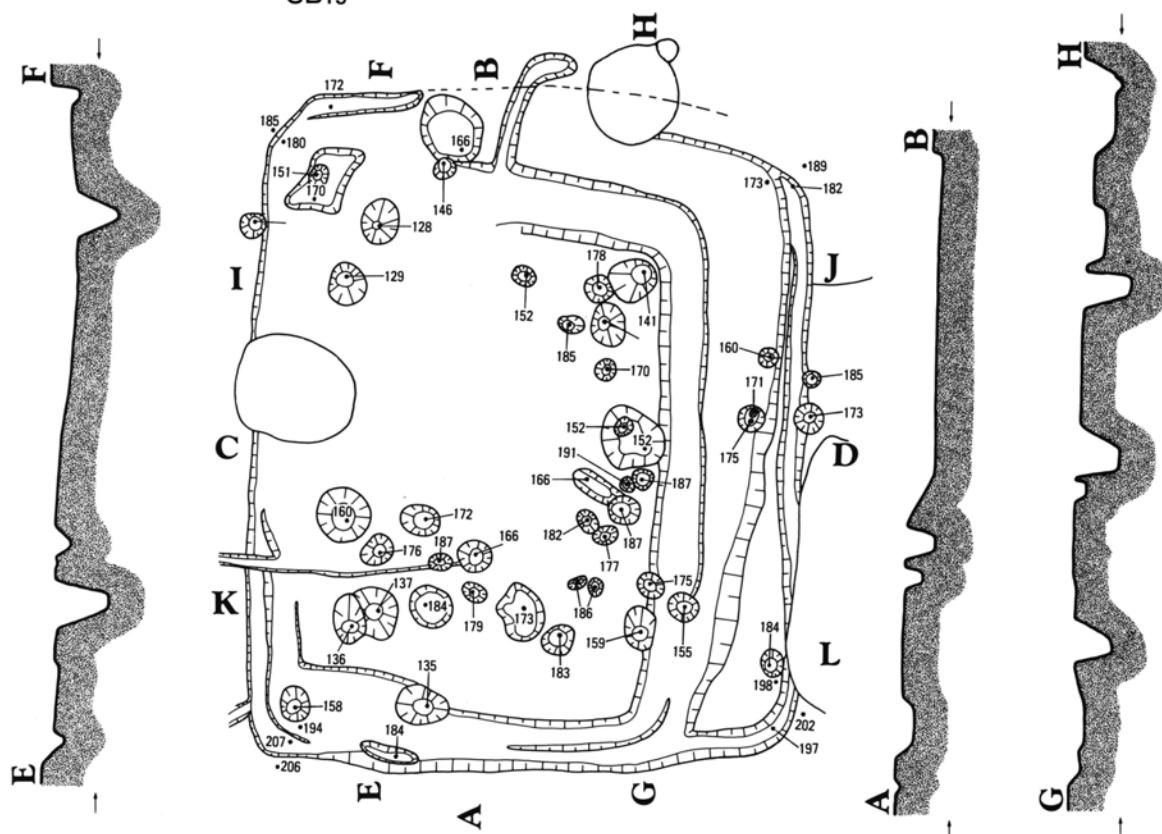


SB22



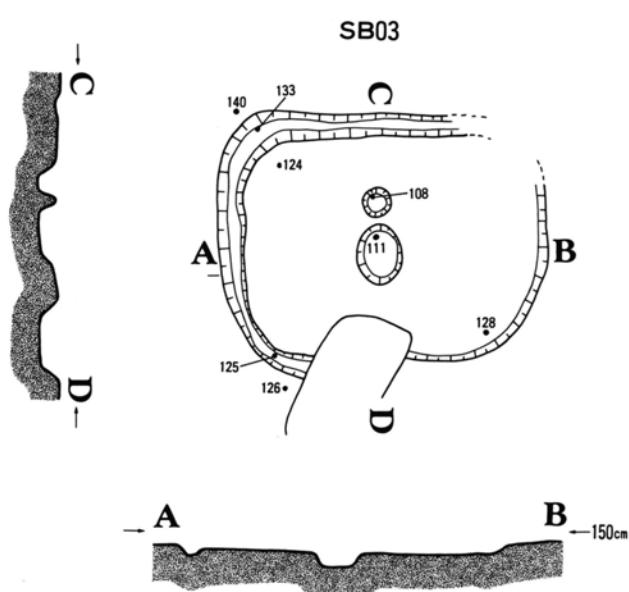
61D区

SB19



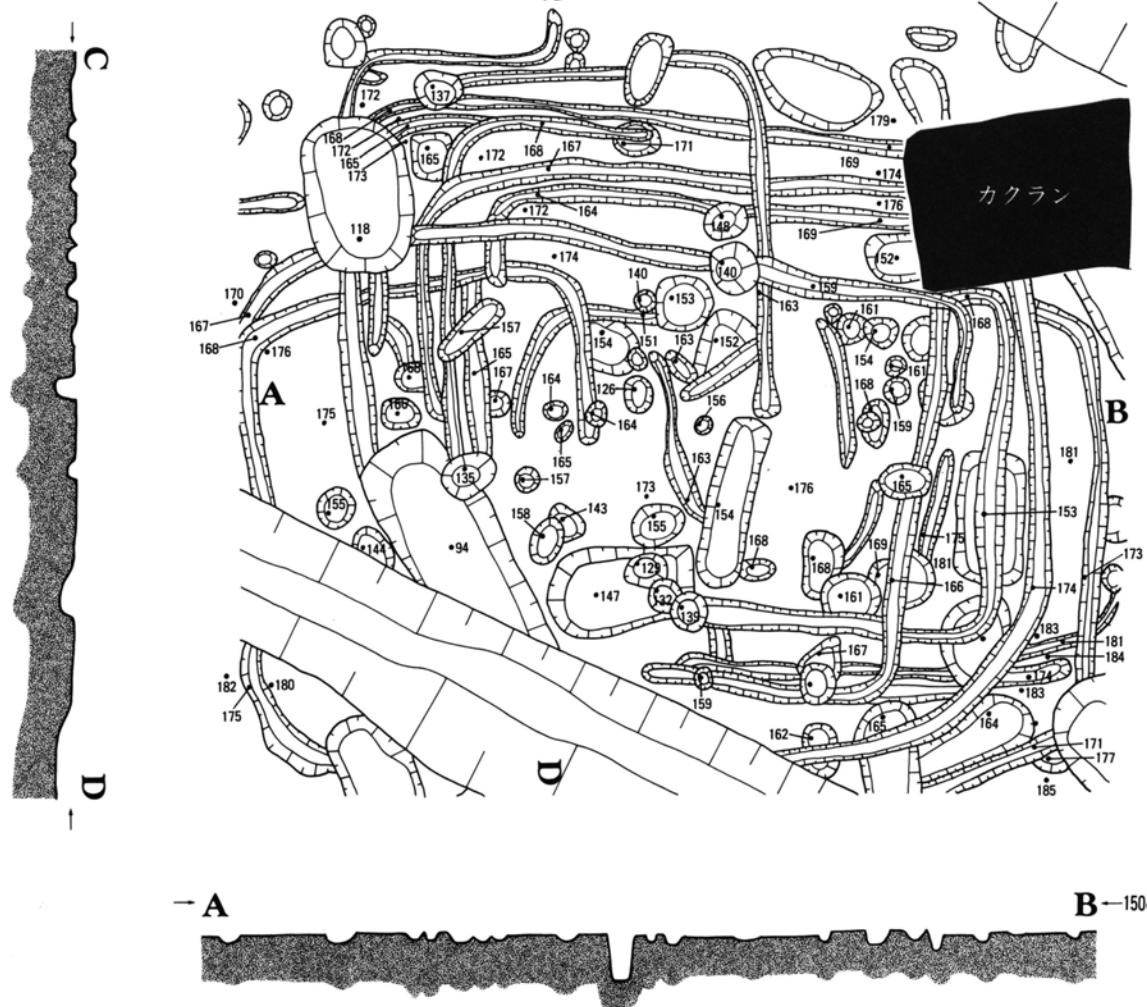
竖穴住居集成 6 (1:80)

61E区

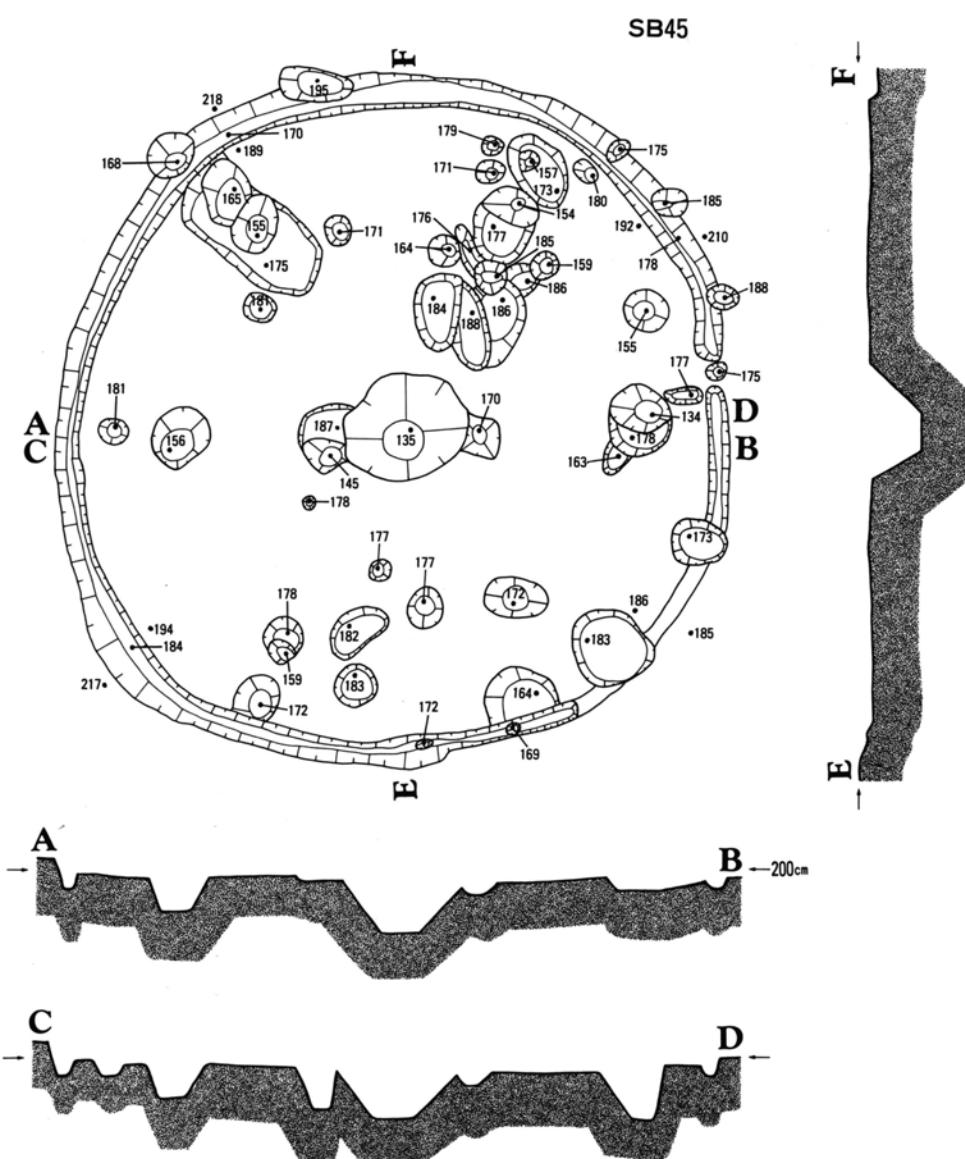
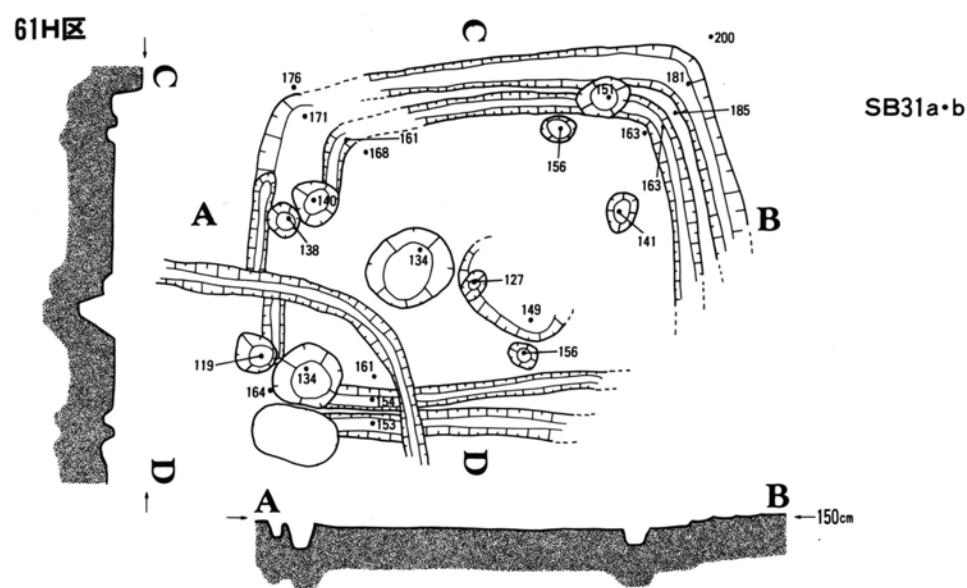


61H区 (北地区)

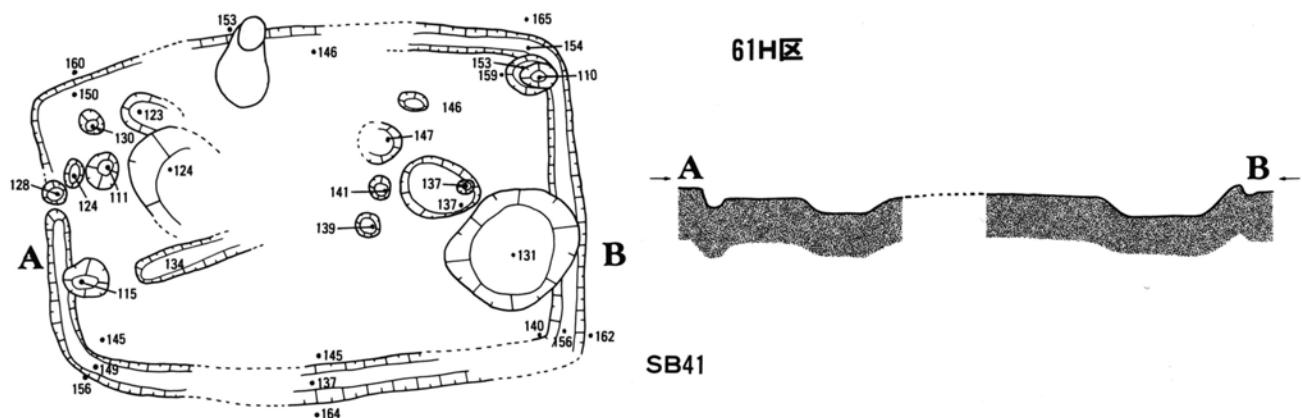
SB08~14



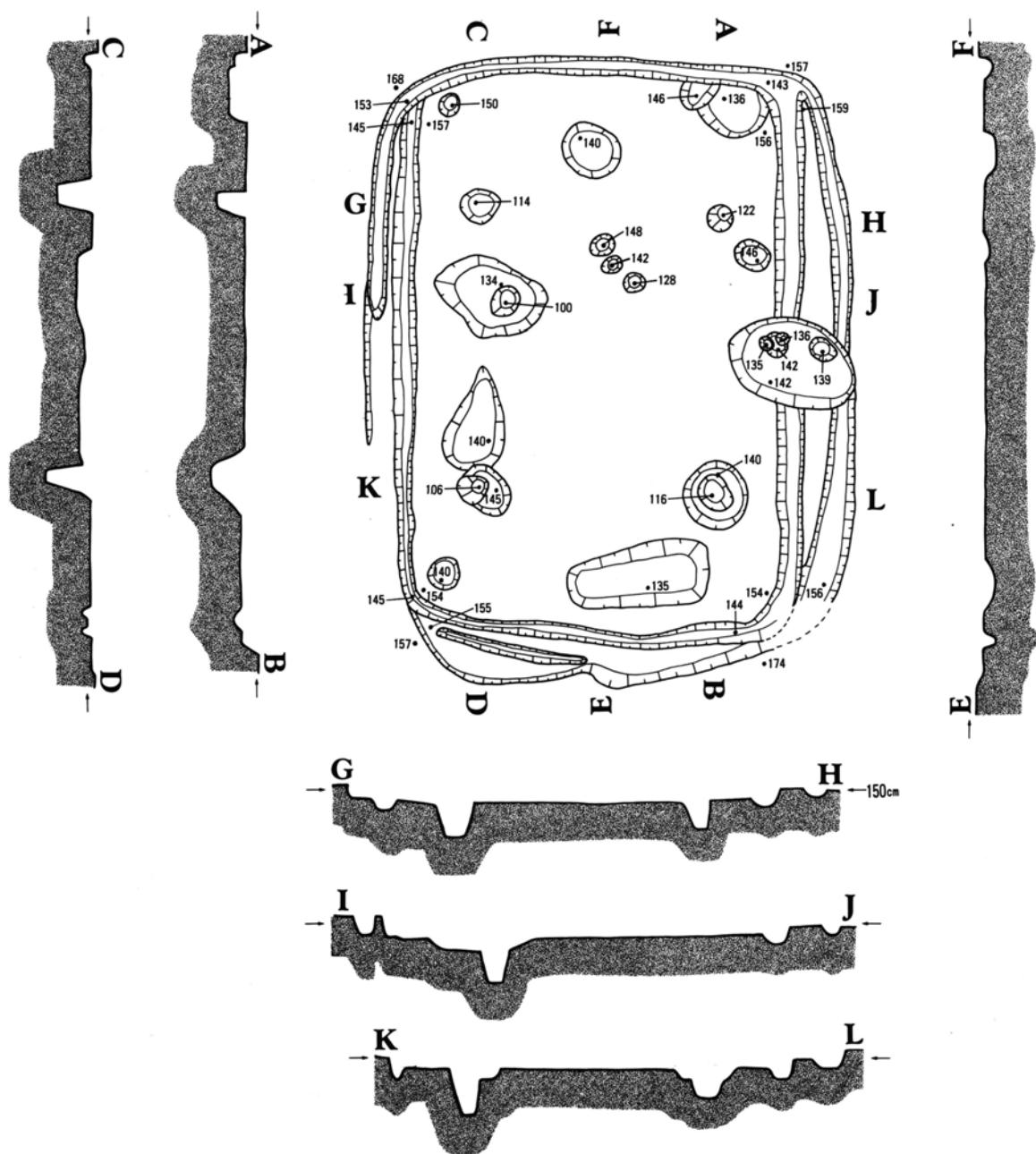
豊穴住居集成 7 (1:80)



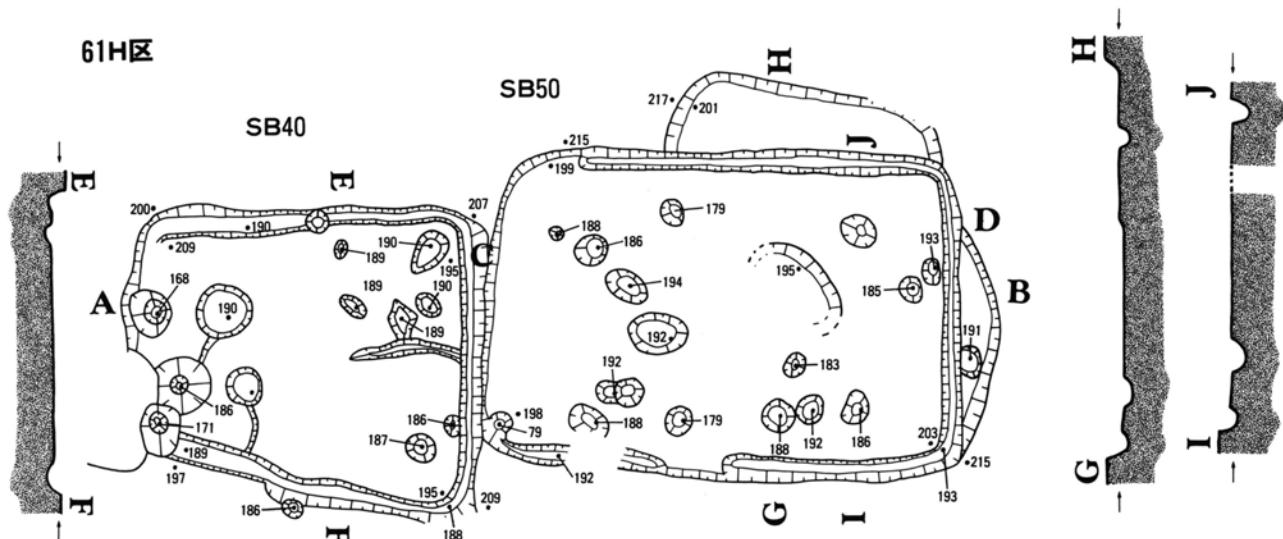
豊穴住居集成 8 (1:80)



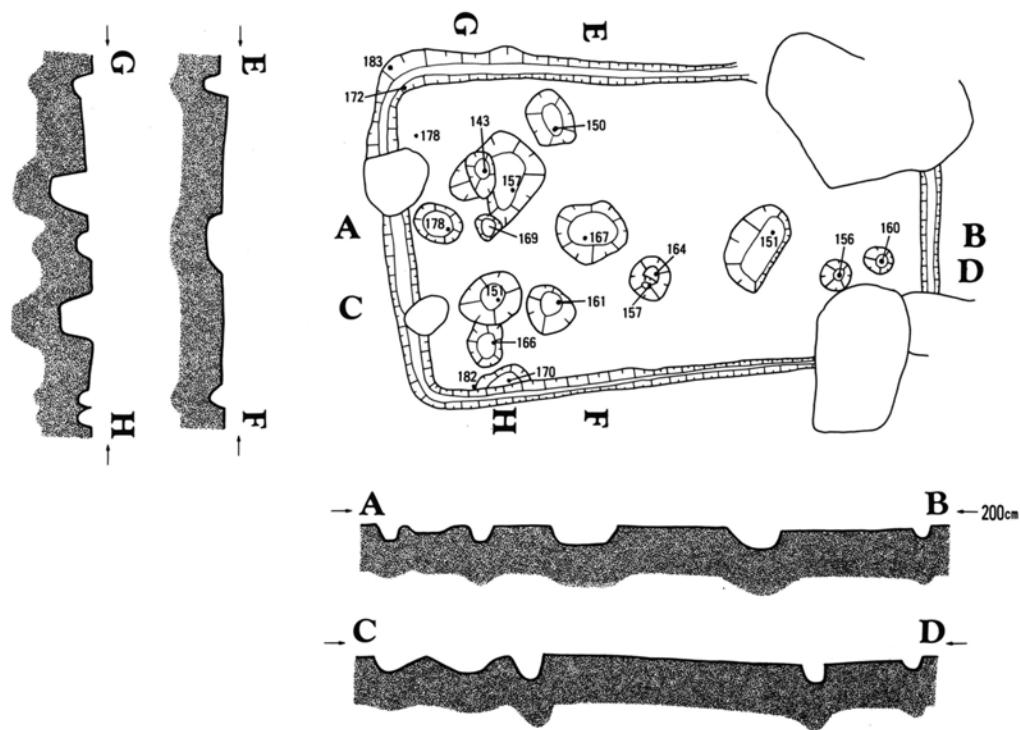
SB38a+b



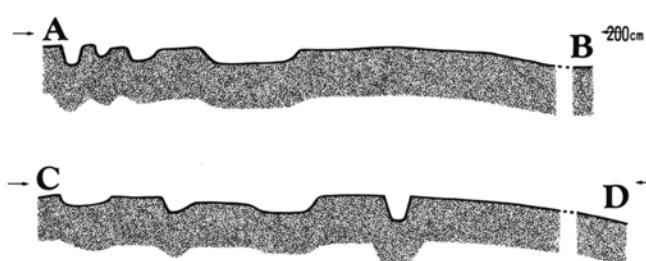
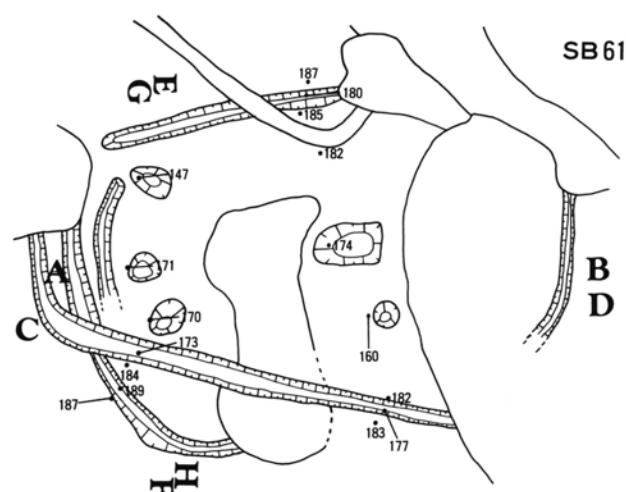
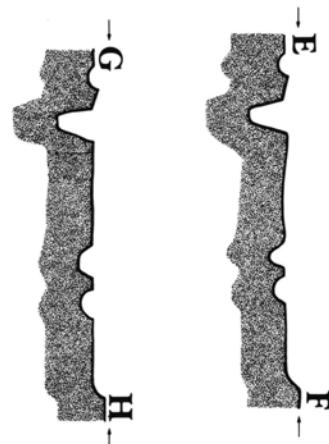
竖穴住居集成 9 (1:80)



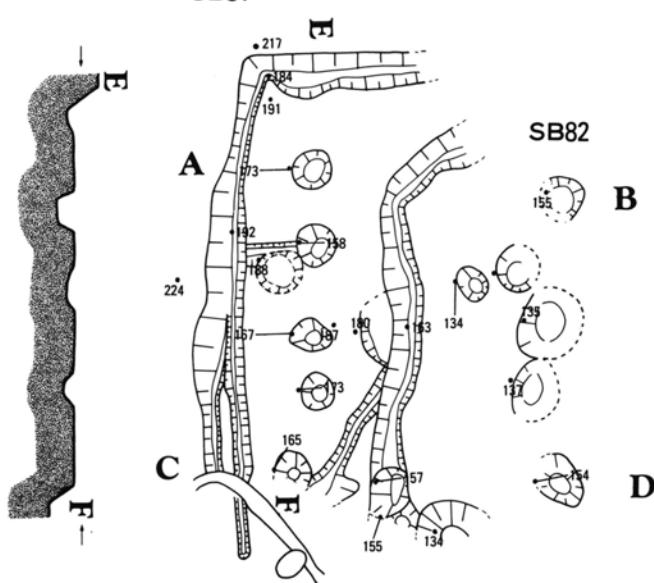
SB79



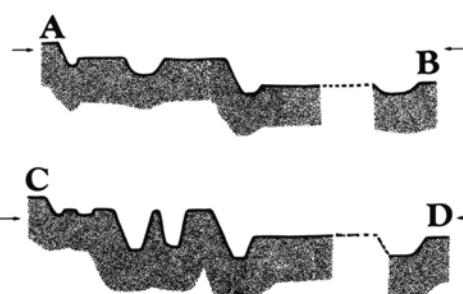
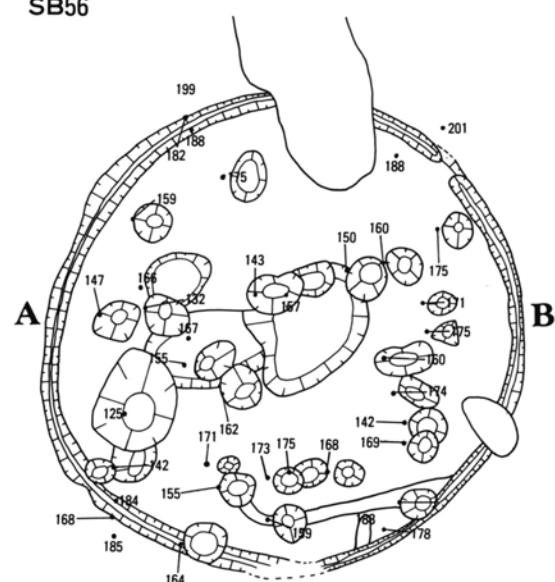
61H区



SB81

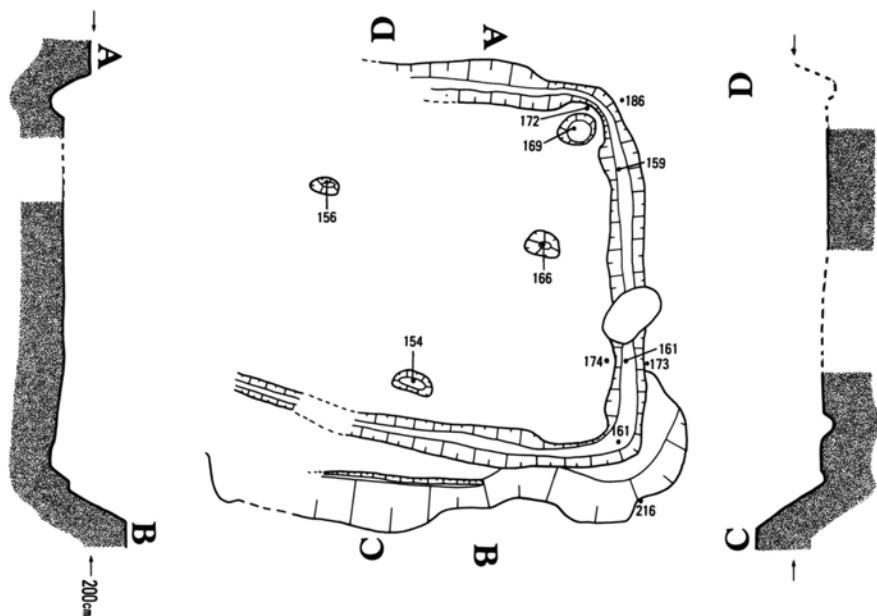


SB56

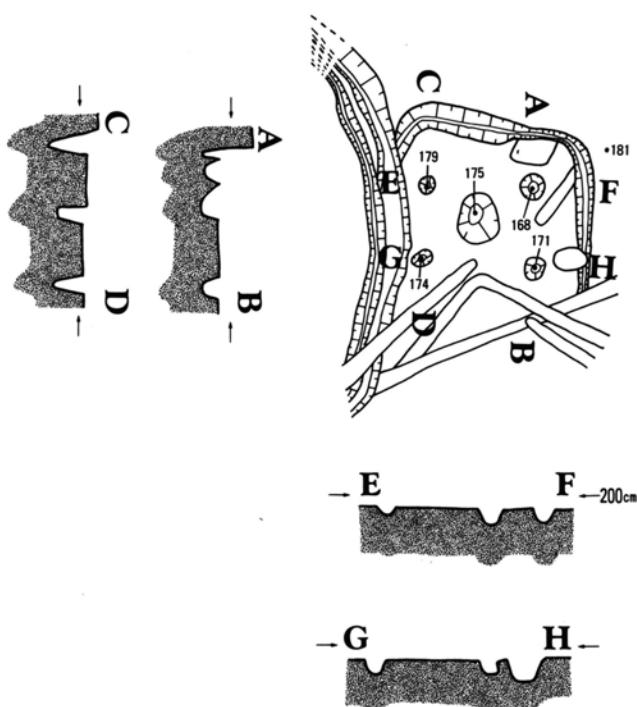


61H区

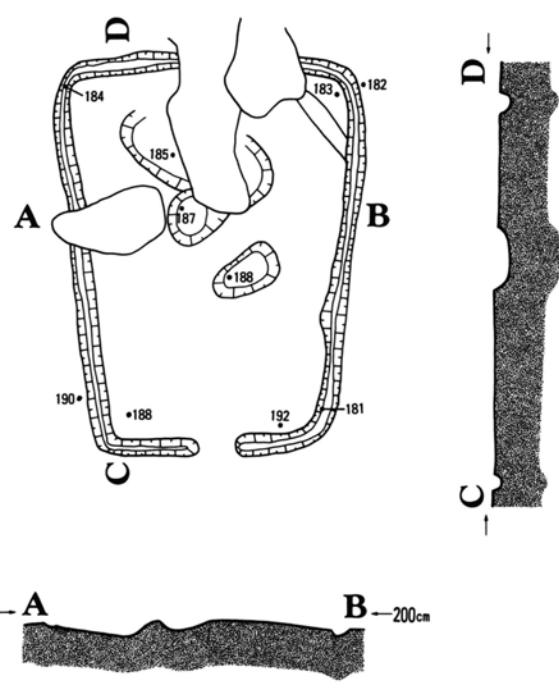
SB85



SB83

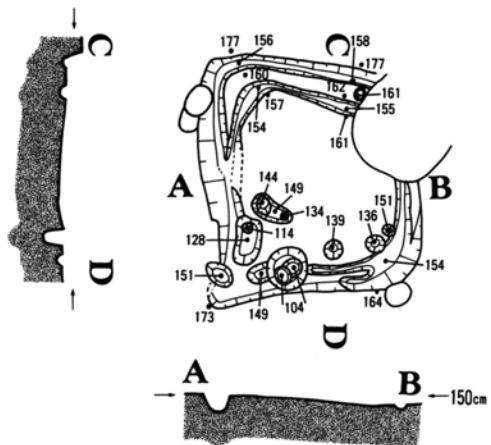


SB60

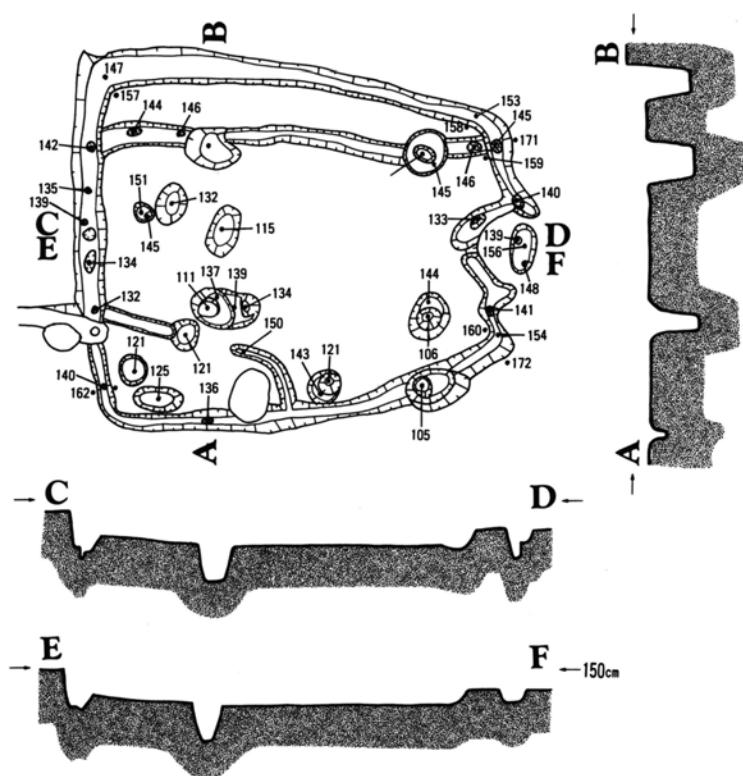


61H区

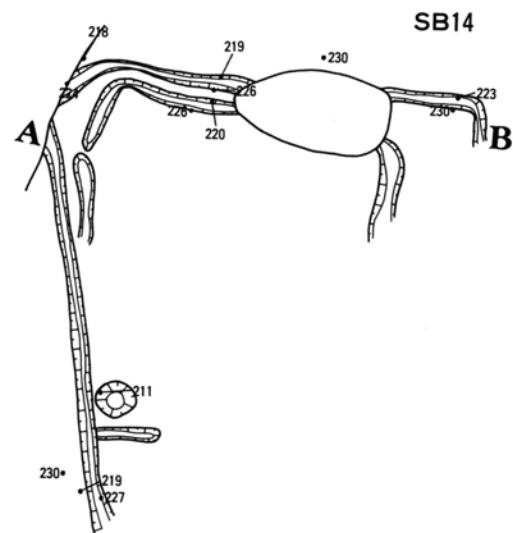
SB105



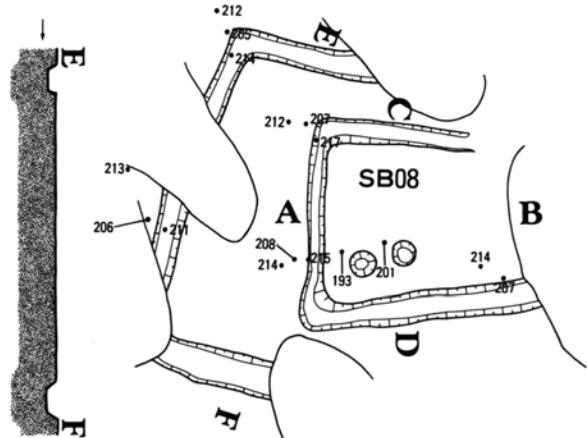
SB100



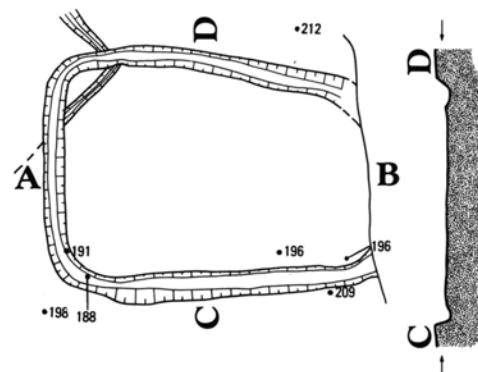
61M区



SB09

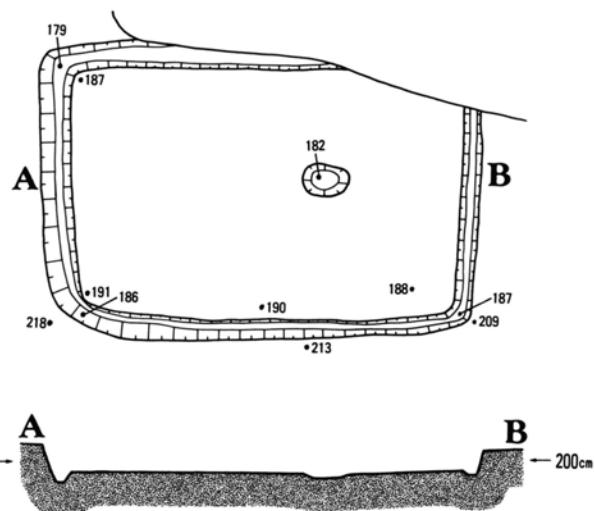


SB06



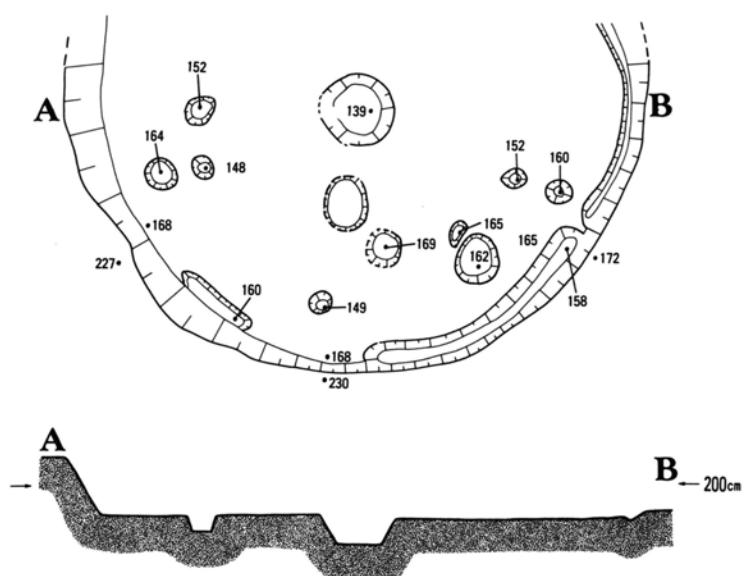
61P区

SB02



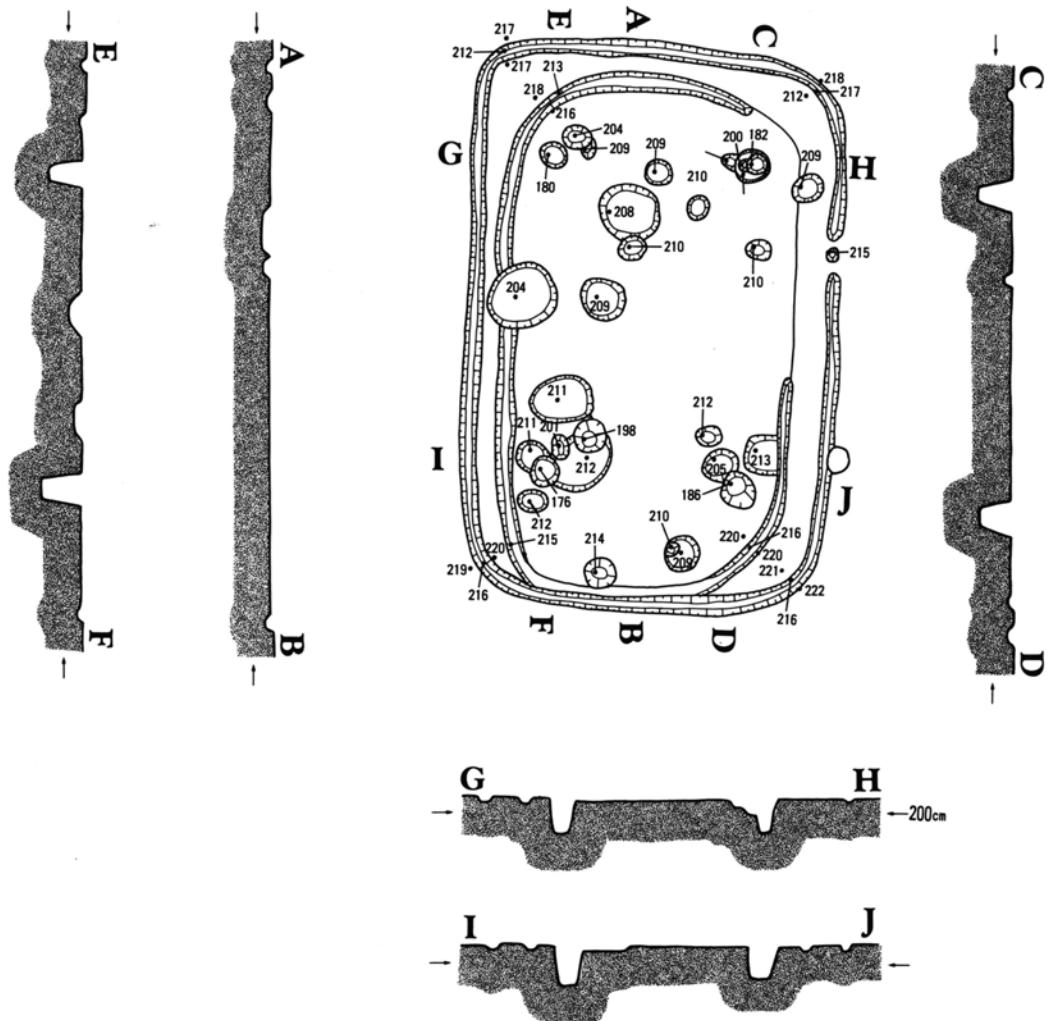
63N区

SB01



62A区

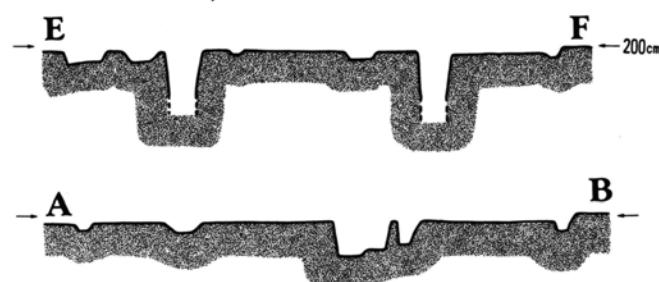
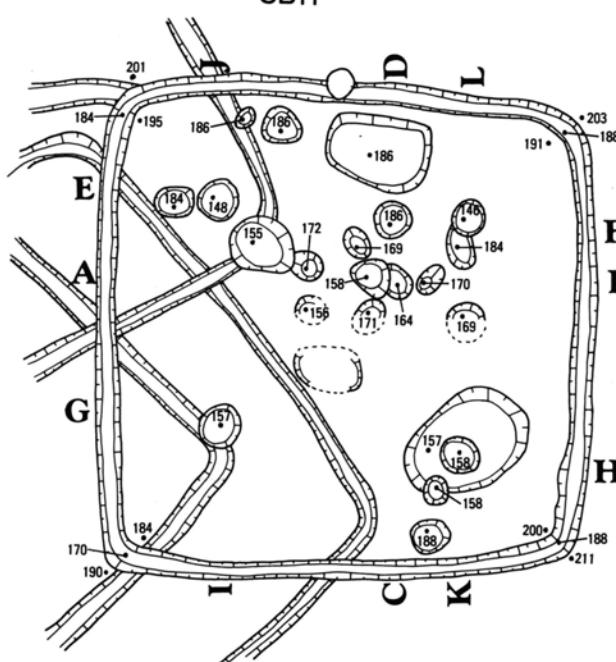
SB01



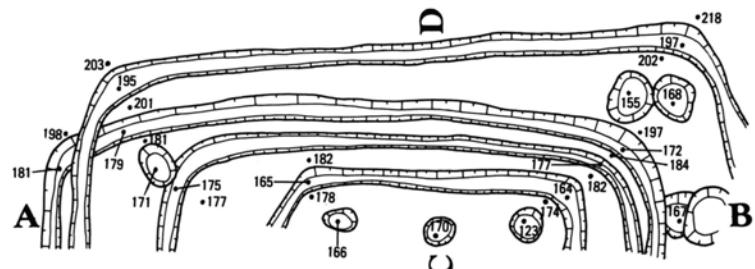
豊穴住居集成 16 (1:80)

63J区

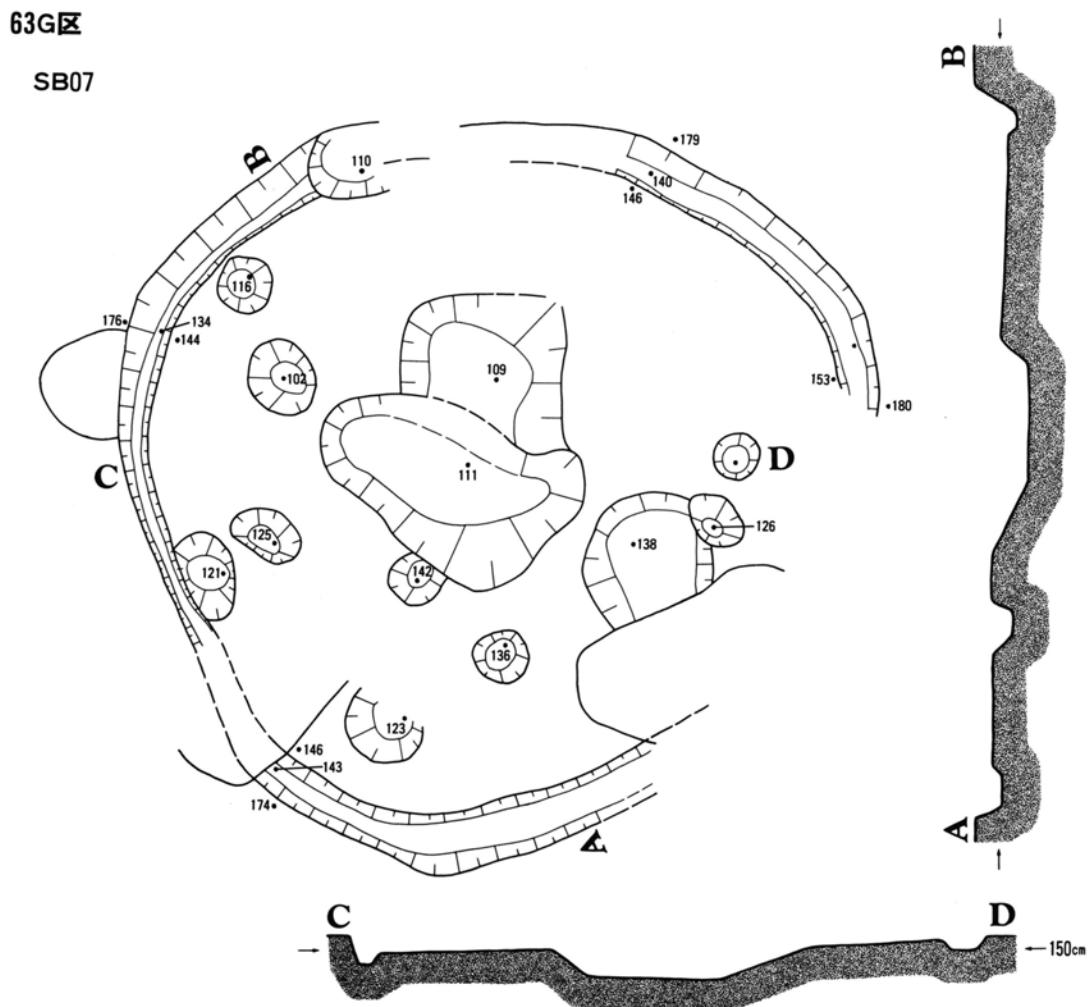
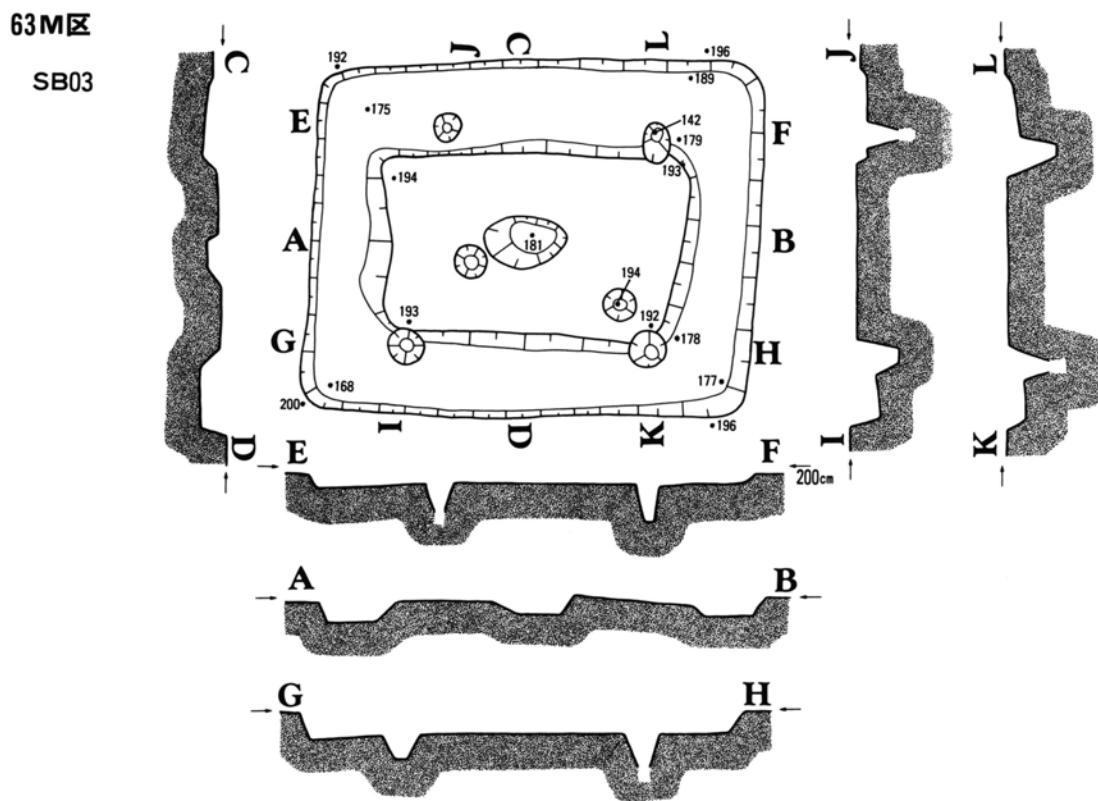
SB11



SB01a,b,c  
SB02

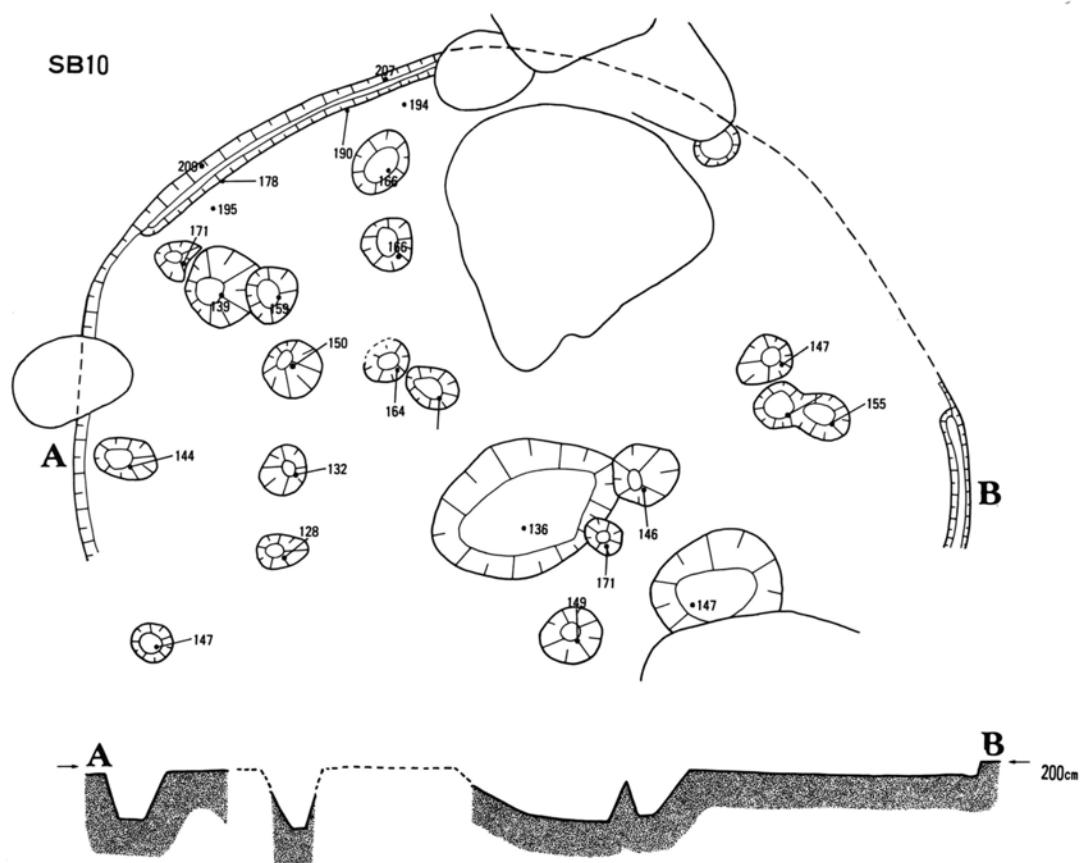


堅穴住居集成 17 (1 : 80)

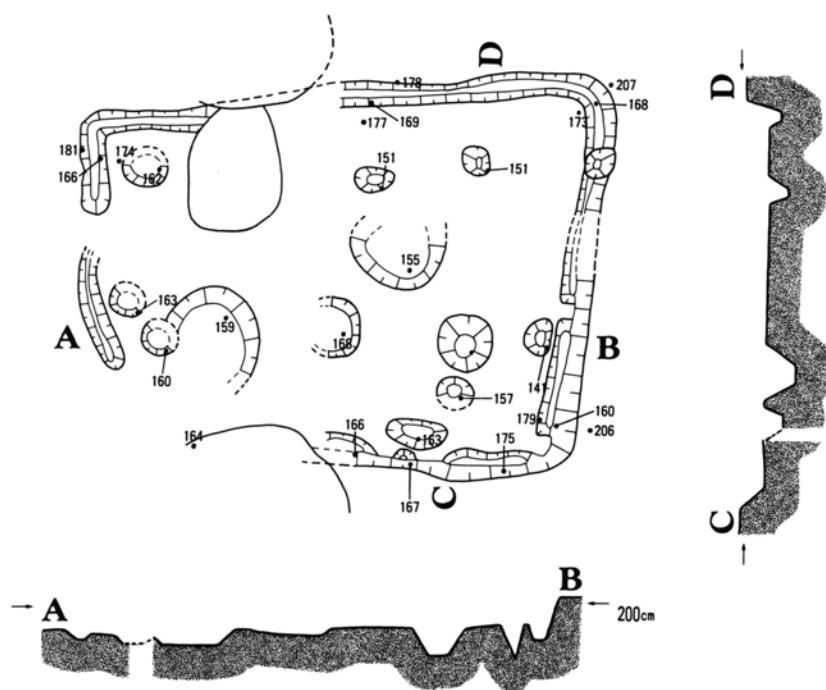


竪穴住居集成 18 (1:80)

89B区

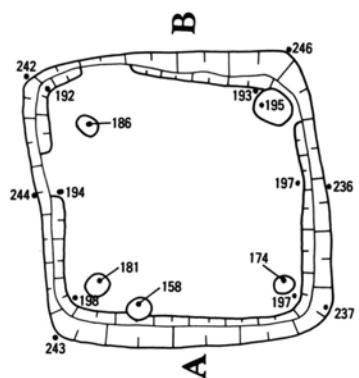


SB14



豊穴住居集成 19 (1 : 80)

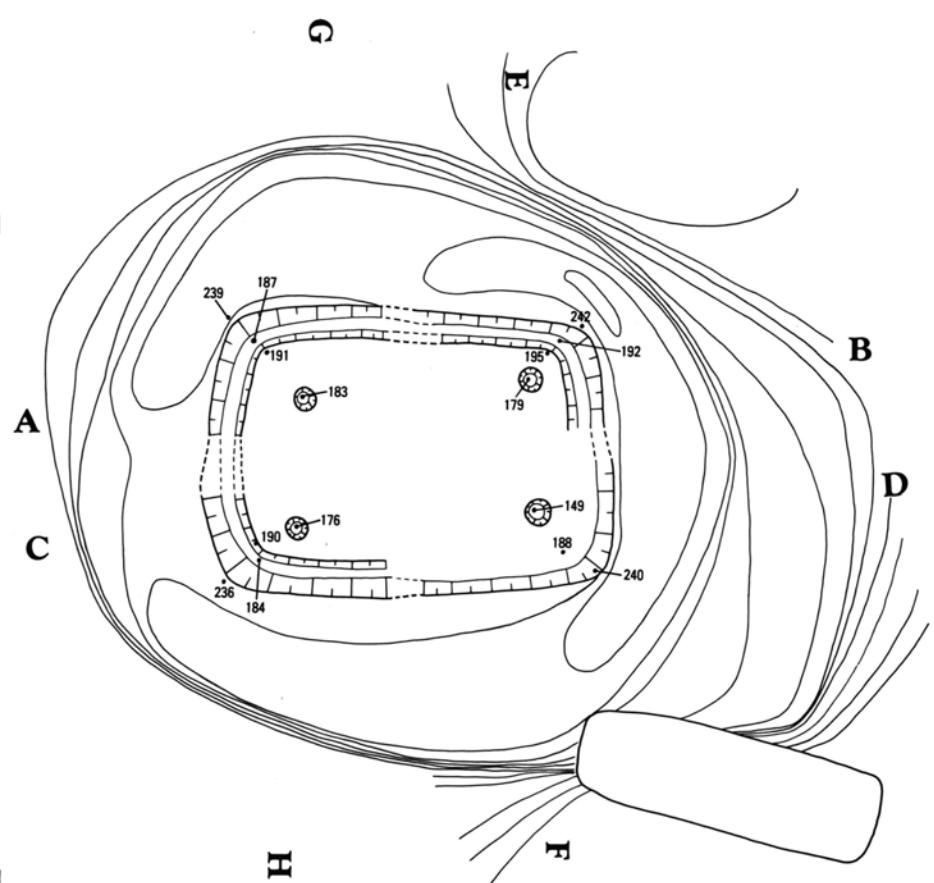
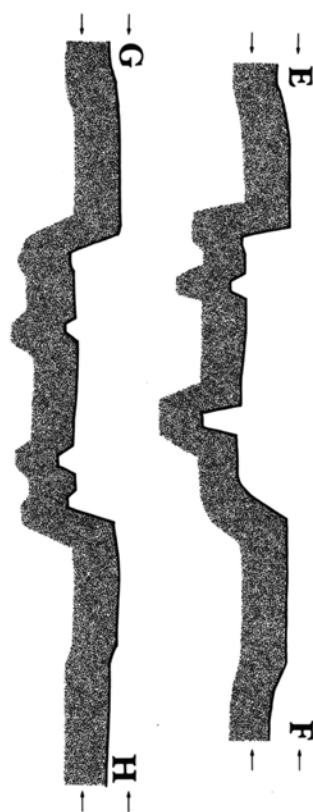
63J区 SB12



A

B → 250cm

89A区 SB30



H

